

東アジアにおける理想郷と庭園

東アジアにおける理想郷と庭園

—「東アジアにおける理想郷と庭園に関する国際研究会」報告書—

—「東アジアにおける理想郷と庭園に関する国際研究会」報告書—

2009

奈良文化財研究所・文化庁

2009

独立行政法人 国立文化財機構
奈良文化財研究所

文化庁



「東アジアにおける理想郷と庭園に関する国際研究会」開催の様子（1）



「東アジアにおける理想郷と庭園に関する国際研究会」開催の様子（2）

觀想念佛

眞実の極樂淨土

虛空段

宝樓段
華坐段

舞樂段

宝池段

鳳凰堂
Hō-oh-dō
1053

即自見身、坐金蓮華。
生已華合、隨世尊後、
即得往生、七寶池中。

上品下生より
『觀無量壽經』

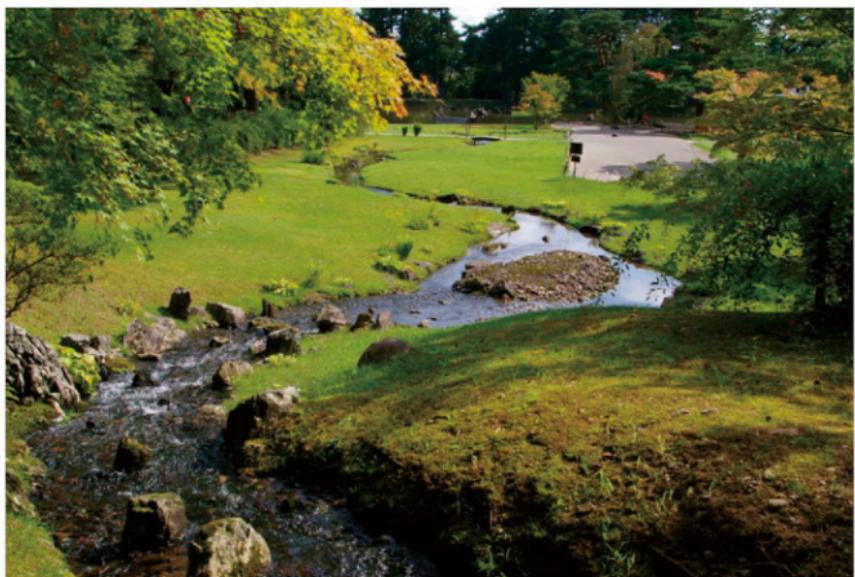
平等院（宇治）鳳凰堂と浄土図の対応関係 [杉本宏氏の報告から：宗教法人平等院提供のものに加筆]



平等院（宇治）鳳凰堂仏後壁の阿弥陀浄土変 [杉本宏氏の報告から]



毛越寺庭園（平泉） 園池南東岸の岬と池中の立石 [本中眞氏の講演及び佐藤嘉広氏の報告から]



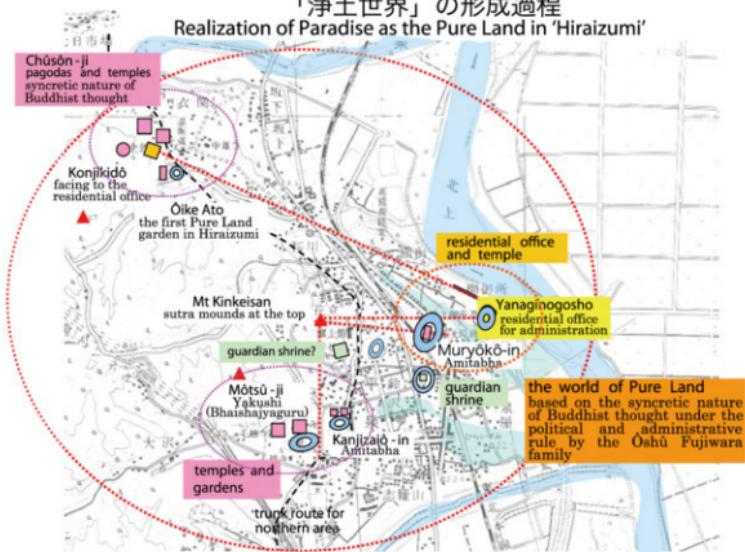
毛越寺庭園（平泉） 園池北岸の道水 [本中眞氏の講演及び佐藤嘉広氏の報告から]

無量光院から望む金鶏山
Muryôkô-in and Mt. Kinkeisan



無量光院と金鶴山（平泉）[佐藤嘉広氏の報告から]

「淨土世界」の形成過程 Realization of Paradise as the Pure Land in 'Hiraizumi'



平泉における「浄土世界」の形成過程 [佐藤嘉広氏の報告から]



雁鴨池庭園（慶州）の衛星写真（左）と現在の風致景観（右）【洪光杓氏の講演から】



昌徳宮芙蓉池の周辺図（東閣図）【洪光杓氏の講演から】



榆林窟 第25窟 観無量寿經变【呂舟氏の講演から】



金明池奪標図【呂舟氏の講演から】



保国寺（寧波） 大殿と淨土池【呂舟氏の講演から】



聖母殿と魚沼飛梁（晋祠）【呂舟氏の講演から】



圓通寺（昆明） 正殿と八角亭【呂舟氏及び田中淡氏の講演から】

序 文

平成21年度(FY2009)に開催したシンポジウム『東アジアにおける理想郷と庭園に関する国際研究会』の報告書をお届けします。

奈良文化財研究所では、平成13年度(FY2001)から毎年、『古代庭園に関する調査研究』をおこなってきています。この研究は、近年の庭園資料の増加を受けて新たな庭園史構築のために寄与貢献することを目的として始めたものであります。

日本では、平安時代や中・近世に造られた庭園が、京都や奈良を中心に多数継承され、こうした庭園の調査研究を通じて確立された庭園史は、建築史や美術史と並び日本の歴史研究を構成する重要な一分野を形成してきました。しかし、かつては奈良時代以前についての事例がなく、そもそも日本における庭園がどのように始まって展開したのか、あるいは、それはアジアの庭園史の中でどのような位置を占めるのかなど、十分に解明されずにいました。

昭和42年(1967)に、平城宮跡で東院庭園が発掘されると、その後奈良時代やそれ以前の飛鳥時代にさかのぼる事例が発掘で見つかるようになり、古代庭園史の状況は大きく変わり始めました。加えて、近年、中国や韓国でも古代にさかのぼる庭園が発掘されるようになり、東アジア全体を見据えた庭園史の構築が現実味を帯びつつあります。当研究所における研究会は、こうした状況を踏まえて始まったものです。

日本庭園の源流にかかる古墳時代の事例から始め、新しい時代へと順次研究を進めてきましたが、今年度は、日本の庭園史の中でもきわめて重要な位置を占める「浄土庭園」をテーマに選ぶこととなりました。

そもそも「浄土庭園」とはどういうものか、中国や韓国には日本と同じ定義による「浄土庭園」は存在するのか、日本の「浄土庭園」は東アジアの中でどのような位置にあるのか、など中国・韓国の専門家も交え、基本的な問題の検討をおこなうことができたと考えております。また、平泉の世界遺産登録問題とも関連して、あらためて「浄土庭園」の内容とその意義が問われている時でもあり、今回の研究会は、時宜を得た企画であったと考えます。

しかし、中国や韓国の庭園史との関係や、「浄土庭園」のさらにわかりやすい解釈など、課題も残されました。これを機に、引き続き、研究の深化をはかけてまいりたいと思いますので、関係各位には今後ともご指導、ご鞭撻、ご協力をお願いする次第であります。

平成21年11月
独立行政法人国立文化財機構
奈良文化財研究所長 田辺征夫

例　言

- 1 本書は、平成21年(2009)5月19日から21日にかけて、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所と文化庁の主催の下、奈良文化財研究所平城宮跡資料館小講堂において開催した「東アジアにおける理想郷と庭園に関する国際研究会」(以下、「国際研究会」という。)の成果を取りまとめた報告書の日本語版である。
- 2 「国際研究会」の正式な報告書は、日本語版の本書と同時に刊行した“Paradise and Gardens in Eastern Asia – Final Report of the International Expert Meeting on Paradise and Gardens in Eastern Asia –”(以下、“Final Report”といふ。)であるのに対して、日本語による本書は、国内の研究者等への成果の普及のために、これを補足して編集したものである。したがって、その趣旨に基づき、日本人読者への便宜のため、英語で編集した“Final Report”には含まれていない記録・資料等を加えている部分等がある。
- 3 「国際研究会」は、奈良文化財研究所文化遺産部と文化庁文化財部記念物課との協議の下、奈良文化財研究所の中期計画に示された「古代庭園に関する調査研究」の一環として、奈良文化財研究所文化遺産部が企画し、事務局を務めた。また、事務局の主務は、文化遺産部の遺跡整備研究室(平澤穀、栗野隆)が景観研究室(清水重敦、恵谷浩子)の協力を得て務めた。また、国際研究会開催時の写真撮影及び音声録音も事務局によるものである。
- 4 「国際研究会」では、基本的に日本語を作業言語とした。資料については、各出席者の母国語(日本語、中国語、韓国語)により作成されたものを日本語に翻訳し、また、資料共有のため、併せて英語に翻訳したものを準備した。質疑応答や討論については、基本的に、各出席者が母国語で発言を行い、通訳を通じて日本語で行った。
- 5 本書は、冒頭のグラビア、序文、緒言のはか、「I. 研究会の成果」と「II. 研究報告」を主要なものとし、これに開催の記録や参考資料を収録した「III. 付録」を加え、3部構成とした。
- 6 「I. 研究会の成果」においては、会合最終日の2009年5月21日に検討し、概ね合意した文書について、後日、主として円卓を構成した8名の専門家が、用語や表現などの詳細を確認した結論文書を掲載した。「II. 研究報告」においては、「国際研究会」における講演・報告・コメントに関する原稿を収録した。このうち、呂舟氏(中華人民共和国・清華大学教授)及び洪光杓氏(大韓民国・東國大學校教授)の原稿については、併せて原著も掲載した。「III. 付録」においては、「国際研究会」開催の記録として、「開催概要」、「出席者名簿」、「開会・質疑応答・討論・閉会の記録」のほか、参考資料として「日本における浄土庭園の構成と年代」及び「仏国寺の蓮池に関する一考察」(洪光杓, 1994; 日本語訳)を掲載した。また、図版等については、講演者・報告者等から提供されたものを基本としつつ、一部については、追加・補足したり、新たに図版を起こしたりしている。さらに、編集の都合上、図版の採否やレイアウトについては、「Final Report」と異なる部分がある。なお、特に平等院の関係写真等については、宗教法人平等院のご理解とご協力を得て掲載した。
- 7 「III. 付録」のうちの「開会・質疑応答・討論・閉会の記録」については、録音から日本語での発言及び日本語への通訳の音声を起こしたものを参照しながら、平澤穀が整理したものを掲載した。なお、各発言における言い回し等については、その趣旨の変更を伴わない範囲で修正等を加えた部分がある。
- 8 本書における年号の表記は、「平成21年(2009)」のように、「和暦(西暦)」とし、年度の西暦表示には、「平成21年度(FY2009)」のように、FY [Fiscal Year] を付した。
- 9 「国際研究会」のための資料等の翻訳、会合開催時の通訳、並びに、本書作成のために必要な資料等の翻訳については、一部を除き、株式会社コングレに委託した。
- 10 本書の編集は平澤穀が行い、栗野隆が補佐した。

緒 言

このたび奈良文化財研究所で開催された「東アジアの理想郷と庭園に関する国際研究会」では、中国・韓国・日本の東アジアで、理想郷としての思想にどのようなものがあるのか、また、理想郷の思想が庭園の形態・意匠・技術にどのように影響して、三国の風土や歴史の違いの中でいかに発展・継承してきたかを検討した。そして、日本でみられるような、仏の浄土世界を表現する「浄土庭園」において理想郷の世界がどのように表現されたのか、また、その普遍性・独自性はどのようなものであるのかについて検討した。

東アジアにおいて、植物・水・石など自然を材料として造形された庭園は、人と自然との関わりから創造されたものであり、その技術・形態が思想と結びついて理想郷という一つの庭園様式が生み出されたものである。

庭園文化の基層をなす人と自然との関わり方で、三国ともに自然崇拜・自然敬慕・自然を親しむなどの気持ちがあることや、「作庭記」にみられる名勝地や名山・湖の自然景観を写すことなどが、庭園の中に共通の意識として存在している。その一方で、自然の写実性について、方池と曲池、加工石材の使用、風水画法の取り入れなど、庭園形態・意匠において違いがみられる。

また、理想郷とはユートピア・パラダイス・仙境(桃源郷)・常世(不老不死)・極楽浄土などの表現で、道教・老莊・神仙・陰陽などの思想のもとに三国で発展してきたものであるが、時期や感情・意味で微妙な違いもみられる。

庭園における理想郷の表現として、その思想的背景と形態・意匠をみてみると、自然の精靈を崇拜するアニミズム(禊)・仏教的宇宙観の須弥山(須弥山石像)・不老長寿を求める神仙(三神仙島・蓬萊山)・無為自然の老莊思想の仙境(隠士文化)・極楽浄土(八功德水・七宝池・蓮池)などのほかに、陰陽五行・風水などがみられる。また、「神仙島」のように三国ともに共通するものと、「浄土」や「天円地方」(方池円島)のように独自の思想的背景に基づく庭園の形態・意匠もみられる。

仏の浄土世界を理想郷とみなし、それを具現化する「浄土庭園」の定義は、構造や変相図や、浄土思想の厭離穢土・欣求浄土、顯教・密教、密界(聖・俗・彼岸・此岸)などの理念や、立地(山・川)・伽藍配置(臨池・宝樓・翼樓)・建築(住宅・寺院)・池(放生池・蓮池・宝池)などの形態・意匠、さらには、国家鎮護・追善供養・極楽浄土などの機能や儀式の総合的検討により、周囲の自然環境と一体となった本尊と仏堂と庭園が十方浄土を現世の寺院境内に空間的に浄土世界を再現した芸術作品である。なかでも日本の「浄土庭園」は、8世紀から11世紀にかけて「浄土庭園」の様式が確立し、最東端の辺境の平泉において、複合的性質をもつ日本独特の仏教思想に基づき、11世紀の作庭技術書「作庭記」の内容を具現化して浄土世界を体現した「浄土庭園」群は、顕著な普遍的価値をもつものであるといえる。

今回の国際研究会では、今までのところ、中国・韓国では「浄土庭園」が盛行した形跡はみられないことが明らかにされたが、今後の発掘調査の成果などによる事例の検討も必要であり、また、日本でも、阿弥陀浄土院(8世紀、奈良)をはじめとして、「浄土庭園」の原初的存在に関する検討を進めていくことが重要である。

ここにとりまとめた「東アジアの理想郷と庭園に関する国際研究会」の成果が、東アジアのみならず、世界に所在するさまざまな理想郷の庭園の解明を更に一層進展させることを期待する。

「東アジアの理想郷と庭園に関する国際研究会」議長

田中 哲雄

目 次

グラビア	i
序 文 田辺 征夫 (奈良文化財研究所長)	ix
例 言	x
緒 言 田中 哲雄 (議長:前・東北芸術工科大学 教授)	xi
I. 研究会の成果	1
「東アジアにおける理想郷と庭園に関する国際研究会」の成果について	2
II. 研究報告	5
II-1. 論考	
1. 「理想郷」としての日本庭園の意匠と技術 本中 健 (文化庁 記念物課 主任文化財調査官)	6
2. 古代中国における庭園の発展および淨土と淨土庭園 呂 舟 (中華人民共和国 清華大学 教授)	20
(原著)中国古代园林发展与净土和净土园林	34
3. 楽園を象徴する韓国の古庭園、雁鴨池庭園 洪 光杓 (大韓民国 東國大学校 教授)	40
(原著)樂園을 象徵하는 韓國의 古庭園, 雁鴨池 庭園	52
4. 中国庭園の初期的風格と日本古代庭園 田中 淡 (京都大学 人文科学研究所 教授)	62
II-2. 事例	
1. 宇治に築かれた西方淨土への憧れ ~平等院庭園~ 杉本 宏 (宇治市 歴史まちづくり推進課 主幹)	74
2. 奥州に夢見た理想郷と庭園群 ~平泉の淨土庭園群~ 佐藤 嘉広 (岩手県教育委員会 生涯学習文化課 主任主査)	86
II-3. 短報	
1. 奈良時代の淨土庭園 ~阿弥陀淨土院とその前身たる觀無量寿院~ 小野 健吉 (奈良文化財研究所 文化遺産部長)	96
2. 日本庭園の自然モチーフと表現／水の意味と形態 尼崎 博正 (京都造形芸術大学 教授／日本庭園・歴史遺産研究センター長)	99
3. 淨土庭園の事例と定義をめぐる考察 仲 隆裕 (京都造形芸術大学 教授)	103
III. 資 料	105
「東アジアにおける理想郷と庭園に関する国際研究会」について	106
1. 開催概要	108
2. 出席者	110
3. 開会・質疑応答・討論・閉会の記録	111
4. 参考資料	
(1)日本における淨土庭園の構成と変遷	156
(2)洪光杓(1994) : 仏国寺の蓮池に関する一考察	158

I. 研究会の成果

「東アジアにおける理想郷と庭園に関する国際研究会」の成果について

2009年5月21日

独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所

文化庁

2009年5月19日～21日に、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所及び文化庁の主催の下に、奈良文化財研究所において「東アジアにおける理想郷と庭園に関する国際研究会」が開催された。この研究会では、中国、韓国を代表する2名の研究者をはじめ、日本国内から6名の研究者・専門家を中心として、標記の主題に基づく研究成果の交流及び議論が行われた。

この研究会における目的、論点、結論については、以下に示すとおりである。

1. 目的

- (1) 日本において8世紀から14世紀にかけて造営された「仏国土(淨土)を表現する庭園」(以下、「淨土庭園」という。)(Pure Land Garden)の本質を明らかにし、価値の証明を行うこと。
- (2) 淨土庭園の系譜を明らかにするために、以下の3点について明らかにすること。
 - ① 中国・韓国・日本の各地域において形成された理想郷の思想
 - ② それらが庭園の理念、意匠・技術に与えた影響
 - ③ それらの庭園における表現上の類似点・相違点
- (3) 淨土庭園の最も重要な到達点を示す一群の事例が現在もなお継承されている平泉(日本の世界遺産暫定一覧表に記載された資産)の顯著な普遍的価値を明確化すること。

2. 論点

- (1) 人と自然との関わり——芸術的表現としての庭園

人と自然との関係を芸術にまで昇華させた東アジアの庭園の成立・発展の系譜・特質に関する検討を通じて、以下の3つの観点から議論を行った。

論点1 庭園文化の基層を成す人と自然との関わり

論点2 庭園文化の伝播と発展

論点3 東アジアにおける庭園の表現

- (2) 庭園における池——その意味と変遷

(1)の議論を踏まえ、日本において成立した淨土庭園の系譜・特質について、東アジアにおける理想郷の表現、あるいは庭園と池との関係に関する検討を通じて、以下の3つの観点から議論を行った。

論点1 庭園における池

論点2 淨土变相図などの淨土を描いた図像における「宝池」

論点3 日本の淨土庭園における池と堂舎

- (3) 理想郷と庭園——東アジアにおける表現の本質と多様性

(1)、(2)での議論を踏まえ、東アジアにおける理想郷と庭園との関係を包括的に検討し、平泉に

残された一群の浄土庭園が持つ顕著な普遍的価値を明らかにするために、以下の3つの観点から議論を行った。

論点1 東アジアにおける理想郷の表現としての庭園

論点2 日本の浄土庭園の独自性

論点3 東アジアの庭園文化史上における平泉の一群の浄土庭園の代表性

3. 結論

中国・韓国・日本の3つの国には、東アジア地域に独特の自然と人間との関係を表す庭園文化が育まれ、それらを反映して形成された多くの歴史的庭園が現存する。

各国・各地域の庭園には、作庭の理念・意匠・技術の各側面において、共通する性質が認められる一方で、各々の歴史的・文化的背景に基づく固有の性質も認められる。

その中でも最大の共通点は、庭園が仏教・神仙思想・陰陽五行説などの様々な思想・理念に基づき、自然を敬慕し、自然に馴染み、自然の姿を写し取ることを目的に、現世における理想郷を表すものとして創造されたことである。

庭園は、中国から朝鮮半島及び日本へと作庭思想が伝わる過程で、各々の地域に固有の自然観とも融合しつつ、独自の発展過程を経て各国に固有の庭園文化として定着した結果、形成された文化的な資産である。

特に日本の場合には、中国から朝鮮半島及び日本へと伝わった作庭思想が、日本に固有の自然崇拜の信仰形態・自然観とも融合しつつ、中国・朝鮮半島とは異なる独自の庭園文化と、それを表す庭園が形成された。

その中でも特筆すべきは、仏の浄土世界を理想郷と見なし、それを具現する独特の浄土庭園(Pure Land Garden)の様式が含まれていることである。それらが持つ顕著な普遍的価値を正当に評価するためには、以下の点について十分考慮することが必要である。

ア. 本研究会は、浄土庭園を以下のように定義した。

浄土庭園は、阿弥陀仏の極楽浄土をはじめ、十方世界において仏道に勧む諸仏の仏国土(浄土)を理想世界(楽土)として捉え、それを現世の寺院境内に空間的に再現した芸術作品である。それは、周囲の自然環境とも緊密な関係を保つつつ、本尊が安置された仏堂と一体となって、本尊の浄土を莊嚴するために仏堂の前面に設けられた庭園である。さらに、それは数々の浄土変相図に描く「宝池」を象徴して造られた広大な水面の池を主たる構成要素とし、鳥伝いに人間を浄土へと導く橋などが架けられる場合などもある。

これらの日本の浄土庭園の地割・構成要素・細部意匠は、浄土庭園が盛行する11世紀に完成の域に達していた寂殿造住宅の庭園に倣って定められたが、法会などに際しては仏国土(浄土)を象徴する臨時の装飾も行われた。

イ. 中国では、現時点において、阿弥陀仏の極楽浄土の世界を象徴して、敦煌莫高窟の壁画に描かれた宝樓殿舎及び宝池を実体化したような庭園の現存事例又はその考古学的遺跡が確認されていない状況にある。

また、韓国では、慶州の仏国寺において発見された九品蓮池が浄土庭園の考古学的遺跡の数少な

い事例として確認されてはいるが、日本のように浄土庭園が盛行した形跡は認められない。

これに対し、日本においては、中国及び朝鮮半島から、人と自然との関わりにより創造された庭園の理念、意匠・技術が仏教・神仙思想・陰陽五行説とともに伝来し、8世紀から14世紀にかけて、日本に固有の自然崇拜の信仰形態、山中を他界(死後世界)と見なす自然観とも融合・発展する過程で、世界の他地域に類例を見ない多様な浄土庭園の様式が確立し、多くの事例及びその考古学的遺跡が残された。それらの庭園の池は、浄土変相圖に描く幾何学的形態を持つ宝池とは異なり、渕浜など曲線を描く護岸の意匠に基づく点で特質を持つ。

ウ、平等院庭園を含む数々の浄土庭園の中でも、平泉の一群の浄土庭園は、イにおいて述べた日本庭園の発展過程における最も典型的・代表的な浄土庭園の事例であり、11世紀の寢殿造住宅庭園の作庭技術書として有名な『作庭記』の記載事項を正確に具現している点においても、他に類例を見ない傑出した資産であることから、以下の3点に基づき、顕著な普遍的価値を持つ可能性が極めて高い。

- a. 仏国土(浄土)を象徴的に表現した仏堂・庭園群とそれらの考古学的遺跡は、6世紀に中国及び朝鮮半島から伝えられ、12世紀にかけて日本列島の最東端へと進んだ建築・庭園の意匠・設計に関する人類の価値観の重要な交流の到達点を示している。
- b. 仏国土(浄土)を象徴的に再現しようとした優秀な芸術作品であり、それらの考古学的遺跡をも含め、建築・庭園の分野における人類の歴史の重要な段階を示す傑出した類型である。
- c. 平泉において一群の浄土庭園が完成する上で重要な意義を持ったのは、複合的性質を持つ日本独特的仏教思想である。それは、世界的な思想体系である仏教思想が、6世紀に日本に伝わり、その後、12世紀に日本列島の最東端へと到達する過程で、法華經・密教・浄土教のみならず、日本古来の神道を含む自然崇拜思想とも融合し、地上に現存するものも、地下に遺存する考古学的遺跡をも含め、仏国土(浄土)を体现した庭園群の意匠・形態へと直接的に反映した点において、顕著な普遍的意義を持つ。

4. 主な参加者

呂 舟 (清華大學教授／中華人民共和国)

洪 光杓 (東國大學校教授／大韓民国)

田中哲雄 (議長：前・東北藝術工科大学教授)

田中 淡 (副議長：京都大学人文科学研究所教授)

本中 真 (文化庁記念物課主任文化財調査官)

尼崎博正 (京都造形芸術大学教授)

仲 隆裕 (京都造形芸術大学教授)

小野健吉 (奈良文化財研究所文化遺産部長)

杉本 宏 (宇治市歴史まちづくり推進課主幹)

佐藤嘉広 (岩手県教育委員会生涯学習文化課主任主査)

II. 研究報告

「理想郷」としての日本庭園の意匠と技術

本中 真

(文化庁記念物課主任文化財調査官)

1. 序—日本庭園の源流—

日本人は、古来、自然界の森羅万象に幾多の精靈が宿るとする自然神崇拜の精神を基調としてきた。例えば、山、島、森、樹木、池沼などを精靈の宿る神性豊かな聖域と見なし、川や海なども遙か彼方の樂土(理想郷)や聖域へと通ずる道であると意識してきた(図-1,2)。山の斜面に露出した巨大な岩塊や樹齢を絶た大きな老古木なども、神が天から降臨する場所として神聖視してきた(図-3)。これらの自然の地形・地物は、すべて岩、水(湧水・流れ)、植物から成り、後代の日本庭園に用いられた素材と共に通する。つまり、日本庭園には、もともと日本人が持っていた自然崇拜の精神を受け継がれているのであり、極めて高い精神性が込められてきたといつてよい。

2. 日本古来の自然崇拜思想と水辺の意匠

日本庭園の作庭思想の源泉は、仏教とともに大陸から伝わったとするのが通説である。しかし、それ以前の時代において、水辺に臨んで造られた神への祭祀場の考古学的遺跡には、後の日本庭園に共通する意匠・構造が見られる。

(1) 城之越遺跡(三重県伊賀市)

発掘調査で発見された城之越遺跡の蛇行溝は、仏教が大陸から日本に伝来する以前の4世紀後半から5世紀中頃に造られたものである(図-4)。石や木で組まれた3ヶ所の湧泉から、岸辺の緩やかな勾配の法面を礫敷で護岸した3本の蛇行溝が大溝へと連続

する。石敷蛇行溝が合流するY字形の部分では、溝の中へ岬状に突出するように造成された三角形のテラスの3隅に立石が施され、聖域の結界が表現されている(図-5)。今ひとつ合流点では、岬の突端に木と石を用いて水際に降りていくための階段状施設が設けられており、岸辺から水際へと及ぶ祭祀行為の動的な在り方を想定させる。

(2) 7～8世紀の庭園における流れの遺構

水辺に臨む禊の場は、大陸から庭園文化が移入される以前から、優れて造園的な水景意匠の対象として注目されてきたのであった。その系譜は、7世紀の古宮遺跡(奈良県明日香村)の小池とそれにつながるS字状石組溝(図-6)、8世紀の平城宮東院庭園(奈良県奈良市)の石組蛇行溝(図-7)及び平城京左京三条二坊宮跡庭園(奈良県奈良市)の曲池(図-8)へと受け継がれた。その過程で、水辺に臨んで行う禊という行為は、「曲水宴」という宴遊の要素を加味した詩情豊かな儀礼行為へと洗練されていった。

3. 古墳の周濠における水辺の意匠

3世紀～7世紀に多く造られた大王を含む有力豪族の墳墓の墳丘とその周濠の意匠・技術は、後代に日本庭園の水辺の意匠を成立させる上で極めて大きな役割を果たした。

(1) 巢山古墳(奈良県広陵町)

巢山古墳の鍵穴形の墳丘のくびれ部における発掘調査では、墳丘の一部が濠内へと方形状に張り出し、その汀線が緩やかな勾配の下に葺石で覆われ、四隅に立石が施されていることが判明した。この事例は、古墳の張出部が被葬者への墓前祭の場として神

聖視されていたことを暗に示すとともに、聖域と水景の意匠とが分かち難く結びついていることをも示している(図-9)。そこには、先に述べた城ノ越遺跡の蛇行溝に見る水景と同様の意匠・技術が見られる。さらに、石を用いて意匠された人工の丘と石敷きの水辺から成る古墳は、後代の庭園における築山と園池にもつながる性質を持っていたことが注目される。

(2) 前代の古墳の周濠を取り込んだ8世紀の貴族住宅の庭園

先に述べたように、平城宮東院庭園では礫敷きの州浜状汀線の意匠・技術が確立したが、その背景には、前代の墳墓である古墳の墳丘が、水・みどり・丘から成る造園的な空間として再認識されていく過程がある。平城京内に造営された貴族の邸宅跡における発掘調査によると、古墳の墳丘を敷地内に取り込み、葺石に景石を据えるとともに、礫を敷き足して水景の意匠を造り出すことが行われたことが明らかとなった(図-10)。墳墓の意匠には聖域を表現する技法と水景に関わる意匠とが緊密に関連しており、それが後に造園活動の対象として積極的に取り込まれていく過程において、礫敷きの州浜状汀線の技法は確立したといってよい。8世紀の日本庭園の意匠・技術は、中国・朝鮮半島から伝來した庭園文化の影響を受容しつつも、日本古来の水景に関する意匠・技術を母胎として、独自の発展を遂げたわけである。

4. 仏教と作庭思想の伝来

中国大陆から仏教が伝來した6世紀以降、それが定着した8世紀に至るまで、日本の庭園は特に古代の宮都が置かれた奈良を中心に造営された。その中には、仏教が伝來する以前の日本において、祭祀場における自然の水の流れを模した水景の意匠や、古墳の墳丘裾部の堀に臨んで景石と洲浜の工法を用いて造られた水景の意匠などとは異なり、石を積み上げて護岸した方形の池の意匠が見られる。仏教とと

もに中国大陆及び朝鮮半島から日本にもたらされた作庭思想は確実に根付き、日本古来の祭祀空間に用いられた水景の意匠と混淆・融合していった。

(1) 石神遺跡の方形池(奈良県明日香村)

日本で最初の統一国家である大和政権が成立した奈良県の飛鳥地方では、発掘調査により多くの庭園遺構が発見された。の中には、石を垂直に積み上げて護岸した方形の池の意匠が見られる(図-11)。外国からの使者に対する迎賓施設の跡である石神遺跡(奈良県明日香村)では、建物に囲まれた中庭に一辺約6mの正方形の石組の池が造られていたことが判明している。さらに、付近からは、「須弥山石」と呼ぶ石造の噴水施設(図-12)も発見されており、外国使節に対する水の饗宴が行われたことが想定できる。

(2) 古宮遺跡(奈良県明日香村)

推古天皇(554~628)の宮殿跡にも推定されている奈良県明日香村の古宮遺跡では、石で組まれた蛇行溝及び池、宮殿の正殿と考えられる建物の跡などの考古学的な遺跡が発見されている。石組の池と建物との間は約20m離れており、何らかの儀式を行う場として使用されたものと考えられる。石組の池は直径約2~3mで、池からは幅約20cmの蛇行溝が南の方向に向かって延びる(図-6)。池に溜められた水は溢れ、蛇行溝を伝って南へと流れたものと思われる。『続日本紀』などによると、三月初めに水辺に臨んで「曲水宴」と呼ばれる禊ぎの行事が行われていたことが判明している。したがって、古宮遺跡の石組の池と蛇行する石組の溝は、曲水宴などの儀礼・宴遊に使われた施設であった可能性もある。

(3) 平城宮東院庭園(奈良県奈良市)

1968~1980年の発掘調査によって、古代の宮殿跡である平城宮跡(1998年に「古都奈良の文化財」の構成資産の一つとして世界遺産一覧表に記載)の東端部に「東院」と呼ばれる区画があることが明らかとなり、その東南隅部に大規模な石組の園池が存在したことが判明した。

この庭園は、8世紀の中頃に大きく改修されたことが判っている。8世紀前期の園池は逆L字形を基本形とし、汀線に近い池の底部に直径約30～40cmの玉石を帶状に敷き詰めている(図-13)。しかし、8世紀後期には全体を埋めて礫敷とし、複雑で優美な曲線を描く洲浜状の汀線へと変更している(図-14)。

9世紀以降に平安京(京都府京都市)に造営された園池のほとんどが、礫を敷き詰めた優美な汀線の意匠を持つことから(図-15)、曲線を描く汀線の意匠は8世紀の平城宮東院庭園において既に完成していたことがわかる。

5. 住宅庭園の意匠・技術の確立

(1)儀式の庭(内裏の庭)

1968年の明治維新に伴って都がそれまでの江戸に移り、東京となるまで、およそ1,000年にわたって天皇の居所は京都の内裏にあった。現在でも、京都の内裏には天皇の居住空間であった紫宸殿や清涼殿などの木造建築が残され、その前面は白砂に覆われた「広庭」とになっている。この「広庭」は、四季を通じて各種の儀式を行うために準備された空間であり、いわゆる自然の姿を象って造形した「庭園」ではない(図-16)。

(2)寝殿造住宅の庭園の確立

上記のような白砂敷の「広庭」に付随して、儀式に際して楽人や舞人が乗る船を浮かべるために池が造られた。池を造るために掘った残土を盛り上げて中島や築山が造られ、自然の山野から掘り採ってきた草花が植えられた。中島には橋が架けられ、儀式に際して楽人の控所となるテントが設けられた。このように、様々な儀式に不可欠の住宅施設として、日本に固有の作庭の理念、意匠・技術を用いた庭園が造られ始めたのは9～10世紀のことである。

10世紀から12世紀の頃の貴族の邸宅を描いた絵巻物からは、当時の住宅と庭園の意匠・構造のみならず、それらが儀式に際してどのように使われたのか

について詳細に知ることができる(図-17)。「寝殿」と呼ぶ主人の居住建築を中心とし、その南側に出し物を演ずる白砂敷の空閑地、舞人が乗る船を浮かべた大きな池、楽人の控所であるテントが設営された中島などがつぶさに描かれている。建築の内部のみならず、その前面の「広庭」や池などを含む庭園が、一体的に儀式の場として使われたことがわかる。このように、日本庭園は、野外における儀式の場であるとともに、水・岩・植物を素材として自然の姿を象った造形空間として完成した。

6. 「理想郷」としての「仏国土(浄土)」と日本庭園

11世紀以降、仏陀が入滅して一定の時期が経過すると、仏法の力が弱まり、世の中が乱れるとする「末法思想」が流行した。人々は現世における利益を求めるとともに、死後に西方浄土へと蘇生することを強く願うようになった。そして、仏が仏道に励む場所である「清浄化された仏国土」を現世に実現しようと試み、仏国土(浄土)を象った多くの寺院を造営した。

(1)阿弥陀変相図に描かれた「宝池」と

実際の浄土寺院の庭園

浄土寺院は、5～13世紀の中国莫高窟の壁画にも見られる阿弥陀浄土変相図や、中国の浄土教典に基づき源信(942～1017)が著した「往生要集」などをもとに、浄土の姿を三次元的な空間として現世に实体化したものである。阿弥陀浄土変相図に描く典型的な浄土の図像は、正殿と両脇殿から成る左右対称の宝樓殿舎群とその前面に「宝池」と呼ぶ水面の上に阿弥陀三尊仏が出現した形態を探る。多くの浄土変相図によると、浄土世界の重要な要素である「宝池」は宝樓殿舎群の基壇や舞台等により区切られ、その形態は矩形であるかのように描かれている。しかし、実際の浄土の姿を象って造営された寺院庭園の発掘調査によると、方形池等の矩形の園池が採用された痕跡はなく、すべて優美な曲線を描く洲浜状の汀線

を持つ園池が採用されたことが判明している(図-18)。

(2)浄土寺院において背後の山が持つ意味

浄土思想が普及する過程において、浄土教の教理解釈の下に自然の山と人工的に造形された庭園とを視覚的に結合することが行われた。例えば、「山越阿弥陀図」と呼ばれる一連の図像(図-19)には、山と仏国土(浄土)との緊密な関係を読み取ることができる。これらの図像は、極楽浄土への往生を確実にするために臨終の人々の枕元に掲げるために製作されたものであった。それは、山の背後に上半身をのぞかせる阿弥陀仏の正面像を中心として、山の此方の中腹に飛来した観音・勢至の両菩薩像を両側に描き、臨終を目前にした観者にとって山中浄土、あるいは山の彼方の浄土を意識させるのに十分な緊迫感に満ちた構図となっている。このような美術作品において自然の山が仏国土(浄土)との関係の下に持った意味は、実際の浄土寺院の造構において背後に控える自然の山が持った意味と基本的に共通するものである。仏堂の背後に位置する山は、山中を死後世界と捉える日本古来の信仰形態とも深く関わりつつ、仏国土(浄土)の方位を象徴する空間装置として重要な意味を持った。

7.『作庭記』に見る日本庭園の作庭思想と意匠・構造

仏国土(浄土)を表現した庭園には、仏教の儀礼に即した様々な置物が設置されたり、飾り付けが行われたりしたが、庭園自体の空間構成・意匠・構造は、11～12世紀の貴族の住宅に營まれた庭園のそれと基本的に類似していた。

「寂殿造」と呼ぶ貴族の住宅庭園の作庭理念は、11世紀後半に製作された『作庭記』に詳細に記述されて

いる。そこには、自然の姿を写し取り、岩・水・草木などの自然の風物に即した庭づくりの精神が示されている。このような精神・規範に基づき作庭された庭園で、今日に遺存する最も典型的かつ唯一無二の事例が平泉の毛越寺庭園である(図-120)。この庭園は薬師仏を本尊とする仏国土(薬師浄土)を莊厳して創造されたものである。しかし、海岸の砂浜を象った池の汀線、軽やかな渓流から緩やかに蛇行して静流する滝水、岩を組んで磯の姿を象った築山、大きな立石が据えられた岬などの姿には、「作庭記」に記された当時の住宅庭園の意匠・構造の規範が正確に反映されている。

8.結論

以上のように、日本の古代庭園における意匠・構造は、自然神崇拜の思想に基づき水辺に臨んで行われていた祭祀とも密接に関係しつつ、6世紀に中国・朝鮮半島から仏教とともにたらされた造園思想に基づく意匠・技術の影響を受けて発展した。日本古来の信仰形態と新たに伝來した仏教との融合の過程で、両者の反映の所産である水辺の意匠も相互に併存・混淆・融合を繰り返した。そして、前代の墳墓である古墳を園池として再利用する過程で、緩やかな州浜状汀線への回帰が主流となり、8世紀の平城宮東院庭園の園池における州浜敷汀線の完成を経て、9～10世紀以降の寝殿造住宅庭園にも通有の意匠・工法として発展した。さらに、11世紀から12世紀にかけて、末法思想が流行するに伴って、仏国土(浄土)を表現した仏堂と庭園から成る浄土寺院が造営されるようになり、寝殿造住宅庭園において確立していた作庭の理念、意匠・技術を活かした日本独特の「浄土庭園」の様式が成立した。

参考文献

- 1) 本中 真(1994), 日本古代の庭園と景観、吉川弘文館
- 2) 本中 真(1998), 飛鳥・奈良時代以前の庭園関連遺構、
ランドスケープ研究Vol. 61-3 , pp 185-191
- 3) 本中 真(2006), 庭園、信仰と世界観, pp 353-370, 岩波書店
- 4) Makoto Motonaka (2006), Japanese Historic Gardens - Their History and Contemporary Significance, PCP Forum, pp.65-75, Switzerland
- 5) 1992, 城ノ越遺跡－三重県上野市比土－, 三重県埋蔵文化財センター
- 6) 2005, 出島状遺構 巢山古墳調査概要, 奈良県広陵町教育委員会, 学生社
- 7) 1975, 平城宮発掘調査報告VI, 奈良国立文化財研究所学報第23冊, 奈良国立文化財研究所
- 8) 1990, 飛鳥・藤原宮跡発掘調査概報18, 奈良国立文化財研究所
- 9) 1976, 飛鳥・藤原宮発掘調査報告, 奈良国立文化財研究所学報第27冊, 奈良国立文化財研究所
- 10) 2003, 平城宮発掘調査報告XV～東院庭園地区的調査－, 創立50周年記念奈良文化財研究所学報第69冊, 奈良文化財研究所
- 11) 1987, 年中行事絵巻(日本の絵巻8), 中央公論社
- 12) 田村 剛(1964), 作庭記, 相模書房



図－1 沖ノ島 [福岡県]
(福岡県教育委員会提供)
玄界灘に浮かび、古来、神が
降臨するとされた島。



図－2 春日大社 [奈良県]
(世界遺産「古都奈良の文化財」
の構成資産)
一の鳥居と背後に見える御蓋山。



図－3 熊野速玉大社 [和歌山県]
(世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」
の構成資産)
境内(神倉山)の斜面に位置する
コトビキ岩。

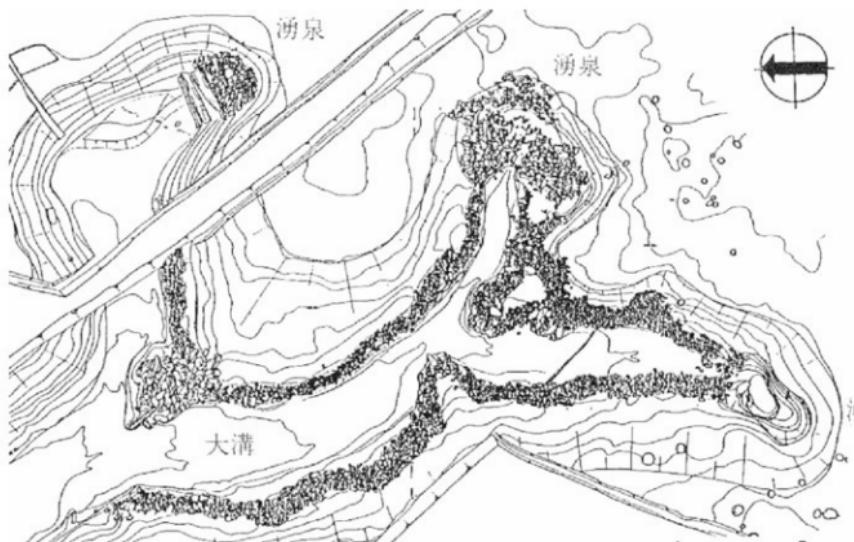


図-4 城ノ越遺跡〔三重県〕 大溝の平面図



図-5 城ノ越遺跡〔三重県〕 大溝に突き出た三角形のテラスと立石。



図-6 古宮遺跡〔奈良県〕(奈良文化財研究所提供) S字状の石組溝。



図-7 平城宮東院庭園〔奈良県〕(奈良文化財研究所提供)
石敷園池の汀線(手前)と並行して設けられた石組蛇行溝(後方)。



図-8 平城京左京三条二坊宮跡庭園【奈良県】(奈良文化財研究所提供)
龍の形状に類似した曲池。



図-9 巢山古墳【奈良県】(広陵町教育委員会提供)
造り出しの部分に設けられた立石と石敷き。



図-10 平城京左京一条三坊の貴族住宅の
庭園遺構〔奈良県〕
(奈良文化財研究所提供)
古墳の周濠を活かした園池。



図-11 石神遺跡〔奈良県〕
(奈良文化財研究所提供)
石組みの方形池。

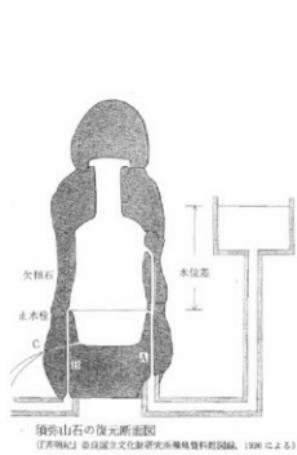


図-12 須弥山石〔奈良県〕(奈良文化財研究所提供)

石神遺跡から出土し、仏教における須弥山を象った噴水施設であるとされる石造物。 II. 研究報告 15



図-13 平城宮東院庭園【奈良県】
(奈良文化財研究所提供)
8世紀前半の園池。



図-14 平城宮東院庭園【奈良県】
(奈良文化財研究所提供)
8世紀後半の園池。

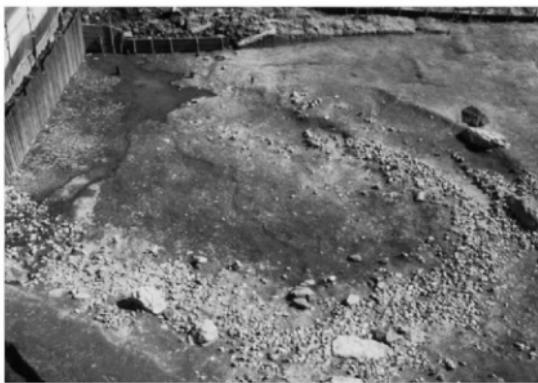


図-15 烏羽殿の庭園【京都府】
園池の洲浜状汀線の遺構。



図－16 京都御所【京都府】（内田和伸氏提供）紫宸殿前の広庭。



図－17 「年中行事絵巻」に描かれた貴族住宅の庭園（「日本の絵巻8」、中央公論社、1987）

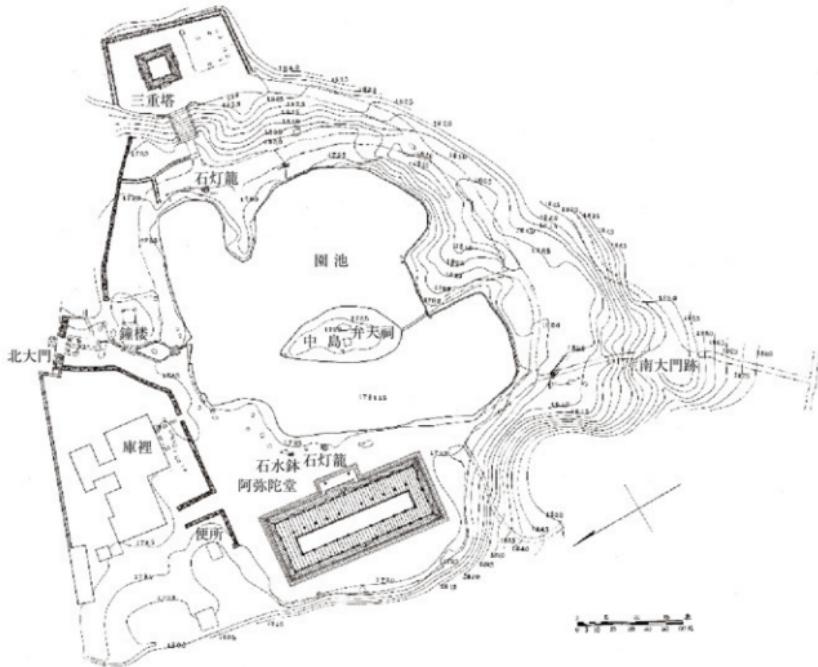


図-18 淨瑠璃寺庭園〔京都府〕
平面図（上）と園池東岸
からの阿彌陀堂の展望（下）



図-19 山越阿弥陀図（椎林寺蔵）

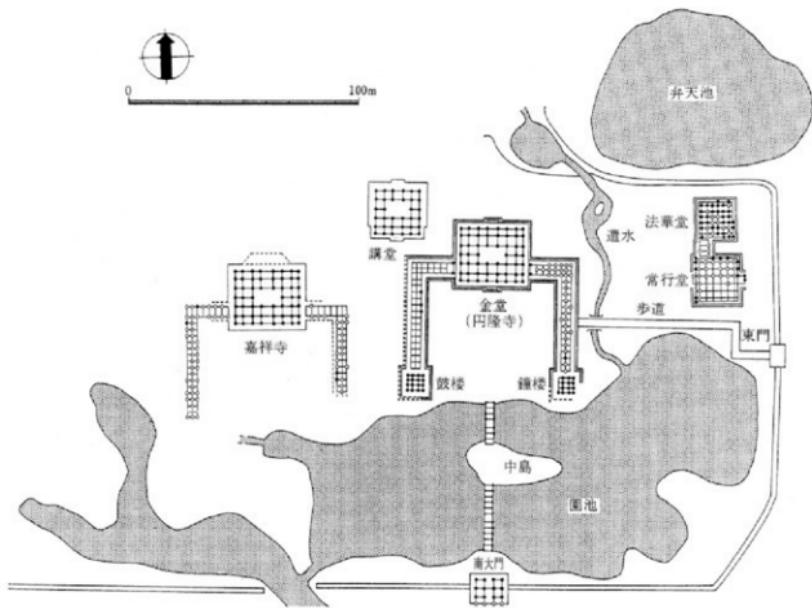


図-20 毛越寺庭園〔岩手県〕復元平面図

古代中国における庭園の発展および浄土と浄土庭園

呂 舟

(清華大學／中華人民共和国)

1. はじめに

中国庭園はその起源を殷代まで遡ることができ、世界で最も長い歴史をもつ庭園体系の1つである。隋・唐以後の中国庭園には「境地」を強調する傾向が見られ始め、それが最終的に中国庭園の基本的な特徴の1つとなった。中国文化の主要構成部分および担体である中国庭園は、唐・宋時代の遣唐使を通じて東アジア各国における庭園の発展に影響を与え、18・19世紀には西洋の宣教師を通じてヨーロッパの庭園へも影響を及ぼした。中国庭園の発展過程を見ると、中国の伝統的な哲学、信仰、宗教などのいずれもが庭園の主題や形態的特徴に反映されている。

浄土宗は中国仏教の一宗派であり、唐・宋以後の中国社会に一定の影響を与えるとともに、東アジア地域へも伝わった。浄土宗は日本庭園の発展に重要な影響を及ぼしたが、中国庭園の発展過程では明らかな足跡を残していない。

敦煌壁画の中には「浄土変」と呼ばれる題材がある。こうした壁画は、人々が憧れる西方浄土の美しい有り様を描いている。それら浄土世界を描いた絵の中では、通常は建築物を取り囲んでいる蓮池に大きな平台があって、その上で仏・菩薩たちが嚴かに座り、伎樂天(音楽の神)や飛天(空を飛ぶ神)たちも美しい姿や踊りを見せている。「こうした建築物と水面の配置方式が中国の伝統的な庭園の発展とどのような関係にあるのか」、および「それが庭園や寺院の完成された配置方式なのか」という点は研究に値する課題であろう。

2. 漢・魏・両晋(東晋・西晋)時代の中国庭園

中国庭園の起源は殷・周時代より古く、すでに『詩經』の中で庭園に関する記述が見られる。この時代の庭園は植物園のような形態をとるものが多く、天子や諸侯のために營造され、行宮(天子が外出時に使う施設)、農園、狩り場などの機能を兼ね備えていた。そのような庭園は秦・漢以後に壮大な規模の皇室庭園へと姿を変えていったが、その行宮、農園、狩り場などの機能はやはり維持された。ここで注目すべきなのは、この時代の皇室庭園における建築物、水、山などの要素が次第に庭園の基本構成部分となっていった点である。中国史上初めて統一帝国となった秦は、その短い歴史の中で多くの宮殿や庭園を營造している。帝王が神仙の伝説を自信して不老長寿を追求したため、庭園の營造に際しては「大海や伝説中の仙人が住む島を模した大面積の水面と島」という表現方がとられ、それによって水面と島も皇室庭園の象徴的かつ重要な要素となった。

秦が漢に代わられてから、「漢自ずから制度有り」と言われたものの、都市建設や宮殿・庭園設計といった面では、明らかに秦代の基本的な考え方方が数多く継承された(庭園の広い水面など)。漢代の皇室庭園は非常に規模が大きく、巨大な池を開削して自然の水系を引き入れることを除き、大多数はやはり基本的に自然の一部を切り取って少し手を加えるだけで、遊んだり、狩りをしたり、植物を育てたりできる庭園としている。こうした庭園の營造方式は、当

時の貴族や富豪の庭園にも影響を与えた。文献に見られる袁廣漢(富豪の名前)の庭園では、園外から引き入れた急な水流、鳥や魚が飛び躍る広い水面、砂洲や人工的な築山などとともに、数多くの樹木や花卉もあり、サイなどの動物が飼育されていた。

三国時代の動乱を経て氏族が台頭して皇帝の権力が弱まり、度重なる政治の変動が両晋時代の社会的な特徴となった。この時代の文人・士大夫(文民官僚)階層の間では、黄帝や老子に対する崇拝、玄学(老子・莊子の哲学)の発展、山水への憧れ、自由奔放な生活などが流行している。玄学や隠遁が同時代の文人・士大夫を象徴するものとなり、社会では氣骨や品格を追求する文人・士大夫階層が高い名声や人望を得た。皇室は隠遁した名士を絶えず朝廷に召し戻し、社会の審美観や趣味もこの階層から影響を受けている。この時代には大規模な皇室庭園や個人庭園があまり营造されなくなっていたが、自然に対する審美観や物への愛着といった文人趣味、延いては名士たちの暮らし方が同時代の文化に深い影響を与えた。

永和九年、歳は癸丑在り。暮春の初め、会稽山陰の蘭亭に会す。禊事を脩むるなり。群賢畢ぐ至り、少長咸集まる。此の地に、崇山峻嶺、茂林脩竹有り。又、清流激湍有りて、左右に映帶す。引きて以て流觴の曲水と為し、其の次に列坐す。系竹管弦の盛無しと雖も、一觴一詠、亦以て幽情を暢叙するに足る。³⁾

[訳注：現代語訳]

永和九年(西暦353年)癸丑の年、暮春の初め、我々は会稽山陰の蘭亭に参集した。禊をとり行うためである。賢者がことごとく群れ集まり、また老いも若きも集まった。此の地はそり立つ高い山と険しい峰、よく茂った林と真っ直ぐ伸びた竹に恵まれている。清らかな流れには早瀬があり、辺りにきらめいている。この流れを引き込み、觴を流す曲水を設け、集まつた者は順次座った。琴や笛の音は無いが、觴を一杯飲んでは

一首の詩を詠う。この趣は深い自然の中にあって深奥の情を醸し出すに充分である。】

このように王羲之の『蘭亭集序』で表現された情緒や審美観は、中国の文人・士大夫階層、延いては中國伝統文化の主要な特質となっている。

両晋時代も中国で仏教が发展した重要な時代である。漢代に伝わって来た仏教は、この時代に宫廷から民間へ次第に伝播し始めている。しかし興味深いことに、西域から來た僧侶に加えて、東晋の慧遠など多くの高名な僧侶も黄帝や老子の教えに精通していた。慧遠は、当時の名士たちと交際しただけでなく、中国仏教の浄土宗で最も古い団体と思われる白蓮社を創始したが、これは當時に流行していた隠士の集團とも言える。慧遠が良き地を選んで東林寺を建立するときに表した審美観や趣味は、当時の玄学に通じた名士たちと同じであった。それについては、「慧遠が建立した精舎(寺院)は、山の美しさを充分に活かしている。そこは香炉峰を背負い、横の谷間にには滝がある。石で基礎が築かれ、松も植えられている。清い泉と石段があり、白雲が部屋に満ちている」²⁾と記されている。

3. 浄土宗と「浄土変相」壁画

浄土宗は中国で发展した宗派であり、その歴史に関する研究では東晋時代の慧遠大師(西暦334～416年)まで遡られ、「慧遠は玄学も含む広い學問を修め、儒学にも長じていた」³⁾という記述が見られる。慧遠は、晋代の社会、政治、文化などの影響を受け、因果応報の教えを深く信じて西方阿弥陀浄土への転生を願っていた。そして、「慧遠は、靈魂不滅の思想を信じ、生死の因果応報に深い恐れを抱いていたため、浄土へ転生する大願を起こした。元興元年には、劉道民、周統之、畢顥之、宗炳、雷次宗、張萊民、張季頤などとともに、精舎の無量寿仏像前に堂を建て、西方浄土を期すことを誓い合った。そのとき劉道民に「寅年の7月(戊辰朔)28日(乙未)、积慧

遠法師は、奥妙の理を深く感じて謹厳な心となり、志を同じくする篤信の者たち123名に集まるよう命じ、廬山にある陰般若雲台精舎の阿弥陀像前で香と花を供え、恭しく誓いを奉げる”と書かせた⁴⁾と記されている。これが中国浄土宗の始まりと考えられており、慧遠が西暦386年頃に廬山で建立した東林寺は浄土宗の発祥地とされた。

ここで注目に値するのは、玄学に精通した当時の名士たちが廬山で数多く慧遠と交わったが、慧遠が創始した白蓮社という浄土宗の団体に属する一部の者も玄学の深い造詣をもっていた、という点である。ある意味において、白蓮社は「隠士集團」と見ることもでき、彼らの審美観にも玄学の色彩が反映されている。

正式に浄土宗を創始したのは北魏の曇鸞である。それについては、「北魏の曇鸞は五台山の近くに住み、内外の経書を読んで文理に通じ、仏性に関する四論(四つの仏教書)を極め尽くしていた。後に南の梁へ行き、武帝に重んじられる。洛陽へ帰った後に会った菩提流支(インド出身の僧侶)から『觀無量壽經』の講義を受け、遂に悟りを得た。晩年には汾州北山の石壁玄中寺に住んで専ら浄土の教えを説き、『礼淨土十二偈』と『安樂集』の二巻を著わして世に広めた。そのため、後世の人から浄土宗の開祖と仰がれている⁵⁾と記されている。曇鸞の後を承けた道绰は、引き続ぎ玄中寺で浄土宗の発展に努めつつ『淨土論』二巻を著わし、浄土宗の第二祖と呼ばれた。

浄土宗の第三祖と考えられている善導(西暦613～681年)は、『觀無量壽佛經疏』、『往生礼賛偈』、『淨土法事贊』などを著わした。ここで特に注目すべきなのは、善導が300幅もの「淨土変相」図を描き、「淨土變相」の製作を一種の修行や功德と位置付けている点である。こうした題材の壁画は当時の寺院によく見られ、仏教の信仰を広める方法の一種と言える。敦煌莫高窟の唐代に開削された洞窟では、そうした浄土変相を題材とした壁画が今でも見られる。

敦煌に現存している「淨土變相」では主に西方極楽世界の様相が描かれており、壮大な建築物、七宝の蓮池、八功德水、咲き誇る花々、菩薩、楽師、飛天などにより西方極楽世界の風景が構成されている。しかし、このような風景を空想だけで描くのは難しく、それには実際の手本があるはずである。帝王の宮殿や大規模な寺院などのいずれもが、そうした「淨土」図を創作する源泉となったのであろう。唐代の宮殿跡に関する研究では、淨土變相における建築物の配置方式と唐代の宮廷建築との関係が明確に判明している。そして、池や蓮の花といった要素は明らかに仏教經典に基づいて描かれたものであり、「七宝の蓮池」や「八功德水」の付属物と言える。

宋代以後の一部寺院では「淨土池」といった呼称が使われているが、淨土變相図に淨土宗寺院の特別な配置規則が反映されていることを直接的に証明するものはない。実際には、中国の社会で流行していた「自宅を寺院に寄進する」徳行の方が寺院の配置方式に大きく影響している。

4. 佛教と作庭思想の伝来

多くの場合、古代中国の文化には文人・士大夫の文化的特徴が表れている。社会の精銳とも言える文人・士大夫階層の思想や気風は、社会の思想や気風を主導しつつ社会の中心的な意識を構成していた。唐代以後における中国庭園の発展を見ると、次に挙げる2つの傾向が表始めている。第一に、皇室庭園に代表される壮大さや華麗さを追求した庭園の風格である。中国の芸術史上において、こうした傾向は李昭道や李思訓に代表される青綠工筆の山水画と対応し、豪華で絢爛豪華な審美観や趣味を表現している。第二に、文人庭園に代表される簡素で清雅な庭園の風格である。これは盛んになり始めていた、筆や墨の趣味にこだわる文人画と対応し、詩境を追求した審美観や趣味を表現している。

唐代の皇室庭園で最も重要なのは大明宮の御苑である。御苑の中央部に1.6haの太液池があり、池の

中には島が築かれ、池の周囲には数多くの建築物が配されている。興慶宮も同じく唐代で最も有名な宮殿だが、その庭園区域は池を中心に据えた配置になつており、池の面積は約1.8haである。この池の周囲に宮殿建築が配置され、帝王は、それら宮殿の中で外国の使者を迎える、殿試(科挙の最終試験)を行ったり、各種の儀式を見たりした。東都・洛陽の西苑でも人工的に開削された「北海」が中心に据えられ、その「海」の中に3つの島が設けられている。ただし、既存の文献を見ても、「淨土変相」に類似した配置方式、または「淨土变相」形式の影響を受けた建築配置は認められない。

唐代は個人庭園が急速に発展した時期であり、特に文人庭園が流行した。王維の鴨川荘は境地を重んじつつ营造された中国庭園の典型とされ、白居易も生涯で多くの庭園を营造している。王維とその友人たちは、鴨川荘で景色を愛でたり、詩作したりして風景に心を託し、詩文を『鴨川集』にまとめ、風景画を『鴨川図』にまとめた。これは中国の造園史上で大きな意義をもつておらず、中国庭園の新境地を開くものと言える。文人の個人庭園は、境地を重んじた庭園营造を提倡および実践する場となっている。王維は『山中で秀才・裴迪に与える書』の中で以下のように記した。

「夜に華子岡へ登ると、鴨水のさざ波が月影とともに上下している。寒山の遠い灯りの明滅が林の外から見える」

「春になると草木が生い茂り、山が美しくなる。敏捷な鷺が水面に躍り、白い鷗が翼を広げて、朝露が緑の草を濡らし、朝には麦畠で雉が鳴く。こうしたことがもうすぐ訪れるが、(君は)私とともに遊べるか」

高遠で晴れやかな境地が紙上で躍っているように感じられる。

白居易は、庭園について「新昌の小院(小さな庭)では松が戸に当たり、履道坊の閑居では、竹が池を囲んでいる。いずれも空しい宅と言うなかれ。林、

泉、風、月などが家の財なのだ」と記している。白居易の心中では、林、泉、風、月などが庭園を营造する目的なのである。彼の庭園では草木が心を持ち、石や竹などのすべてに品格がある。そして、「淡泊な性質の水は我が友とでき、虚心な竹は我が師である」や「池は暮れて蓮も間の中に消え、秋の窓に見える竹の意は深い」とも記している。

唐代における庭園の营造法は、両晋や南北朝のとき形成された隠士文化の延長と見なすことができ、都市の中の山林、閑居の実現、および心の自由という理想を追求している。君主に影響を及ぼしながら平民から尊敬される対象となる階層のこうした心のあり方は、容易に庭園へ影響を与え、それを一種の芸術作品を見る考え方導いていく。

宋代の文人・士大夫階層は、帝王から尊重されて高い社会的地位を得るとともに、社会に対する大きな影響力も有していた。文人画、特に山水画が发展するにつれて、庭園の「詩情画意」を大切にしつつ境地の表現を重視する手法がさらに成熟し、絵画の写意的な表現手法により庭園設計の進歩がさらに促進された。宋代には個人庭園がますます流行し、「数多くの楼台が30里にもわたって築かれ、どこに静かな山があるのかも分からぬ」といった状況を呈するまでになっている。このような背景の下、宋代には文人庭園が次第に成熟し、「簡素・高遠」、「簡明」、「優雅」、「天然」などを特徴とする庭園の風格が現れた。

宋代以後に帝王が文人化していく傾向を受け、皇室庭園の营造に際しても文人庭園の特徴がますます表現されるようになった。例えば、宋代で最も有名な皇室庭園である「艮岳」については、規模を大きくして数多くの珍しい石や植物を各地から集めていることを除き、その設計手法は当時の文人庭園とさほど変わらない。宋の徽宗皇帝は、そうした点を自ら説明するため「岩、谷、洞穴、亭閣、楼台、樹木、草などが多くまたは低く、遠くまたは近く、出たり入った

り、華やかであったり、枯れていたりするように配されている。周囲を歩き回って仰ぎ見ると、まるで深い山間の谷底にいるようだ」と記述している。このような傾向は、連綿と清代まで引き継がれた。

寺院庭園は中国庭園の主要な部分の1つである。しかし、現存する実物や明確な考古材料がないうえ、この時代の寺院庭園に関する文献の記述は、ほとんどが非常に簡単である。例えば、長安の大薦福寺については「寺の東院には放生池があり、その周囲は200歩余りで、漢代には洪池陂と呼ばれたと伝えられている⁶⁾」、長楽坊の光明寺については「庭園に山や池があり、数多い古木が高く聳えていて、まるで山間の谷のように静かだ⁷⁾」と記されている。一部の寺院では庭園の池が埋め立てられた。例えば、崇義坊の招福寺については「元は寺の中に池があったが、永樂東街の土で埋め立てられた」、大興善寺については「元は寺の裏に曲池があったが…今は陸地に戻っている⁸⁾」と記されている。現有の資料を見ても、唐代の寺院庭園が独自の完全な風格や比較的に成熟した方式を備えていたかどうかは読み取れない。ここで注目に値するのは、唐以後の高僧たちがしばしば極めて強い文人気質を發揮しているとともに、その多くが当時の名士と密接に交わっている点である。そのため、寺院庭園でも文人庭園の特徴が表現されているのだ。こうした状況下では、ある種の固定的な形態を重んじる庭園形式はなかなか影響力をもてない。

宋代は中国で淨土宗が繁栄・発展した時代である。しかし、その影響力は禅宗に比べるべくもなく、淨土宗寺院の独特な配置や庭園形式に関する文献も見当たらない。それに比べて、江南の重要な禅宗寺院である靈隱寺は、単なる寺院と見られるのではなく、当時の有名な景勝地とされていた。それについては、「東南の山水では余杭が第一、郡では靈隱寺が第一、寺では冷泉亭が第一である。この亭は寺の西南部で山下の水中にあり、あまり高くなく、大きくもないが、すばらしい景色を見ることができ、すべてを見

通せる。春には草木が美しく、穏やかかつ純粹に人の気血を巡らせる。夏には泉の風が涼しく、憂いがなくなつて酒の酔いも醒め、人の心を静めさせる。山の木々が屋根となり、岩が屏風となつていて。雲が建物から生じ、水と石段が平らになつていて⁹⁾」と記されている。自然や野趣の追求も明らかに当時の寺院の庭園や環境がもつ特徴となっており、こうした特定の文化的要素を伴う自然や野趣は、少なくとも高尚な趣味を反映させた庭園形態の一種と考えられる。そして、個人庭園、寺院庭園、延いては皇室庭園のいずれでも達することが期待される境地なのである。

5. 中国庭園における水と水庭

水は中国庭園の重要な要素であり、庭園に動きを与えるとともに、詩心や画境の担体ともなる。白居易が庭園について詠んだ詩文では水に関する明確な記述が見られ、王維の輞川荘にも茱萸片、欹湖、金屑泉といった水景がある。皇室庭園でも水は不可欠な構成部分となる。皇室庭園での水は、景観要素の一種であるだけでなく、例えば領土や神仙の国などを象徴する一定の意味をもつ。そして、水と山のバランスは中国の伝統的な世界観の反映と言うことができ、「仁者は山を楽しみ、智者は水を楽しむ」という観念も庭園の营造に反映される。また、中国で水が財産の象徴とされていることも、庭園を营造する人々に水体をより重視させている。

秦代には、「始皇帝は潤水を引いて池となし、それは東西20丈、南北20里にわたる。また、蓬萊山を築いて鯨を石で刻み、その長さは200丈である¹⁰⁾」という記述が見られる。

漢代に武帝が開削した昆明池については、「池の中には豫章台と石の鯨があり、その石で刻まれた鯨の長さは3丈である。それは雷雨のたびに吼え、鬱^{イク}や尾を振る」、「池の中に龍首船を浮かべ、しばしば宮女たちを乗せていた。鳳蓋^{ヒナガマ}を張り(皇帝の儀仗)、華やかな旗を立て、歌を唄つたり樂器を

演奏したりし、皇帝自ら豫章台へ赴いた¹¹⁾」、「武帝は月を愛るために池を開削し、その横で月を眺めるために望閣台^{ぼうかくだい}を建てた。月の影が池に映ると、宮人を船に乗せて月影で遊ばせた。それは影娥池または眺瓈宮と呼ばれた¹²⁾」などと記されている。また、建章宮の中にも池が掘られ、池の中に仙人の島を象徴する3つの山が築かれた。そして、一部の豪族や富豪の個人庭園でも、水は重要な要素とされている。「西京雜記」では、袁廣漢の個人庭園に関して「その中に激しい流水を入れ、…秒で島を築き、激しい水で波を起こさせた」という記述が見られる。

後燕(5世紀)のとき建設された龍勝苑についても、「天河渠を開削して宮殿内へ水を引いた。また、その昭儀(官名)である苻氏のために曲光海や清涼池も開削した¹³⁾」と記されている。

6世紀頃、北齊で最後の君主となった高綽が仙都苑を建設した。この庭園内には中国の五名山を象徴する5つの山が築かれ、漳河から引かれた4つの流れが四海とされた。

北魏の洛陽城については、「華林園の中には大海になぞらえた魏天淵池が造られ、池の中には文帝九華台もあった¹⁴⁾」という記述が見られる。洛陽の城西については、「西遊園の中には魏の文帝に築かれた凌雲台があり…台の下に碧海曲池、台の東に宣悲觀が設けられ、その高さは10丈である。觀の東には雲芝釣台が木材で築かれており、その池からの高さは20丈である。…釣台を背景として石の鯨があり、それは地から湧き出して空中を飛んでいるよう見える。釣台の南に宣光殿、北に嘉福殿、西に九龍殿がある。殿前の九龍に吐かれた水が池になっている¹⁵⁾」と記されている。

唐代の皇室庭園では水面を景観の中心に据える手法がとられ、長安の大明宮や興慶宮、東都・洛陽の西苑といった主な宮殿の庭園でも同じような手法が用いられている。唐代には漢の未央宮跡で通光殿が建設され、その両側に詔芳亭と凝思亭が造られた。

洛陽宮内の流杯殿も両側に配された亭が池を囲む配置形式である。また、渤海海上京禁苑の考古遺跡でも似た配置方式がとられている。これら皇室庭園の美しい風景は、人々が西方浄土世界を描くための手本となり得る。宋代の金明池は水軍を訓練するために營造されたものだが、やはり配置上では整然かつ対称的にしようという意図が感じられる。

個人庭園、特に文人庭園の発展により、境地の表現が庭園設計の中心的内容となっている。そして、風、月、雲、水面、島、山などによる自然界の模倣・再現が庭園造営の主な方式とされ、整然かつ対称的な配置は主流から外れた。封建時代末期の皇室庭園では、そうした手法が用いられたこともあったが(例えば、頤和園の前山建築群と昆明湖との対称関係)、それら庭園の手法は浄土世界という宗教的な意味をもたない。一方、皇室庭園も含む多くの庭園が、文人庭園のように境地を表現する方向へと発展していった(承德避暑山莊など)。

寺院について見ると、仏典で取り上げられている七宝の蓮池や八功德水といった内容は、寺院が好んで表現する題材であり続けてきたが、その配置の固定的な方式に関する記述は見当たらない。有名な寺院庭園である蘇州・西園では、放生池が中心に据えられて、東岸に「蘇台春満」軒、池の中に亭がそれぞれ配されたうえ、2つの九曲橋で東西两岸が結ばれており、そうした配置上で「淨土変相」の痕跡が若干は認められる。そして、昆明円通寺は池を建築物で取り囲む対称配置となっていて、より「淨土変相」の方式に似ている。しかし、民国時代の写真を見ると、その池の痕跡がなくなっていた。また、寧波保国寺で南宋時代に開削された「淨土池」は水庭に近いが、池の中には平台や建築物がない。これは名称を借用したものと言うべきであり、一種の固定的な方式が反映されたものではなかろう。晋祠聖母殿の魚沼飛梁も似た形態だが、それと浄土信仰の関係は確認できない。

6. 結論

中国庭園の発展過程は、主として文化化の過程と言えよう。中国庭園の中で最も古い一部の皇室庭園は、營造後の発展において文化化の傾向がますます顕著になっていった。その過程では詩情画意の強調が最重要の内容とされている。中国庭園で詩情画意を強調する方法は土地に応じ、時に応じて変化し統一、固定的な方式が中国庭園の主導的な地位を得るには至らなかった。

水と水庭は中国庭園の重要な景観要素だが、同時に庭園の中で多様に移り変わる要素でもあり、その固定的な方式が存在するわけではない。

淨土変相とは、仏教の淨土世界に対する僧侶、工匠、供養者などの理解を表すものと言える。後世の中国の寺院で「淨土池」といった名称が使われ、敦煌壁画の「淨土」や「淨土變相」もある程度は唐代の建築物や庭園の状況を反映しているものの、こうした建築物や庭園の形態および配置が一種の固定的な方式として中国の寺院(淨土宗寺院も含む)や庭園で用いられてきたわけではない。また、中国で現存する寺院や庭園の中には、「淨土」という名称を用いたうえ敦煌の淨土變相図とも完全に合致するものが見当たらない。

註

- 1)『蘭亭集序』
- 2)『高僧伝・慧遠』
- 3)『漢・魏・両晉・南北朝仏教史』湯用形、武漢大学出版社、2008. P242
- 4)『漢・魏・両晉・南北朝仏教史』湯用形、武漢大学出版社、2008. P246
- 5)『隋・唐仏教史稿』湯用形、武漢大学出版社、2008. P179
- 6)『長安誌』
- 7・8)『西陽雜俎・寺塔記』
- 9)『冷泉亭記』
- 10)『元和郡縣圖誌』
- 11)『三輔故事』
- 12)『三輔黃圖』
- 13)『晉書・慕容熙載記』
- 14・15)『洛陽伽藍記』

参考文献

- 1)『漢・魏・両晉・南北朝仏教史』湯用形、武漢大学出版社、2008
- 2)『隋・唐仏教史稿』湯用形、武漢大学出版社、2008
- 3)『中国古典園林史』周維權、清华大学出版社、1999
- 4)『江南園林史』中国建築工業出版社、1984
- 5)『中国古代建築史』第二・三卷、中国建築工業出版社、2001. 2003



図-1 南越国宮殿遺跡 平面図（一部）



図-2 榆林窟 第25窟 觀無量壽經變

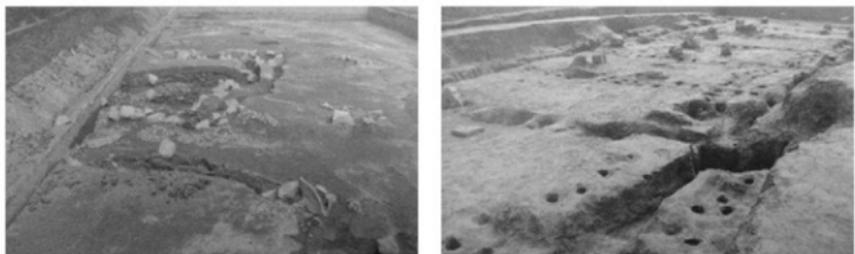


図-3. 太液池（左：蓬萊島南岸遺構、右：北岸建築遺構）



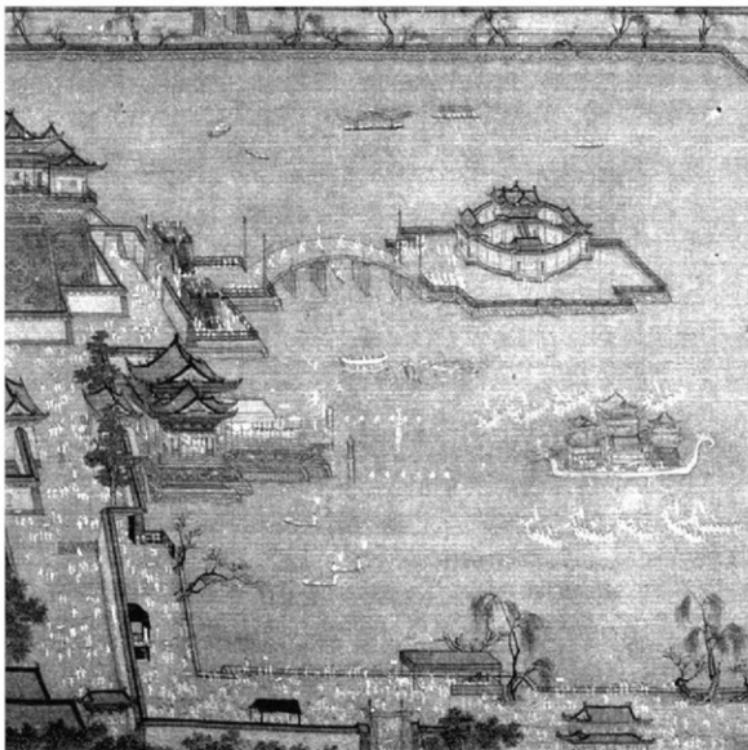
図-4. 漢宮図 趙伯駒（南宋早期；12世紀）



図-5. 風櫓展卷図 趙伯駒（南宋早期；12世紀）



図-6. 高士図 衛賢（五代；10世紀）



《金明池奪標図》

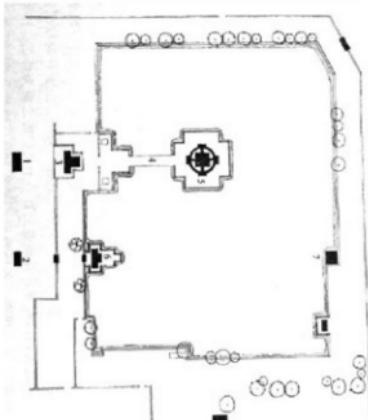


図-7. 金明池

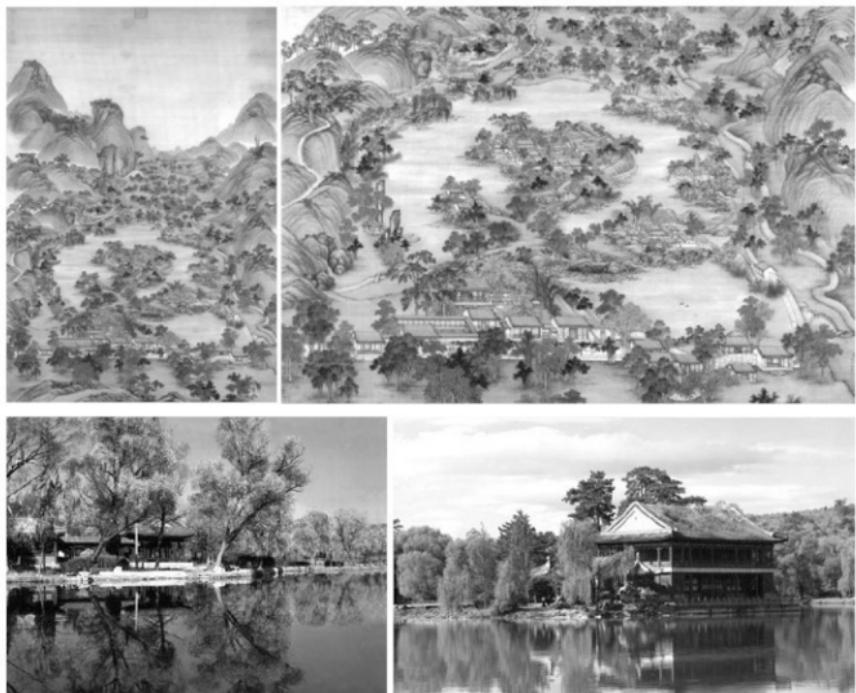


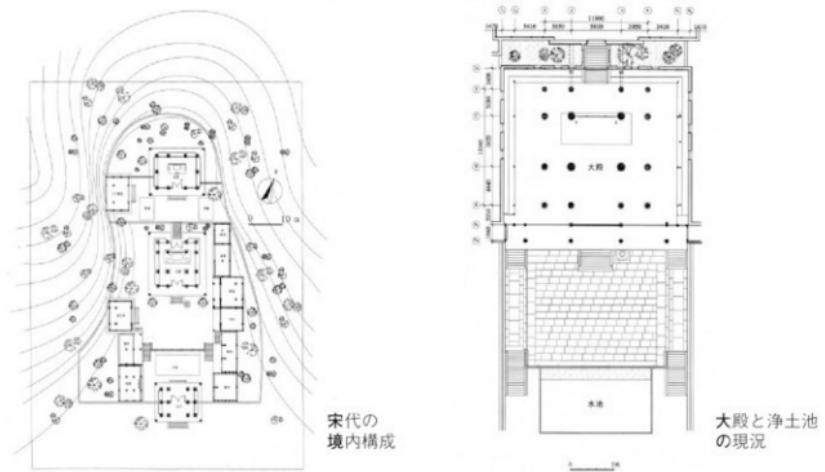
図-8. 避暑山莊（承德）



図-9. 頤和園（北京）



図-10. 拙政園（蘇州）



*図版は、『東來第一山—保國寺』（清华大学建築学院 郭黛姮・宁波保國寺文物保管所）による。



図-11. 保国寺（寧波） 大殿と淨土池

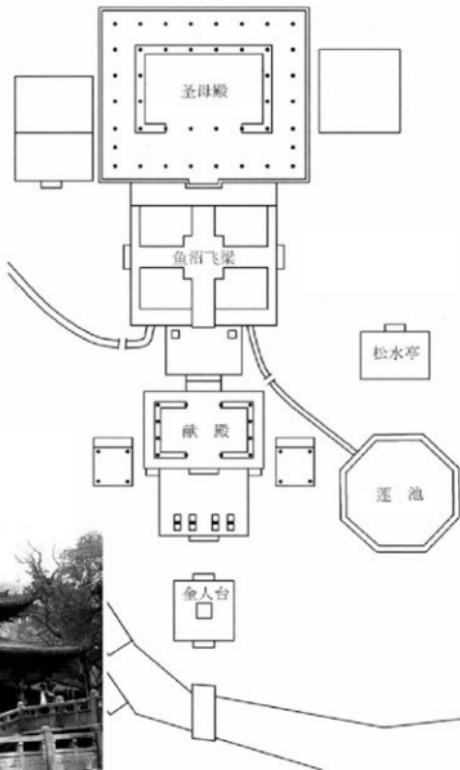


図-12. 聖母殿と魚沼飛梁（晋祠）

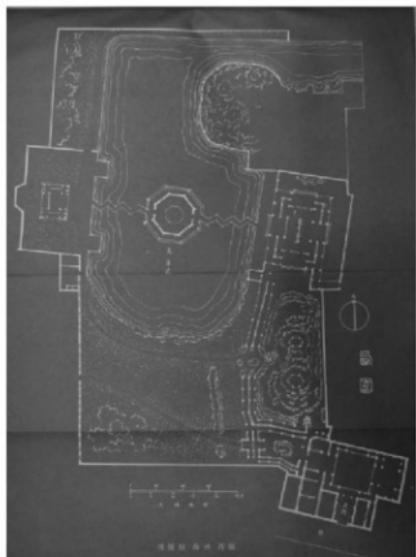


図-13. 西園（蘇州）平面図と創建当時の建物復元



図-14. 圓通寺（昆明）

中国古代园林发展与净土和净土园林

吕 舟（清华大学 教授）

中国园林的历史可以上溯到商代，是世界上历史最为悠久的园林体系之一。隋唐之后中国园林开始出现了强调“意境”的倾向，并最终成为中国园林的基本特征之一。中国园林作为中国文化的主要组成部分和载体，从唐宋时期通过东亚各国的遣唐使对东亚地区园林的发展产生影响，在18、19世纪则通过来自西方的传教士对欧洲园林产生影响。在中国园林发展的过程当中，中国传统的哲学、信仰、宗教都在园林的主题、形态特征中得到了反映。

净土宗是中国佛教的宗派之一，唐宋之后对中国社会有一定的影响，并传播到东亚地区。净土宗对日本园林的发展产生了重要的影响，但却没有在中国园林的发展过程中留下明显的印记。

在敦煌壁画中有一种被称之为“净土变”的题材。在这些壁画中反映了人们所向往的西方净土世界的美丽景象。在这些反映净土世界的图像中，通常是建筑环绕的莲池上有巨大的平台，佛、菩萨们法相庄严的端坐，而伎乐天、飞天们则在展示她们美丽的身姿和舞蹈。这样的一种建筑、水面的布局方式与中国传统园林的发展是一种什么样的关系。它是否是一种成熟的园林或寺院布局方式，是一个值得研究的问题。

一、汉魏两晋时期的中国园林

中国园林发端不晚于商周。《诗经》中已经有关于园林的描述。这一时期的园林通常以园囿的形态出现，为天子或诸侯营造，兼有行宫、种植园和猎场的功能。秦汉以后这种园林演化成规模宏大的皇家园林，其功

能则仍旧保持了行宫、种植园和猎场的内容。值得注意的是，这一时期皇家园林中建筑、水、山等要素已经逐步成为园林的基本组成部分。秦作为中国历史上第一个统一的帝国，在其短暂的历史中营建了大量的宫室、园囿。在园囿营造中由于帝王迷信神仙传说，追求长生不老，出现了模拟大海和传说中海上仙岛的大面积的水面和岛屿的园林表现方式，水面和岛屿也因此而成为皇家园囿中具有象征性的重要元素。

汉代替秦之后，尽管“汉自有制度”，但在城市营建，宫室、园囿设计等方面则显然继承了秦代的许多基本意向，包括园囿中的大片水面。汉代的皇家园囿规模巨大，在大多数情况下除了开挖尺度巨大的水面，引入自然的水系之外，基本上还是截取自然的一部分，稍经经营便成为可游、可猎、可植的园囿。这种园林营建的方式也影响到了当时贵族和富豪的园林。在文献所反映的袁广汉园林中，既有从园外引入的湍急的水流，鱼跃鸥飞宽阔的水面、沙洲和人工堆叠的山岭，又有大量树木、花卉，饲养的包括犀牛在内的动物。

经过三国时代的动荡，氏族的崛起和皇权的削弱，政治的反复变化成为两晋时期的社会特征。推崇黄老之说，发展玄学，寄情山水，放浪形骸成为这一时期文人士大夫阶层的时尚。玄学、归隐成为这一时代文人士大夫的标志，而由于对风骨和品格的追求，使文人士大夫阶层获得了很高的社会声誉和威望，皇室不断邀请归隐的名士重回朝廷，而社会的审美趣味也受到这一阶层的影响。在这一时期规模巨大的皇家园囿或私家园林的营造活动已少有进行，但对自然的审美，以物寄情的文人趣味，甚至名士们的生活方式却对这

一代代的文化产生了深刻的影响。

“永和九年，岁在癸丑。暮春之初，会于会稽山阴之兰亭，修禊事也。群贤毕至，少长咸集。此地有崇山峻岭、茂林修竹，又有清流激湍，映带左右。引以为流觞曲水，列坐其次。虽无丝竹管弦之盛，一觞一咏亦足以畅叙幽情矣。”（注1）王羲之的《兰亭集序》所表达的那种情趣与审美成为中国文人士大夫阶层，甚至是中国传统文化的主要特质。

西晋时期也是中国佛教发展的一个重要时期。汉代传入的佛教从这一时期开始逐步从宫廷走向民间，但有意思的是除了那些来自西域的僧人之外，即便是一些著名的高僧也往往精通黄老之说。例如东晋的慧远。慧远不仅与当时的名士交往，他创建的被认为是中国佛教净土宗最早团体的白莲社也更接近于一个当时流行的隐士集团。在他择地建立东林寺的时候，他所表现出的审美趣味与当时的玄学名士们并无二致：“远创造精舍，洞尽山美。却负香炉之峰，旁带瀑布之壑。仍石构基，既松栽构。清泉环阶，白云满室。”（注2）

二、净土宗和“净土变”壁画

关于慧远（公元334—416）：“慧远学问兼综玄释，并擅儒学”（注3）。由于晋代的社会、政治、文化的影响，慧远深信报应之说，以投生西方阿弥陀净土为愿。“远公既持精灵不灭之说，又深忧生死报应之威，故发弘愿，期生净土。元兴元年与刘遗民、周续之、毕颖之、宗炳、雷次宗、张莱民、张季硕于精舍无量寿佛像前建斋立誓，共期西方。乃令刘遗民著其文，首曰：‘维岁在摄提格，七月戊辰朔，二十八日乙未，法师释慧远，贞感幽奥，霜怀特发，乃延命同志息心贞信之士百有二十三人，集于庐山之阴般若云台精舍阿弥陀像前，率以香华，敬荐而誓焉’”（注4）。这一事件被认为是中国净土宗的肇始。慧远公元386年前后在庐山创立的东林寺则成为净土宗的发祥地。

真正创立净土宗的则是北魏的昙鸾。“北魏昙鸾家近五台山，内外经籍具陶文理，而于四论佛性弥所穷究。后南游梁，为武帝所重。后还洛下，遇菩提流支，授以《观无量寿经》遂有所悟。晚住汾州北山石壁玄中寺，专唱净土，撰《礼净土十二偈》、《安乐集》二卷，广流于世。故后人推为净土宗初祖云。”（注5）昙鸾之后道绰继续在玄中寺弘扬净土宗，著有《净土论》二卷，被称为净土宗二祖。

善导（公元613—681）被认为是净土宗的第三代祖师，他曾著《观无量寿佛经疏》、《往生礼赞偈》、《净土法事赞》等著作。特别值得提出的是，他还曾画三百幅“净土变”图，并将绘制“净土变”作为一种修行和功德。这种题材的壁画在当时的寺庙中是一种常见的传播佛教信仰的方式。今天在敦煌莫高窟的唐代开凿的窟龛中还能见到这类的净土变题材的壁画。

敦煌现存的“净土变”主要表现西方极乐世界的景象，以宏伟的建筑、七宝莲池、八功德水、缤纷的花卉、菩萨、乐师、飞天等构成一幅西方极乐世界的图景。但显然这样一幅图景是无法凭空创造出来的，它必然有现实的蓝本。帝王的宫殿、规模巨大的寺庙都成为这幅“净土”图景创作的源泉。根据对唐代宫殿遗址的研究，可以清楚地看到，在净土变中的建筑布局形式与唐代宫廷建筑之间的关系。而水池、莲花等内容则显然源于佛经的描述，是对“七宝莲池”、“八功德水”的附会。

宋代以后在一些寺庙中出现了“净土池”等称谓，但仍没有直接的证据说明净土变的图像反映了净土宗寺庙特殊的布局规制，事实上在中国社会流行的“舍宅为寺”的功德行为却在更大程度上影响着寺院布局的方式。

三、唐宋时期的中国园林

中国古代文化在大多数情况下表现出了一种文人士大夫文化的特征，文人士大夫阶层作为社会的精英阶层，他们的思想和情趣主导着社会的思想和情趣，构成了社会的主导意识。唐代之后，中国园林的发展开始表现出两种倾向，一种是以皇家园林为代表的，追求宏大、华丽的园林风格，在中国艺术史上，这种倾向与以李昭道和李思训为代表的青绿工笔山水画相互呼应，表现了奢靡、绚丽的审美趣味。另一种则是以文人园林为代表的简约、清雅的园林风格，它与刚刚兴起的讲究笔墨趣味的文人画相互呼应，表现追求诗境的审美趣味。

唐代皇家园囿中最为重要的是大明宫的御苑。在御苑的中部是占地 1.6 公顷的太液池，池中有岛，池的周围则有大量的建筑。兴庆宫同样是唐代最为著名的宫殿，它的园林区也以水池为核心布置，水池的遗址大约占地 1.8 公顷。在这一水池周围，布置有宫殿建筑。帝王在这些殿宇中接待外国使臣，举行殿试，观看各种表演。东都洛阳的西苑也以人工开凿的“北海”为中心，“海”中有三岛。但从现有文献看不到有类似“净土变”的布局方式或者在建筑布局上受到“净土变”形式的影响。

唐代是一个私家园林迅速发展的时期，特别是文人园林更是成为了一种风尚。王维的辋川别业成为中国园林侧重意境创造的典范：白居易一生更是营建了多处宅园。王维及其友人在辋川别业中赏景，赋诗，以景寓情，并将诗文集为《辋川集》，将景色画成《辋川图》。这成为中国造园史上的一件美事，开中国园林意境表现的先河。而文人的私家园林则成为园林意境营造的倡导者和实践地。王维在《山中与裴秀才迪书》中写到：

“夜登华子冈，辋水沦涟，与月上下。寒山远火，明灭林外。”

“当待春中草木蔓发，春山可望，轻鲦出水，白鸥矫翼，露湿青皋，麦陇朝旬佳，斯之不远，尚能从我游乎？”高远、晴明的意境跃然之上。

关于宅园，白居易写道：“新昌小院松当户，履道幽居竹绕池。莫道西都空有宅，林泉风月是家资。”显然在白居易心中，林泉风月是他营建宅园的目的。在他的园林当中草木生情，一石一竹皆是品格：“水能性淡为吾友，竹解心虚即可师”，“池晚莲芳榭，窗秋竹意深”。

唐代宅园的营造之风可以被看作是两晋、南北朝形成的隐士文化的延续，追求一种都市中的山林，实现隐居，追求心灵自由的理想。这样一种心态对于一个一面可以影响君王，一面又是平民敬仰的对象的阶层而言，是很容易影响园林作为一种艺术创作的方向的。

宋代，文人士大夫阶层受到帝王的尊重，获得了更高的社会地位，也具有了更大的社会影响。随着文人画，特别是山水画的发展，在园林中讲究“诗情画意”，重在意境表达的手法更趋成熟，而绘画中写意的表现手法促进了园林设计的发展。私家园林在宋代成为一种风尚，以至于出现了“一色楼台三十里，不知何处见孤山”的景象。在这样的背景下，宋代文人园林逐步成熟，出现了以“简远”、“疏朗”、“雅致”和“天然”为特征的园林风格。

宋以后，帝王文人化的趋势，使得皇家园林在营建当中也越来越多地表现出文人园林的特征。例如宋代最为著名的皇家园林“艮岳”除了规模巨大，以及从各地收集的大量奇石异卉之外，在园林设计手法上和当时的文人园林并没有太大的差别。宋徽宗自己在《艮岳记》中的描述也说明了这一点：“岩峡洞穴，亭阁楼观，乔木茂草，或高或下，或远或近，一出一人，一荣一凋。四面周匝，徘徊而仰顾，若在重山大壑，幽谷深岩之底”。这种趋向一直延续到清代。

寺庙园林是中国园林的一个主要部分，由于没有现存的实物和清晰的考古材料，而且文献中对这一时期的寺庙园林的描述大多十分简约。例如：长安的大荐福寺“寺东院有放生池，周二百余步，传云即汉代洪池陂也”（注6）。长乐坊的光明寺“山池庭院，古木崇阜，幽若山谷。”（注7）。有些寺院的情况则是将园池填平，如崇义坊的招福寺，“寺内旧有池，下永乐东街数方土填之”；大兴善寺“寺后先有曲池...今复成陆矣”（注8）。从现有资料看不出唐代的寺院园林已经形成自己完整的风格，或者有相对成熟的模式。值得注意的是，唐以后的高僧大师们往往表现出极强的文人特质，且大多与当时的名士往来密切，这就使得寺庙园林也同样表现出文人园林的特征。在这种情况下，那种尊崇某种固定的形态的园林形式本身就难以产生影响。

宋代是中国净土宗繁荣发展的时期。但其影响仍难以和禅宗相比，也没有相关文献涉及净土宗寺庙的特殊格局或园林型制。相反，作为江南重要的禅宗寺院的灵隐寺似乎不仅仅是一座寺院，而且也是当时著名的风景名胜区：“东南山水余杭为最，就郡则灵隐寺为最，就寺则冷泉亭为最。亭在山下水中，寺西南隅，高不倍寻，广不累丈，撮奇搜胜，物无遁形。春之日，草薰木欣，可以导和纳粹，畅人气血；夏之日，风冷泉汀，可以除烦析醒，起人幽情。山树为盖，岩石为屏。云从栋生，水与阶平。”（注9）显然，追求自然和野趣也是这一时期寺院园林或寺院环境的特征，至少这种被赋予了特定文化内涵的自然野趣被认为是一种反映高尚趣味的园林形态，是一种无论私家园林还是寺庙园林，甚至皇家园林期望达到的境界。

四、中国园林中的水和水庭

水是中国园林中的重要元素，它使得园林变得灵动，也使得诗意与画境有了载体。白居易在他记述园林的诗文中有过清楚的描述，而王维的辋川别业，更是有

茱萸片、欹湖、金屑泉等水景。在皇家园林中水也同样是不可缺少的组成部分。在皇家园林中水不仅是一种景观要素，同时还在某种程度上具有象征意义，例如作为疆土的象征，作为神仙国度的象征等等。而水与山的均衡更反映了中国传统的世界观。“仁者乐山，智者乐水”的观念同样也反映在园林的营建过程当中。在中国水还是财富的象征，这也促使人们在营造园林的过程中对水体的重视。

秦代“始皇引渭水为池，东西二百丈，南北二十里，筑为蓬莱山，刻石为鲸鱼，长二百丈”（注10）；

汉代，武帝开昆明池“池中有豫章台及石鲸，刻石为鲸鱼，长三丈。每至雷雨，常鸣吼，鬚尾皆动”；“池中有龙首船，常令宫女泛舟池中。张凤盖，建华旗，作擢歌，杂以鼓吹，帝御豫章观临观焉”（注11）；“武帝凿池以玩月，其旁起望鹤台以眺月。影入池中，使官人乘舟弄月影，名影娥池，亦名眺蟾宫”（注12）；在建章宫内更开挖水池，在池中筑三山，象征海上仙山。另外在一些豪族巨富的私园中，也将水景作为园林的重要内容。《西京杂记》中描写了袁广汉的私园“激流水注其内，.....积沙为洲屿，激水为波澜”。

后燕（5世纪处）兴建龙腾苑“凿天河渠，引水入宫。又为其昭仪符氏凿曲光海、清凉池”（注13）。

公元6世纪，北齐后主高纬建仙都苑。苑中堆土筑五山象征五岳，引漳河水分流四渎为四海。

北魏洛阳城中“华林园中有大海，即魏天津池，池中犹有文帝九华台”（注14），洛阳城西有“西游园，园中有凌云台即是魏文帝所筑者.....台下有碧海曲池，台东有宣慈观，去地十丈。观东有灵芝钓台，累木为之，出于海中，去地二十丈。.....刻石为鲸鱼，背负钓台，既如从地涌出，又似空中飞下。钓台南有宣光殿，北有嘉福殿，西有九龙殿。殿前九龙吐水成一海。”（注15）

唐代皇家园林中水面作为核心景观的手法，在长安的大明宫、兴庆宫，以及东都洛阳的西苑等主要宫殿区的园林中都有所反映。唐代曾在汉未央宫遗址上建通光殿，两侧为诏芳、凝思二亭。洛阳宫内流杯殿也是两侧出亭，环绕水池的布局形式。渤海海上京禁苑的考古遗迹也反映了类似的布局方式。这些皇家园林的美丽景色可能成为人们描绘西方净土世界的蓝本。宋代的金明池，尽管建池的目的为训练水军，但从格局上仍然表达了严整、对称的意向。

私家园林，特别是文人园林的兴起，使得意境的表达成为园林设计的核心内容，风月云影，水面与岛屿、山阜，模仿、重现自然中的关系成为园林造景的主要方式，规整、对称的布局关系不再是园林设计的主要手法，虽然在中国封建社会的晚期的皇家园林中，这种手法仍时有出现，例如颐和园前山建筑群与昆明湖的对位关系，但这种园林手法并无净土世界的宗教含义。相反更多的包括皇家园林在内的园林在文人园林意境表现的方向上有了更多的发展，例如承德避暑山庄。

对寺院而言，七宝莲池、八功德水之类，佛经中曾经提到的内容，始终是寺院乐于表达的题材，然而在格局上却没有看到关于相对固定的模式的记载。苏州的西园是著名的寺廟园林。西园的核心是放生池，东岸有“苏台春满”轩，池中有亭，并经两道九曲桥与东西两岸相连，格局上多少有些“净土变”的痕迹。昆明圆通寺尽管是建筑环水池对称布局，更接近于“净

土变”的模式，只是在民国时期的照片中并无这一水池的痕迹。宁波保国寺开凿于南宋的“净土池”更接近于水院，池中也没有平台、建筑，在这里应当是名称的借用，而并非反映一种固定的模式。晋祠圣母殿的鱼沼飞梁也有类似的形态，但却无法建立起它与净土信仰之间的联系。

五、结论

中国园林的发展过程从主体上看是一个文人化的过程。作为中国园林最早出现的部分皇家园林在后期的发展中文化化的倾向则是日趋明显。在这样一个过程中强调诗情画意是最为重要的内容。而在中国园林中对诗情画意的强调，表现为因地制宜，表现在不断的变化，固定的模式在中国园林中始终不能占有主导的地位。

水和水庭是中国园林中重要的景观要素，但同样，水和水庭在园林中同样是一个灵活多变的要素，并不具有固定的模式。

净土变是僧人、工匠、供养人对佛教中净土世界的理解，尽管在后来中国的寺庙中有净土池之类的称谓，敦煌壁画中关于“净土”的“净土变”在一定程度上反映了唐代建筑、园林的情况，但这种建筑与园林的形态、关系并未成为一种相对固定的模式被固定在中国寺庙园林或净土宗寺庙园林中。在中国现存的寺庙园林中也无法看到以净土为名称与敦煌净土变图完全契合的寺庙园林。

注1：《兰亭集序》

注2：《高僧传·慧远》

注3：《汉魏晋南北朝佛教史》汤用彤，武汉大学出版社，
2008，P242

注4：《汉魏晋南北朝佛教史》汤用彤，武汉大学出版社，
2008，P246

注5：《隋唐佛教史稿》汤用彤，武汉大学出版社，2008，
P179

注6：《长安志》

注7、注8：《酉阳杂俎·寺塔记》

注9：《冷泉亭记》

注10：《元和郡县图志》

注11：《三辅故事》

注12：《三辅黄图》

注13：《晋书·慕容熙载记》

注14、注15：《洛阳伽蓝记》

参考书目

《汉魏晋南北朝佛教史》汤用彤，武汉大学出版社，2008

《隋唐佛教史稿》汤用彤，武汉大学出版社，2008

《中国古典园林史》周维权，清华大学出版社，1999

《江南园林志》中国建筑工业出版社，1984

《中国古代建筑史》第二卷、第三卷，中国建筑工业出版社，
2001、2003

楽園を象徴する韓国の古庭園、雁鴨池庭園

洪 光杓

(東國大學校教授／大韓民國)

1. 序論

記録や今まで残された遺跡から見て、韓国の庭園は三国時代から造成されたものと見られる。古代に造成されたこれらの庭園はほとんどが水を中心としており、珍しい動物や植物が導入された楽園であった。このような楽園的概念の庭園は統一新羅時代、高麗時代、朝鮮時代を経る過程で継続的に造成されているが、今まで残された庭園を見ると、宮闈、別墅、士大夫家、寺刹などで詳しく造営されたことがわかる。

韓国の庭園が楽園という概念によって説明できる理由は、韓国庭園の追求する場所性が神仙思想を背景とする神秘的な場所^①であり、仏教の浄土思想に立脚した極楽浄土^②のように人が理想郷的な世界として憧憬する特別な場所であることによる。

韓国では、武陵桃源、栗島、西方極楽浄土などが楽園に通ずる概念として考えられてきた^③。これらの理想郷は生の苦痛から解き放ってくれる場であり、完全な秩序を保つ美しい場所であった。したがってすべての人々がこのような理想郷を常に憧憬しつつも現実的にはそれに近づくことができず、庭園を造ることで現実世界からこのような理想郷に近づこうとしたのである。

韓国の古庭園の中でも、新羅王室の東宮に付属する慶州の雁鴨池庭園は神仙思想に基づき造成された楽園であった。この庭園は現存する韓国庭園としては最も古く、規模の面でも単一の庭園としては最大のものである。とくに雁鴨池は屈曲の激しい曲線護岸で形作られ、独特な造営美を誇っている。朝鮮時

代に造成された韓国庭園が陰陽五行思想に基づき形成された方形の池塘を中心に形作られたことが一般的であった点を考慮すると、雁鴨池は韓国における苑池の始原を示す貴重な資料と言える。

この研究は、雁鴨池庭園についての理解を通じて韓国の古庭園がどのような形式と内容で構成されていたかを明らかにすべく進められた。雁鴨池庭園を分析するための資料は、主に雁鴨池発掘調査報告書から蒐集し、先行研究結果と現場調査により発掘調査報告書で不足する部分を補った。

2. 結果および考察

(1) 概観

A. 運営時期

『三国史記』卷6新羅本紀第7文武王14年(674)条には「宮内に池を掘り、山を造り、草花を植え珍奇な鳥と動物を飼っていた(宮内穿池造山 種花草 養珍禽奇獸)」という記事がある。また、「東國輿地勝覽」慶州条には「雁鴨池は天柱寺の北側にある。文武王が宮内に池を掘り、石を積んで山を造り、巫山十二峰の象徴として草花を植え珍しい鳥を飼っていた。その西側に臨海殿の敷地があるが…(雁鴨池 在天柱寺北 文武王於宮内爲池 積石爲山 象巫山十二峰 種花卉養禽 其西有臨海殿…))」とある。この2つの記事から、雁鴨池が文武王14年(674)に造成された宮園池であることは明らかであり、雁鴨池に臨海殿という殿閣が存在したことがわかる。

一方、雁鴨池の発掘過程で出土した文瓦に「儀鳳四年」と記された銘文があるが、儀鳳4年は唐朝第3代高宗時代の年号で文武王19年(679)に該当し、ま

た「調露二年」と刻まれた溥片が出土しており、この調露2年は文武王20年に該当する。これらを見ると『三国史記』と『東国輿地勝覧』の記事に誤りがないことがわかる。

雁鴨池が造成された当時の時代状況は、新羅が三国の統一を一応成し遂げたものの唐が新羅の地から完全には撤収しておらず、政治、社会的に極めて不安定な時期であった。このような時期に宮内に雁鴨池のような大きな池を掘った目的がどこにあったのかについては、未だ明らかにされていない⁴⁾。

イ. 名称

『三国史記』や『三国遺事』には雁鴨池という名称が見られない。雁鴨池という名称は『東国輿地勝覧』に初めて確認できるが、『東国輿地勝覧』が1481年に編纂された地理書である点を考慮すると、雁鴨池という名称は15世紀以前につけられたものと見るのが妥当と言えよう。一般的に学者の大半は、雁鴨池の新羅時代の呼称は月池であったと見ている(韓炳參, 1982:40、鄭東暉、1986:53-4)。雁鴨池の新羅時代の名称を月池と考える理由は、憲德王が太子を月池宮に住ませたとする『三国史記』の記録と、月池に関する職官として月池典と月池嶽典があったという理由による。

雁鴨池という名称については、梅月堂金時賀の詩『四遊録』に収録された安夏池旧跡に見られる安夏池が漢字音の似た雁鴨池に換わったとする見解と、朝鮮朝の姜璋の詩文「十二峯低玉殿荒 碧池依舊雁聲長 莫尋天柱燒香處 野草痕深內佛堂」に見られるように朝鮮時代に入り廃墟となった池に雁と鴨が棲む様子を見て雁鴨池と呼ぶようになったとする見解がある(朴景子、2001:121)。

ウ. 思想的背景

雁鴨池には池の中に3つの島がある。これは道教の神仙思想による蓬萊、瀛洲、方丈の三神山と思われる。一方、『東国輿地勝覧』慶州条に見られる「積石爲山 象巫山十二峯」との記録もまた、雁鴨池の造成背景が神仙思想であることを示すものである。

このほかに在来民間信仰としての龍王信仰もまた、雁鴨池造成の背景であった可能性もあるが、これを立証するに足る明らかな記録や遺物は存在しない。ただ雁鴨池の出土遺物である皿、碗、平鉢などの内底面に「辛審龍王」や「龍王辛審」などの文字が大きく陰刻されている点を見ると、雁鴨池で龍王祭を執り行なった可能性は考えられる(朴景子、2001:122-126)。

エ. 象徴的意味

『東国輿地勝覧』慶州条に「…西側に臨海殿の敷地があるが… (…其西有臨海殿…)」とした記事の存在を考慮すると、雁鴨池は海(とくに東海[日本海])を象徴する意味を持っていたことがわかる。これらの点から、雁鴨池の中に造成された3つの島が東海に浮かぶ三仙島を象徴するものとして無理なく関連づけることができる。一方、前述した龍王信仰が雁鴨池に介在していた場合、雁鴨池には龍が棲むという神秘性が添えられることになる。

(2)造成形式

ア. 空間構成

雁鴨池庭園は池塘である雁鴨池を中心に構成された。雁鴨池は土を掘り出して水を引き、掘り出した土で仮山を築き島が形成されるように造られた人工池であり、その全体範囲は東西200m、南北180mとほぼ方形区域内に造成され、池の全体面積は15,658m²である。

池は全体的な形態として「L」字形をなし、自然の地形を利用して直線と曲線が様々な変化を見せつつ調和を保つよう護岸を造成している(高敬姫、1989:21-22)。

池を中心に東側・北側は自然な曲線をなす丘陵として造成されており、西側・南側は建物敷地として造成されており、対照的な景観を見せている⁵⁾。

池の中には3つの島があり、池を中心に周辺を回遊できるよう動線体系が整えられている。

イ. 護岸

池の南岸と東岸は直線で処理し、北岸と西岸は複

雑な曲線で屈曲護岸をなす。護岸は磨いた石を積み上げたもので、護岸の石垣が直線処理された南岸と西岸は、地形上東岸と北岸に比べ約2.5m高く、護岸石垣も東岸と北岸より高く積み上げている。西岸には5つの建物が池に沿って造成されているが、これらの建物の基壇石垣は護岸石垣より池の方向に突き出る形で築造した。

北側と東側の護岸石垣は高さ1.5m前後の曲線石垣となっており、ほぼ垂直に1段で積み上げられている。一方、西側の護岸は直線で処理されており、建物のある場所は高さ1.8m前後の1段石垣、建物のない場所は下層護岸と上層護岸との間の幅が2mとなる上、下2段の石垣となっている。

建物敷地に接する護岸石垣の基壇は水没する部分についてはすべて長さ0.8m～2.3mの自然石を前面のみ磨いて積み上げ、水面上に見える部分の大半には長くて高い長台石(長さ1～2m、高さ55cm)を磨いて積み上げた。

池の南側護岸はほぼ単調な直線形態となっており、護岸と地面との間は傾斜面とし、その間に奇岩怪石を配置し花や木を植え造景を整えた。

池の護岸石垣の長さは計1,005mで、島の護岸石垣を含むと1,285mに達する。

ウ. 島

島は池の中に3つあり、最も大きい島(1,094m²)は池の南側に長軸を東西にして位置し、中間の大きさの島(596m²)は大きい島と向き合う池の西北側に位置し、最も小さい島(62m²)は池の中央からやや南側にずれた位置にある。3つの島はすべて人為的に築造されたもので、高さ1.7m前後に積み上げた石垣の上に土で仮山を築いた。石垣の下には大きな川石を等間隔で配し護岸石垣を支えるようにした。

島には奇岩怪石を配置し珍しい花や木を植え、鳥や動物が棲んでいたことが発掘調査の結果判明している。

エ. 峠

東側の護岸には深い海峡のように屈曲した絶妙な

峠が3カ所見られる。2カ所はかなり深く、1カ所はさほど深くはない。この峠の際全体にかけて2.1m前後の石垣が約80°の傾斜で積み上げられており、これが山の盛土を保護している。

最も深い峠は北側の護岸に沿って東へ伸びたもので、深さがおよそ90m、峠の入口にあたる池の広さはおよそ30mであり、狭まった場所と広がりのある場所が連続し変化に富んでいる。最も狭い場所が約4.5mとなっており、この峠の周囲の護岸には20余の屈曲が見られる。峠の最深部にあたる場所には舟から降りられるよう4段の階段が護岸に設置されている。東側護岸の中心にある峠は深さがおよそ35m、入口の広さは約14mである。これらに次いでさほど深くない大きく屈曲すると見られる峠があるが、これは池の東側中央に位置し西側から真直ぐ見渡せるようになっている。

オ. 半島

東側の山と峠との間に半島が2つある。北側の半島はかなりの大きさで、東側から西側の池の中へ広がりながら横たわっている。この半島は付け根からの長さが65mあり12カ所に屈曲が見られ、大きく3つの突出面をなしており、複雑な海岸線のようである。この半島の南側にあるもう1つの半島は池の東側護岸から北側へ向けて30mほど突き出している。護岸には6カ所ほど屈曲を加え変化を与えている。

カ. 山

雁鴨池の北側護岸の際には東西に約80mの長さを持つ山が3つの峰をなして配されている。山には自然石が配され、深く峻険な山の変化が感じられるよう造成されている。東側の護岸と半島にも山を造り、小さな峰々が連なっている。長い歳月を経て削られた点を考慮すると、現在より高かったことが想像できる。『東国輿地勝覧』などの古文献では、この山を巫山十二峰と記録しているが、山には美しい草花や珍しい動物が棲んでいたと思われる。

キ. 入水溝と出水溝

雁鴨池に水を入れる入水施設は池の東南端にあるが、自然石による石槽－加工石で作った加工石溝－自然石による水溝施設－2つの石槽施設－小さな池－滻の形状をなす施設という6段階の構成からなっている。ここで特記すべき点は2つの石槽であるが、これは南北5m、東西4mの区間に南北の方向に置かれている。南側の石槽は長さ2.4m、幅1.65mの柔らかな曲線からなる亀の形で、石槽の周りを掘り水が溜まるようにし、北側の面に雀みを作り、ここを通る水が40cmほど低い位置に据えられた北側の石槽を満たすように作られている。北側の石槽は長さ2.66m、幅1.65mでこれも亀の形をしており、南側の石槽同様水を抜くための溝を設けた。南北の石槽の両側には長さ2.4m、幅1.2mの大きな板石を置きこれらの板石の外縁に長さ80cm前後、高さ28cmの外縁石を、屏風を囲むように配置した。滻の形をした施設は、小さな池を通過した水が幅2.5m、高さ70cmの層級石段を通過して3つの板石を利用して作った2段の滻を通って音を響かせながら池に落ちるようになっている。上下の板石の高低差は1.2mである。

出水溝は北側護岸の中間にあり、水位を調節する特殊施設、長台石を積み上げた石溝、木製の水溝、長台石の石溝など4段階で構成されている。特殊施設は、護岸石垣面に合わせ長さ1.5m、高さ0.3mの長台石を2段に積み上げ、1段と2段とをつなぐ部分に直径15cmの穴を開け、そこに木材の蓋を差し込んだものだった。また、2段の長台石のうち上部長台石の上面には幅15cm、長さ1m、深さ1cmの凹部の上に碑座形の何からの部材を置いたものと推測される。

ク. 植物と動物

雁鴨池の半島と島には種類も様々な珍しい草花と動物が棲んでいたとされる。『三国史記』文武王14年の記事からは、雁鴨池の島に植えられたものは灌木類や草花類であったと見られる。これは大木を植え

ると山の形や奇岩怪石を眺めることが出来なくなるためによる。このとき雁鴨池に導入された草花類は真平王の時代に新羅に輸入された牡丹や菊、蘭、クチナシ、香草、ツツジ、ザクロ、サンシュユなどの類と推定される(鄭在鍾、1996:56)。

一方、発掘調査の過程でガチョウ、鴨、山羊、鹿、豚、馬、犬の骨が出土し、当時雁鴨池に棲んだ動物についても想像することができる。

(3) 考察

ア. 楽園としての概念

雁鴨池は楽園としての性格を示している。これは、池の中にある3つの島が三神山を意味すると見られる点と、『東国輿地勝覧』慶州条に記述のある「雁鴨池に石を積んで山を造り巫山十二峰の象徴とし、草花を植え珍しい鳥を飼っていた」とする記事による。

雁鴨池の中に造成された3つの島は三神山を象徴するものと見られる。これは『三国史記』にある、百濟の武王が634年扶余の宮南に池を掘り池の中に方丈仙山を模したとする記事から見て、雁鴨池に造成された三神山が即ち三神山説話に登場する蓬萊山、方丈山、瀛洲山のうちの1つと類推せるものである。一方、三国時代には花郎を国仙とも呼び、仙郎、神仙、仙または仙風とも呼称したが、これは神仙思想に根付くものである。これを見ると雁鴨池造成時、韓國固有の神仙思想も流行したことがわかる。このような側面から、雁鴨池の3つの島への神仙思想の取り入れも大きな無理はなかったと考えられる。

『東国輿地勝覧』に見られる巫山十二峰は、中国の戦国時代、楚の襄王が冀州の雲夢で仙女と遭遇したとする古事に由来する。『古文真宝』前集七巻に記載された李太白の觀元丹丘坐巫山屏風詩の註釈では、十二峰の呼称を望霞、翠屏、朝雲、松巒、集仙、聚鶴、淨壇、上昇、超雲、飛鳳、登龍、聖泉とした。一方679年に建立した東宮・正殿の名称は臨海殿といい、哀莊王5年(804)に東宮内に万寿房を建てた。『東国輿地勝覧』に見られる巫山十二峰や臨海殿、万寿房

などは神仙思想に関わりのある名称である(文化財管理局、1978:377)。このような点から、雁鴨池が神仙思想に基づき造成された庭園であることは明らかであり、このような神仙思想が楽園という理想郷的な世界と相通するものであることが理解できる。

イ. 雁鴨池造成のモチーフ

雁鴨池が造成される当時において新羅では東向重視思想が流行していた。その証拠としては、脱解王を東岳の神として推仰したこと、石窟庵主尊仏の方向を文武大王陵のある東海口側に向けて配置したことなどが挙げられる。新羅人たちにとって吐含山の向こう側にある東海は護國の源となる地であった。とくに東海口は海水と真水が出会う地点であり、海岸線の構造が複雑なアリアス式海岸となっている。

雁鴨池が造成された東宮の主殿が臨海殿という名称を名乗っている点は、海に面する建物であるという象徴性を具体的に示すものである。この点から見て雁鴨池は、海を表現したものであり、とくに文武大王の水中陵のある東海口をモチーフにしたものと考えられる。

ウ. 雁鴨池前後の韓国庭園

文献上の記録や遺跡、遺物から見て、新羅時代に造成された庭園は雁鴨池が最初のものである。一方、百濟時代に既に庭園が造られたとする記録もいくつか見られる。『三国史記』卷第25「百濟本紀」第3辰斯王7年(391)条には「正月に宮室を改修し池を掘って山を築き、珍奇な動物や草花を育てた(春正月 重修宮室 穿池造山 以養奇禽異卉)」とする記事があり、『三国史記』卷第26「百濟本紀」第4東城王22年(500)条には「春に宮の東側に臨流閣を建てたが、高さが丈であった。さらに池を掘って珍奇な飛禽たちを飼った(春 起臨流閣於宮東 高五丈 又穿池養奇禽)」という記事があり、『三国史記』卷第27「百濟本紀」第5武王35年(634)条には「3月に宮の南側に池を掘り、水を20余里にわたり引き入れ、池の端の4つの丘に柳を植え、池の中に島を造り方丈仙山を模した(三月 穿池於宮南 引水二十餘里 四岸植以

楊柳 水中築島嶼 摳方丈仙山)」という内容の記事がある。これを見ると百濟の方が新羅に比べて庭園造成の歴史が古いことがわかる。

雁鴨池が造成された時点が、新羅が百濟と高句麗を滅ぼし三国を統一した直後であった点を考慮すると、雁鴨池の造成に百濟人が動員された可能性は充分考えられる。したがって歴史的に見て、雁鴨池は百濟の庭園技術に基づいて造られた可能性が極めて高い。

一方、「日本書紀」推古天皇20年条(612)には「百濟から帰化した路子工が宮室の南側の庭に須彌山を作り吳橋を架けた」との記録がある(金龍基、1996:406より再引用)。これらの記録を見ると百濟の庭園造成の技法が日本にまで影響を及ぼしたと思われ、新羅の東宮園池である雁鴨池庭園と日本の古代庭園が多くの面で類似性を持つ可能性を示唆している。

雁鴨池の造成以降、統一新羅時代に造られた龍江洞園池(嶺南文化財研究院、2001)と九黃洞園池(国立慶州文化財研究所、2008)は雁鴨池と同じく曲線護岸からなり、池の中に島を配しており(龍江洞園池は南北に2島、九黃洞園池は大小2島)雁鴨池と類似の形式であることが確認できる。これらの点から、雁鴨池と類似の形式を持つ池が庭園の中心に配されることが当時としては一般的な傾向であったと思われる。

新羅時代以後高麗時代、朝鮮時代を経ながら、宮闈をはじめとする数多くの場所に庭園が造成され、現在まで多くの庭園が残されている。これらの現存する庭園遺跡を注意深く観察すると、朝鮮時代の韓国庭園は陰陽五行説に基づく円島方池を中心に配して庭園を造成した傾向が見てとれる。庭園の中心となるこれらの円島方池は宮闈のみならず別墅、士大夫庭園などに例外なく見られ、雁鴨池のような形式を持つ池を見つけることが困難となる。この点から見て、朝鮮時代へ移行する過程で韩国庭園には雁鴨池のような池塘様式がそれ以上伝承されなかつたと考えられるが、その理由は分からぬ。

3. 結論

雁鴨池庭園は統一新羅時代に造成された雁鴨池を中心とし、形成された韓国の古庭園である。雁鴨池は直線と曲線の護岸が神秘的な調和をなしており、池の中には3つの島があり三神島を象徴している。雁鴨池の東側と北側には山を造り奇岩怪石を用いて視覚的効果を高めているが、これは巫山十二峰を象徴するものと思われる。

雁鴨池の楽園としての象徴性は、やはり3つの島と巫山十二峰の存在によるものである。三神山と巫山十二峰は道教的概念の神仙思想に基づき形成されるものであり、神仙思想は現実世界では到達しえない神秘的な場所性を持つ。このような神仙思想が雁鴨池造成の背景にあったならば、雁鴨池が楽園としての象徴性を持つことに疑いの余地がないと思われる。

雁鴨池造成のモチーフはやはり東海であったと見るのが妥当である。東海の中でも、とくに東海口は新羅人にとっては聖なる地であった。このような聖なる地を日常頃訪ねて身近に感じることを新羅人は願望として夢見たであろう。

雁鴨池が造成されて以降、統一新羅時代に龍江洞園池と九黃洞園池に、雁鴨池と類似の屈曲の激しい曲線形の池塘が造成されたものの、高麗、朝鮮時代を経る過程で韓国庭園は陰陽五行思想に立脚した円島方池を中心に造園することが一般的となり、これ以降雁鴨池の造成様式の伝承はなかったと思われる。ただ、日本庭園の池塘様式との類似性を見ることができ、造園様式が日本へいかに伝えられたのか注目されるところである。

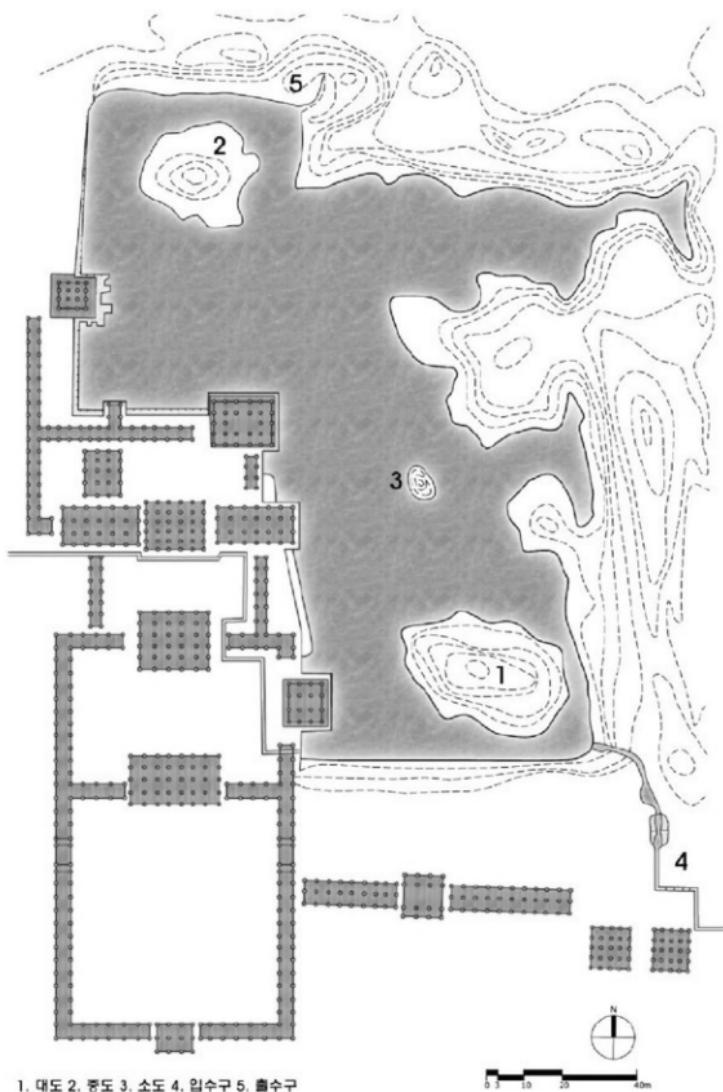
この研究は雁鴨池に対する概括的な内容と造成形式を取りあげ、いくつかの重要な論点について考察した。今後、韓、中、日の3国において庭園についての比較研究が進めば、3国間の庭園様式の交流についての理解が深まるものと期待される。

註

- 1)三神山や巫山十二峰に代表される。
- 2)韓国で浄土思想に基づき造成された庭園としては、仏国寺の九品蓮池をはじめとする庭園が代表的なものである。「仏国寺古今創記」には「嘉慶三年戊午年に蓮池の蓮の葉を返す」との記録があり、九品蓮池が浄土の象徴である蓮花を飾る皿としての機能を果たしていたことが確認できる。九品蓮池は浄土信仰の九品蓮台に由来する名称であり、浄土に往生する者が座った9種類の蓮花台が即ち九品蓮台である。九品蓮池は1970年代の仏国寺復元のための発掘調査の過程でその姿を現した。発掘調査の結果、九品蓮池は青雲橋と白雲橋の南側の泛影樓付近に位置し、東西長軸39.5m、南北長軸25.5m、深さ2~3mほどの蓮池であり、池の周囲には巨大な石が積み上げられていたという。九品蓮池や極楽殿へ登る蓮花橋、七宝橋は、互いに意味的なつながりを持つ。つまり蓮花橋は九品蓮台の中上品である蓮花台を意味する名称であり、七宝橋は中中品である七宝蓮台を意味する名称である。九品蓮池が蓮花橋と七宝橋そして安養門と極楽殿の前面部に造成されたことは、九品蓮池が極楽浄土へと進む過程であることを象徴的に表現するひとつの手段となるものであり、これら諸々の状況から見て九品蓮池が浄土庭園であることが確認できる。仏国寺に造成された浄土庭園・九品蓮池は、未だ復元されることなく土の中にその姿をとどめている。一日も早く完全な発掘を行ってその全貌を明らかにし、速やかに復元して韓国の大概念の浄土庭園との出会いを実現すべきである。
- 3)西洋人はユートピア(Utopia)、シャングリラ(Shangrila)、エルドラド(El Dorado)のような場所を理想郷と考えてきた。
- 4)新羅が三国間の割權争いで百濟を滅ぼした時期は太宗武烈王7年(660)、高句麗を滅ぼした時期は文武王8年(668)、唐を新羅の地から完全に逐い出した時期は文武王16年(676)である。
- 5)発掘調査の結果、雁鶴池の西側に全5ヶ所の建物跡が確認された(文化財管理局、1978)。

参考文献

- 1)高敬姬. 1989. 雁鶴池. 대원사
- 2)國立慶州文化財研究所. 2008. 慶州 九黃洞 皇龍寺址展示館建立敷地内遺蹟－九黃洞圓池遺蹟
- 3)金富軒. 1145. 三國史記 : 李丙肅譯註. 1983. 三國史記 上・下. 乙酉文化社
- 4)金龍基. 1996 : 韓國造景學會. 東洋造景史. 文運堂
- 5)文化財管理局. 1978. 雁鶴池発掘調査報告書
- 6)朴景子. 2001. 雁鶴池 造營計劃研究. 學研文化社
- 7)嶺南文化財研究院. 2001. 慶州龍江洞圓池遺蹟. 學術調査報告 30冊
- 8)鄭彊祚. 1986. 韓國의 庭園. 民音社
- 9)鄭在鍾. 1996. 韓國傳統의 苑. 圖書出版 造景
- 10)韓炳三. 1982. 雁鶴池 名稱에 대하여. 考古美術 153
- 11)洪光杓. 1994. 佛國寺 蓮池에 관한 一考察. 韓國庭園學會誌 12 (2). p.p.75~82
- 12)洪光杓·李相潤. 2001. 韓國의 傳統造景. 東國大 出版部



1. 대도 2. 청도 3. 소도 4. 입수구 5.排出구

0 5 10 20 40m



図-1 雁鴨池の配置平面図
(1. 大島 2. 中島 3. 小島 4. 入水溝 5. 排出溝)



図-2 雁鴨池 衛星写真（中央）と現在の風致景観

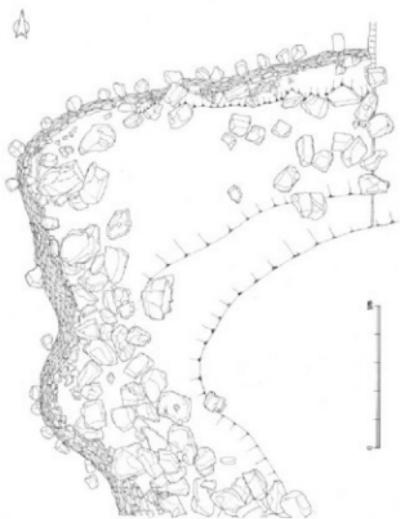


図-3 雁鴨池 護岸発掘平面図

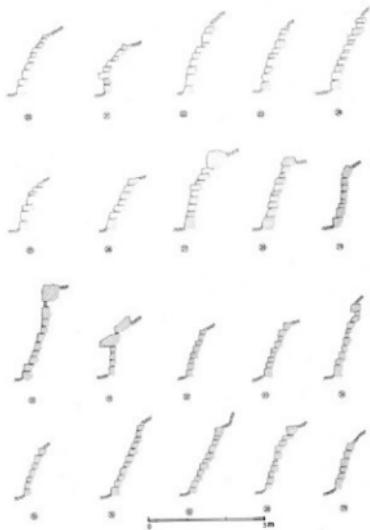


図-5 雁鴨池 護岸石垣断面図

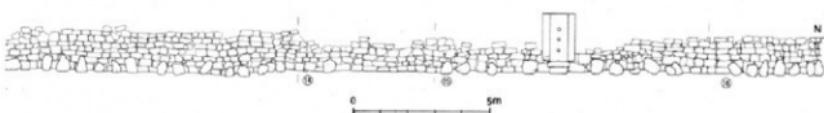
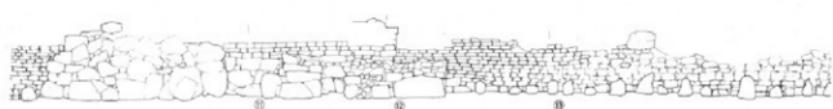
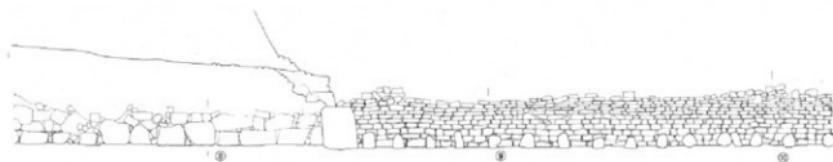


図-4 雁鴨池 護岸石垣立面図

*本頁の図版は、参考文献5による。

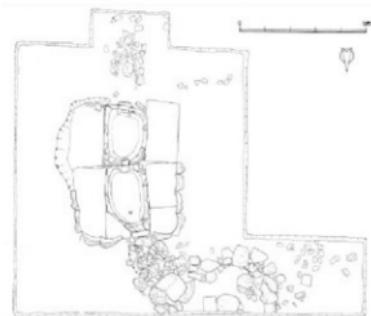


図-6 雁鵠池 石槽の発掘平面図

※参考文献5による。



図-7 雁鵠池 入水溝の石槽

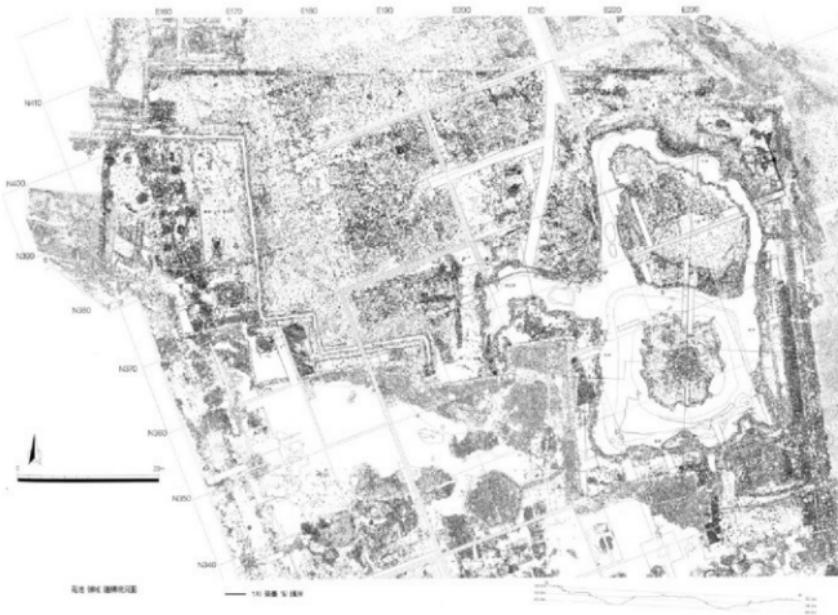


図-8 九黄洞園池遺跡 発掘平面図

※参考文献2による。



図-9 龍江洞園池遺跡 発掘平面図
※参考文献7による。

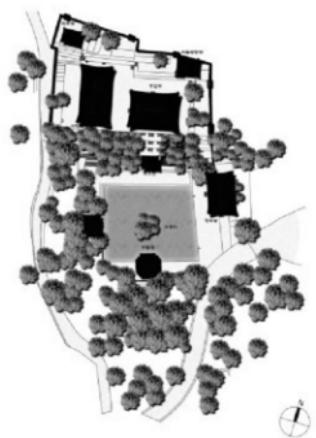


図-10 昌徳宮芙蓉池の周辺配置図



図-11 昌徳宮芙蓉池の周辺図（東闕図）

樂園을 象徵하는 韓國의 古庭園, 雁鴨池 庭園

洪 光杓 (東國大學校 教授)

I. 序論

기록이나 남겨진 유적으로 볼 때, 韓國의 庭園은 三國時代부터 造成된 것으로 보인다. 古代에 造成된 이 庭園들은 대부분 물을 중심으로 하고 있으며, 기이한 짐승들과 식물들이 도입된 樂園이었다. 이러한 樂園의 概念의 庭園은 통일신라시대, 고려시대, 조선시대를 거치면서 계속해서 조성되었는데, 지금 까지 남겨진 정원을 보면 宮闈, 別墅, 士大夫家, 寺刹 등에 골고루 조영되었음을 알 수 있다.

한국의 정원이 낙원이라는 개념에서 설명될 수 있는 것은 韓國庭園이追求하는 場所性이 神仙思想을 배경으로 하는 신비스러운 곳¹ 이거나 佛教의淨土思想에 입각한 極樂淨土² 와 같이 인간이理想鄉的世界로 동경하는 특별한 곳이기 때문이다.

韓國에서는 樂園과 통하는 개념으로 武陵桃源, 菩提鳥, 西方極樂淨土 등을 생각해왔다.³ 이러한 理想鄉들은 삶의 고통으로부터 해방된 곳이었으며, 완전한 질서를 가진 아름다운 곳이었다. 따라서 모든 인간들은 이러한 이상향을 항상 동경하여 왔으나 현실적으로는 다가갈 수 없었으므로 庭園을 만들어 現實世界에서 이러한 이상향을 접하고자 하였던 것이다.

韓國의 古庭園 가운데에서도 新羅王室의 東宮에 부속된 慶州의 雁鴨池庭園은 神仙思想을 바탕으로 하여 조성된 樂園이었다. 이 정원은 남아있는 한국 정원으로서는 가장 오래된 것이며, 규모 또한 단일 정원으로서 가장 크다. 특히 雁鴨池는 届曲이 심한 曲線護岸으로 이루어져 있어 독특한 造營美를 보이고 있다. 朝鮮時代에 造成된 韩國의庭園들이 陰陽五行思想을 바탕으로 형성된 方形 池塘을 중심으로

¹ 三神山이나 巫山十二峰으로 대표된다.

² 韩國에서淨土思想에 입각하여 조성된 정원은 佛國寺 九品蓮池을 중심으로 하는 정원이 대표적이다. 「佛國寺古今創記」에는 「嘉慶三年 戊午年에 연못의 연잎을 뒤집다」라는 기록이 있어 九品蓮池가淨土의象徵인 연꽃을 담는 그릇으로서의 기능을 했음을 확인할 수 있다. 九品蓮池는淨土信仰의 九品蓮臺에서 유연한 명칭으로淨土에 往生하는 이가 앉는 9種의 莲花臺가 곧 九品蓮臺이다. 九品蓮池는 1970년대에 불국사를 복원하기 위한 발굴조사과정에서 그 실체가 드러났다. 발굴조사 결과를 보면 九品蓮池는 青雲橋와 白雲橋 남쪽 泛影廬 가까운 곳에 위치하고 있었으며, 동서장축 39.5m, 남북장축 25.5m, 깊이 2~3m 정도 되는 연지로 연못주변에는 큰 돌을 쌓았다고 한다. 九品蓮池와 極樂殿으로 올라가는 莲花橋와 七寶橋는 의미적으로 서로 통하는 바가 있다. 즉, 莲花橋는 九品蓮臺의 中上品인 莲花臺를 의미하는 명칭이며, 七寶橋는 中中品인

七寶臺를 의미하는 명칭이다. 九品蓮池가 연화교와 칠보교 그리고 얀양분과 극락전 전면부에 조성된 것은 구품연지가 극락정토로 진입하는 과정이라는 것을 상징적으로 보여주는 하나의 수단이 되는 것이다. 이러한 계반 상황을 볼 때 구품연지가 정토정원이라는 것을 확인할 수 있다. 불국사에 조성되었던 정토정원 구품연지는 아직까지 복원되지 못한채 고스란히 땅에 묻혀있다. 하루속히 완전발굴을 실시하여 그 전모를 밝히고 복원을 서둘러 한국적 개념의 정토정원을 볼 수 있도록 하여야 할 것이다. 佛國寺 九品蓮池에 관한 내용은 다음의 論文이 도움이 된다. 洪光杓, 1994, 佛國寺 蓮池에 관한 一考察, 韩國庭園學會誌 12(2), pp75~82

³ 西洋人們은 유토피아(Utopia), 상그릴라(Shangri-la), 엘도라도(El Dorado) 등과 같은 장소를 理想鄉으로 생각해왔다.

이루어져있는 것이 일반적이라는 관점에서 본다면 雁鴨池는 韓國 池苑의 始原을 보여줄 수 있는 귀중한 資料가 아님 수 없다.

本 研究에서는 雁鴨池 庭園에 대한 이해를 통해 韓國의 古庭園이 어떠한 形式과 內容으로構成되어 있었는지를 밝히기 위한 目的을 두고 진행되었다. 雁鴨池 庭園의 分析을 위한 資料는 주로 雁鴨池 發掘調査報告書를 통해서 寶集되었으며, 先行研究結果와 現場調査를 통해 發掘調査報告書에서 부족한 부분을 补完하였다.

II. 結果 및 考察

1. 概觀

1) 造營時期

『三國史記』卷6 新羅本紀 第7 文武王 14年(674)條에는 “궁내에 웃을 과고 산을 만들었으며, 화초를 심고 진귀한 새와 짐승을 길렀다(宮內穿池造山 種花草 獅珍禽奇獸)”라는 기사가 있다. 또한 『東國輿地勝覽』慶州條에는 “안암지는 천주사 북쪽에 있다. 문무왕이 궁내에 웃을 만들고 돌을 쌓아 산을 만들어 무산십이봉을 상정하고 화초를 심고 진귀한 새를 길렸다. 그 서쪽에 임해전 터가 있는데……(雁鴨池 在天柱寺北 文武王於宮內爲池 積石爲山 象巫山十二峯種花卉禽畜 其西有臨海殿……)” 이 두 기사를 보면 雁鴨池는 文武王 14年(674)에 조성된 宮園池가 분명하며, 안암지에는 臨海殿이라는 전각이 있었음을 알 수 있다.

한편, 雁鴨池 밭굴과정에서出土된 文瓦에 “儀鳳四年”이라고 적힌 銘文이 있는데, 儀鳳四年은 唐高宗 때의 年號로 文武王 19年(679)에 해당되며, 또 “調露二年”이라고 새긴 牙片이出土되었는데, 調露二年은 文武王 20年에 해당된다. 이것을 보면 『三國史記』와 『東國輿地勝覽』의記事가 틀리지 않았음을 알 수 있다.

雁鴨池가 조성된 시점의 時代狀況은 新羅가 三國을統一하기는 하였으되 唐이 신라 땅에서 완전히 침수하지 않은 때여서 政治, 社會의 으로 매우不安

定한 때였다. 이러한 시기에 宮內에 雁鴨池와 같은 큰 웃을 建目的이 무엇인가에 대해서는 아직까지 분명히 밝혀진 것이 없다.¹⁾

2) 名稱

『三國史記』나 『三國遺事』에는 雁鴨池라는 이름이 나오지 않는다. 雁鴨池라는 이름이 보이는 것은 『東國輿地勝覽』에 서서인데, 『東國輿地勝覽』이 1481년에 편찬된 地理書라는 점을 감안한다면 雁鴨池라는 명칭은 15世紀 以前에 붙여진 것으로 보는 것이 옳겠다. 일반적으로 대부분의 학자들은 雁鴨池의 신라 때 이름은 月池였을 것으로 보고 있다(韓炳三, 1982:40; 鄭東時, 1986:53-4). 雁鴨池의 신라 때 명칭을 月池로 보는 이유는 憲德王이 太子를 月池宮에 거처하게 하였다는 『三國史記』의 記錄과 月池에 관련된 職官으로 月池典과 月池蠶典이 있었다는 이유 때문이다.

雁鴨池라는 名稱은 梅月堂 金時習의 詩 '四遊錄'에 수록된 安夏池舊址에 나오는 安夏池가 비슷한 한자음인 雁鴨池로 바뀐 것으로 보는 견해와 朝鮮朝姜璣의 詩文 '十二峯低玉殿荒 碧池依舊雁聲長 莫尋天柱燒香處 野草痕深內佛堂'에서 보듯이 朝鮮時代에 들어와 窟墟가 된 웃에 거리기와 오리가 疾息하는 것을 보고 雁鴨池라고 하였다는 見解가 있다(朴景子, 2001:121).

3) 思想의 背景

雁鴨池에는 池中에 세 개의 섬이 있다. 이것은 道教의 仙神思想에 의한 蓬萊,瀛洲, 方丈의 三神山으로 생각된다. 한편, 『東國輿地勝覽』慶州條에서 보이는 “積石爲山 象巫山十二峯” 記錄 역시 雁鴨池의 造成背景이 仙神思想이라는 것을 보여주는 것이다.

이밖에 在來民間信仰으로서의 龍王信仰 또한 雁鴨池 造成의 背景이 되었을 수도 있으나 이를 입증할만한 분명한 記錄이나 遺物이 없는 실정이다. 단

* 新羅가 三國間의 爭霸에서 百濟를 滅한 時期는 太宗武烈王 7年(660), 高句麗를 滅한 時期는 文武王 8年(668)이며, 唐을 新羅 땅에서 완전히 逐出한 때가 文武王 16年(676)이다.

지 雁鴨池 出土遺物인 접시, 盆, 대접 등의 内底面에 '辛審龍王'이나 '龍王辛審'과 같은 글자가 크게 陰刻되어 있음을 볼 때 雁鴨池에서 龍王祭를 지냈을 가능성이 있어 보인다(朴景子, 2001:122-126).

4) 象徵的 意味

『東國輿地勝覽』慶州條에 "...서쪽에 임해전 터가 있는데...(...其西有臨海殿...)"라는 기사가 있음을 볼 때 雁鴨池는 바다(특히 동해바다)를 象徵하는 意味를 지니고 있었음을 알 수 있다. 이렇게 볼 때, 雁鴨池 池中에 조성된 세 섬은 동해바다에 떠 있는 三仙島를 상징하는 것으로 자연스럽게 연결될 수 있다. 한편, 앞서 말한 龍王信仰이 雁鴨池에 계제되어 있다면, 雁鴨池에는 용이 사는 神秘性이 덧붙여지게 된다.

2. 造成形式

1) 空間構成

雁鴨池 庭園은 池塘인 雁鴨池를 中心으로 構成된다. 雁鴨池는 땅을 파내어 물을 끌어들이고 그 파낸 흙으로 假山을 만들고 섬을 쌓아 만든 人工池인데, 그것의 전체 범위는 東西 200m, 南北 180m로 거의 方形區域 안에造成되어 있으며, 못의 全體面積은 15,658m²이다.

못의 全體의 形態는 '匚'字形을 하고 있으며, 自然地形을 이용하여 直線과 曲線이 다양한變化를 가지며 調和를 이룰 수 있도록 護岸을造成하였다(高敬姬, 1989:21-22).

못을 중심으로 東쪽과 北쪽 편은 자연스러운 曲線의 丘陵으로造成되어 있고, 西쪽과 南쪽 편은 建物地로 조성되어 있어서 對照의 景觀을 보이고 있다.

못 안에는 세 개의 섬이 있으며, 못을 중심으로 周邊을 回遊할 수 있도록 動線體系가 마련되어 있다.

2) 護岸

못의 南岸과 東岸은 直線으로 處理하고, 北岸과 東岸은 複雜한 曲線으로 屈曲護岸을 이루게 하였다.

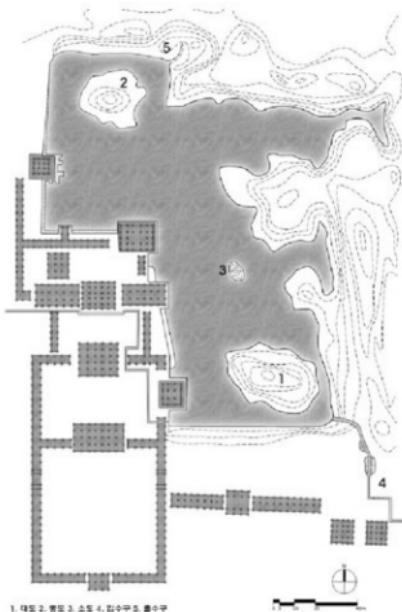


그림 1 雁鴨池 配置平面圖



그림 1 雁鴨池 配置平面圖

護岸은 다듬은 돌로 石築을 하였는데, 護岸石築이 直線으로 처리된 南岸과 西岸은 地形上 東岸과 北岸보다 약 2.5m 높아 護岸石築 역시 東岸과 北岸보다 높게 하였다. 西岸에는 5個所의 建物이 뭇에 沿해서造成되어 있는데, 이들 建物의 基壇石築은 護岸石築보다 연못 쪽으로 突出시켜 築造하였다.

護岸石築은 북쪽과 동쪽의 경우에는 높이 1.5m 안팎의 曲線石築으로 垂直에 가깝게 한 단으로 쌓아 올렸다. 반면 서쪽 護岸은 直線으로 처리되어 있으며, 建物이 있는 곳은 높이 1.8m 내외의 1단 석축이고 건물이 없는 곳은 下層護岸과 上層護岸이 폭 2m를 사이에 둔 上, 下 2段 石築으로 되어 있다.

建物地와 접한 護岸石築의 기단은 물에 잡기는 부분의 경우에는 모두 길이 0.8m~2.3m의 자연석으로 앞면만을 다듬어 쌓았고, 수면 위에 보이는 부분에는 대부분 길고 높은 長臺石(길이 1~2m, 높이 55cm)을 다듬어 쌓았다.

못의 남쪽 護岸은 거의 단조로운 直線形態이며, 護岸과 땅 위와의 거리는 順斜面으로 만들고 그 사이에 怪石를 놓고 꽃과 나무를 심어 造景을 하였다. 연못의 護岸石築 길이는 총 1,005m이며, 섬의 護岸石築을 포함하게 되면 1,285m에 달한다.

3) 섬

섬은 뭇 속에 세 개가 있는데, 가장 큰 섬(1,094m²)은 연못 남쪽에 長軸을 東西로 하여 자리를 잡았고, 중간 크기의 섬(596m²)은 큰 섬과 對稱方向인

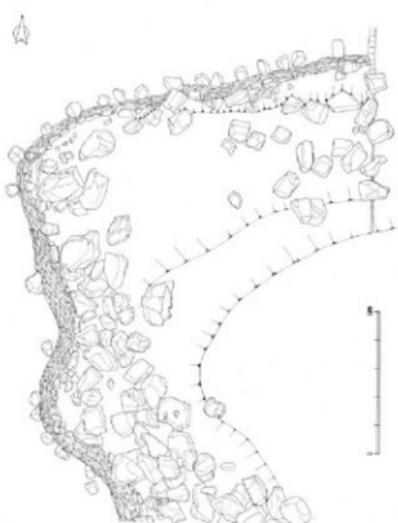


그림 3 護岸 發掘平面圖

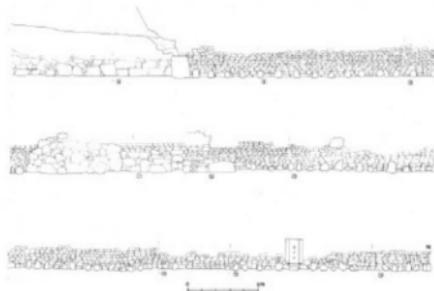


그림 4 護岸石築 立面圖

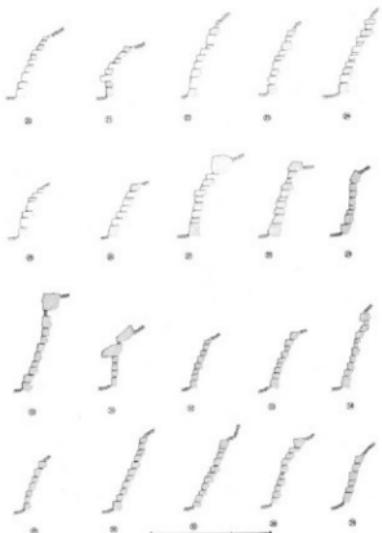


그림 5 護岸石築 斷面圖

못의 西北쪽에 위치하고 있고, 가장 작은 섬(62m²)은 못의 한가운데에서 약간 남쪽으로 치우친 곳에 있다. 세 섬은 모두 人爲의으로 築造한 것으로 높이 1.7m 내외로 쌓아올린 石築 위에 흙으로 假山을 만들었다. 석축 아래에는 큰 냇들을 등 간격으로 놓아 호안석축을 받치도록 하였다.

섬에는 怪石를 놓고 真귀한 꽃과 나무를 심었으며, 새와 동물들이 놀았음을 發掘調査 결과를 통해서 알 수 있다.

4) 峽

東쪽 護岸에는 3개의 깊은 海峽같은 絶妙한 屈曲의 峽이 있다. 2개는 상당히 깊고 1개는 그렇게 깊지 않다. 이 峽 가에는 모두 2.1m 정도의 石築을 80° 정도로 늘혀서 쌓아 造山의 土量을 保護하고 있다. 제일 깊은 힙은 北쪽 호안을 끼고 東으로 쑤 뻗은 것인데, 깊이가 90m쯤 되고 험 입구 넓이는 30m쯤 되며, 들어갈수록 좁았다 넓었다 하여 변화가 무쌍하다. 아주 좁은 곳이 4.5m 정도이며, 이 峽의 周圍 護岸은 20여 개의 屈曲을 주었다. 峽의 가장 깊은 곳에는 배에서 내릴 수 있게 4段의 階段이 護岸에 設置되어 있다. 東等 護岸 중심에 있는 峽은 깊이가 35m쯤 되고 입구의 넓이는 14m 정도이다. 다음으로 그리 깊지 않은 큰 屈曲 같은 峽이 있는데, 이것은 못의 동쪽 중앙이 되어 서쪽에서 바로 견디다 보이게 되어있다.

5) 半島

東等 造山과 峽의 사이에 半島가 두 개 있다. 北쪽의 半島는 아주 큰 것인데, 동쪽에서 서쪽 못 속으로 손바닥처럼 내밀고 있다. 이 반도는 뿌리에서 65m 길이이며, 12개의 屈曲을 이루고 있고, 크게 세 개의 突出面을 만들어 複雜한 海岸線 같이 되어있다. 이 半島 南쪽에 있는 또 하나의 반도는 못의 東等 護岸에서 北쪽을 향하여 30m 정도突出되어 있다. 護岸은 여섯 곳 정도에 屈曲을 주어서 變化를 주었다.

6) 造山

雁鴨池 북쪽 護岸가에는 東西길이가 80m 정도되는 造山이 세 개의 봉우리로 배치되어 있다. 造山에

는 自然石을 配置하여 깊고 험준한 산의 변화를 느낄 수 있게 조성하였다. 동쪽 護岸과 半島에도 造山을 造成하여 작은 봉우리들이 連續되도록 만들어져 있다. 오랜 세월이 지나는 동안 깎여 나간 것을 감안한다면 지금보다는 높았을 것으로 생각된다. 『東國輿地勝覽』 등 古文獻에서는 이 造山을 巫山十二峰으로 記錄하고 있는데, 造山에는 아름다운 花草와 珍奇한 珠寶들이 있었을 것으로 보인다.

7) 入水溝와 出水溝

雁鴨池에 물을 대는 入水施設은 못의 東南쪽 모서리 부분에 있는데, 自然石 石構-加工된 돌로 만든 加工石溝-自然石 水溝施設-2개의 石槽施設-작은 못-瀑布모양의 施設과 같은 6段階의 施設로 構成되어 있다. 여기에서 특기할 만한 것은 2개의 石槽인데, 이것은 南北으로 5m, 東西로 4m 區間에 南北으로 놓여있다. 南쪽의 石槽는 깊이 2.4m, 너비 1.65m로 柔軟한 曲線으로 된 거북이 모양이며, 石槽의 가장자리를 파서 물이 고이도록 했고, 北쪽을 향한 면을 움푹 파서 이곳을 통해 물이 40cm 정도 낮게 설치된 북쪽의 石槽로 넘치도록 되어 있다. 北쪽의 石槽는 깊이 2.66m, 너비 1.65m로 이 역시 거북이 모양이며, 南쪽의 石槽와 마찬가지로 물 빼기 흔을 두었다. 南北 石槽 양쪽에는 깊이 2.4m, 너비 1.2m의 큰 板石을 놓고 이를 板石 外緣으로 깊이 80cm 내외, 높이 28cm의 外緣石을 屏風 두르듯이 設置하였다. 瀑布모양의 施設은 작은 못을 통과한 물이 너비 2.5m, 높이 70cm의 層級石段을 통과하여 세 개의 板石을 이용하여 만든 2段 瀑布를 통해 소리를 내며 못에 入水되도록 하였다. 上下 板石의 높이 차는 1.2m이다.

出水溝는 北等 護岸 中間에 있으며, 水位를 調節하는 特殊施設, 長臺石으로 쌓은 石溝, 木製 水溝, 長臺石 石溝 등 4段階로 構成된다. 特殊施設은 護岸 石築面에 맞추어 깊이 1.5m, 높이 0.3m의 長臺石을 2段으로 쌓고 1段과 2段의 이음부분에 直徑 15cm의 구멍을 뚫어 그곳에 목재 마개를 끊어 놓은 것이었다. 또 2段의 長臺石 중 위에 놓인 장대식 上面에는

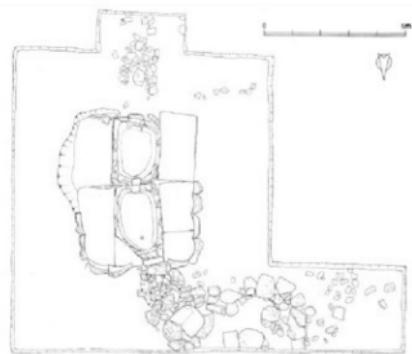


그림 6 石槽 發掘平面圖



그림 7 石槽寫眞

碑座모양으로 너비 15cm, 길이 1m, 깊이 1cm의 凹부 위에 어떤 부재를 놓았던 것으로 보인다.

8) 植物과 動物

雁鴨池의 半島와 섬에는 다양한 종류의 珍奇한 花草와 動物들이 있었다고 한다. 「三國史記」文武王 14년記事를 보면 雁鴨池의 섬에 심은 것은 灌木類나 草花類였을 것으로 보인다. 이것은 큰 나무를 심으면 造山의 形態와 怪石을 볼 수 없었기 때문에 취한 조치였다. 이때, 雁鴨池에 導入한 花草類는 真平王 때 新羅에 들어온 모란이거나 국화, 난, 치자, 향초, 철쭉, 석류, 연죽, 산수유 같은 것을 것으로 추정된다(鄭在鍾, 1996:56).

한편, 發掘調査過程에서 거위, 오리, 산양, 사슴, 돼지, 말, 개의 뼈가出土되어 당시 雁鴨池에 살았던

動物들까지도 想像할 수 있게 한다.

3. 考察

1) 樂園으로서의 概念

雁鴨池가 낙원으로서의 성격을 보이고 있음을 지중에 있는 3개의 섬이 삼신산을 의미할 것이라는 생각과 「東國輿地勝覽」慶州條에 실린 “雁鴨池에 돌을 쌓아 산을 만들어 巫山十二峯을 상징하였고 화초를 심고 진귀한 새를 길렀다”는 기사 때문이다.

雁鴨池 池中에造成된 3개의 섬은 三神山을 象徵하는 것으로 볼 수 있다. 이것은『三國史記』에 百濟武王이 634년 무이의 宮南에 못을 파고 못 속에 方丈仙山을 모방하였다라는 기사를 통해서 생각해 볼 때, 雁鴨池에造成된 三神山이 바로 三神山 話說에 나오는 蓬萊山, 方丈山,瀛洲山 중의 하나라고 유추해보는 것이다. 한편, 三國時代에는 花郎을 神仙이라고 부르기도 하고 仙郎, 神仙, 仙 또는 仙風이라하여 神仙思想에 傑리를 막고 있다. 이것을 보면 雁鴨池를 조성할 당시에 韓國固有의 神仙思想도 유행하였음을 알 수 있다. 이러한 측면에서 볼 때 雁鴨池의 세 섬에 神仙思想을 移入시키는 것은 크게 무리가 없어 보인다.

「東國輿地勝覽」에서 보이는 巫山十二峯은 中國戰國時代 楚나라 襄王이 기주의 雲夢에서 仙女와 노닌 古事에서부터 시작되었다.『古文眞寶』前集七卷에 실려 있는 李太白의 觀元丹丘坐巫山屏風詩의 註釋에 十二峯의 이름을 望霞, 翠屏, 朝雲, 松煙, 集仙, 聚鶴, 淨壇, 上昇, 超雲, 飛鳳, 登龍, 圣泉이라 하였다. 그리고 679년에 건립한 東宮의 正殿 이름이 臨海殿이며, 袞莊王 5年(804) 東宮內에 萬壽房을 짓는다.『東國輿地勝覽』에서 보이는 巫山十二峯이나 臨海殿, 萬壽房 등은 神仙思想과 연관된 名稱이다(문화재관리국, 1978:377). 이것을 볼 때 雁鴨池는 神仙思想을 바탕으로 해서 조성된 庭園이라는 것을 알 수 있으며, 이러한 神仙思想은 곧 樂園이라는 理想鄉의 世界와 疏通하게 되는 것으로 이해할 수 있다.

2) 雁鴨池 造成의 모티브

雁鴨池가 造成될當時에 新羅에서는 東向重視思想이 유행하고 있었다. 그러한證據로 脫解王을 東岳의 神으로 推仰하는 것, 石窟庵 本尊佛의 方向을 文武大王陵이 있는 東海口 쪽으로 向하게 配置하는 것 등을 見을 수 있다. 新羅들에게 있어서 吐含山 너머의 동해바다는 護國의 震源地였던 것이다. 특히 東海口는 바닷물과 민물이 합쳐지는 곳으로 海岸線이 복잡한 리아스식 海岸의 構造를 지니고 있다.

雁鴨池가 造成된 東宮의 主殿이 蘆海殿이라는 명칭을 쓰고 있는 것은 바다에 면한 건물이라는 象徵性을 구체적으로 보여주는 것이다. 이것으로 볼 때 雁鴨池는 바다를 표현한 것이며, 특히 文武大王의 水中陵이 있는 東海口를 모티브로 삼았던 것으로 보인다.

3) 雁鴨池 前後의 韓國庭園

文獻記錄이나 遺蹟, 遺物을 통해서 볼 때, 新羅時代에 造成된 庭園은 雁鴨池가 最初이다. 그런데 이미 百濟時代에 만들어진 庭園에 대한 記錄은 여럿 나타난다. 즉, 『三國史記』 卷 第25「百濟本紀」第3辰斯王 7年(391)條을 보면 “정월에 궁실을 중수하고 뜻을 파고 산을 만들어서 기이한 짐승과 화초를 길렀다(春正月 重修宮室 穿池造山 以奇禽異卉)”라는記事가 있고, 『三國史記』 卷 第26「百濟本紀」第4 東城王 22年(500)條에는 “봄에 궁성 동쪽에 임류각을 세웠는데, 높이가 5丈이었다. 또 뜻을 파고 진기한 날짐승들을 길렀다(春起臨流關於宮東 高五丈 又穿池養奇禽)”라는記事가 있으며, 『三國史記』 卷 第27「百濟本紀」第5 武王 35年(634)條에는 “3월에 궁 남쪽에 뜻을 파고 물을 20여리나 끌어들었으며, 뜻가의 네 언덕에는 벼드나무를 심고 뜻 속에 섬을 만들어서 방장선산을 흉내 내었다(三月 穿池於宮南 引水二十餘里 四岸植以楊柳 水中築島嶼 摳方丈仙山)”라는 내용의記事가 있다. 이것을 보면 百濟가 新羅보다 庭園造成의 歷史가 빨랐던 것을 알 수 있다.

雁鴨池가 造成된 時點이 新羅가 百濟와 高句麗를滅하고 三國을統一한直後였다는 점을 생각한다면,

雁鴨池 造成에 百濟人们이 동원되었을 가능성은 충분히 짐작하고도 남음이 있다. 따라서 歷史的 時點으로 볼 때 雁鴨池는 百濟의 庭園技術이 바탕이 되어 만들어졌을 可能성이 매우 높다.

한편, 『日本書紀』推古天皇 20年條(612)에는 “百濟에서 蘿化한 路子工이 宮室 남쪽 뜻에 須彌山을 꾸미고 吳橋를 놓았다”는 기록이 있다(金龍基, 1996:406에서 再引用). 이러한 기록을 보면 百濟의 庭園造成技法이 日本에까지 影響을 미쳤던 것으로 볼 수 있어 新羅의 東宮園池인 雁鴨池 庭園과 日本의 古代庭園이 여러 가지 측면에서 類似性을 지니고 있음을 可能성이 있음을 示唆하고 있다.

雁鴨池 造成以後 統一新羅時代에 만들어진 龍江洞園池(嶺南文化財研究院, 2001)와 九黃洞園池(國立慶州文化財研究所, 2008)는 雁鴨池와 같은 曲線護岸으로 되어있으며, 池中에 섬을 두고 있어(龍江洞園池는 南北 2島, 九黃洞園池는 大小 2島) 雁鴨池와 類似한 形式이라는 것을 확인할 수 있다. 이것을 보면 雁鴨池와 類似한 形式의 뜻이 庭園의 中心이 되는 것은當時로서는一般的이었던 현상이었던 것으로 보인다.

新羅時代以後 高麗時代와 朝鮮時代를 거치면서 궁궐을 비롯한 많은 곳에 정원이 조성되었으며, 아직까지도 많은 정원들이 남아서 전해지고 있다. 남겨진 庭園遺蹟을 통해서 살펴볼 때 朝鮮時代로 오면서 韓國의 庭園은 陰陽五行說을 바탕으로 하는 圓島方池를 중심으로 庭園이 造成되는 傾向을 보이게 된다는 것을 알 수 있다. 정원의 중심이 되는 이러한 圓島方池는 宮闈뿐만 아니라 別墅, 士大夫庭園 등에서 예외 없이 나타나고 있으며, 雁鴨池와 같은 形式的 뜻은 더 이상 찾아보기가 어렵게 되었다. 이것을 볼 때 朝鮮時代로 移行하면서 韓國庭園에서는 雁鴨池과 같은 池塘樣式이 더 이상 承傳되지 못하였음을 알 수 있는데, 그 이유에 대해서는 알 수가 없다.

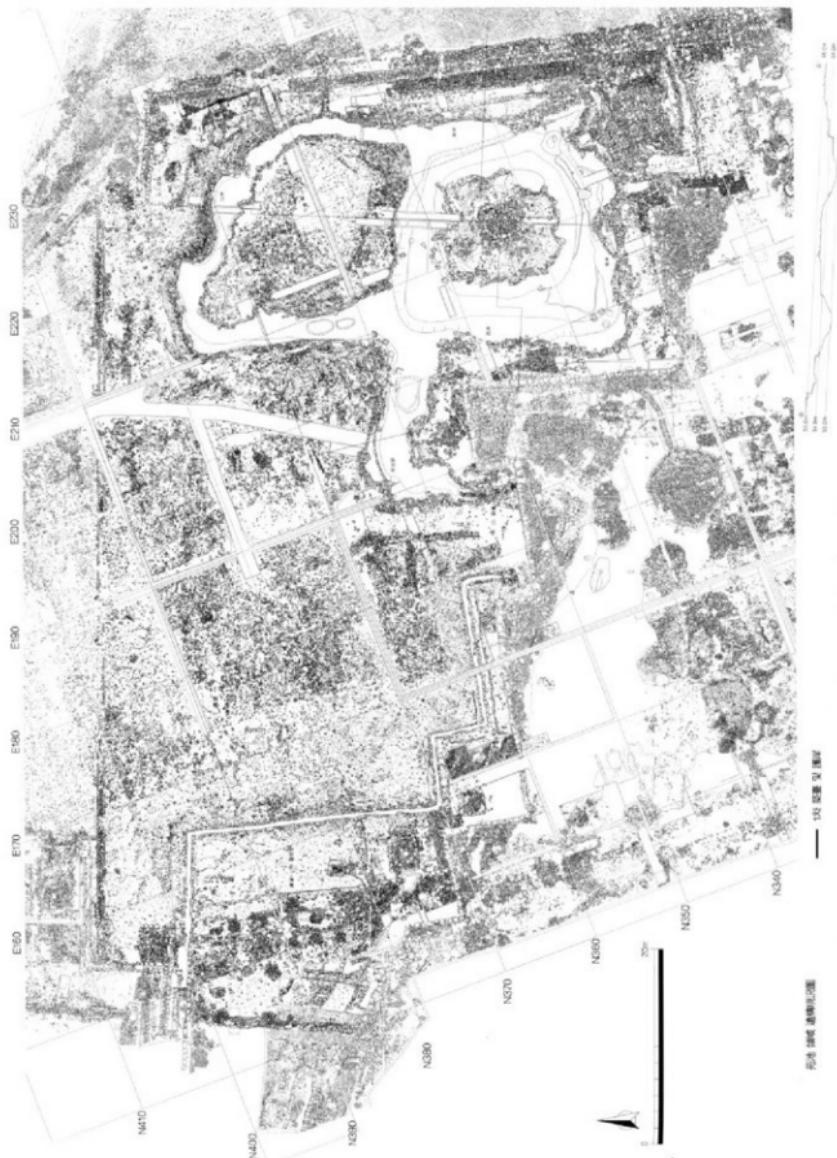


圖 8 九黃洞園池遺蹟 發掘平面圖

元代青白釉碗

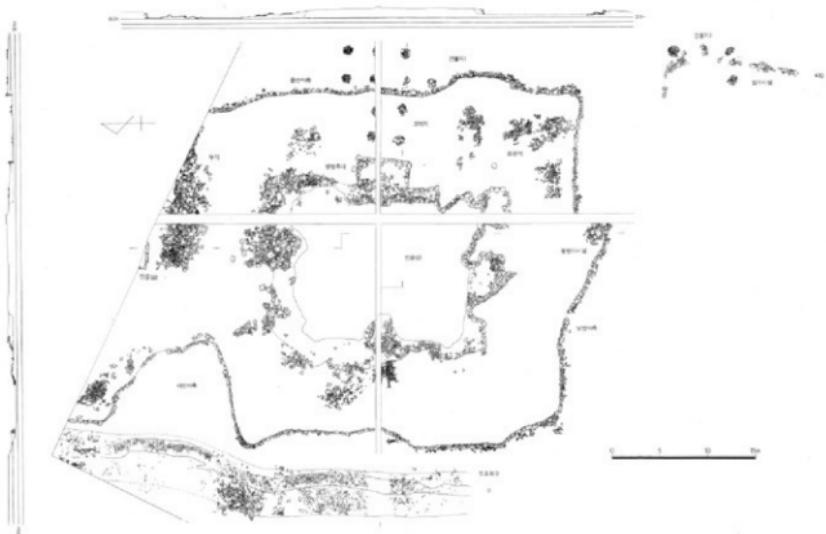


그림 9 龍江洞園池遺蹟 發掘平面圖

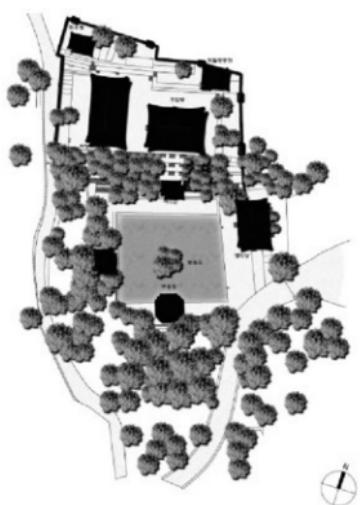


그림 10 昌德宮 芙蓉池周邊 配置圖



그림 11 昌德宮 芙蓉池周邊 그림(東闕圖)

III. 結論

雁鴨池 庭園은 統一新羅時代에 造成된 雁鴨池를 중심으로 형성된 韓國의 古庭園이다. 雁鴨池는 直線과 曲線의 護岸이 신비스러운 調和를 이루고 있으며, 池中에는 3개의 섬이 있어 三神鳥를 象徵하고 있다. 雁鴨池 東側편과 北側편에는 造山을 하였고 怪石을 놓아 視覺的效果를 높이고 있는데, 이는 巫山十二峯을 象徵하는 것으로 보인다.

雁鴨池가 樂園으로서의 象徵성을 보이는 것은 역시 세 개의 섬과 巫山十二峯의 存在 때문이다. 三神山과 巫山十二峯은 道教의 概念의 神仙思想을 바탕으로 형성되는 것으로 神仙思想은 現實世界에서는 도달할 수 없는 신비로운 場所性을 가진다. 이러한 神仙思想이 雁鴨池 造成의 背景이 되었다면 雁鴨池가 樂園으로서의 象徵성을 지니는 것에 의심의 여지가 없을 것으로 생각된다.

雁鴨池 造成의 모티브는 역시 동해바다였을 것으로 보는 것이 타당하다. 동해바다 가운데에서도 특히 東海口는 新羅人们에게는 聖所로 여겨지던 곳이었다. 이러한 聖所를 가까이 끌어다 놓고 쉽게 접하고자 함은 신라인들이 꿈꾸던 所望이었을 것이다.

雁鴨池가 造成된 이후 統一新羅時代에 龍江洞園池와 九黃洞園池에서 雁鴨池와 유사한 曲曲이 심한 曲線形 池塘이 조성되기는 하였으나 高麗, 朝鮮時代를 거치면서 韓國의 庭園은 陰陽五行思想에 입각한 圓島方池를 중심으로 이루어지는 것이 일반적이어서 雁鴨池의 造成樣式이 계속해서傳承되지는 못한 것으로 보인다. 단지 日本庭園의 池塘樣式과의 類似性을 發見할 수 있어 日本으로의 轉移與否가 注目되는 바이다.

本研究는 雁鴨池에 대한 概括的인 內容과 造成形式에 대한 것을 다루었으며, 몇 가지 중요한 논의사항에 대하여 考察하였다. 향후 韓, 中, 日 三國의 庭園에 대한 比較研究가 진행된다면 三國間의 庭園樣式의 交流에 대한 理解가增進될 것으로 보인다.

參考文獻

- 高敬姬, 1989, 雁鴨池, 大원사
國立慶州文化財研究所, 2008, 慶州 九黃洞 皇龍寺址展示館 建立敷地內 遺蹟-九黃洞園池遺蹟
金富軒, 1145, 三國史記; 李丙淵譯註, 1983, 三國史記 上, 下, 乙酉文化社
金龍基, 1996; 韓國造景學會, 東洋造景史, 文運堂
文化財管理局, 1978, 雁鴨池發掘調查報告書
朴景子, 2001, 雁鴨池 造營計劃研究, 學研文化社
嶺南文化財研究院, 2001, 慶州龍江洞園池遺蹟, 學術調查報告 30冊
鄭璫旿, 1986, 韓國의 庭園, 民音社
鄭在鍾, 1996, 韓國傳統의 苑, 圖書出版社 造景
韓炳三, 1982, 雁鴨池 名稱에 대하여, 考古美術 153
洪光均, 1994, 佛國寺 蓮池에 관한 一考察, 韓國庭園學會誌 12(2), pp75-82
洪光均·李相潤, 2001, 韓國의 傳統造景, 東國大 出版部

中国庭園の初期的風格と日本古代庭園

田中 淡

(京都大学人文科学研究所教授)

1. 中国庭園の滥觴と不老長生の理想郷

中国における苑囿(大規模自然庭園)は四季の皇帝田獵儀礼に端緒が求められるが、実際人工的造園の滥觴は秦始皇帝と漢武帝の離宮において顕著に現れる。『史記正義』秦始皇本紀31年(前226)に引く『秦記』に、現在の咸陽にあった蘭池宮について記し、

始皇帝は長安に都をつくった。渭水の水を引いて池をつくり、蓬萊、瀛洲の蓬山をきずいた。

遺址を彫って鯨をつくり、その長さは200丈であった。

という。不老長生を追究しつづけた始皇帝が来世永久の理想世界を現出しようとした庭園にほかなりない。これは、東海の神仙が棲むという神山を苑池に造営した文献上の初見であると同時に、原文に「築為」とあることから、それが紛れもなく版築の工法で築かれた、後後にいわれる「假山」の明確な祖形である。

次いで、前漢の武帝が秦の旧苑址を拡張整備を加えた上林苑は文献的に知られる最初の本格的な人工的景観の造営をともなう苑囿であって、その中の建章宮について、『史記』封禪書に、

そこで建章宮をつくった。その規模は千門萬戸に及び、前殿は未央宮よりも高かった。……高さ20丈あまりの漸台を設け、この池を太液池と呼んだ。池中に蓬萊・方丈・瀛洲・壺梁の諸島

があって、海中の亀魚に擬えている。

とあり、これらの神山が池中の島として築かれたことが明確に知られる。武帝もまた周知のように神仙思想に傾倒し、元鼎2年(前115)方士の少翁と

公孫卿の「仙人は樓居を好む」という進言にもとづいて柏梁台を築いて、台上に巨大銅人像を建てて仙人掌で甘露を受け、玉屑を混ぜて不老長寿の仙薬として服した。太初元年(前104)に柏梁台が焼失するやいなや建章宮に神明台と井幹楼という高台高樓を造営したのも武帝の仙境への憧憬の明白な証じである。注意すべきことは、秦始皇帝にはじまり漢武帝に集約される東海神山の理想郷をかたどった苑池の中島を配するレイアウトが中国庭園の滥觴と重なるという事実である。神仙の苑池と言うべき初期庭園の構成は、その後も北魏の洛陽華林園、隋の洛陽西苑、唐の長安大明宮太液池へといたる歴代皇帝の苑囿に、かたちを変えこそそれ踏襲された。近年一部の発掘調査がおこなわれている大明宮太液池は現代にいたるまで窪地として、中島の蓬莱山は高まりとして地上に痕跡をとどめているとおりである。

北魏洛陽華林園について、「洛陽伽藍記」に、華林園の中に大きい池があり、これは漢(魏の誤り)のときの天淵池である。池中にまた[曹魏の]文帝の九華台がある。高祖はこの台上に清涼殿を造った。世宗は海内に蓬萊山を作った。山上に懶人館があり、上に釣台殿があり、いずれも虹蜺閣のつくりで、虚に乗じて(空中を歩いて)往来することができた。三月上巳の禊日や季秋巳辰の日には、皇帝が龍舟御舟に乗って、その池上に遊んだ。

と記すのもその例証である。虹蜺閣のつくりというのは、『水經注』にも、

遊覧する人びとが阿闍を昇り降りすると、虹の階を出たり入ったりして、その様子はちょうど

鳴が沈んだり鸞が飛び立つようにみえた。

とあるが、虹はしばしば橋の比喩とされるように、池の中島の蓬莱山に立つ懐人館と釣台殿の両閣が高く架けられた空中廊のつくりであったことを描写したものにちがいない。実例をあげれば、下華嚴寺薄迦教藏(山西大同、遼・重熙7年[984])、二仙觀大殿道帳(山西高平、北宋・紹聖4年[1097])など、あるいは敦煌莫高窟壁画に描寫される類型をもって想像することができる。この種の空中樓閣は、北宋・元符3年(1100)に編修された官撰建築書「營造法式」小木作制度にはいみじくも「天宮樓閣仏道帳」として記載されるように、本来、仏教・道教の別に拘泥すべき類型ではなく、昇仙する理想郷の建築世界を現出したものにほかならない。

敦煌壁画の中には「淨土變」と呼ばれる題材がある。こうした壁画は、人々が憧れる西方淨土の美しい有り様を描いている。それら淨土世界を描いた絵の中では、通常は建築物を取り囲んでいる蓮池に大きな平台があって、その上で仏・菩薩たちが厳かに座り、伎樂天(音楽の神)や飛天(空を飛ぶ神)たちも美しい姿や踊りを見せている。「こうした建築物と水面の配置方式が中国の伝統的な庭園の発展とどのような関係にあるのか」、および「それが庭園や寺院の完成された配置方式なのか」という点は研究に値する課題であろう。

2. 自然風景庭園の初期的風格

秦漢以来の中国早期庭園は、上述したような皇帝苑圃だけでなく、本来、広々とした苑池の水面や水流を主要な構成要素とするところから出発した。前漢長安に梁孝王劉武が築いた菟園は、「西京雜記」に、梁孝王は宮室・苑圃をつくるのを娯しみにしていた。曜華之宮をつくり、菟園を築いた。園内には百靈山があり、山には膚寸石、落巖石、棲龍岫があった。また、屬池があり、池の間々には鶴洲、鳧渚があった。多くの宮觀はたがいに連なり、数十里にわたってめぐらされていた。

珍奇な果樹や木々、珍鳥や怪獸がことごとく備わっていた。王は毎日、宮人や賓客と一緒に園内で弋射や魚釣りをした。

という。名称から推測する限り、主要な景觀として自然の秘境を模した巖、谷、洞が配され、苑池に鶴や水鳥をかたどった洲浜が造成されたらしい。『三輔黃圖』によると、

茂陵の富民袁廣漢は、巨万の錢を藏し、……北山に東西四里、南北五里の庭園を築いた。川の流れを遮って園内に注ぎ入れ、石を積んで築山をつくり、その高さは10丈あまりで、数里にわたって連なっていた。白い鸛鶴や紫の鷺、鶴牛、青い児を飼い、珍しい獸や鳥がその間に蓄えられていた。砂を積んで中洲をつくり、流水を術くきあたらせて波濤をつくりだした。川や海の水鳥を養って繁殖させ、雛が林や池に満ちあふれた。珍しい樹木や草の栽培していないものはない。建物はすべてめぐり連なり、重層の樓閣や長い歩廊は1日かかっても全部回りきれないほどである。

と。また庭づくりマニアで知られた後漢の梁冀は、「後漢書」の列伝によると、

また高大な庭園をつくった。土を集めて築山をきずき、10里的距離に9つの丘があつて、二崤山(洛寧の山)をかたどった。奥深い山や険しい渓谷は、あたかも自然そのままのようだった。飼いならされた珍獸がその間を飛び跳ねていた。

という。これら最初期の庭園の事例によると、土や石の築山をきずき、池を開き、池岸を設営するという中国庭園の基本的要素が備わると同時に、原文に「沙を積みて洲浜を為り、水を激いて波濤を為り」、「自然の若き有り」と、自然を模倣、再現するという造園の基本原則が看取される。魏晋南北朝時代を経て、造園景象の重点は苑池から築山へと変容をとげたようであるが、いずれにしても自然風景を模した景象が造園の主たる構成要素とされたのは、今日私たちが蘇州や無錫など江南地方に分布する明清時代

以降の遺構から得られる中国庭園の風格とはあまりにも乖離が大きい。

中国では庭園の発掘調査の事例はながいあいだ皆無に等しかったが、最近ようやくわずかながら発掘調査の報告がいくつか現れてきた。広東広州の秦漢時代と推定される南越王国の宮苑遺址からは苑池の広大な水面を主要な要素とし、池中に縁を東立てで張り出した干闌(高床)式構造と推定される宮殿遺構とともに、水流を屈曲させて配した日本の古代庭園の造園手法と酷似する庭園遺構が検出されたことは、日本の造園史学界では何故か無視されつづけているが、もっと注意を惹いて当然である。それは、私が約20年前に予測したとおり、中国庭園の初期的風格は、むしろ日本古代庭園の要素と著しく近似した風格のものだったであろうとする仮説の正確さを実証することになった。

唐洛陽城郊の離宮上陽宮の遺址が近年発掘調査され、そのごく一部ではあるが、東西に細長い苑池の南岸から、東西に埠敷き基壇に立つ回廊と、その中間に池中に木造の土台と東建ての縁を張り出す水榭の遺構とともに、玉石鋪き洲浜をともなう苑池と池中に立っていたらしい假山の遺構が検出されたこともまた重視されてよい。また、長安大明宮太液池の南岸で干闌(高床)式建築の長廊および大型の廊院建築遺構が検出されたのも、いまとなってはやはり宮苑との関連から改めて注目しなおさなければならない。というのは、すでに西安碑林(陝西省博物館)に蔵されていた唐長安城内の興慶宮を描いた宋代の石刻図に、龍池という苑池の南岸に沿って走る長廊の描写があることからみて、ちょうど北京西郊の清の頤和園に現存するのと同様な構成であろうことは推定ことができたし、私もすでにその事實を指摘していたからである。

宮苑や仏寺に限らず、早期の庭園では苑池、水面が重視された。唐の詩人白居易が長慶4年(824)から住んだ洛陽城内の履道里の邸宅につくった庭園は、かれの「池上篇」序に、

敷地は方17里で、建物が3分の1、水が5分の1、竹が9分の1を占め、そして島や樹、橋や道がその間にばらばらとあった。

という。庭園内には3つの島があって、西平橋と中高橋、つまり西寄り対岸は平橋、両島の中間はアーチ橋でないでいたとも記す。このように、現存する江南庭園の実例とはまったく異なり、水面が大きな比重を占めるものであったという推論を私はすでに1990年に前述と同じ論文のなかで発表した。その後わずか数年にして、果たして履道坊内の西北寄りの地で白居易の旧居が発掘され、南北両進からなる四合院と坊の西北両面を周る伊渠から水路を引いた、詩文に南園と詠まれた池にあたるとおもわれる遺址が確認されたのは、まさしくその推測が正しいことが立証されたのである。

敦煌莫高窟壁画の觀經變相図に描かれた仏寺の庭園は境内溝面の水面に、ちょうど厳島神社社殿と同じように、木造の縁東を水中に林立させ、干闌式で舞台状の床を立ち上げる構造に描かれている。雲南昆明に現存する圓通寺の池苑を中心とする伽藍配置は、もともと私自身がかつて現地に遺る元代の創修記を蒐集、記録して考証を加えたことからはじめて内外に知られるようになった。現存する建築遺構は明代の再建ではあるが、池苑をともなう配置は唐代にまでさかのほる可能性があり、稀少ながら、その種の苑池伽藍が実在したことをしめす例証である。いまや広州南越王宮苑遺址、唐長安大明宮太液池遺址、洛陽上陽宮遺址が検出された以上、こうした広範な視点と研究方法がいっそう追求されなければならない。

3. 日本古代庭園にみる中国早期庭園の要素

日本の古代庭園は、上述のように跡易するほどの大量の文献史料と相反するほど歯がゆい遺構しかない中国庭園と比べて、発掘調査の事例ははるかにおおいだけなく、また造園手法にかんする情報も豊

富であり、そのなかにむしろ中国庭園ではつとに佚なわれた遺制が散見されることはじゅうぶん注意するに値しよう。

たとえば、築山は、中国では假山と称するが、冒頭に引いた秦の咸陽蘭池宮の版染、前漢梁孝王菟園の石山、後漢の梁冀の園苑には土山をはじめとして、早期の庭園からすでに不可欠な構成要素であった。中国では古代の遺構実例は確認できない一方、わが国の平城宮東院庭園遺址で発掘された假山の遺構はおそらくそのような中国古代の初期的風格を伝えるものとみてよいであろう。大明宮太液池の蓬萊山南岸で一部検出された石組と一部共通する因子がみられることもけっして偶然ではあるまい。

假山と関連の深い造景に、中国庭園では立峯とか特置石峯などと称する、太湖石などの奇岩怪石をオブジェのように屹立させる意匠がある。この種の造景は、一般にはその歴史的事実関係をほとんど検証されないまま中国庭園の象徴として印象づけられているようだが、それは正確ではない。すでに南朝・梁の華林園で用いられたのを嚆矢とするが、石癖(菟石マニア)は唐の牛僧孺、李德裕や白居易の当時にピークを迎える古い伝統をもつものである。北宋徽宗による艮嶽の造営を契機としていよいよ白熱し、さらに専門化する経緯をたどった。太湖石の細かい空洞を多く開けた奇怪な形象の立峯は、さらに後の明清時代に定着した伝統にすぎず、北宋までの石峯ははるかに素朴で豪放な形象を特徴としていた。岩手県平泉の毛越寺庭園大泉池の水中に屹立する立石は、前掲の記述にならえばもちろん石の築山に属するけれども、同時に、立峯の初期的風格をしめすものとみてよい。立峯は、また盆景・盆石と深い関連をもつ。正倉院御物の古木でつくった假山は、毛越寺に伝わる鉄樹とともに、盆景の原型をしめすとともに、造景要素の初期形態をしめすミニチュアでもある。

また、造水は、平安時代に橘俊綱が撰した造園秘伝書である『作庭記』に記述があり、平泉毛越寺大泉

池の発掘調査でその記載とびったり合致する自然地形を活かした水流遺構が検出されてから具体的形態がいっそう明確になったけれども、もともとは晋の王羲之が蘭亭で開いた流觴曲水の故事に由来する。先に引いた『洛陽伽藍記』に、華林園で皇帝が龍舟鷁首に乗る園遊が記されるのはそれにもとづくものであり、華林園のなかには三国時代、魏明帝の造営にかかると伝えられる流觴池という名の池もあった。ちなみに、龍舟鷁首の式典はかつて平等院鳳凰堂や毛越寺庭園にも伝えられた。曲水の宴は、平城京宮跡庭園において微妙な水流勾配を制御する S 字型に屈曲した苑池が発掘されたことからも知られるように、すくなくとも初期には自然風景をたたえた装置であったと推測される。隋の煬帝が大業元年(605)に造営したという洛陽城郊の西苑には、16の院を周る龍麟渠があったというの、自然風景の造景でおこなわれた初期の流觴曲水の形態を伝えるものである。ただし、煬帝が同年に築いた離宮の都梁宮には流杯殿という名の建物があったから、すでにこの儀礼に専用の建物も早くからつくられていたことが知られる。韓國慶州の鮑石亭には石に溝を穿った流杯渠がのこり、中国でも同様に、河南開封の流杯渠遺址のほか、現存遺構としては、北京紫禁城寧寿宮花園の禊賞亭の屋内に石に穿たれた流杯渠がある。北宋の建築書『營造法式』石作制度には「風字」「國字」2種の流盃渠が掲載されているように、流觴曲水に専用の流杯殿(亭)がつくられるのが早くから通例となつたことは疑いない。

毛越寺大泉池に代表される日本古代庭園造構の水面を主要な構成要素とする造景は、白水阿弥陀堂庭園、称名寺庭園、鎌倉二階大堂などの遺址とともに(一般に浸透した「淨土庭園」という呼称は誤解を招く源であるが)、すでに述べたように、中国庭園の初期的風格を伝えるものにほかならない。石敷きの洲浜の手法もまた前述したように、むしろ漢代の造景に近い。前述した造水だけでなく、観自在王院庭

園遺址の瀑布は「作庭記」にいう池の類型のうち「伝い落ち」にあたる早期の実例である。

もとより「作庭記」には、中国の造園手法から直接影響されたと考えられる内容が少なからず含まれている。たとえば、方位の禁忌に関連して、東北は鬼門であるが、阿弥陀三尊石を迎えてれば魔縁の侵入を妨げることができるというはその典型である。門の中央に木があると「閑」字になるから訪問する人もなく家は閑散となる、庭の中央に木があると「困」字になるから家運は困窮する、などの記載と同様に、中国の風水・関係分野の専門方術書の影響であることは歴然としている。「作庭記」には「宅經に云」ではじまる箇条がある。現存する「黃帝宅經」は、清代に編纂された晚期の風水方術書であって、これとは関係ないが、同類的一群の風水方術書のなかには西晋や南朝・宋の編纂とする書物も伝わる。「宅經」を書名に冠する書物やそれと酷似すると推定される書物がすでに散佚した書物にあったことは「隋書」経籍志、「唐書」芸文志や「旧唐書」呂才伝の記述によって確認できる。同書か、あるいは同類の古典からの佚文の引用ではないかと推定される。つまり、「作庭記」の記載と合致する造園の要素が伝わる事実は、とうてい日本の庭園史や仏教史、政治史の範疇にのみ限定して解釈できる主題ではない。そうした数多の造園手法の例証によって、はじめて中国古代庭園の佚われた初期的風格の遺制が知られる点にこそ毛越寺庭園に代表される庭園遺跡が有する眞の価値を伝えるといつていい。

註

- 1)『史記』秦始皇本紀31年12月。張守節「史記正義」「秦記云。始皇都長安。引渭水為池。築為蓬、瀛。刻石為鯨。長二百丈」。
- 2)『史記』封禪書「於是作建章宮。度為千門萬戶。前殿度高未央。……漸臺高二十餘丈。命曰太液池。中有蓬萊、方丈、瀛洲、壺梁。像海中神山龜魚之屬」。
- 3)田中淡1990a、1997。
- 4)『洛陽伽藍記』卷1城内「華林園中有大海。即漢(魏)天淵池。池中猶文帝九華臺。高祖於臺上造清涼殿。世宗在海內作蓬萊山。山上有懶人館。上有釣臺殿。並作虹蜺閣。乘虛來往。至於三月禊日、季秋巳辰。皇帝駕龍舟鶴首。遊於其上」。
- 5)「水經注」穀水「遊觀者升降阿閣。出入虹陛。望之狀鳬沒驚舉矣」。
- 6)田中淡1988、1990b、1990c、1992。
- 7)『西京雜記』卷2「梁孝王好營宮室苑囿之業。作曜華之宮。築兔園。園內有百靈山。山有膚寸石、落狼巖、棲龍岫。又有鷗池。池間有鶴洲、鳧渚。其諸宮觀相連。延亘數十里。奇果異樹。瑰禽怪獸畢備。王日與宮人賓客弋釣其中」。
- 8)『三輔黃圖』卷4「茂陵富民袁廣漢。藏雞鉅萬。家僮八九百人。於北[邙]山下築園。東西四里。南北五里。激流水於注其中。構石為山。高十餘丈。連延數里。養白鸛鵠、紫鷺鷥、鷺牛、青兕。奇獸珍禽。委積其間。積沙委洲澗。激水為波濤。致江鵠海鶴孕雛產卵。延溝林池。奇樹異草。靡不培植」。
- 9)「後漢書」列伝24梁冀傳「冀乃大起第舍。……又広開園囿。採土築山。十里九坂。以像二嶠。深林絕調。有若自然。奇禽馴獸。飛走其間」。
- 10)田中淡1998a、2002a、2002b。
- 11)楊鴻勛2001。
- 12)田中淡1990a、1997。
- 13)中国社会科学院考古研究所洛陽唐城隊1998。
- 14)中国社会科学院考古研究所等2003a、2003b、2004。
- 15)田中淡1998b。
- 16)白居易「池上篇」序(『旧唐書』卷166白居易傳)「即白氏叟棄天退老之地。地方十七畝。屋宇三之一。水五一。

竹九之一。而烏樹橋道問之。

- 17) 田中淡1990a、1997。
- 18) 中国社会科学院考古研究所洛陽唐城隊1994。
- 19) 蕭默1989。
- 20) 田中淡1983a、1995。
- 21) 田中淡1990、1997、1994。
- 22) TANAKA 1992。
- 23) 田中淡等2003。
- 24) 田中淡1978、1989。
- 25) 田中淡等2003。
- 26) TANAKA 1992。
- 27) 森蘿1962。田中淡1988。
- 28) TANAKA 1992。
- 29) 森蘿1986。
- 30) 田中淡1983b。
- 31) LEDDEROSE 1983。

参考文献

- 1) 田中淡1983a 「昆明圓通寺の碑文と建築・池苑」、『佛教藝術』151号、毎日新聞社。
- 2) 田中淡1983b 「生と死の原理」、上田篤・多田道太郎・中岡義介編『空間の原型』、筑摩書房。
- 3) 田中淡1978 「隋朝建築家の設計と考証」、山田慶兒編『中國の科学と科学者』、京都大学人文科学研究所。
- 4) 田中淡1988 「中國建築、庭園と鳳凰堂一天宮樓閣、神仙の薦池」、『平等院大觀1建築』、岩波書店。
- 5) 田中淡1989 「中國建築史の研究」、弘文堂。
- 6) 田中淡1990a 「中國造園史における初期的風格と江南庭園造構」、『東方學報』京都第62冊、京都大学人文科学研究所。
- 7) 田中淡1990b 「中國建築、庭園与鳳凰堂(1)」、『古建園林技術』總第28期。
- 8) 田中淡1990c 「中國建築、庭園与鳳凰堂(2)」、『古建園林技術』總第28期。
- 9) TANAKA,Tan 1992 "Early Horticultural Treatises and Pure Land Buddhist Garden: Sakuteiki and Its Background in Ancient Japan and China" , Garden History-Issues, Approaches Methods, John Dixon Hunt (ed.) ,Dumbarton Oaks, Washington D.C.
- 10) 田中淡1992 「敦煌壁画中的建築、庭園与日本鳳凰堂」、蕭默編『敦煌建築』、新疆新華書店、烏魯木齊。
- 11) 田中淡1994 「『圓治』の世界—明末の造園論」、『しにか』1994年2月号、大修館書店。
- 12) 田中淡1995 「昆明圓通寺の碑文與其建築及池苑」、『空間雜誌』第67期、空間雜誌社、台北。
- 13) 田中淡1997 「中國早期園林風格與江南園林实例」、『城市與設計』第1期、唐山出版社、台北。
- 14) 田中淡1998a 「中國園林在日本」、『文史知識』1988年第11期。
- 15) 田中淡1998b 「清代の建築と離宮・苑圃」、『世界美術大全集東洋編 9 清』、小学館。
- 16) 田中淡2001 「中國建築の知識は如何なる媒体を通じて日本に伝えられたか—工匠、模型・図面、そして書籍」『考古学の学際的研究—濱田青陵賞受賞者記念論文

集 I」、昭和堂。

- 17) 田中淡2002a 「中国園林在日本」、蔡毅編訳『中国伝統文化在日本』、中華書局、北京。田中淡2002b 「日本における中国庭園」、蔡毅編『日本における中国文化』、勉誠出版。
- 18) 田中淡2002c 「中国建築知識東傳日本の媒介」(『東北亞研究論文系列(APARP)』16)、中央研究院 亞太研究計画、台北。
- 19) 田中淡・外村中・福田美穂共編2003 『中国古代造園史料集成—增補哲匠錄巖山篇 秦漢・六朝』
- 20) LEDDEROSE, Lothar 1983 "The Earthly Paradise: Religious Elements in Chinese Landscape Art" . Theories of the Arts in China, Susan Bush and Christian Murck (ed.) ,Princeton University Press.
- 21) 森蘿1962 『寢殿造系庭園の立地の考察』(『奈良国立文化財研究所学報』第13冊)、奈良国立文化財研究所。
- 22) 森蘿1986 『「作庭記」の世界』、日本放送出版協会。
- 23) 楊鴻勛2001 『宮殿考古通論』、紫禁城出版社、北京。
- 24) 着默1989 『敦煌建墓研究』、文物出版社、北京。
- 25) 中国社会科学院考古研究所洛陽唐城隊1994 「洛陽唐都観音坊白居易故居発掘簡報」『考古』1994年第8期。
- 26) 中国社会科学院考古研究所洛陽唐城隊1998 「洛陽唐東都上陽宮園林遺址発掘簡報」『考古』1998年第2期。
- 27) 中国社会科学院考古研究所・日本独立行政法人奈良文化財研究所聯合考古隊2003a 「唐長安城太液池遺址考古新収穫」『考古』2003年第11期。
- 28) 中国社会科学院考古研究所・日本独立行政法人奈良文化財研究所聯合考古隊2003b 「唐長安城太液池遺址発掘簡報」『考古』2003年第11期。
- 29) 中国社会科学院考古研究所・日本独立行政法人奈良文化財研究所聯合考古隊2004 「西安唐太液池南岸遺址発現大型廊院建墓遺存」『考古』2004年第9期。



図-1 下華嚴寺薄迦教藏・天宮樓閣

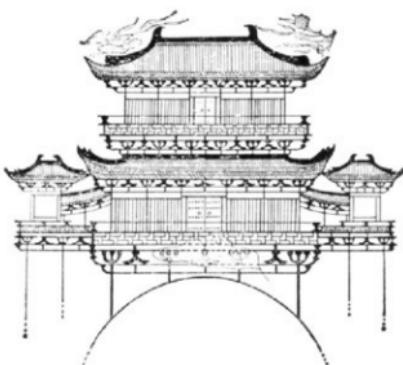


図-3 李寿墓壁画樓閣図

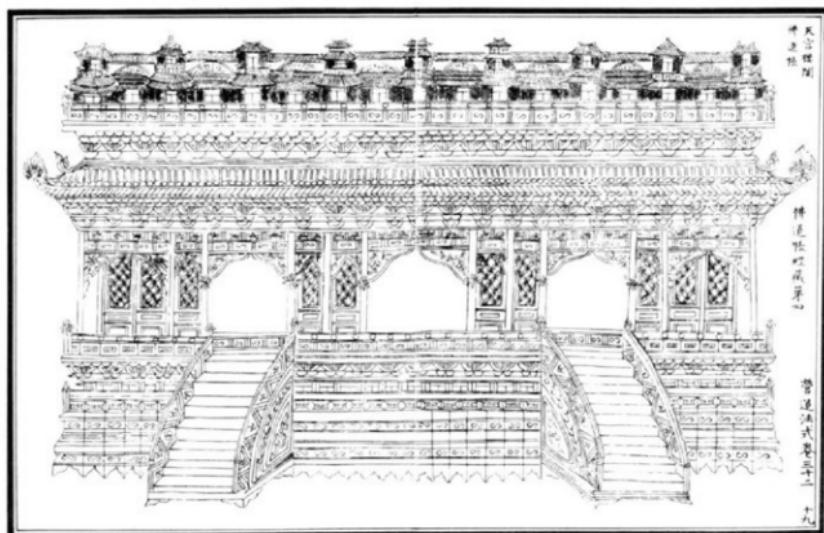


図-2 「營造法式」天宮樓閣

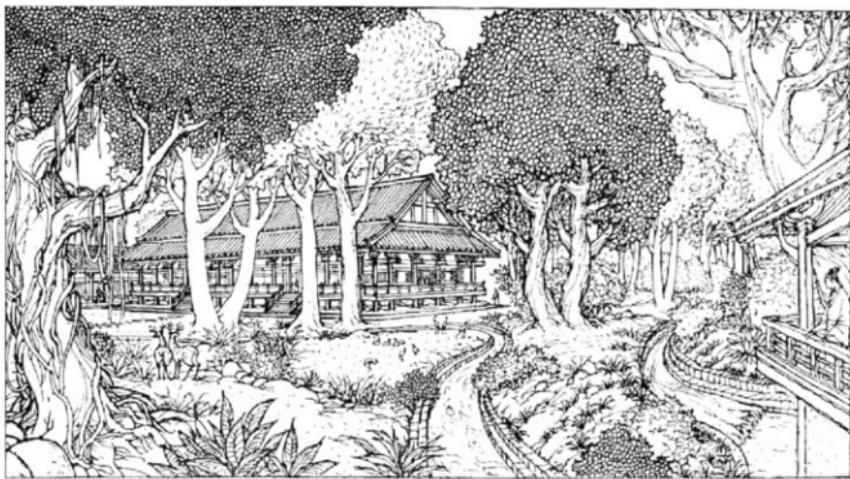
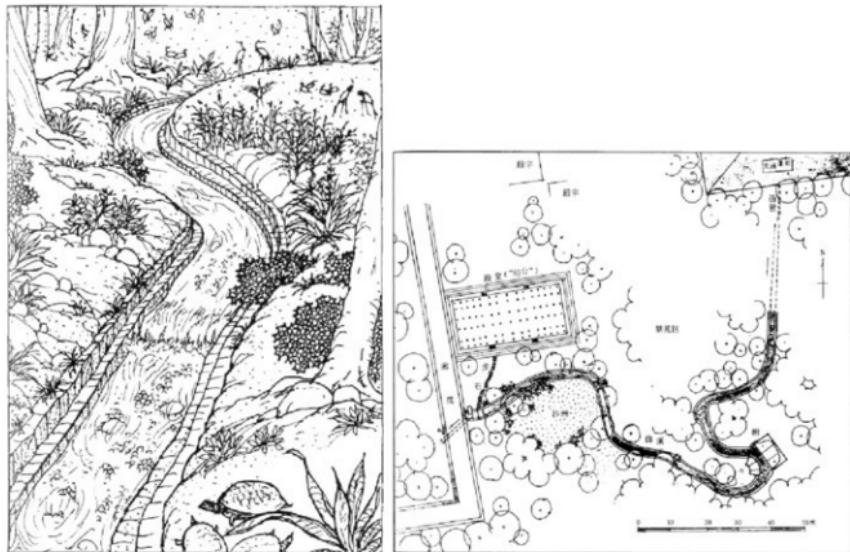


図-4 秦漢南越王宮苑遺址(広東州広州市)遺水州浜 平面図と復元図[楊 鴻勵]



図-5 唐洛陽上陽宮園林遺址平面図

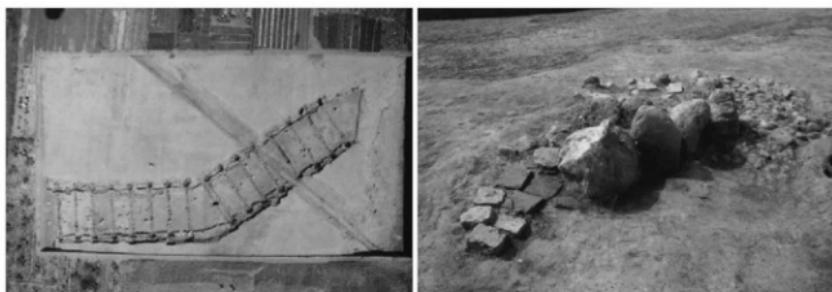


図-6 唐大明宮太液池[左上：北岸「干闋」建築址、右下：蓬萊島南岸景石群(假山)]

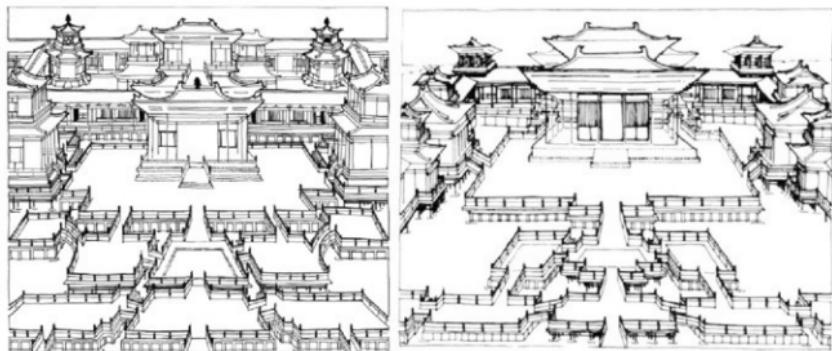


図-7 敦煌莫高窟
[左図：第85窟北壁壁画 菩薩經變の佛寺、右図：第172窟 観經變相図]

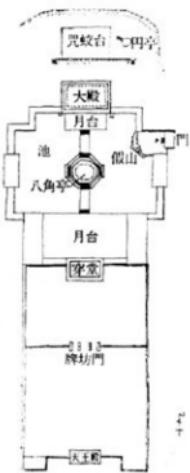
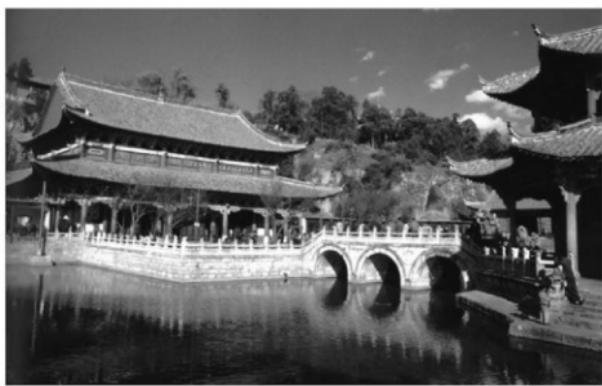


図-8 圓通寺 [明・成化年間 (1465-1487)]
上図：池苑 正殿（左）と八角亭（右）右図：伽藍主要部配置略図

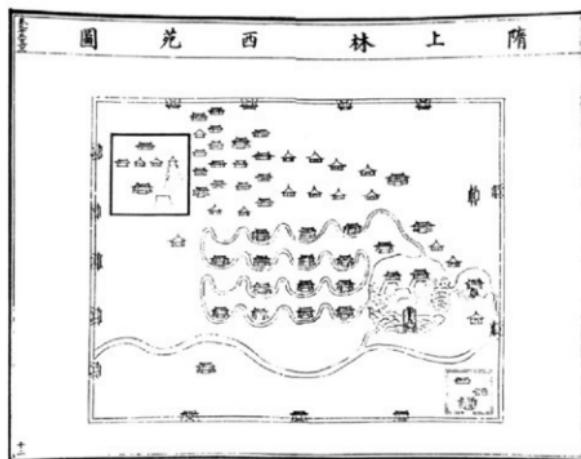


図-9 隋東都西苑 (永楽大典)

風字流蘇渠

營造法式卷三十九
十五

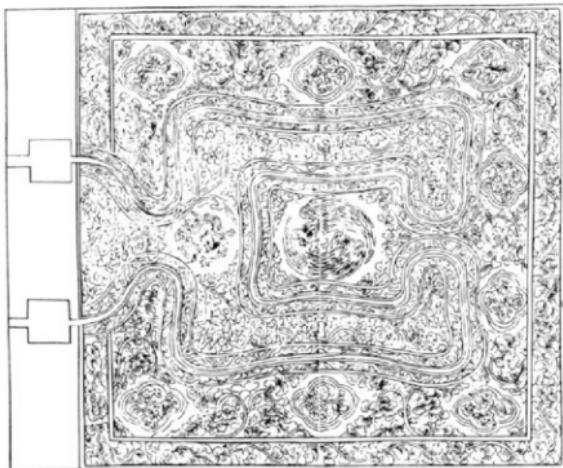


図-10 「營造法式」風字渠



図-11 鮑石亭（韓国・慶州）

宇治に築かれた西方浄土への憧れ～平等院庭園～

杉本 宏

(宇治市歴史まちづくり推進課主幹)

1. 平等院創建

平安時代の宇治は、平安京の南郊に開けた別業の地であった。平等院の前身は、平安前期に造営された源融の宇治別業に遡り、平安中期になってこの宇治別業が藤原道長に買得され、さらに長子頼通に伝承されたのち、永承7年(1052)に寺院に改造され平等院となっている。時あたかも末法初年であった。創建時の仏堂は別業寝殿を改修した本堂であり、鳳凰堂は翌年に建立されている。この後、一門によつて造営が進められ、頼通が薨じた1074年までには約8haの境内に多くの塔堂が建ち並ぶこととなった。主要堂塔には、先の本堂・鳳凰堂のほか、法華堂・多宝塔・五大堂・不動堂・護摩堂・経蔵・鐘楼・北大門・西大門などが記録に残り、通常の僧房以外にも南泉房・成真房など規模の大きな房院も境内周囲に展開していた。

平等院は伽藍配置上のいくつかの特徴を持っている。一つは寺域東限が宇治川西岸となり、ここに築地塀などの遮蔽施設を持たないこと。二つに各堂宇が東面を基本とすること。三つに伽藍中軸線が見出せないことである。浄土庭園を持つ寺院(浄土教寺院)の嚆矢となる藤原道長創建の法成寺や、白河天皇創建の法勝寺のように、四周を築地塀が取り巻き、南門から延びる南北軸上に南面堂と池を配置し、圓池をコ字形に堂が開む様子とは、およそ違うこととなる。また鳳凰堂の建築型式は鳥羽の勝光明院や平泉の無量光院などに引き継がれ、その後の浄土教寺院の展開に大きな影響を与えることとなった。

2. 平等院庭園

平等院伽藍の中核施設が鳳凰堂であることは、記録の上でも伽藍配置の上でも明らかである。鳳凰堂は定朝作丈六阿弥陀如来坐像を本尊とする東面堂で、建築的には仏堂である中堂と、その南・北・西にデザイン化された廊を付設し、阿弥陀仏の宮殿宝樓閣を模した阿弥陀堂建築である。鳳凰堂は池中の中島上に建てられており、周囲に庭園が展開する。平等院庭園とは、鳳凰堂を中心にして作庭された仏堂庭園であり、極楽浄土の有り様の再現を目指した淨土庭園ということになる。

庭園の中核となる阿字池は、現在は主に鳳凰堂東面と北面に水面を広げるが、かつては背後となる西方にも、河岸段丘に沿って大きく広がっていたことが分かっている。また現在、鳳凰堂正面側は堤防の木立て東への眺望が阻害されているが、本来は庭園と宇治川岸とは直結しており、景観を広く東に開いていた。阿字池は別業時代の園池を踏襲したもので、鳳凰堂の建立にあたっては、西側河岸段丘面を削って池面を広げつつ中島を掘り残している。池水は河岸段丘面と池中からの湧水でまかなわれており、宇治川へ排水していたものと考えられる。河岸段丘崖となる池南岸を除く他の部分は、緩傾斜の汀となり基本的に拳大的河川礫を用いた洲浜が造成され要所に景石が配置されているなど、あしらいは基本的に同時代の寝殿造庭園と同じである。

鳳凰堂前面である池東岸は、当初は堂正面の南よりに小石敷きの細い出島があり、宇治川との間も一面の小石敷き庭園となっていた。しかし頼通薨去後

ほどなく、この辺りは池の埋め立てと庭園面の嵩上げが行われ、鳳凰堂真対岸に鳳凰堂の観覧施設である小御所が建てられている。続く12世紀初頭には鳳凰堂の大改修が行われ、柱が池から立ち上がる翼廊型式から総壇上積基壇に変わり、屋根も本瓦葺きとなった。当初の屋根は、平泉中尊寺金色堂のような木瓦葺きが推定されている。

3. 極楽世界の儀を移す

1061年の多宝塔建立記事の中には「平等院は邸宅を改め寺院とし、阿弥陀如来の像を造って極楽世界の儀を移した」と述べられている。また都では「極楽いぶかしくば宇治の御寺をうやまへ」という謠が流行ったという。平安当時、平等院は都人に現世の極楽浄土として認識されていたと見てよいだろう。

この現世の極楽浄土の具体的機能をうかがう良い資料がある。1067年の後冷泉天皇平等院行幸である。この行幸では、鳳凰堂前の池上には錦繡の仮屋が建てられ、池中には龍頭鶴首船が浮かび、天皇は池上の仮屋から阿弥陀如来を礼拝している。浄土經典は往生者が極楽の宝池に化生することを説いている。当時の觀想念佛を踏まえれば、この礼拝はまさに極楽往生の疑似体験であったとしてよい。さらに注意すべきは、この行幸に報いるために平等院や藤原頼通に功賞があり、宇治川対岸にある離宮社にも位記が授けられている点である。近年、離宮社(現宇治上神社)本殿の年輪年代測定を行ったところ、1060年に建てられていることが判明した。離宮社の造営年代と平等院行幸のあり方を踏まえると、両者は対

施設であったと考えられる。彼岸である平等院は、此岸の存在がなければ存在し得ない。宇治川西岸の平等院を彼岸とすべく、此岸のシンボルとして対岸に配置されたのが離宮社であり、宇治川は彼岸と此岸とを分け隔てる境界として認識されたと考えてよいだろう。平等院庭園が宇治川西岸に面し、広く景観を東に解放するのは、まさにこの点による。藤原頼通の西方浄土への憧憬は、ひとり鳳凰堂と平等院庭園に仮託されたのではなく、広く宇治の自然景観を含みこんだ中に表現されたとみるべきであろう。

頼通薨去後、鳳凰堂の池対岸に専用観覧施設小御所が建てられ、頼通の空間仮託のコンセプトに修正が迫られ、さらに12世紀初頭に鳳凰堂は建築表現を変える。ただこのような変化は、現世の極楽浄土としての平等院の提案力を弱めてはいない。それは、鳳凰堂を模した勝光明院も平泉無量光院も、改修された鳳凰堂と平等院庭園を手本としていることからうかがえよう。

参考文献

- 1)『史跡及び名勝平等院庭園保存整備調査報告書』宗教法人 平等院、2003年
- 2)吹田直子・杉本宏「平等院発掘」「佛教藝術」279号－特集宇治の考古学・藤原氏別業の世界－ 毎日新聞社、2005年
- 3)杉本宏『日本の遺跡6 宇治遺跡群』－藤原氏が残した平安王朝遺跡－、同成社、2006年

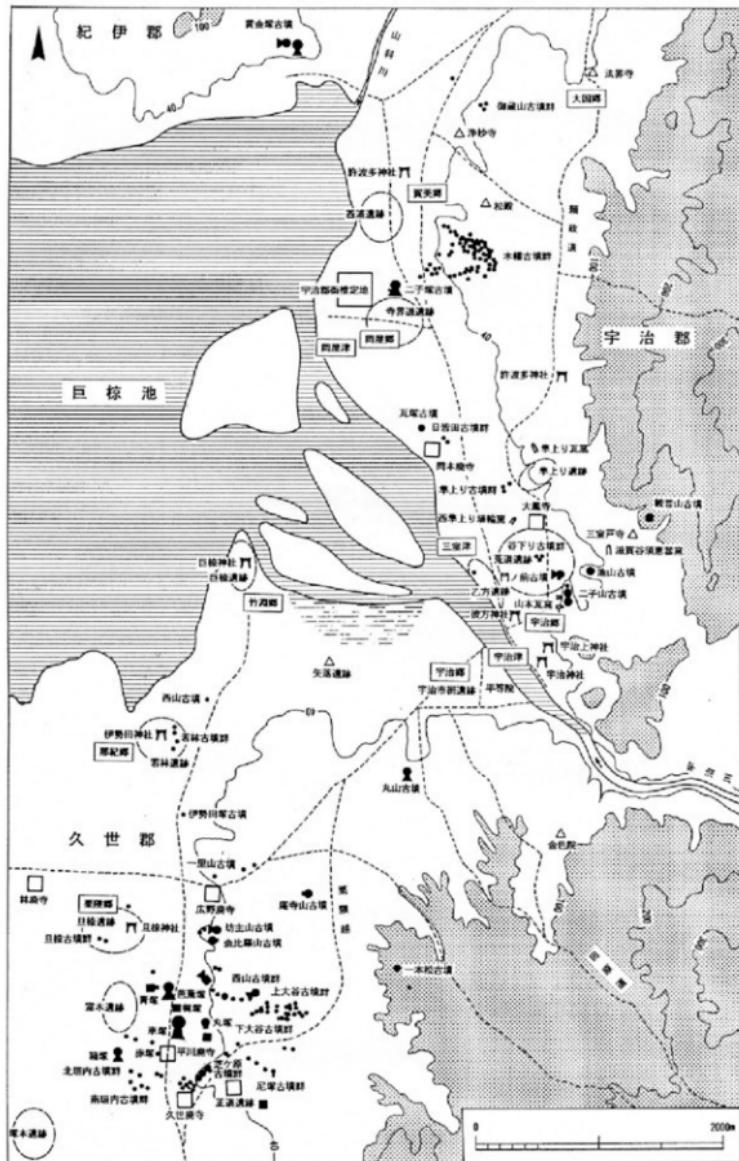


図-1 古代の宇治周辺の推定地形と主要遺跡



図-2 現代の宇治周辺の地形図

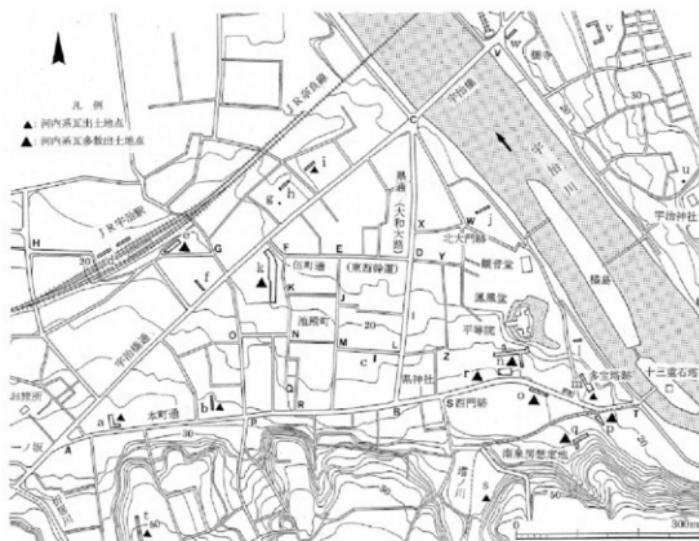


図-3 平等院周辺の地形と道路（1965年頃の地図から）

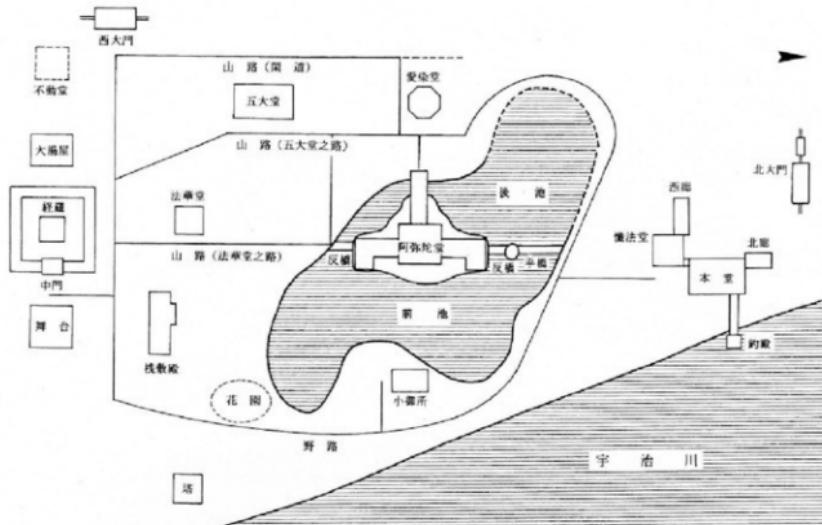


図-4 平等院伽藍の諸堂推定位置関係図

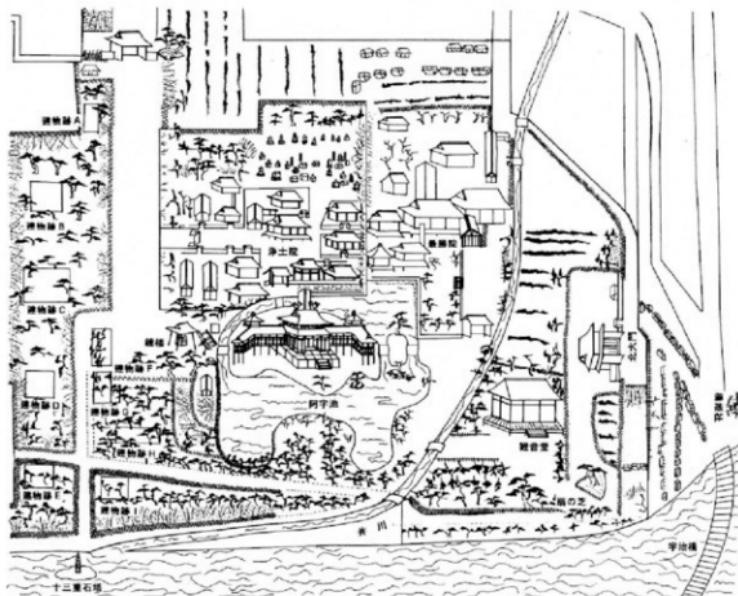


図-5 最勝院藏「平等院境内古図乙図」(近世、書き起こし文字追加)

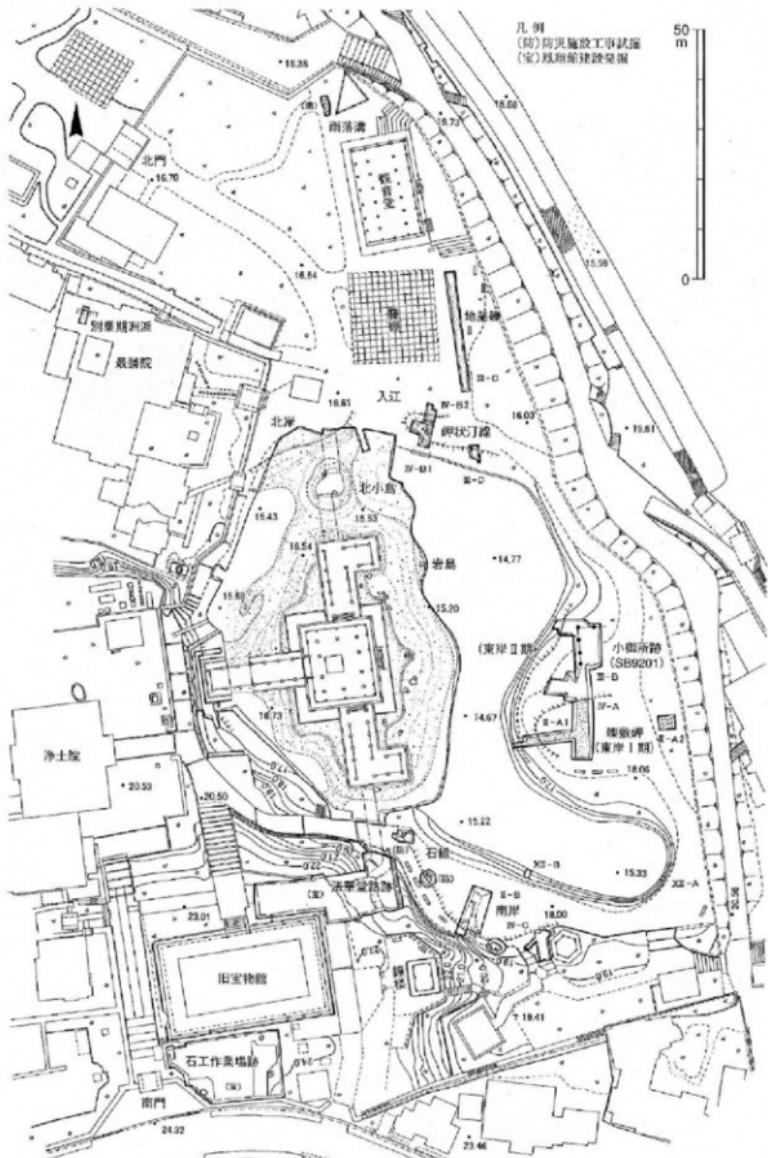


図-6 平等院庭園発掘調査図(「平等院庭園保存整備報告書」より)



図-7 平等院庭園 上空写真



図-8 凤凰堂と淨土園の各段対応関係



図-9 本尊 阿弥陀如來坐像（定朝作 丈六寄木造）



図-10 凤凰堂仏後壁の阿弥陀

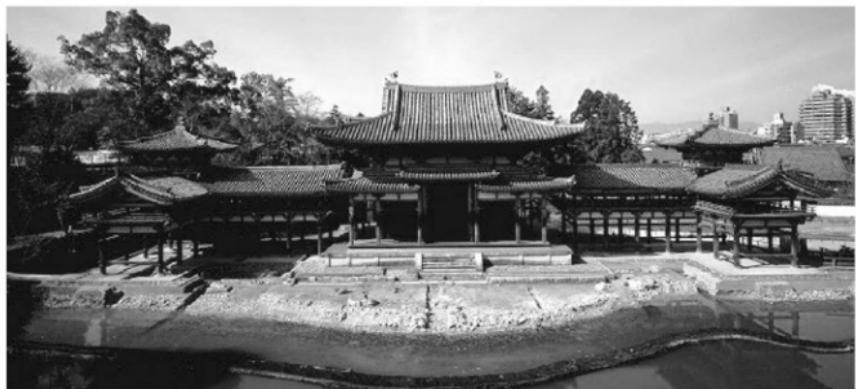


図-11 鳳凰堂周囲の庭園発掘

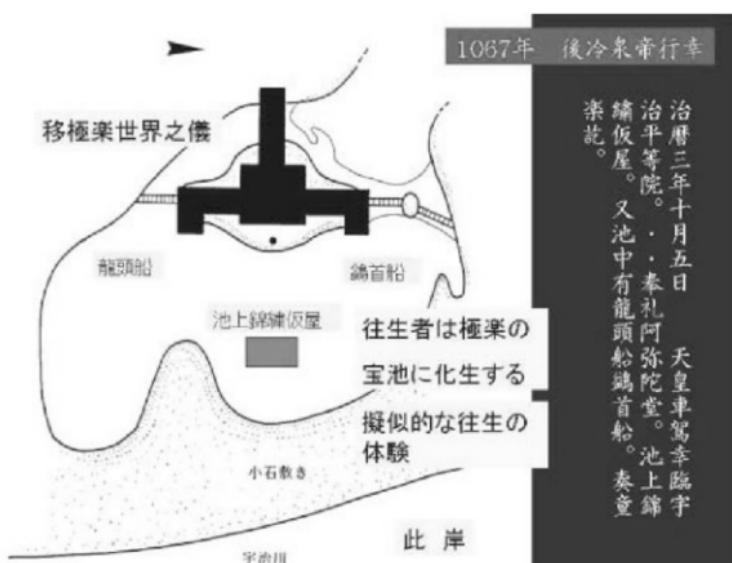


図-12 後冷泉行幸時 (1067年)

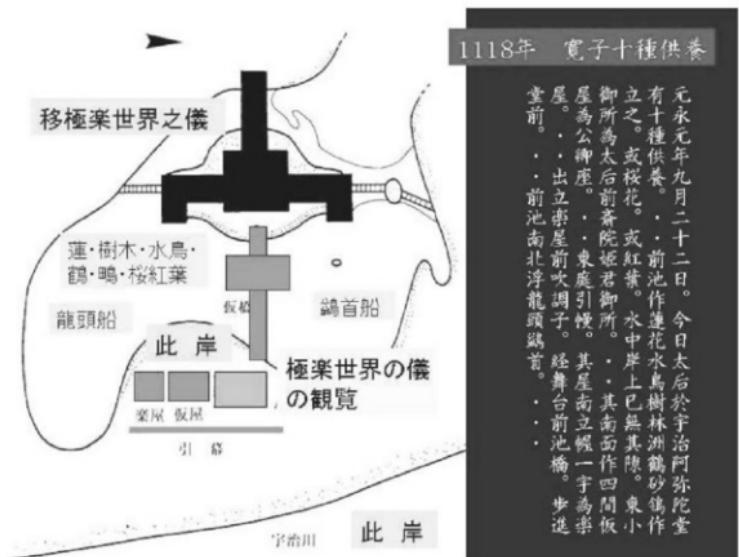


図-13 十種供養時 (1118年)

元永元年九月二十二日。今日太后於宇治阿弥陀堂有十種供養。前池作蓮花水鳥樹林洲鶴砂集御所為太后前齋院姫君御所。其南面作四間板屋。屋為公卿座。東庭引慢。其屋南立櫻子。其南面作四間板屋。前立東屋。前庭引慢。其屋南立櫻子。其南面作四間板屋。前立東屋。前庭引慢。其屋南立櫻子。前池南北浮龍頭鶴首。前池橋。步進堂前。前池南北浮龍頭鶴首。前池橋。步進堂前。



図-14 『扶桑略記』から判読できる空間仮託



図-15 平等院の空間仮託の構造

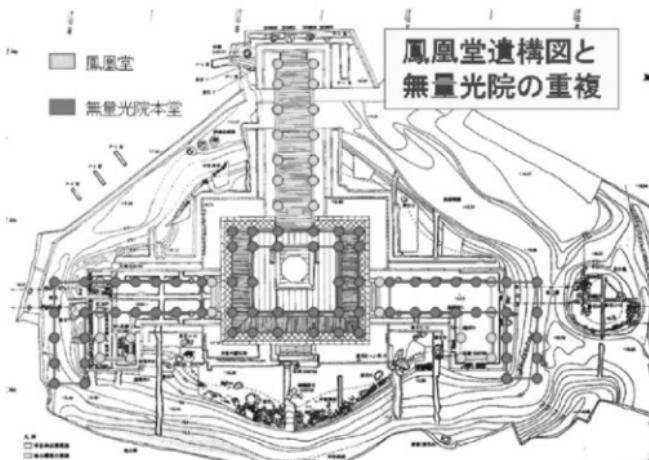


図-16 凤凰堂発掘図に平泉無量光院を重ねる

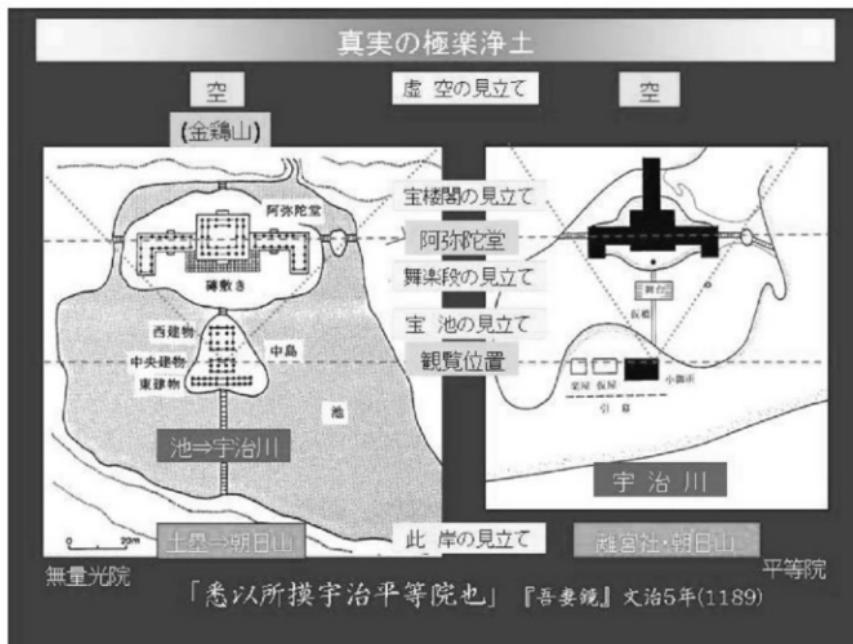


図-17 無量光院と鳳凰堂との法会時比較

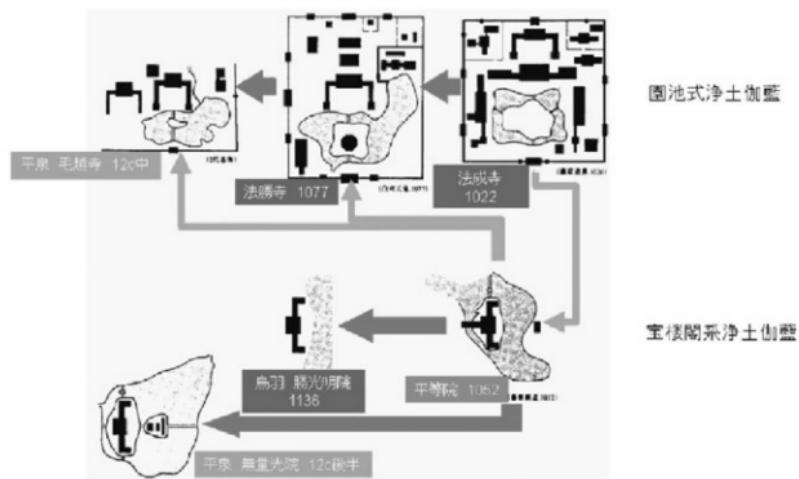


図-18 平安期浄土教寺院の変遷

奥州に夢見た理想郷と庭園群～平泉の浄土庭園群～

佐藤 嘉広

(岩手県教育委員会生涯学習文化課主任主査)

1. 「平泉」の成立

(1) 理想郷の舞台～平泉

平泉は、日本列島の本州北部、古代の行政区画である陸奥国のはば中央に位置する。東を北上川、北を衣川、南を太田川によって囲まれ、西は起伏のある低い丘陵が続いている。「中尊寺建立供養願文」や「円隆寺梵鐘銘」によれば、平泉の一部又は全体が四神相応の地と考えられていた可能性が高い。

(2) 歴史的背景

中央勢力の地方支配をめぐる対立の構図は数世紀間に及んでいたが、11世紀中葉から後半においても両者の摩擦が顕在化し、内乱となつた。遠く中央貴族の系譜をひきながらも自らを土着の「東夷」の末裔と称した藤原清衡が内乱の勝者となり、11世紀末に平泉を拠点とした。清衡が仏教思想に基づく国家鎮護を企図したことは、「中尊寺建立供養願文」に顕著に表される。加えて、末法思想の流行に基づく西方浄土概念の普及や、京都郊外における理想的空間形成の動向が、平泉に政治・行政上の拠点と一体化した現世の浄土が生み出される背景となつた。

2. 理想郷の構築過程

～平泉の浄土庭園群

(1) 清衡段階～中尊寺大池跡など

平泉に居館(柳之御所遺跡)を移した清衡は、まず支配領域の中心に塔を建立した(「吾妻鏡」)。この塔は現段階では史料上でのみ存在が知られるが、中尊寺境内を形成する関山丘陵のはば中央にあることは確実と考えられる。各種堂塔の建立に統いて、阿弥

陀堂であり後に華堂となる金色堂が居館に向けて建立された。

中尊寺大池跡は、平泉における最初の浄土庭園である可能性がある。これまでの発掘調査により、中島を有すること、東側の低い部分が土堤によって護岸されていること、12世紀中に2時期の造り替えがあることが明らかとなっている。

大池跡を、「中尊寺建立供養願文」中の記載と対応させて考えた場合、その西側を中心に「三間四面桧皮葺堂」、「三重塔」、「二階瓦葺経蔵」、「二階鐘楼」などが所在したと考えられる。発掘調査では、経蔵跡と考えられる遺構が確認されている。

(2) 基衝段階～毛越寺庭園・觀自在王院庭園

ア. 毛越寺・觀自在王院

12世紀第2四半期から第3四半期前半にかけて、二代基衝は毛越寺を建立した。本尊が薬師如来であることから、淨瑠璃淨土との関わりが説明可能である。円隆寺と嘉勝寺の二つの金堂を有するが、大泉が池と呼ばれている園池は円隆寺に面し、南大門から中島を介して正南北に架橋されていた。同様に、境内は土壙によって区画され、堂舎とともに軸方向は南北に整えられている。伽藍背後には、塔山が西北にそびえている。

大泉が池は現存する典型的な浄土庭園として考えられる。東西に長く、北側護岸は玉石敷きである。導水は池の北東方向から、背後の山を水源とし、板石及び円礫などにより構築された造水によっている。造水を構成する配石の状況は、州浜や荒磯風に構築されている池の護岸や中島及び景石などとともに、「作庭記」の記述を具現化している。13回に及ぶ

発掘調査を経て往時の状況が完全に復元整備されている。なお、中島については2時期の変遷が跡付けられている。

觀自在王院は、毛越寺境内の東側に隣接している。「吾妻鏡」では基衡の妻が建立した阿弥陀堂と伝えている。境内及び堂舎の軸方向は、毛越寺と同様正南北である。

阿弥陀堂に対する池は舞鶴が池と呼ばれていて、中島を有している。中島にいたる橋については不確定である。導水は北西方向からで、毛越寺境内北東に所在する貯水池（弁天池）を水源としている。池と接する箇所では、「作庭記」の記述に沿って滝の伝い落ちの状況を配石により形成している。

イ. 金鶏山と施設配置

基衡段階は、平泉に淨土世界を形成することになった諸施設の配置計画が明確化した時期である。金鶏山頂には経塚構築が開始され、毛越寺・觀自在王院間の南北区画の北への延長が金鶏山頂に達することから、金鶏山が両寺院の配置に重要な役割を果たしたことが明らかである。また、柳之御所遺跡においても、居館（又は持仏堂）に付随する池に架けられた橋の西の延長が金鶏山頂に達することから、金鶏山を西方淨土に見立て、中心建物が池の設置とともに正南北軸に再構築された可能性が考えられる。

（3）理想郷の完成～無量光院跡

無量光院は、三代秀衡によって「宇治平等院の地形を模」して建立された。本堂は丈六阿弥陀仏を安置する阿弥陀堂で、翼廊を有し、ほぼ東に向いて開かれている。池は梵字が池と呼ばれ、素掘りである。導水は北西側から行われていて、水源は金鶏山方面の湧水と考えられる。池中には、本堂ののる中島、東小島及び北小島を浮かべている。東小島には、本堂に相対する施設が構築されていた。本堂から北小島には、架橋されていたことが確認されている。池のさらに外側は、土壙及び堀によって囲繞されている。また、近年の発掘調査成果から、無量光院の構築が秀衡の晩年であり、出家を相前後する時期であ

る可能性が高まっている。

無量光院は、池の東側から東小島をはさんで中島上の阿弥陀堂を見た場合、その背後に西方極楽淨土を想起させる金鶏山が位置している。そのため、池と仏堂と背後の山が一体となった淨土庭園の最高の発展形態と評価されている。また、猫間が淵をはさんで東側に柳之御所遺跡が接することから、政治行政上の拠点と西方極楽淨土がまさに一体化した空間として捉えることも可能である。

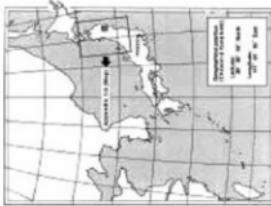
3. 淨土世界「平泉」

平泉の「淨土世界」は、初代清衡が平泉を領域の仏教支配の中心地とし、二代基衡によって淨土を形成する施設の配置計画が具体化し、三代秀衡晩年の無量光院の建立によって完成された。100年間の淨土世界の形成過程は、立地・形態・意匠それに特徴をもつ淨土庭園の発展の過程でもある。それは、奥州藤原氏の政治行政の基盤のもと、日本で独特の展開を見せた複合的仏教思想に基づいて計画的に諸施設が配置され、自然地形により十分な水量の供給が見込まれた平泉でのみなしたものである。

平泉は、理想的空間である「淨土」が単にひとつの寺院境内で完結することなく、淨土庭園など複数の施設が、都市的要素をもつ政治行政上の拠点施設と一体化して形成された、まとまりのある空間に創出された現世の理想郷といえるものであった。

参考文献

- 1) (財)京都市埋蔵文化財研究所編 2007 『院政期の京都 白河と鳥羽』
- 2) 平泉町教育委員会編 2007 『特別史跡毛越寺境内附 鎮守社跡整備報告書』
- 3) 藤島亥治郎編 1961 『平泉－毛越寺と觀自在王院の研究』 東京大学出版会
- 4) 岩手県教育委員会編 2008 『平泉文化研究年報』第8号



修持而得之洞悉，皆古音士而微，佛特治真金而顯，佛經無疑，極樓大門大耳，出高嶺山，就鷲鵠，龍虎勢宜，即是四洲具足之地也。實真關一管，豈非諸佛體頂之場乎，又啟萬

「中華寺建立供養願文」(一三六)

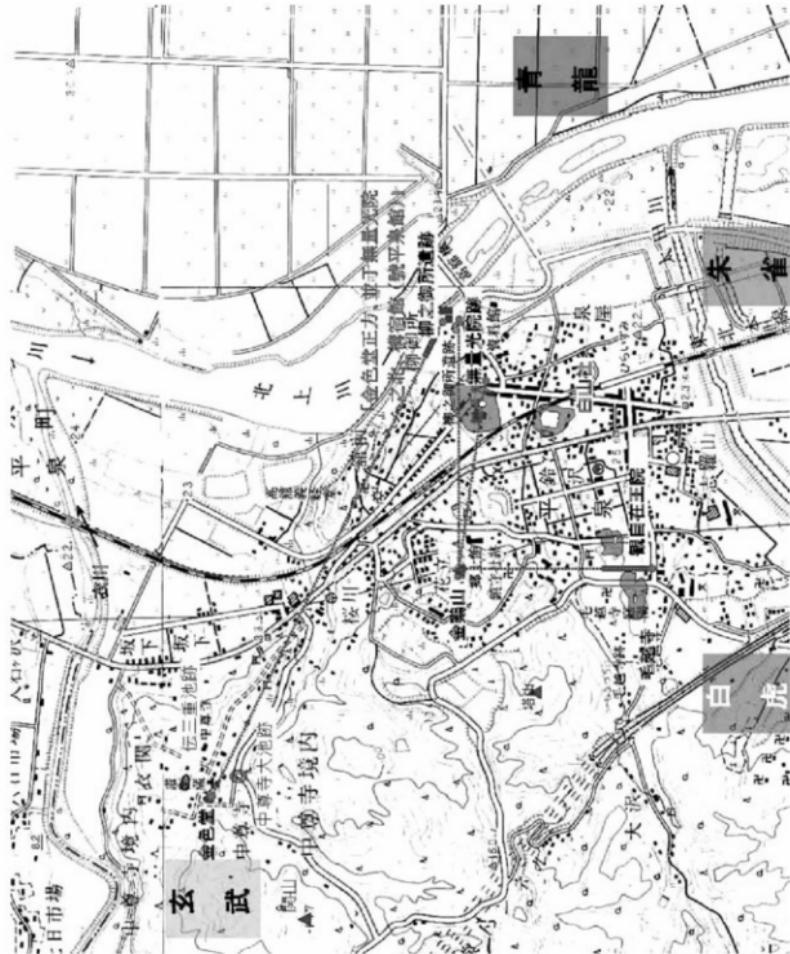


図-1 「平泉」の立地と諸施設の配置

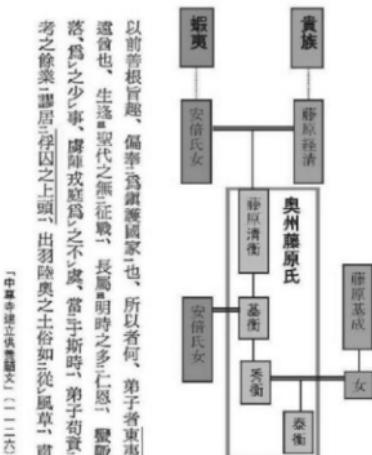


図-2 奥州藤原氏の系譜と自意識

「中興重建俱羅館」(二二五)

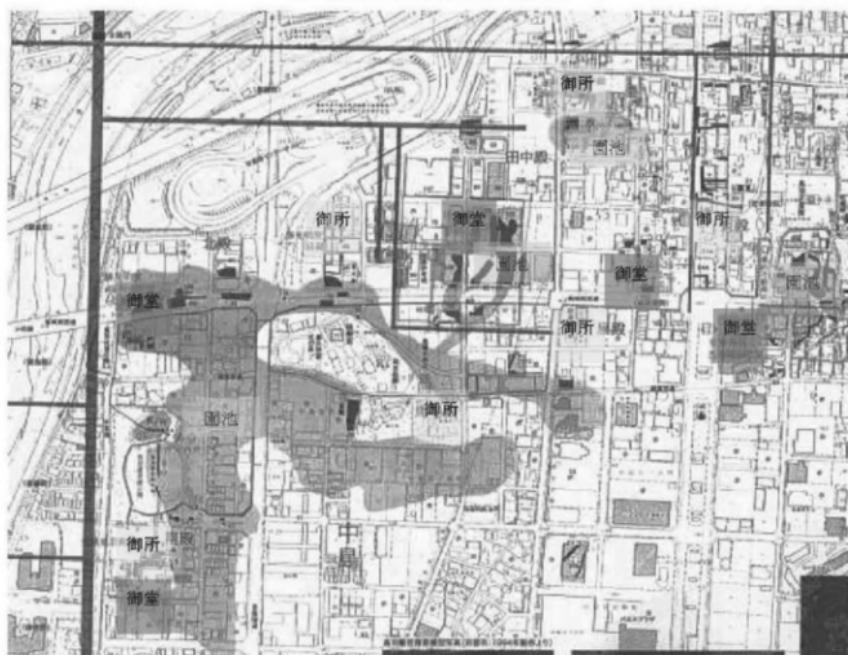
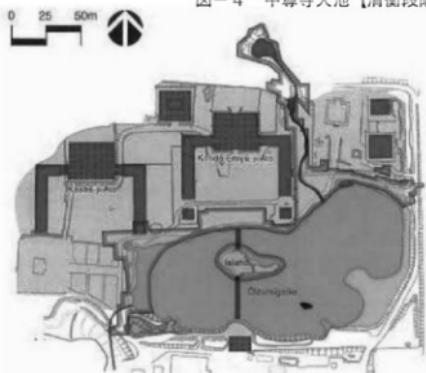


図-3 鳥羽離宮復元図案（京都市埋蔵文化財研究所 2007 付図を元図として作成）



図-4 中尊寺大池【清衡段階】と「中尊寺建立供養願文」

奉^ニ建立供養、鐵護國家大伽藍一區事
三間四面檜皮葺堂一字在左右廻せ二間
二階瓦葺經藏一字
奉^レ納金銀泥一切經一部
奉^ニ安置等身皆金色文殊師利尊像一軀
大門三字
築垣三面
反橋一道せ一間
斜橋一道十四間
龍頭鶴首畫船二隻
左右樂器大鼓舞裝東卅八具
右、築^フ山以墳^ム地形、穿^ル池以貯^ム水脈、
〔中尊寺建立供養願文〕(一一六)



進水事
一、先^ム水のみなみの方角をさだむし。既云、東より南へひがへて西へながすを周流とす。
西より東へながすを逆流とす。しかば、東より西へながす、常態也。又東方よりいだして、
舍もハしたをとおして、未申方^ハ出す、是吉也。青龍の水をもひて、もろべの恩氣を白虎
のみわへあらひだすゆへなり。その家のあるじ成氣惠康のやまひなくして身心安樂無事長
進なるべしといへり。
四神相応の地をえらぶ時、左より水なれたらを、青龍の地とす。かるがゆへに進水をも殿
舎もハ寝殿の東より出で、南へむかて西へながすべき也。北より出ても、東へまわして
南西へながすべき也。既云、進水のためる内ヲ曳^ム旗とす、居住をそのハらにあつる。吉
進するべしといへり。

一毛越寺事
塔堂四十餘宇、羅房五百餘宇也。
基衡建^ス文字之、先金堂號興福寺、鑄^ス金銀^ハ、織^ス櫛赤木等、
書萬寶^ハ交^ス象色^ハ、本柳安^ハ、樂師丈六、同十二神將^ハ、皆後作之、母有開作以
「作延紀」



図-5 毛越寺と毛越寺庭園（大泉が池）【基衡段階】

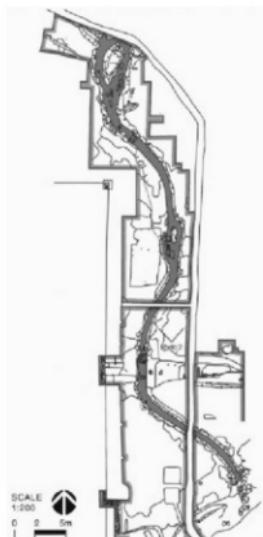


図-6 毛越寺庭園（大泉が池）の遺水

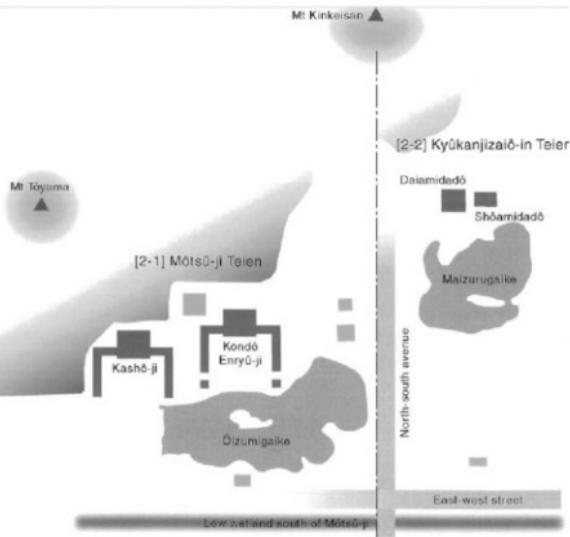


図-7 金鶏山と毛越寺・觀自在王院の設計【基衝段階】

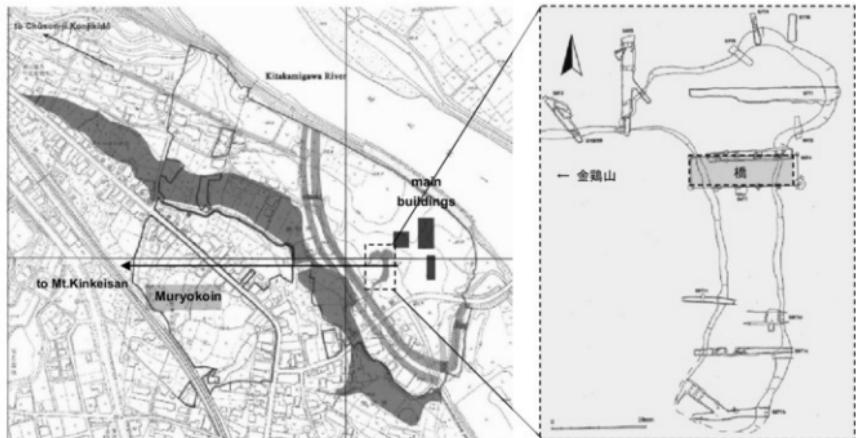


図-8 金鶏山と柳之御所遺跡園池及び主要建物の設計【基衝段階】

一、池はぬめ、もしへつるの才がたにほるべし。水はものにしたがひて、そのかたちをなるものなり。又現言をかなだまするがたなど、おもひよせてほるべきかなり。

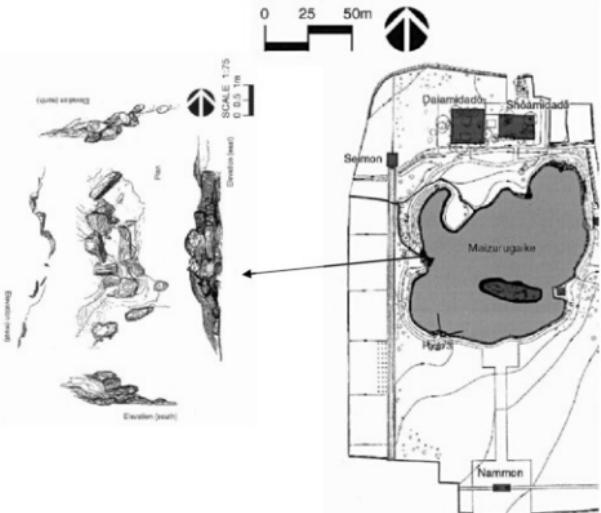


図-9 観自在王院庭園（舞鶴が池）【基術段階】と「作庭記」

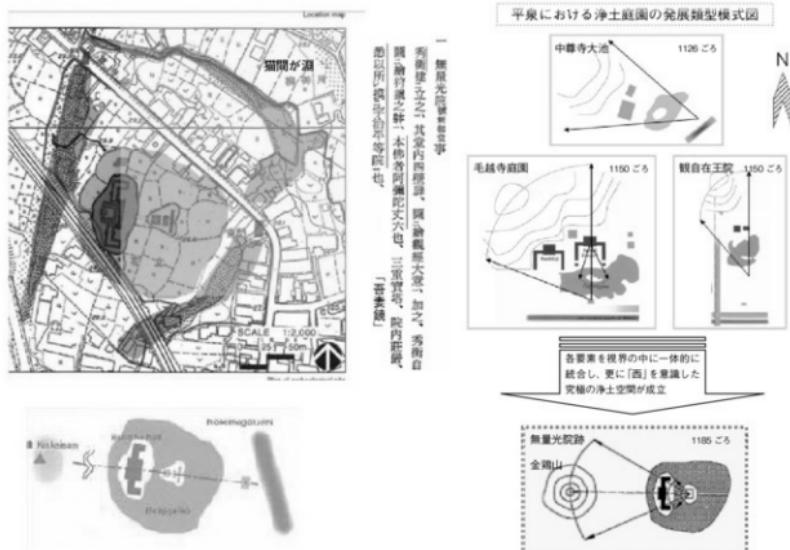
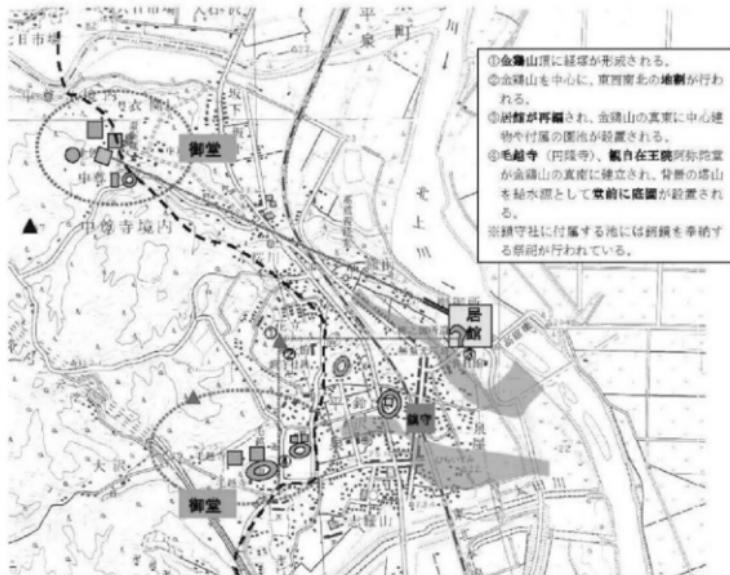


図-10 無量光院園池（梵字が池）【秀衡段階】と平泉における浄土庭園の発展模式図



- D
- ①河川交錯の要害地に居館(御館)が形成される。
 - ②櫛山山頂を中心に、塔をはじめとして、法華経、密教、淨土教など、複合的仏教思想に関する仏龕が建立される。
 - ③河筋乾燥である金色堂が居館に面して建立される(後に寶光院となる)。
 - 小鎮守宮(御館の建立とともに、大澤が造成される)。
 - 記録に残れない建物は、鐵守(中央壁社)と伝えられている。



- A
- ①金雞山頂に經塔が形成される。
 - ②金雞山を中心、東西南北の地割が行われる。
 - ③居館が再編され、金雞山の真東に中心建物や付属の建物が設置される。
 - ④毛越寺(内隆寺)、氣自在王(桐原院)が金雞山の東南に建立され、背景の塔山を給水源として堂前に底盤が設置される。
 - 宗鏡守社に付属する池には銅鏡を奉納する祭祀が行われている。

図-11 「平泉」における浄土世界の形成過程（上段：清衡段階、下段：基衡段階）

図-12 「平泉」における浄土世界の形成過程（秀衡・泰衡段階）



表「平泉」中心域に所在する庭園群

No.	位置	名稱	時期	系輪 (漢字は西面、英字は東面)	方向	基盤 高さ	形状	対記建物	中島		灌水	排水	調査	備考		
									形状	種類						
1	中尊寺	大池	12C 前半	活潑		70	1.0	基盤 土壘	不整形	古稱謨か 金堂	不整形	北西~ 南東	×	1960-2008		
2	中尊寺	三重の池	12C 中葉	基盤か 中葉	南北か 東西	?	?	玉石組	不整形	金堂か 金堂	不整形 玉石組	○	?	1960-1987	淨土庭園	
3	毛越寺	大泉の池	12C 中葉	基盤	東西	190	0.8	玉石敷	不整形	金堂 (円堂)	不整形 2時刻	○	北~南	5-100	東~西 1955-1958 1980-1990	
4	毛越寺	普天池	12C 中葉	基盤か 中葉	東西	80	0.0	?	素掘り	不整形	(2箇所)	△	?	北西~ 南東	なし	貴賤が池への 導水施設
5	觸自在王陀地	舞鹤小池	12C 後半	基盤		90	1.4	一部 石引き	不整形	阿弥陀堂	不整形	△	北西~南東	西~東 1954-1955		
6	無量光院跡	雙字が池	12C 後半	秀衡後半		110	0.3	基盤	不整形	阿弥陀堂 (3箇所)	不整形	△	北西~南東	2-100	西~東 1952-2008	淨土庭園
7	達谷庭	鶴鳴小池	12C	基盤か 秀衡		?	?	玉石組	不整形	西光寺 延寿門堂	扇形方型か 扇形	△	?	?	1968	
8	白山社		12C 中葉	基盤		?	?	玉石組	?	白山社	?	○	北西~南東	前	1992	計較用園池
9-1	柳之街所通池		12C 中葉	基盤	南北	42	0.8	基盤	馬蹄形	持仏堂か (持仏堂)	?	○	自然灌水方式	東~西 1990-2005	浮舟造形庭園	
9-2	柳之街所通池		12C 後半	秀衡後半	南北	42	0.6	玉石敷き 格子形	原輪 (原毛)	不整形か (原毛)	×	△	自然灌水方式	北東~ 南西 1990-2005		

奈良時代の浄土庭園～阿弥陀浄土院とその前身たる觀無量寿院～

小野 健吉

(奈良文化財研究所文化遺産部長)

1. 寺院と池

6世紀の仏教伝来以来、飛鳥寺や大官大寺などをはじめとする飛鳥・藤原京の時代(592-710)の寺院には、伽藍を構成する要素として池を含むものは確認されていない。奈良時代(710-794)になると寺院境内地のなかに池を含むものが現れる。今もその姿をとどめ、奈良でも指折りの名所となっているのが、興福寺の猿沢池である。しかし、猿沢池は中心伽藍の南門の外側の、元來は南花壇と呼ばれた標高の低い区画にあり、從来の谷筋の湿地を利用した池である。その役割は区画の名の示す通り蔬菜の栽培であり、多雨時には調整池的な機能も果たしたと考えてよいだろう。もちろん、寺院境内の池であることから、放生池的な機能を果たしたことも想像できる。もう一つ、奈良時代の寺院境内の池として記録に残るのが、大安寺の池である。大安寺境内の北東部には、周濠を伴った全長154mの前方後円墳・杉山古墳があるが、天平14年(747)の『大安寺伽藍縁起並流記資材帳』には、墳丘と周濠が「池並岳」として記されている。これらは、境内の中の庭園的な性格で用いられたことも考えられるが、当然のことながら、この池も大安寺創建時にはすでに存在したものであり、その位置から考えても、仏堂と一緒に取り扱われたものではなかった。これらに対し、仏堂と圓池が一体となっていたことが確実なのが、阿弥陀浄土院である。

2. 阿弥陀浄土院とその前身

阿弥陀浄土院は天平宝字5年(761)に光明皇太后

(奈良時代初期の最有力貴族である藤原不比等の娘、聖武天皇の皇后)の一周年忌會のために、法華寺の一角に造営された寺院で、本尊は阿弥陀如来である。平城宮東院庭園のすぐ東隣にあたる跡地には花崗岩の立石が地上に残されており、江戸時代の地誌『和州旧跡幽考』にも記されているように、古くからここが阿弥陀浄土院の跡地であると伝えられてきた。平成12年(2000)に奈良国立文化財研究所が実施した発掘調査では、中島のある曲池や池の中に立つ礎石建築ならびに廊橋の遺構が見つかった。全貌が明らかになったわけではないが、これらが阿弥陀浄土院の遺構であることは、出土遺物などから考えても疑いのないところである。さらに、その礎石建築の前身と見られる掘立柱建物の遺構も池の中で見つかっており、これについては、光明皇太后の母(不比等の妻)である縣犬養橘三千代が建立した「觀無量寿堂」(石山寺所蔵『如意輪陀羅尼經』の跋語に記載)を中心とする区画(以下、「觀無量寿院」と仮称する)に伴うものと考えるのが妥当であろう。觀無量寿堂という名称は、阿弥陀經・無量壽經とともに淨土三部經の一角をなし、十六觀(阿弥陀仏の極楽淨土に往生するための16の觀法)を内容とする觀無量壽經によることは言うまでもない。觀無量壽經を絵画として表現した「觀經變(觀經変相)」は極楽淨土の情景を中心としてその外縁部に十六觀の図などを配置したものであるが、こうした觀經變が觀無量壽堂の内部に掛けられていたことも十分に考えられる。ちなみに、十六觀のうちの第五觀は宝池觀(極樂の宝の池を觀する)、第六觀は宝樓觀(極樂の宝の樓閣を觀する)で、さらに、第十四~十六觀は往生する衆生の

行状などが9段階に分けて描かれる「九品段」である。

3. 不比等邸を踏襲した観無量寿院

このように観無量寿堂がその名のとおり観無量寿院信仰に根ざした仏堂であったと考えると、観無量寿院が池を伴った仏堂という構成をとった理由がよくわかる。まさに、観経変に描かれる極楽浄土を具現しようとしたわけである。それでは、観無量寿院の池は三千代による観無量寿院建立の際に新設されたものであったのか。結論的に言うと、それは、不比等邸であった時代の園池を引き継いだものであったのだろう。「正倉院文書」には、不比等邸を踏襲した法華寺の中に「中嶋院」「外嶋院」という二つの写経所区画があったことが記されており、これらはその名称から園池を含む区画であったと考えられている。不比等邸の園池区画が観無量寿院となり、法華寺の時代におそらく「外嶋院」と呼ばれるようになって、最終的に阿弥陀浄土院となつた、これが私の考えるこの場所の履歴である。そして、不比等邸の時代から続く園池を引き継いだものと見れば、観無量寿院の池が観経変に描かれる極楽浄土の宝池のような幾何学的輪郭を持つものではない理由がわかる。不比等邸の園池が平城遷都と軌を一にして盛行する、唐起源の曲池・景石を基調とした宮廷・邸宅系のものであったからだ。観無量寿堂の建立にあたって、曲池から幾何学的輪郭を持つ池に改修することも不可能ではなかったかもしれない。しかし、不比等の時代からの池をあえて改修する必要性が感じられず、むしろ当時の最高の意匠を持つ園池の景色をよしとしたものと推測しておきたい。そして、観無量寿院から法華寺「外嶋院」に転用された敷地をさらに踏襲して造営された阿弥陀浄土院についても、建物は掘立柱から礎石建物へと新造したものの、園池については基本的に大きな改修は加えず引き継いだと考えてよいだろう。阿弥陀浄土院の造営は、皇太后の一周年忌斎会といふいわば国家的な事業であり、そこでも不比等邸以来の園池が残されたということ

になれば、このタイプの園池が極楽浄土を象徴するものという意識が明確にあったと解釈することもできる。

4. 日本における淨土庭園の嚆矢

ここまで、かなり大胆な推測を含めて、論を進めてきた。これが大きく外れていないとすれば、阿弥陀浄土院の前身たる観無量寿院こそが、仏堂と園池が相まって淨土を表現した屋外空間、すなわち淨土庭園の嚆矢と見ることも可能であろう。そして、重ねて強調しておきたいのは、観無量寿院あるいは阿弥陀浄土院の空間構成が阿弥陀仏の極楽浄土をイメージしたものであったこと、ならびにその園池デザインが奈良時代の宮廷・邸宅系のものであったことである。なぜなら、この2点が、平安時代以降の淨土庭園造営思想の底流となり、日本における淨土庭園を考える上で、見落とすことのできない論点と考えられるからである。

参考文献

- 1) 清野孝之ほか 「法華寺阿弥陀浄土院の調査」『奈良国立文化財研究所年報』2000・Ⅲ, 2000
- 2) 渡辺見宏 「阿弥陀浄土院と光明子追善事業」『奈良史学』18号, 2000
- 3) 東野治之 「橘夫人厨子と橘三千代の淨土信仰」『ミュージアム』565号, 2000
- 4) 岸俊男 「鳩稚考」『日本古代文物の研究』培書房, 1988
- 5) 加藤優 「『如意輪陀羅尼經』の跋語について」『石山寺の研究 深密藏聖教篇・下』法藏館, 1992
- 6) 中村元ほか編 「岩波仏教辞典(第二版)」岩波書店, 2002
- 7) 大西磨希子 「西方淨土變の研究」中央公論美術出版, 2007
- 8) 小野健吉 「淨土庭園の諸相」金子裕之編『古代庭園の思想』角川書店, 2002
- 9) 小野健吉 「日本庭園－空間の美的歴史」岩波書店, 2009

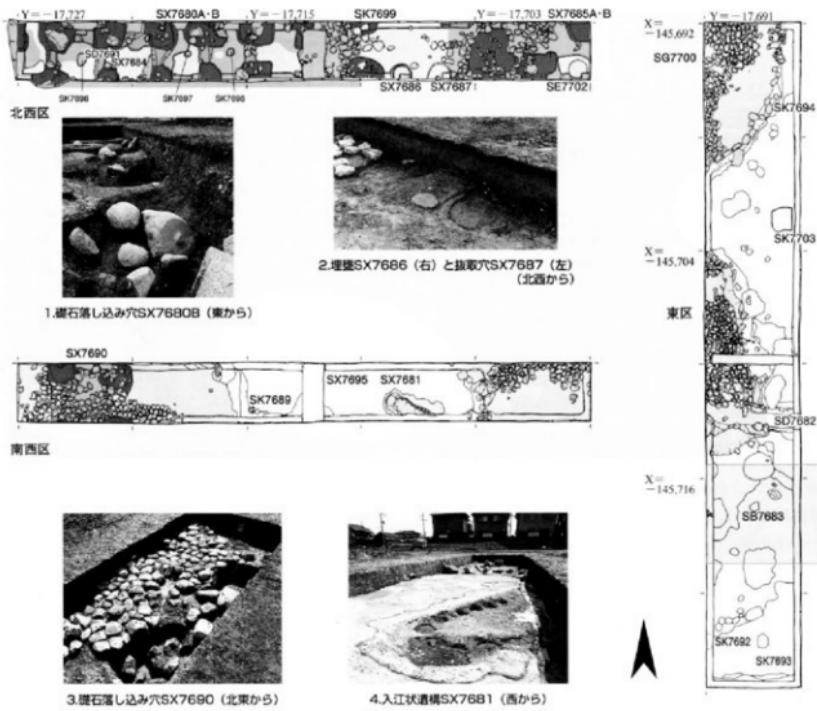


図-1 発掘調査平面図と主な遺構



図-2 発掘調査位置図

※本ページの図版は、「法華寺阿弥陀淨土院の調査」(『奈良国立文化財研究所年報』2000・Ⅲ、2000)による。)

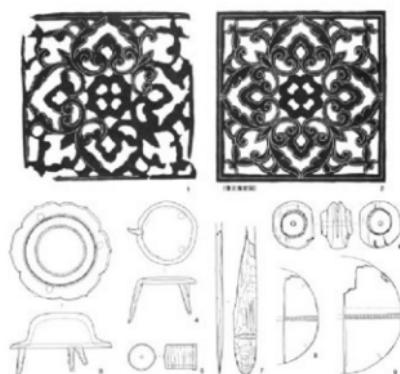


図-3 出土遺物

日本庭園の自然モチーフと表現／水の意味と形態

尼崎 博正

(京都造形芸術大学教授／日本庭園・歴史遺産研究センター長)

1. 日本庭園の自然モチーフと表現

日本の庭園は自然をモチーフとしてきた。『作庭記』が記すように、ことに平安時代にはその傾向が顕著で、滝や湧水から造水を経て池へと至る空間造形は「水の転生」に象徴される「自然の輪廻」の表現とみることができる。海の見立てとしての池には島が浮かべられ、砂浜の風景は州浜の手法で、荒磯は岩組で表現されたが、平泉の毛越寺庭園におけるその写実性の追求には驚くべきものがある。

毛越寺庭園の庭石は蛇紋岩と粘板岩である。両岩石とも付近には産出しないことから、その選択に作庭者の意図が働いていたと推察される。主たる景石での蛇紋岩は北上川を十キロほど遡った母体(もたい)付近から運ばれてきたもので、暗黄緑色の石肌が荘厳な雰囲気を演出していたとみられる(図-3)。

注目すべきは、荒磯の風景を象った築山(図-1)の水際に据えられている粘板岩である(図-4)。これらの粘板岩には穿孔貝であるカモメガイの巣穴(図-2)が検出されたことから、その生息地である三陸海岸で採集されたものであることが明らかになった。写実性を求めるあまり、荒磯を表現するにあたってモデルとした三陸海岸の波打ち際からわざわざ粘板岩を運んできた作庭者の拘りをここに読み取ることができる。このような施工段階における自然描写の緻密さは、自然に倣うという当時の庭園觀を如実に物語る典型例といえよう。

2. 水の意味と池の形態

水は神聖・清浄な空間をイメージさせ、あるいは結界性を示す媒体として受け止められてきた。また、生命の源であるがゆえに、輪廻転生の象徴とみなされていた可能性を鑑みれば、浄土世界を表現する重要な要素としての水(池)の役割を理解できよう。

また、初期の中国庭園は不老長生を希求する理想郷としての神仙世界の具現化であり、海の表現である池には仙人島が造形された。韓国の古代庭園を代表する新羅時代の雁鴨池も同様に、神仙思想にもとづく楽園という概念でつくられ、東海(日本海)を象徴する池には三仙島が浮かべられたと解釈されている。

このように東アジアでは、理想郷としての庭園に池がつくられてきたが、その形態はどこに由来するのであろうか。

敦煌の壁画に現存する浄土変相図等に描かれている池は矩形で、左右対称の楼閣建築の前面に仏の出現する「宝池」として存在する。その情景が生みだされたのは、浄土世界が經典として、あるいは絵画として表現される段階で、荘厳華麗なインドや中国の宮殿が重ね合わされた結果である推察される。理想郷は想像しうる最高のものでなくてはならず、布教という面からも、当時の支配者層の住空間を模すのが最も有利であったとみられるからである。

したがって日本の浄土庭園においては方形の池が採用されず、写実的な自然表現を基調とした曲線の池など、貴族の邸宅である寝殿造庭園の様式を踏襲しているのは当然の帰結といえよう。すなわち、理

念から造形への具現化は、それぞれの地域の自然的・文化的な風土と複合的に融合しつつ、かつ世俗とのバランスのなかで実現されていったものと考えられる。

3. 複層する空間原理

「山越阿弥陀図」などにみられるように、浄土思想が普及する過程で自然の山と庭園との視覚的な結合が行われ、その典型的な例が、空間構成の中軸線上に金剛山を望む平泉の無量光院跡であるとされる。来迎阿弥陀との関係も指摘される山中浄土の思想がどの段階で生まれたのかの検証は今後の課題だが、いずれにせよ、その根底には古来から受け継がれてきた自然崇拜との融合があったと考えるのが妥当であろう。

日本古来の自然崇拜が、神の依り代としての巨岩・

巨木信仰、神体山、そして熊野三山をはじめとする密教系の修験道などといった山岳信仰へと展開

していくなかで、それらは神仏習合と相まって淨土思想にも大きな影響を与えたにちがいない。このように複層する思想・宗教の状況こそ日本文化の特徴といえるからである。

他方では、浄土思想の高揚期に成立した『作庭記』には中国の古代思想、とくに水流の方向などに陰陽五行説の原理を見てとれるという説がある。また、李氏朝鮮時代の韓国庭園でも陰陽五行説に基づく円島方池がつくられる傾向にあったとされる。この陰陽五行説が森羅万象を理論化したものであると解釈すれば、具象的表現であれ、抽象的表現であれ、いずれの時代、いずれの国の庭園においても、その理想世界としての本質が自然への畏敬の念、あるいは憧憬にあったといえるのではないだろうか。



図-1 荒磯の風景を象った築山



図-2 粘板岩に観察される
カモメガイの巣穴

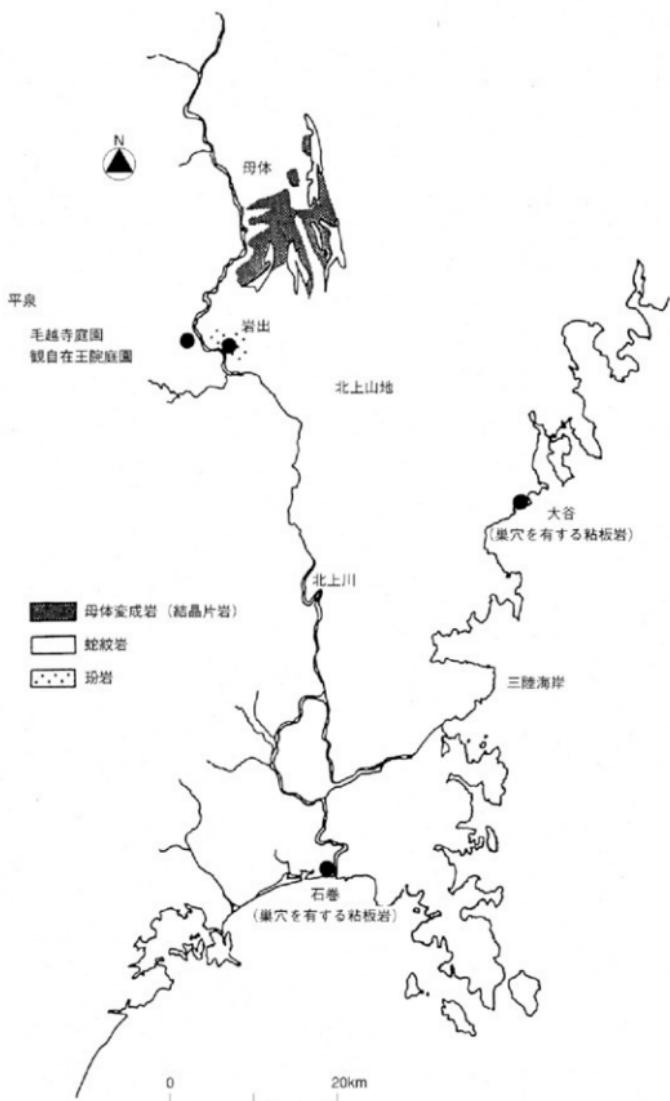


図-3 毛越寺庭園・觀自在王院庭園の主な庭石の採集地
 尼崎博正：『庭石と水の由来－日本庭園の石質と水系』(2002年 昭和堂)より

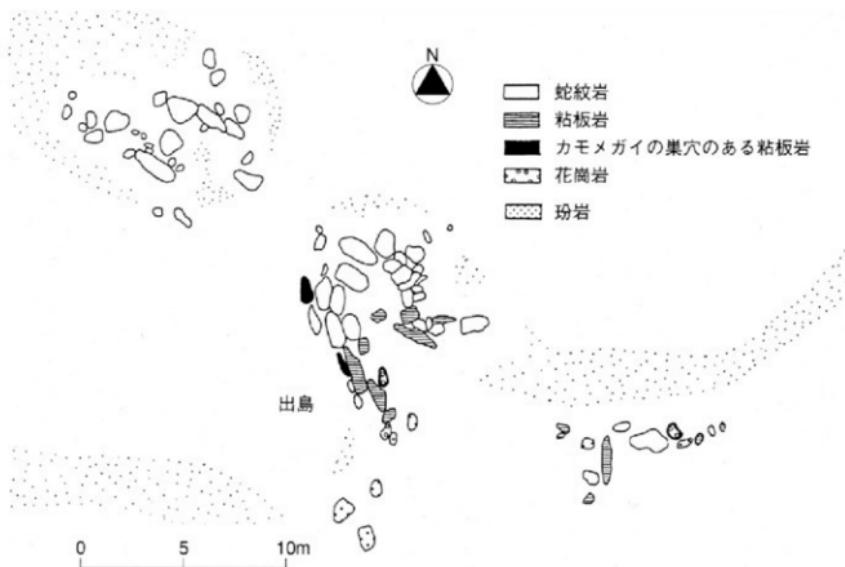
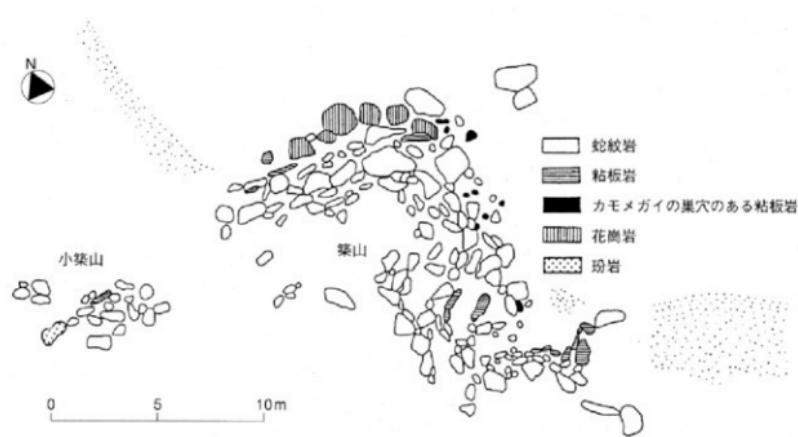


図-4 毛越寺庭園 築山石組(上)と出島石組(下)の石質分類図
尼崎博正:『庭石と水の由来 -日本庭園の石質と水系』(2002年 昭和堂)より

浄土庭園の事例と定義をめぐる考察

仲 隆裕

(京都造形芸術大学教授)

1. 奈良時代の浄土庭園と平安時代の 浄土庭園

「厭離穢土 欣求淨土」という言葉で簡潔に示される浄土思想は、すでに仏教伝来とともに日本に伝わっていた。この思想が寺院の建物と一体となって庭園に表現されたものを「浄土庭園」と呼んでいる。この呼称は戦後に定着した比較的新しい用語である。

奈良時代にすでに法華寺阿弥陀浄土院において、阿弥陀堂の前面に蓮池を開き、仏の清浄常樂の国土を表現しようとした事例がみられる。しかし浄土庭園が盛行するのは平安時代の京都においてであり、末法思想が高まる中期以降、王朝貴族は特に阿弥陀仏に救いを求める、数多くの仏堂が建立されるなかで浄土庭園がつくられるようになったとみられる。

奈良時代と平安時代の浄土思想の相違点は、奈良時代においては死者への追善に重点が置かれていたことに対し、平安時代は自身の浄土への往生を希求するところにあったと考えられている。

2. 浄土庭園と阿弥陀如来

大乗思想においては、十法界に存在する諸仏のいずれにも仏国土が想定されている。「浄土庭園」は一般的に「極樂淨土をこの世に再現すべく、阿弥陀堂と園池とを一体的に築造した仏寺の庭園様式」(『岩波日本庭園辞典』)と定義されるが、より広義にとらえれば阿弥陀堂の前池のみには限定されない。积迦の「蜜嚴淨土」や薬師如来の「淨瑠璃淨土」なども存在するのであり、たとえば淨瑠璃寺庭園は園池の東側に建つ三重塔に薬師如来が、西側に阿弥陀堂が

建ち、両者の浄土を表現していると捉えられる。毛越寺では現在仏殿は失われているが、園池北岸の金堂(円隆寺)には薬師如来が祀られていた。

平安時代中期以降の浄土庭園の盛行は、藤原道長が寛仁4年(1020)に造営した無量寿院阿弥陀堂に始まる。西方の彼方に位置するという阿弥陀淨土をこの世にあらわそうとしたもので、九体阿弥陀如来を本尊とする阿弥陀堂が東向きに建てられ、その前面に中島を持つ園池が開かれた。のち園池の北には金堂・五大堂、東には薬師堂など諸堂が建ち並び、病氣平癒や藤原摶閑家の安泰という現世利益をも祈願する一大伽藍となり、名も法成寺と改められる。しかし道長が臨終の時を迎えたのは阿弥陀堂においてであり、阿弥陀如来に導かれて浄土に往生することを念じた。

道長は若い時から寺院への参詣もたびたびで、祖先の供養のために淨妙寺を建立するなど仏教への信仰も篤かった。その晩年は特に阿弥陀仏信仰に傾倒し、臨終行儀も源信のあらわした『往生要集』に沿って行われた。道長の曾祖父・藤原忠平の日記『貞信公記』には興福寺の『觀無量壽經』の九品往生段を題材とした『九品往生圖』を模写させた、との記事がある。九品來迎図は極樂往生を願う者の臨終に阿弥陀如来が菩薩聖衆を從えて迎えに現れる情景を描いたものである。これを実際の阿弥陀堂・庭園によって三次元化しようとしたものが無量寿院であったと考えられる。なお、九体阿弥陀堂は記録上三十数例確認されているが、現存する事例は淨瑠璃寺(京都府木津川市加茂)一例のみである。

国家鎮護と自身の極樂淨土への往生を願った藤原道長の法成寺は大規模な「臨池式伽藍」であった。一

方、頼通の造営した平等院は道長の宇治別業を施入したもので、阿弥陀堂を主体とする比較的小規模ながら、園池の中島上に阿弥陀堂が建つという斬新な配置計画をみせる事例である。杉本氏の報告は、平等院においていかに立地を活かして阿弥陀淨土の世界が現出されたかを詳細に分析している。興味深いことは、当初は頼通の極楽への往生を希求する空間であった平等院が、のちには頼通の追善の空間としても供養されていることである。

鎌倉時代以降、武家によって營まれた浄土庭園は再び追善が重要なテーマとなっていくことと関連するかもしれない。

3. 平泉の浄土庭園群の特徴

浄土庭園は京都から全国へと波及していくが、佐藤氏の報告によれば、平安時代中期以降京都で個々に展開した浄土庭園の特徴すべてが、平泉においては都市全体に計画的に配置され、奥州藤原氏の政治的理想を具現化する形となっているといふ。

毛越寺は法成寺対抗して白河上皇が造営した法勝寺をモデルとした大伽藍で、金堂(円隆寺)の南に広がる園池、東北から蛇行して池に注ぐ造水は寂殿造庭園の典型的手法を踏襲している。これは「法成寺型」の浄土庭園といえよう。ただし毛越寺には阿弥陀堂を欠くのであるが、それは三代秀衡の無量光院として平等院をモデルに造営されているとみられる。そして「中尊寺建立供養願文」にみられるように、平泉の浄土庭園群のはじまりといえる中尊寺は初代清衡によって「國家鎮護」の寺院として造営されているのである。

この平泉の浄土庭園群の歴史文化的価値としては、鎌倉の都市づくりに影響を与えたという点も評価されてよいだろう。

4. 東国の浄土庭園と室町時代への展開

奥州藤原氏を攻め滅ぼし、鎌倉幕府をひらいた源頼朝は文治5年(1189)、鎌倉に戦没者の極楽往生と自らの安穏を願って永福寺を建立するが、そこには二階堂・阿弥陀堂・薬師堂の3つの仏堂が立ち並び、前面に広大な浄土庭園が營まれていた。頼朝は平泉の浄土伽藍に感銘を受けたようで、『吾妻鏡』によれば二階堂の仏後壇は円隆寺を模写したものといい、建築や庭園の配置にも平泉の影響が多く見られる。

頼朝の奥州征伐の戦勝祈願のために北条時政が建立したと伝える願成就院(静岡県蘿山)にも浄土庭園があったと推定されているが詳細は不明である。足利氏の本貫地である栃木県足利市にある権崎寺(権崎八幡宮)は、源氏一族である足利義兼が奥州征伐の戦勝を祈願し、帰國後伽藍を本格的に整備した寺院であり、大規模な浄土庭園の存在が発掘調査で確認されている。近年史跡に指定され、庭園の復元整備が進められつつある。そのほか、平泉の浄土庭園に影響を受けたと考えられる東国の浄土庭園についても、近年研究が進展しつつある。

戦闘による死者を追善供養する場としての浄土庭園は、室町時代(南北朝時代)にも營まれている。室町幕府を開いた足利尊氏は後醍醐上皇の鎮魂のために天童寺を造営し、嵐山を背景として仏殿西側に園池を營んだ。その庭園を作庭した夢窓穂石は西芳寺において浄土庭園と枯山水を併置する新様式を創出する。このように室町時代には桙宗寺院に浄土庭園が組み込まれ、さらに西園寺北山第、足利義満の北山殿、足利義政の東山殿などにおいて新しい形態と意匠を見せることになる。

このような新しい流れの中で、「法成寺型」の浄土庭園は金沢貞顕が元亨3年(1323)に完成させた称名寺庭園(下図)がおよそ最後の事例となるようである(村岡正『史跡称名寺境内庭園苑池保存整備報告書』、1988年)。

III. 資 料

III. 資 料

「東アジアにおける理想郷と庭園 に関する国際研究会」について

はじめに 「東アジアにおける理想郷と庭園に関する国際研究会」(以下、「国際研究会」という。)は、奈良文化財研究所及び文化庁の主催の下に、奈良文化財研究所文化遺産部を事務局として、平成21年(2009)5月19日から21日までの3日間にわたり、平城宮跡資料館小講堂において開催された。

この専門家会合では、東アジアの庭園史に関する重要な知見を共有するとともに、日本の「浄土庭園」をめぐるさまざまな見地からの検討を通じて、その本質に備わる顯著な普遍的価値を明らかにしたのみならず、東アジアの庭園史に関する包括的な研究において重要な一步を標したと言える。

以下には、このような国際研究会に関して、開催の背景や趣旨、経過と成果の一部に関する概要を記し、今後の更なる研究の方向性を検討したい。

開催の背景と趣旨 奈良文化財研究所では、独立行政法人化後の中期計画に示された「古代都城遺跡に関する庭園の調査研究」において、平成13年度(FY2001)以来、「古代庭園に関する調査研究会」を開催してきた。現在、第Ⅱ期として平安時代(8世紀末～12世紀末)を中心とした庭園に関する研究をテーマとしており、平成18年度(FY2006)から、宫廷の庭園、貴族邸宅の庭園などについて検討してきた。

平安時代の庭園を検討する上で、残された検討課題のうちでも、日本において10世紀から14世紀にかけて特異的に造営された「浄土庭園」の本質を見極めることが重要であった。そして、その本質を検討するためには、中国大陆及び朝鮮半島(韓半島)を通じてもたらされた理想郷の思想と庭園の空間構成に与えた影響、また、中国大陆や朝鮮半島(韓半島)における表現の類似点や相違点など、その発展の系譜について検討することが不可欠であったのである。

一方、日本を代表する浄土庭園である平等院庭園(世界文化遺産「古都京都の文化財」(京都市・宇治市・

大津市)の構成資産)や、「平泉の文化遺産」(日本の世界遺産暫定一覧表登載資産の一つ)に見られる傑出した浄土庭園群など、検討の中心となるべき事例は、日本における世界遺産の取組とも関連が深い。

そのため、平成21年度(FY2009)の「古代庭園に関する調査研究会」においては、文化庁と協力・連携し、日本国内のみならず中国・韓国からも建築史・庭園史の専門家を招いて、東アジアにおける理想郷と庭園の系譜や特質を検討し、それぞれの事例の比較研究を通じて、日本の「浄土庭園」の本質、あるいは、その極めて重要な到達点を示している「平泉の浄土庭園群」の世界的見地からの価値などについて検討を行った。
国際研究会の組立と経過 国際研究会では、田中哲雄(前・東北芸術工科大学教授)議長の下、中国・韓国からの専門家2名と日本国内の専門家5名の、8名で円卓を構成した。また、平等院庭園及び平泉の浄土庭園群に関する詳細な情報提供のための地元専門家のほか、日本イコモス国内委員会、平泉に関する専門家その他の関係者、そして、田辺征夫所長をはじめとする奈良文化財研究所の研究員、計35名の出席を得た。開催に当たっては、2日間にわたる講演と報告、コメント、質疑応答によって議論に不可欠な情報を共有した後、3つの議論を重ねることによって検討を深めた。

なお、開催に当たっては、講演・報告・コメントについてそれぞれ日本語、中国語又はハングルで参照すべき資料を作成して、それらを事務局が取りまとめるとともに英語訳を準備した。さらに、会議における作業言語を日本語として、中国語及びハングルと日本語の間でそれぞれ2名、計4名の通訳者と1名の通訳コーディネーターを配置した。これら、翻訳・通訳については、株式会社コングレに委託した。その組立と論点の概要は以下のとおりである。

最初に、田辺征夫(奈良文化財研究所長)による開会の後、円卓を構成する専門家の1人でもあった小野健吉(文化遺産部長)からは、国際研究会の趣旨説明、そして、田中哲雄議長からは、今回の検討における方向性に関する問題提起が示された。

そして、講演・報告・コメントが以下の標題と順番で行われた。講演Ⅰ「『理想郷』としての日本庭園の意匠と技術」(本中眞：文化庁文化財部主任文化財調査官)と講演Ⅰに対するコメント(尼崎博正：京都造形芸術大学教授)、報告Ⅰ「宇治に築かれた西方淨土への憧れ～平等院庭園～」(杉本宏：宇治市歴史まちづくり推進課文化財保護係長)及び報告Ⅱ「奥州に夢見た理想郷と庭園群～平泉の淨土庭園群～」(佐藤嘉広：岩手県教育委員会生涯学習文化課主任主査)と報告Ⅰ・Ⅱに対するコメント(仲隆裕：京都造形芸術大学教授)、講演Ⅱ「古代中国における庭園の発展および淨土と淨土庭園」(呂舟 LU Zhou：清华大学教授、中華人民共和国)、講演Ⅲ「樂園を象徴する韓国の古庭園、雁鴨池庭園」(洪光杓 HONG Kwang-Pyo：東國大學校教授、大韓民国)、講演Ⅳ「中國庭園の初期的風格と日本古代庭園」(田中淡：京都大学人文科学研究所教授)。

そして、これらに基づき、「人と自然－表現としての庭園」、「庭園における池－その意味の変遷」、「理想郷と庭園－東アジアにおける表現の本質と多様性」をテーマとして、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの3つのセッションで、それぞれ2時間余り討論を行った。なお、討論Ⅰ・Ⅱにおいては会場全体を含めて議論し、討論Ⅲにおいては円卓で検討し結論を取りまとめた。

2日目に行われた討論Ⅰ・Ⅱにおいて主に重点を置いて検討された論点は、その順番に、「庭園文化の基層を成す人と自然の関わり」、「庭園文化の伝播と発展」、「東アジアにおける庭園の表現」、「東アジアの庭園における池の意味」、「淨土の画像における池」、「淨土庭園における池と堂舎との関係」、「日本に展開した淨土庭園の特異性・希少性」、「平泉の淨土庭園群の代表性・典型性」であった。

3日目の討論Ⅲにおいては、これらの成果を踏まえて準備された結論に関する案文について具体的な用語や表現の取扱いを含めて検討が行われた。

国際研究会の成果 討論Ⅲにおいて検討については、「『東アジアにおける理想郷と庭園に関する国際

研究会』の成果について」とする文書にとりまとめられた。その構成は、「1. 目的」、「2. 論点」、「3. 結論」、「4. 主な参加者」である。

「3. 結論」では、東アジアにおける庭園を「中国から朝鮮半島及び日本へと作庭思想が伝わる過程で、各々の地域に固有の自然観とも融合しつつ、独自の発展過程を経て各国に固有の庭園文化として定着した結果、形成された文化的な資産である。」として、特に日本において形成された庭園とその文化に、仏の淨土世界を理想郷とみなし、それを具現する独特の「淨土庭園」(Pure Land Garden)の様式が含まれることに着目し、それらが有する顕著な普遍的価値を正当に評価するため十分考慮すべき3つの観点についてとりまとめた。

すなわち、最初に、国際研究会の検討において明らかにされた「淨土庭園」の定義を示し、次に、現時点では、中国ではそのような「淨土庭園」に関する遺構は確認されていないこと、また、韓国では淨土世界を表現した仏国寺の九品蓮池のような事例は見られるものの、「淨土庭園」の盛行した形跡が認められていないことが示された。そして、平等院庭園など数々の事例が示すように、日本において盛行した「淨土庭園」の中でも、平泉に見られる一群の「淨土庭園」は、その発展過程において最も典型的かつ代表的な事例として認められることが示された。

おわりに 今回開催した国際研究会では、日本における古代の庭園史において最も重要な主題のひとつである「淨土庭園」について、東アジアという広い文脈の中で検討を行い、調査研究を進めて行く上でも極めて重要な成果を挙げることが出来たと言える。特に日本における古代の庭園史に関する検討においては、アジア大陸からの種々の影響と伝播の過程を明らかにすることが極めて重要であり、この度の成果が、アジア諸国における原初的な庭園の歴史に関する調査研究をより一層発展させ、ひいては、更にアジアの庭園史を世界の庭園史の中に緊密なる繋がりを以て位置づける一助となれば幸いである。

(平澤毅／奈良文化財研究所)

1. 開催概要

(1) 名称

東アジアにおける理想郷と庭園に関する国際研究会

(2) 開催趣旨

奈良文化財研究所では、中期計画に示された古代都城遺跡に関連する庭園の調査研究において、平成13年度(FY2001)以来「古代庭園に関する調査研究会」を開催してきた。現在、第Ⅱ期として平安時代(8世紀末～12世紀末)を中心とした庭園をテーマとしており、平成18年度(FY2006)から、宮廷の庭園、貴族邸宅の庭園などについて検討してきた。

平安時代の庭園を考える上で検討するべき重要な課題のうちでも、日本において11世紀から14世紀にかけて特異的に造営された「淨土庭園」の本質を見極めることが重要である。そして、その系譜を検討するためには、中国大陆及び朝鮮半島を通じてもたらされた理想郷の思想と庭園の空間構成、そして、それらが日本における淨土庭園の成立と発展に与えた影響、あるいは、中国大陆や朝鮮半島における表現の類似点や相違点などについて検討することが不可欠である。

一方、日本を代表する淨土庭園である平等院庭園(世界文化遺産「古都京都の文化財(京都市・宇治市・大津市)」の構成資産)や、「平泉の文化遺産」(日本の世界遺産暫定一覧表登載資産の一つ)の傑出した淨土庭園群など、検討の中心となるべき事例は世界遺産の取組とも関連が深い。

そのため、平成21年度(FY2009)の「古代庭園に関する調査研究会」においては、文化庁と協力・連携し、日本国内のみならず中国・韓国からも建築史・庭園史の専門家を招いて、理想郷と庭園の系譜・特質を検討し、それぞれの事例の比較研究を通じて、日本の淨土庭園の本質、あるいは、その極致とも言うべき「平泉の淨土庭園群」の世界的見地からの価値などについて検討を行う。

(3) 主催

独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所、文化庁

(4) 開催期日

平成21年(2009)5月19日(火)から5月21日(木)の3日間

(5) 開催場所

平城宮跡資料館 小講堂 (奈良県奈良市佐紀町)

(6) 開催日程

平成21年5月19日(火) 10:00 ~ 17:45

- 午前： (1)開会挨拶 田辺 征夫 (奈良文化財研究所長)
(2)出席者紹介・日程等説明 [事務局]
(3)開催趣旨等 小野 健吉 (奈良文化財研究所文化遺産部長)
(4)問題提起 田中 哲雄 (議長)
(5)講演 I 本中 真 「理想郷」としての日本庭園の意匠と技術
(6)コメント I 尼崎 博正
(7)質疑応答 I

昼食・休憩等 12:05 ~ 13:30

- 午後： (8)報告 I 杉本 宏 宇治に築かれた西方浄土への憧れ ～平等院庭園～
(9)報告 II 佐藤 嘉広 奥州に夢見た理想郷と庭園群 ～平泉の浄土庭園群～
(10)コメント II 仲 隆裕
(11)質疑応答 II
準備・休憩等 14:45 ~ 14:55
(12)講演 II 呂 舟 古代中国における庭園の発展および浄土と浄土庭園
(13)質疑応答 III
準備・休憩等 16:15 ~ 16:25
(14)講演 III 洪 光杓 樂園を象徴する韓国の古庭園、雁鴨池庭園
(15)質疑応答 IV

レセプション 16:15 ~ 16:25

平成21年5月20日(水) 9:30 ~ 16:30

- 午前： (16)講演 IV 田中 淡 中国庭園の初期的風格と日本古代庭園
(17)質疑応答 V
準備・休憩等 10:30 ~ 10:50
(18)討論 I
昼食・休憩等 12:50 ~ 14:30
午後： (19)討論 II

平成21年5月21日(木) 14:00 ~ 16:00

- 午後： (20)討論 III
(21)閉会挨拶 小野 健吉 (奈良文化財研究所文化遺産部長)

2. 出席者

(1) 円卓

- 田中 哲雄（議長：前・東北芸術工科大学教授）【日本庭園史・遺跡庭園・遺跡整備】
田中 淡（副議長：京都大学人文科学研究所教授）【中国建築史・中国庭園史】
本中 真（文化庁記念物課主任文化財調査官）【日本庭園史】
呂 舟（Dr. Lu Zhou／中華人民共和国・清華大学教授）【中国建築史】
洪 光杓（Dr. Hong Kwang-Pyo／大韓民国・東國大學校教授）【韓国庭園史】
尼崎 博正（京都造形芸術大学教授／日本庭園・歴史遺産研究センター長）【日本庭園史】
仲 隆裕（京都造形芸術大学教授）【日本庭園史】
小野 健吉（奈良文化財研究所文化遺産部長）【日本庭園史】

(2) 情報提供者

- 杉本 宏（宇治市歴史まちづくり推進課文化財保護係長）【日本考古学・遺跡庭園】
佐藤 嘉広（岩手県教育委員会生涯学習文化課主任主査）【日本考古学】

(3) 文化庁

- 三谷 卓也（文化庁文化財部記念物課世界文化遺産室長）

(4) 日本イコモス国内委員会

- 杉尾伸太郎（日本イコモス国内委員会副委員長）

(5) 岩手県、「平泉」関係者等

- 大矢 邦宣（盛岡大学教授）
工藤 雅樹（福島大学名誉教授）
前川 佳代（奈良女子大学博士研究員）
藤里 明久（毛越寺執事長）
中村 英俊（岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課文化財世界遺産課長）
佐藤 淳一（岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課世界遺産担当文化財専門員）
櫻井 友梓（岩手県教育委員会平泉遺跡群調査事務所柳之御所担当文化財調査員）
千葉 信胤（平泉町世界遺産推進室室長補佐）
大野 渉（ブレック研究所文化財保護研究センターワン）

(6) 事務局及び所長他、奈良文化財研究所の研究職員等

事務局：文化遺産部

- 平澤 殿（遺跡整備研究室長）
栗野 隆（遺跡整備研究室研究員）
清水 重教（景観研究室長）
恵谷 浩子（景観研究室研究員）
田辺 征夫（奈良文化財研究所所長）
肥塚 隆保（奈良文化財研究所副所長／企画調整部長）
高瀬 要一（文化遺産部客員研究員）
島田 敏男（文化遺産部建造物研究室長）
吉川 聰（文化遺産部歴史研究室長）
高橋知奈津（都城発掘調査部遺構研究室研究員）
今井 晃樹（都城発掘調査部主任研究員）
丹羽 崇史（企画調整部展示企画室研究員）
高田 貢太（都城発掘調査部考古第三研究室研究員）
青木 敏（都城発掘調査部考古第一研究室研究員）

(7) 通訳

株式会社コングレ

3. 開会・質疑応答・討論・閉会の記録

1. 開会(平成21年5月19日)	112
2. 質疑応答(平成21年5月19日及び20日)	119
● 本中眞氏の講演及び尼崎博正氏のコメントに対する質疑応答	119
● 杉本宏氏及び佐藤嘉広氏の報告並びに仲隆裕氏のコメントに対する質疑応答	120
● 呂舟氏の講演に対する質疑応答	122
● 洪光杓氏の講演に対する質疑応答	123
● 田中淡氏の講演に対する質疑応答	125
3. 討論－1(平成21年5月20日)	127
■ 庭園文化の基層を成す人と自然の関わり	127
■ 庭園文化の伝播と発展	130
■ 東アジアにおける庭園の表現	131
4. 討論－2(平成21年5月20日)	135
■ 東アジアの庭園における池の意味	135
■ 净土の画像における池	138
■ 净土庭園における池と堂舎の関係	140
■ 日本に展開した淨土庭園の特異性・希少性	142
■ 平泉の淨土庭園群の代表性・典型性	144
5. 討論－3(平成21年5月21日)	146
■ 結論文案に関する説明	146
■ 結論に関する議論	148
■ 最終コメント	154
6. 閉会(平成21年5月21日)	155

「東アジアにおける理想郷と庭園に関する国際研究会」の記録

平成21年5月19日(火)～21日(木)

1. 開会(5月19日)

【平澤】 皆様、おはようございます。

本日は公私ご多忙の中、また遠路はるばるお越しいただきまして、まことにありがとうございます。ただいまより、「東アジアにおける理想郷と庭園に関する国際研究会」を開催いたします。

はじめに、当研究所の所長、田辺征夫から歓迎と開会のご挨拶を申し上げます。

【田辺】 本日は「東アジアにおける理想郷と庭園に関する国際研究会」のご案内を差し上げましたところ、基調報告をいただく先生、事例報告をいただく先生はじめ、多数の関係者の方、大変ご多忙の中お集まりいただきまして、ありがとうございます。とりわけ、中国からは清华大学の呂舟先生、それから韓国からは東國大學校の洪光杓先生、大変遠いところおいでいただきましたこと、厚く御礼申し上げます。

私たちの奈良文化財研究所では、平成13年度(FY2001)から「古代庭園に関する調査研究」を継続して行っています。この調査研究においては、日本において庭園の源流を示す遺構が窺われる古墳時代の事例などから検討を始め、先史の縄文時代、弥生時代、飛鳥時代、奈良時代と時代を下って研究を進めてきております。その一貫として、いよいよこの日本庭園史の中で非常に重要な位置を占める「浄土庭園」について検討する段階になりました。



「浄土庭園」は、浄土世界の表現を企図した浄土式伽藍を有する庭園で、9世紀の平安時代から12世紀の鎌倉時代にかけて数多くつくれました。この度、その代表的な事例である宇治の平等院や平泉の無量光院、毛越寺など、日本における世界遺産の取組とも関連が深いことから、文化庁との共催でこの国際研究会を開催することになったわけです。

この「浄土庭園」は、日本庭園史の中で非常に大きな位置を占めておりまして、京都をはじめ、平泉、鎌倉に、日本庭園としても幾つかの傑出した事例が見られますので、日本人にはすぐに頭の中に浮かびますし、その大切さという点はとても直感的に理解されるものです。しかし、こういったことを世界の方々にご理解いただくのはなかなか難しいという側面もあって、東アジアを中心とした世界史的な観点の中でこの「浄土庭園」がどのように理解され、位置づけられるのかということについて、中国、韓国からの専門家も交え、日本国内から庭園の研究を専門とされている先生方にお集まりいただきて、そうした議論を十分に深めるというのが、この研究会の最大の趣旨と考えます。

私も若い頃から、京都の庭園が好きで、しばしば見に行ったりしていますので、庭園といえば、いわゆる浄土庭園的なものも普段から頭の中にはありました。そのような庭園にも関連して最近少し気になっておりますのが、ここ奈良の平城宮東院庭園の東側に法華寺の「阿弥陀浄土院」の存在です。すなわち、奈良時代の天平宝字5年(761)につくられたこの「阿弥陀浄土院」にも庭園遺構が確認されていますが、そのような庭園がこの「浄土庭園」の文脈の中でどのような関係を有するかということです。そのようなことからも、この奈良文化財研究所において、「浄土庭園」に関連する検討が深められるのは大変意義深いことだと思います。

最近、発掘調査によって、唐長安城大明宮の苑池であっ

た中国西安市太液池、あるいは、韓国慶州市龍江洞苑池など、東アジアにおける古代庭園の重要な事例が発見され、調査研究が進められています。奈良文化財研究所では、この十数年来、中国社会科学院考古研究所や国立慶州文化財研究所などとの共同調査研究を進めてきております。そのような取組とも関連して、また、近年の中国や韓国における古代庭園構造の極めて重要な調査成果を踏まえ、平成17年(2005)には当研究所の飛鳥資料館において特別展「東アジアの古代苑池」を開催いたしました。

そうしたことも含め、庭園の歴史を通じた中国、韓国、日本との繋がりを検討することは大変興味深く、この機会に一層議論を深めていただければ大変ありがたく思います。

【平澤】 次に、ご講演、ご報告等のためにご出席いただいている先生方のご紹介をしたいと存じます。今回の国際研究会において、ご講演、ご報告いただく先生方をはじめとして、円卓会議の形式をとらせていただいています。議長から順次ご紹介してまいりたいと思います。

初めに、この研究会の議長を務めていただきます、田中哲雄先生です。田中哲雄先生は、日本庭園史のはか、遺跡庭園、遺跡整備をご専門とされ、当研究所の改組前の奈良国立文化財研究所の研究員、それから文化庁記念物課の主任文化財調査官などを経まして、この3月まで東北芸術工科大学の教授でいらっしゃいました。著書等に『発掘された庭園』『庭園と茶室』、『城の石垣と堀』、『古代庭園の立地と意匠』などがございます。どうぞよろしくお願ひいたします。

次に、副議長を務めさせていただきます田中淡先生です。田中淡先生は、中国建築史、中国庭園史、中国技術史をご専門とされ、文化庁文化財保護部建造物課文部技官、中国南京工学院建築研究所客員研究員などを経られまして、現在、京都大学人文科学研究所の教授でいらっしゃいます。また、ドイツのハイデルベルグ大学、それから台湾大学でそれぞれ客員教授を歴任されておられます。著書等に、『中国建築史の研究』、『中国古代造園史料集成』、『中国技術史の研究』などがございます。田中先生、よろしくお願ひいたします。

次に、中国からご出席いただきました呂舟(ル・ズウ)



先生です。呂舟先生は中国建築史、中国庭園史をご専門とされ、イクロムの評議員、それから中国イコモス国内委員会副委員長、中国世界遺産専門委員会副委員長などを歴任され、現在、清华大学の教授でいらっしゃいます。また、世界文化遺産に登録されている紫禁城の周辺の歴史地区の保存や、文化的観光に関する調査研究のほか、避暑山荘、ラサのボタラ宮歴史地区など、数多くの歴史遺産の保全計画に取り組まれてございます。著書等に『清朝の建築規制に関する研究』、『中国文化財保存の歴史・遺跡の保全』、『文化的観光と文化遺産の保全』などがございます。呂先生、よろしくお願ひいたします。

次に、韓国からご出席いただきました洪光杓(ホン・カンビョウ)先生です。洪光杓先生は韓国庭園史をご専門とされ、ソウル大学環境計画研究所主任研究員などを経られまして、現在東國大學校の教授でいらっしゃいます。ワシントン大学客員研究員、韓国伝統造形学会副会長などを歴任されまして、また韓国の文化財庁、文化財専門委員のほか、文化財、建築、都市計画に関する委員を多数歴任されておられます。著書等に『韓国の伝統造景』、『東洋造景史』、『韓国の伝統水景観』、『造景計画論』、『韓国庭園踏査手帳』などがございます。洪先生、よろしくお願ひいたします。

次に、本中真先生です。本中真先生は、日本庭園史をご専門とされ、議長の田中哲雄先生と同様に、奈良国立文化財研究所の研究員を経て、現在文化庁記念物課の主任文化財調査官でいらっしゃいます。遺跡整備や世界遺産、文化的景観などについても造詣が深い先生でいらっしゃいます。著書等に『日本古代の庭園と景観』、『借景』、『造園修景大事典』などがございます。本中先生、よろしく

くお願ひいたします。

次に、尼崎博正先生です。尼崎先生は日本庭園史をご専門とされ、京都芸術短期大学長、京都造形芸術大学副学長などを歴任されまして、現在、京都造形芸術大学教授でいらっしゃいます。また、現在、日本庭園・歴史遺産研究センターの所長でいらっしゃいますし、文化庁の文化審議会文化財分科会の名勝委員会の委員でもいらっしゃいます。その他、庭園や文化財に関する数多くの要職を務めいらっしゃいます。著書等に、「庭石と水の由来」「石と水の意匠」など多数ございます。尼崎先生、よろしくお願ひいたします。

次に、仲隆裕先生です。仲隆裕先生は千葉大学園芸学部助手、京都芸術短期大学助教授などを経られまして、現在、京都造形芸術大学教授でいらっしゃいます。日本庭園学会関西支部長のほか、庭園や文化財に関する数多くの委員などを務めいらっしゃいます。著書等に「平安京の庭園遺構」、「日本庭園の系譜」、「史跡名勝平等院庭園の整備」などがございます。仲先生、よろしくお願ひいたします。

最後に、当研究所文化遺産部長の小野健吉でございます。専門は日本庭園史で、奈良国立文化財研究所の研究員、文化庁記念物課の主任文化財調査官などを経て、この4月から当研究所の文化遺産部長となりました。著書等に「岩波日本庭園辞典」、「日本庭園－空間の美の歴史」、「発掘庭園資料」などがございます。

以上が円卓についていただく8名の先生方です。よろしくお願い申し上げます。



主な出席者（敬称略、＊印は円卓出席者）

上段：田中哲雄＊（議長）、田中淡＊（副議長）、呂舟＊（中国）、洪光杓＊（韓国）、本中眞＊

下段：尼崎博正＊、仲隆裕＊、小野健吉＊、杉本宏、佐藤嘉広

次に、この研究会での議論を充実するために事例のご報告をいただく2人の方をご紹介申し上げます。

まず、宇治の平等院庭園についてご報告いただく杉本宏さんです。杉本さんは、日本考古学、遺跡庭園をご専門とされまして、現在宇治市歴史まちづくり推進課の主幹を務めいらっしゃいます。杉本さん、よろしくお願ひいたします。

そして、平泉の淨土庭園群についてご報告いただく佐藤嘉広さんです。佐藤嘉広さんは、日本考古学をご専門とされ、現在、岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課主任主査を務めいらっしゃいます。佐藤さん、よろしくお願ひいたします。

以上、この研究会の議論の中心となられる先生方をご紹介しました。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

その他の出席者につきましては、お手元にお配りいたしました資料にその一覧、もしくは入口のところでお配りしました座席表に表示をしてございますので、ご参照ください。

さて、この研究会の事務局を務めさせていただく文化遺産部の私、平澤と申します。また、補佐の栗野でございます。どうぞよろしくお願ひいたします。開催中何かございましたら、何なりとお申しつけください。本日から明日の冒頭のご報告、ご講演の間につきましては、私のほうで司会進行を務めさせていただきます。よろしくお願ひします。

次に、日程について、ごく簡単にご説明させていただきます。既にご案内のとおり、この研究会は、本日から

3日間、この場所を会場に開催いたします。本日1日目はご講演とご報告、それからコメントをいただきます。あすの2日目は、午前9時半から冒頭に講演、その後2時間のディスカッションを2つ、午前と午後にかけて行います。明後日3日目は午後2時から3つ目のディスカッションを行いまして、午後4時過ぎを目途として終了したいと存じます。お手元に細かいプログラム、タイムテーブルございますので、詳しくはそちらをご参照ください。

資料については、時間の都合上、1つ1つご確認いたしませんけれども、不都合があれば、いつでも事務局までお申しいただければ幸いです。このうち、緑色の表紙の仮版本資料が、報告・講演の資料集になりますけれども、それぞれ日本語、中国語、ハングルの原文、先生方の原文を最初にしております。今回、日本語、英語への翻訳についてはこちらで手配させていただきましたので、現段階では基本的に仮訳とさせていただいております。

この国際研究会の成果につきましては、英語版、日本語版の報告書を作成したいと思っております。報告書編集段階で、また英語に翻訳した部分などについては当然精査いたしますけれども、特に英語の文章につきましては、レジュメ原稿をいただきました先生方におかれましては、会期中以降にも確認をしていただきまして、もし訂正すべき表現等ございましたら、電子メールなどでご連絡いただければ幸いです。よろしくお願ひいたします。

少し前置きが長くなりましたがけれども、それでは、本研究会の開催趣旨につきまして、当研究所小野健吉部長からご説明を申し上げます。

【小野】 開催趣旨等ということで、若干お時間をいただきますてご説明を申し上げます。先ほどの田辺所長の挨拶で主なところは大体述べられており、重複するところがあるかと思いますが、よろしくお付き合いいただきたく存じます。

奈良文化財研究所では、独立行政法人になりました平成13年度(FY2001)以降、文化遺産部において、古代庭園をテーマに研究を進めてまいりました。第1期の平成13年度(FY2001)から平成17年度(FY2005)については、奈良時代以前の庭園ということで、古墳時代以前から始まり、飛鳥時代、それから奈良時代、さらにその庭園での催し

としての曲水の宴といったことについて、研究を進めてまいりました。

第2期の平成18年度(FY2006)から平成22年度(FY2010)の5年間については、平安時代の庭園をテーマにしています。これまで文献資料、絵巻物などからうかがえる平安時代庭園の様相、あるいは発掘などからわかる貴族の住宅庭園の様相、さらには、天皇の専用の庭園である禁苑あるいは離宮といったものについての研究を進めてきて、4年目に当たります今年については、浄土庭園をテーマにさせていただいたわけです。

これまでの8年間にわたる研究会においては、日本国内の研究者だけによる議論だったわけですが、今回は、文化庁のご援助もいただきて、中国と韓国から専門の先生をお招きして、浄土世界を表現する庭園というものを中国、韓国、日本という東アジアの枠組み、観点から検討し、さらに平泉の浄土庭園群の評価についても議論をするということにいたしております。

この研究の中で、日本については、平安時代、すなわち10世紀から13世紀ごろの浄土庭園にスポットを当てる事になると思います。先ほど田辺所長の話にもありました奈良時代の阿弥陀浄土院等について、今回の研究会では、とりたてて話題にはしておりませんので、この場をおかりして、私のほうから奈良時代の寺院の庭園、平安時代の浄土庭園の前史とも言うべき奈良時代の寺院の庭園について、少しお時間をいただいて紹介し、あわせて私の考え方なども簡単に述べさせていただければと思います。

奈良時代の寺院の庭園で池を伴ったものとしては、現在も残っております興福寺の猿沢池、それから記録に残っ





ております大安寺の「池並びに丘」の池、さらに先ほどから話題になっております法華寺の阿弥陀浄土院が知られています。猿沢池については、皆さんよくご存じのとおり、中心伽藍の外側、南門から一段下がったところに位置しております。また、大安寺の池というのは、境内に杉山古墳という古墳があるわけすけれども、多分その古墳に伴う周濠であつただろうと考えられており、伽藍の中心部からは離れたところにあると考えられております。

これに対して、法華寺の阿弥陀浄土院については、寺院内の1つの区画の中で、仏堂と池が一体になった、いわば「臨池式伽藍」、すなわち、池に臨んだ伽藍、そういうふうな構成を持つ、確認されている奈良時代唯一のものであろうかと思います。場所は、平城宮の東院庭園のすぐ東隣ですので、明後日でも時間の空いたときにでもご覧になっていただければ幸いです。

ここで、阿弥陀浄土院の歴史について、簡単に触れておきますと、天平宝字5年(761)に光明皇太后、この人は奈良時代初期の実力のある政治家であった藤原不比等の娘であるとともに、聖武天皇の皇后でもあった方ですけれども、その光明皇太后が亡くなられた1周忌、1年後の

1周忌斎会のために、法華寺の一角に造営された寺院がこの阿弥陀浄土院です。言うまでもなく、本尊は阿弥陀如来です。

実は、10年ほど前に、奈良文化財研究所が阿弥陀浄土院の池の部分を発掘いたしました。そうしたところ、阿弥陀浄土院の池とともに、その池に先立つ前身造構も見つかり、同じような池であることが分かりました。すなわち、阿弥陀浄土院の池というのは、もともとあった池をつくりかえてできているということがわかったわけです。この阿弥陀浄土院の前身の池がどういうものかということですが、文献資料のほうからの研究によると、光明皇太后のお母さんであった県犬養橘三千代という方が觀無量寿堂というお堂を建てたという記録があり、これが現在の法華寺の一角にあったということが分かります。そうすると、池というのも觀無量寿堂という建物に伴つたものではないかということが推しはかられるわけです。

蛇足になりますが、「無量寿」という言葉は、「はかりしれない寿命を持つ」ということで、「無量寿仏」というのは、阿弥陀仏の別名、別称です。したがって、觀無量寿堂というのが觀無量寿經にちなんだ堂名、阿弥陀仏をまつ

る仏堂であったということは明らかではないかと思ひます。そもそも阿弥陀淨土院を含む法華寺の敷地というのは、光明皇太后のお父さんであるところの不比等の邸宅の跡であり、阿弥陀淨土院の池、あるいはその前の無量寿院の池も、おそらくは不比等の邸宅の庭園の池を踏襲したものであったのではないかと、私は考えております。

そうしますと、阿弥陀淨土院にせよ、觀無量寿院にせよ、邸宅の庭園をベースに、池の西側に阿弥陀仏を本尊とする仏堂を配し、全体として極楽淨土を具現しようとした、そういう試みではなかったかと考えているところです。阿弥陀淨土院については、立体的に三次元で淨土を表現しようとしたものであるということがうかがえる記録もあります。

こういうことを総合いたしますと、淨土庭園、一般的には平安時代以降のものと考えられますけれども、その起源というのをこのあたり、奈良時代にさかのぼることも可能ではないかと、私は個人的には考えているところです。

絵画等の画像との関係で言えば、中国の敦煌の壁画、あるいは日本にあるものとしては、當麻曼荼羅などに見られる、いわゆる「淨土変」、あるいは「觀經變」と呼ばれるような極楽淨土の画像、それでは建物と池がセットになっています。もちろん直線的な護岸ライン(輪郭)を持つ池ですけれども、建物と池がセットになっています。この阿弥陀様がいらっしゃるところの前に池がある、こういう構成が阿弥陀淨土院にせよ、觀無量寿院にせよ、仏堂と池という、それがセットになっている構成の基本的な考え方につながったのではないかと考えられるわけです。

以上のことまとめると、次の2点に留意しておく必要があるだろうと思います。

1つは、阿弥陀淨土院または觀無量寿院が、住宅庭園をベースにしているということです。これは、この後、杉本先生の話にも出てくる平安時代淨土庭園を代表する平等院についても、藤原頼通の住宅というか別荘の庭園をベースにしたものであるということに、ある意味通じる



のではないかと私は考えております。

さらにもう1つあるのは、これはやはり阿弥陀の西方極楽浄土という概念が浄土庭園の初めの段階から非常に強かったということです。したがって、浄土庭園を厳密にというか、狭い意味に定義するといたしますと、阿弥陀如来の極楽浄土というものを表現しようとした空間ということにならうかと思います。仏教においては、阿弥陀の極楽浄土のほかに、薬師の淨瑠璃浄土、あるいは觀音の靈山浄土、さらに觀音の補陀洛浄土など、十方の仏様に対する十方浄土というものが想定されているわけですが、浄土庭園成立の当初の段階では、あくまでも阿弥陀浄土が想定されていたということではないかと思っています。そして、その後、平安時代にさまざま形に展開していくいうことがあらうかと、私は考えております。

この後、様々な講演と報告の下に、本格的な議論に入るわけですけれども、理想郷としての庭園、さらにその到達点としての日本の浄土庭園、さらにその平泉の浄土庭園群ということの本質について、多角的かつ深く検討することができるだろうと考えております。

一専門家として、私個人的にも大変楽しみであるとともに、実り豊かな成果が生み出されることを、今の時点から確信をしております。3日間にわたりますが、お集まりの先生方、ご参集の皆様、よろしくお願ひしたいと思います。

【平澤】 それでは、次に、本研究会の議論で目指すべき検討の方向性などについて、田中哲雄議長から、ご提起いただきたいと存じます。よろしくお願ひいたします。



【田中(哲)】 この『東アジアの理想郷と庭園に関する国際研究会』における議論において、目指すべき方向性について少しお話させていただきます。

1つめは、東アジアの庭園というのはご存じのように自然を材料として、自然を造形するといいますか、人と自然のかかわりから創造された庭園と思想と技術というものがあります。それが中国大陆、朝鮮半島で形成されている。それが思想と結びついて理想郷という1つの庭園の様式を生み出したのだと思います。まず、その理想郷の庭園とはどういうものかという大きな背景について検討したいと思います。特に庭園の意匠の中で、文化的影響を受けて類似する部分もありますし、風土や歴史の違いなどによって、独自の表現となる場合もあると思います。庭園に表現された理想郷について、特に庭園の歴史の観点から把握していきたいと思います。

2つめに、浄土世界を理想とする庭園について、具体的にその構成について検討したいと思います。特に、立地について、それから、建造物と庭園の関係について、また、変相図に描かれた図面の中の浄土と、実際につくられた庭園に見られる違いといったようなものについて、検討できればと思います。さらには、機能について、浄土庭園の機能としてはどのようなことが考えられるかということを検討していきたいと思います。此岸と彼岸というように、あの世とこの世というような分け方もありますし、天道を使われたというような、そういう機能、それから、実際に浄土庭園で行われた儀式などにすることを視野に入れて検討する必要があるだと思います。

3つめには、そのような様々な検討を踏まえ、東アジア庭園文化史の中で、日本において「浄土庭園」と呼ばれる庭園がどのように位置づけられるのかを検討していきたいと思います。特に、日本における理想郷としての浄土庭園の代表的なものとして、群として残っている平泉の事例の独自性、代表性がどのように示されるのかということについて検討することによって、そのようなことを検討していきたいと思います。

かなり難しい課題とも思いますが、皆さん方のご協力の下で、有意義な成果を導き出したいと思いますので、よろしくお願ひいたします。

2. 質疑応答(5月19日および20日)

(1) 本中真氏の講演及び尼崎博正氏のコメント に対する質疑応答

(1)-ア

【呂】 尼崎先生から、自然の意匠の実現に際して、自然の石を持ってきて使っているということがありましたが、自然の真実もしくは写実性というのは、どういうことを意味しているのかということについて、もう少し深く教えていただきたいと思います。

【尼崎】 池というのは、海岸の風景を表現していると考えられています。その海岸の風景の1つが、砂浜の風景は州浜という手法で表現されています。一方、海岸風景のもう1つの典型的なものが、荒磯という風景です。その風景の表現が、実際の荒磯を形成している岩石を使うことで、庭園表現の写実性が実現されているというような、そういう意味です。

(1)-イ

【洪】 韓国において庭園の思想的表現の仕方に関しては、神仙思想というのが大変重要な位置を占めています。尼崎先生はこの部分に関して、神仙思想に対して若干触れおられますが、本中先生からは、浄土思想または浄土庭園に関するかたちで、神仙思想に関する言及はなかったように思われます。果たして、日本の浄土庭園において、神仙思想はどのように作用したのかしなかったのか、また、したとすれば、どういった形で関連性を持っているのか、そのようなことについてお聞きしたいと思います。

【本中】 神仙思想が、日本の庭園の立地や風水をとらえる上で、重要な影響を与えてることは事実だと思います。北側に山があったり、それから川が流れていく方向があったり、それは少なくとも韓国で見られる神仙思想



の流れをくむ考え方方が、土地を選ぶという思想の中に、確実にあるのだと思います。それが浄土思想とどのように関係を持ち、浄土を形象化した庭園の中に、どのように投影しているのかということについては、私の頭の中ではまだ明確に整理ができていません。

もう1つ言っておかなければいけないことは、日本では「作庭記」という作庭の技術書が11世紀に出てきますけれども、そこに投影されている思想的な背景の多くは風水に基づくものですし、神仙思想の影響が非常に色濃く出ていると感じられます。ですから、そのような庭園の考え方、意匠、技術がそのまま仏教の伽藍の中に用いられて、浄土をかたどった庭園として成立する場合に、同じような理想郷をあらわす表現の手法として、同一の文脈のもとに捉えられたのではないかと思います。



(2) 杉本宏氏及び佐藤嘉広氏の報告並びに仲隆裕氏のコメントに対する質疑応答

(2)一ア

【小野】 佐藤さんに3点ご質問したいと思います。1つは無量光院について、東門あるいは中島から阿弥陀堂を仰いだときに、後ろに金鶴山が見えるという話がありましたが、実際には阿弥陀堂の建物が相当な大きさで、少なくとも中島から見たときには、後ろの金鶴山は建物に隠れて見えないという話を聞いたことがあるのですが、その点に関してのご見解を伺いたいと思います。

2つめは、これも金鶴山に関わることですが、そこに経塚があるという話がありました。金鶴山はいろいろなところから見て都合のよいロケーションにあるので、下から全部積んだとは思わないでけれども、上のほうで、築山というか、若干人の手が入ったような痕跡が有るのか無いのかについてお伺いしたいと思います。

3つめは、中尊寺の供養願文の話ですが、もととなる史料が14世紀の写本であることから、中尊寺という表題に書き間違いがあって、本来毛越寺のことを書いているのではないか、という指摘がされたことがあります。そのようなことについて、現在の研究成果では、どう理解されるのかについて教えていただければと思います。

【佐藤】 まず1つめのご質問については、多分、金鶴山は見えないと思います。もちろん、阿弥陀堂の高さにも

よると思いますが、平等院と同じぐらいの建物だとすれば見えないと思います。

2つめのご質問については、金鶴山の調査自体が非常に古いうることもあって、山頂部分に人工的な築山があるかということについては確認できていません。ただし、近世の伝承の中では、人工的にくり上げたということがありますので、今後の調査研究上の課題のひとつと考えています。

それから3つめのご質問ですが、供養願文に書かれている伽藍はどこかということで、大きく中尊寺大池伽藍説と毛越寺伽藍説がありますが、現在でも毛越寺伽藍説が完全に否定されたわけではなく、むしろその方が説明しやすいと考えている方も多いと思います。ただし、中尊寺の大池跡の新しい発掘調査成果と、最近の仏教美術分野の研究成果からすると、大池の周辺に願文伽藍があったと考えるほうが妥当ではないかとも言われています。

(2)一イ

【呂】 佐藤先生に、平泉の関係で、寺院伽藍とその淨土世界の関係について、計画的にある軸線に基づいて施設が配置されたということを証明するような文献というのが有るのか無いのかについてお尋ねします。

【佐藤】 12世紀後半の平泉滅亡の状況を伝える記録に『吾妻鏡』という文献があります。この中には、金色堂の正面に政治行政上の拠点である平泉館があること、それから、無量光院の北に同じく平泉館があることが記されています。





す。すなわち、平泉館、柳之御所遺跡が、金色堂と無量光院の関係で説明されています。

【呂】『吾妻鏡』以外に、何かそのようなことを示す文献資料はありますか。

【佐藤】施設の配置の関係につきましては、『吾妻鏡』に限られると思います。

(2)一ウ

【洪】杉本さんの報告を踏まえた上で、まず、本中先生にご質問いたします。本中先生の講演では、平等院の浄土庭園というのは典型的なものではないと言われたように私は理解したのですが、それはそのようなことでよいのでしょうか。

【本中】私の報告では、そう申し上げました。平等院には、建物はもちろん残っていますし、庭園も残っています。それから、杉本さんが説明されたように、『扶桑略記』その他の文献から、対岸に山があり、そして群類を彼岸に導くという一種の浄土も兼ねているわけです。それは現地形に合うということでもよく知られていることです。ただ、ご説明したように、浄土を描いた図像には、多くのものが山の向こう、あるいは、山中に浄土が描かれています。それは、当時の日記、さまざまな文献の中に山中成仏という言葉が出てくることにも窺われます。すなわち、山の中にある浄土が仏堂の背後に想定できるという点からいって、無量光院の庭園のほうが山と仏堂と庭園との3つの関係をよく表しています。この点で、無量光院の庭園はより典型に近いと言えるのではないかと思います。

もう1つは、宇治殿という別業(別荘)が喜捨されて寺院になったという歴史的な経緯を持っている関係上、やはり平等院の池と仏堂の立地している位置関係というのが、浄土寺院としての最も望ましいロケーションを基礎として持ち合わせてはいないことが指摘できます。それに対して、

無量光院は最初から浄土寺院として成立していますから、浄土を表現する地形をより確保しやすかったというが指摘できます。もちろん、中島に立つと無量光院の場合には背後の山は見えないのでけれども、柳之御所という居館・政府から猫間が潤を越えて、無量光院の東門に入った地点では見えるわけですから、庭園・仏堂・山の3者の関係者の関係が確実に認知できるという点でも典型と考えられます。

【洪】分かりました。次に、杉本先生からは、平等院と平泉との関連性という観点から浄土庭園に関して報告されましたけれども、先ほど本中先生が言われたようなことについて、杉本先生はどのようにお考えでしょうか。

【杉本】本中先生が言われたのは、無量光院が浄土庭園の1つの到達点ということで、典型例であるというのは、背後に山があり、当初からお寺としてつくられている、その2点の意味であったと思います。私の報告は、基本的には典型ということでお話をさせていただいたというよりも、そういう宝篋閣系の伽藍形態がどういう形で変化しながら平泉に伝播していくのかということに軸足を置いたものでした。

当然、平等院よりも後に造営された寺院のほうが、よりよい形につくられていくでしょうから、そういう意味では、法会や儀式を行うときに、無量光院のほうが完備された形で整備されていたと評価できると思います。

それから、平等院の場合は、最初に比較的大きな別荘があつて、それをベースにしながらつくっていますから、幾つかの制限は当初からあったということは間違いないと思います。これに対し、無量光院では、当初から一番都合に適ったロケーションのところに土地を選んで寺院を構え、宇治につくられた平等院のあり方を参照しながら、更に完成された形でもう一度阿弥陀浄土の世界の現実化を図っているということは十分妥当性を持って考えられることだと思います。

(3) 呂舟氏の講演に対する質疑応答

(3)-ア

【尼崎】 全体として、中国の庭園では、むしろ、文人の文化が底流にあって、いわゆる日本で言う「浄土庭園」のようなものは見当たらないということでおよしいのでしょうか。

【呂】 ひとつには、いろいろな条件あるいは原因によって、例えば、長安のほうの重要な寺院庭園に対しての考古学的な研究というのが、まだそれほど進んでいないという状況があります。今、現存している寺院庭園、あるいは非常に限られた考古的な資料から見て、私たちは日本と同じような「浄土庭園」のような様式をもった庭園が中国にあったかどうかということは、まだ確認できないという段階です。唐や宋の時代に確かにそういう庭園というのは出てきたかも知れません。しかし、あったとしても、非常に早くほかの庭園の様式に取って替わられたために、今、それをあるとは言えないということです。

それからまた、その当時の状況としては、文化化という中において、庭園の中に、詩にあふれる気持ちであるとか、また絵に描かれるような感情とか、そういうものの意を重んじるということがありましたので、それもひとつ大きな影響があるかと思います。

(3)-イ

【本中】 寧波の保国寺の話をされた中で、保国寺の「放生池」は「浄土池」とも呼ばれていたということのようですが、どのように四角い池を「浄土池」と呼ぶ事例は、ほかにはほとんど見られないということでしょうか。

それからもう一つ、放生池が「浄土池」と呼ばれる何か積極的な起源というのも想定できるのでしょうか。想像でも構いませんので、もしも呂舟先生にインスピレーションがあれば教えていただきたいと思います。

【呂】 「浄土池」と呼ぶ事例は、ほかのところにもありま



す。例えば、上海の方塔園です。

しかし、この「浄土池」と「放生池」との間の関係については、想像の範囲ですが、「放生池」が蓮池であったことからそう呼ばれたのではないかと思います。私が調べた範囲では、浄土池に関しては往々にして「養生蓮池」という記述があって、つまり、仏教の中の言い方として、人の命が亡くなるとき(養生)に、ハスの池(蓮池)の中に行つて、そこに転生していくという言い方があります。このようなことにつきましては、田中淡先生からも何かご意見をいただけると幸いです。

【田中(淡)】 少し関連したことも含めてお話ししたいと思います。

まず、「浄土庭園」という用語がひとり歩きしていることもあって、「浄土教」との関係を論じる点に少し苦しいところがあります。

仲先生のコメントにもありましたし、私もレジュメの中に書いていますが、「浄土庭園」というのは日本だけでつくった新しい用語で、その翻訳が難しいために、「浄土庭園」を論じるときに「浄土教」との関係を論じなければならないような誤解を招いていると、私は考えています。私も今まで国際会議で、しばしば「浄土庭園」を「浄土宗庭園」と誤訳されました。そこに重要な意味合いがあるので、私は自分自身で一々訂正していました。

このようなことにも関連して、「浄土池」ということについて、用例を全部見たわけではありませんが、大藏經



の中の自然部にそういう用例は、比較的容易に探せます。「淨土庭園」という場合の「淨土」というのは、「淨土思想」とが「淨土教」に基づくという特定の意味ではなくて、一種の美称で、日本だけに通用する美称だと私は考えています。日本の古代寺院に関するところで言えば、「金堂」は、「金」の「堂」と書きますが、別に金色のお堂のことではなく、伽藍の正殿という趣旨の特定の意味を指します。同じく少し時代下がって、「多宝塔」と言えば、日本において特定の塔の類型を示しますけど、これらも全く日本だけで使い出した用法です。

「淨土庭園」というのは、日本語としてあるわけですから、しかも、新しい言葉なので、なおさら、これを言葉として検討することを最初に持っていくと誤解の発生のもととなると考えられます。

中国の古典を見ると、例えば「金堂」だと「多宝塔」とかいう言葉を探することは簡単にできます。ところが、それは全く日本で言う「金堂」とか「多宝塔」という意味ではなくて、「立派な仏堂」、「立派な塔」ということを意味する美称として使われているわけです。

ですから、「淨土池」について全部調べたわけではないですが、おそらく同じような類いで、「仏教の池」という、ただそれだけの意味だと思います。

(4) 洪光杓氏の講演に対する質疑応答

(4)一ア

【尼崎】 庭園に対する儒教からの影響について、少し補足説明いただければと思います。

【洪】 例えば、儒教思想は男女の居場所を区別するというところが強いわけです。その点で言えば、王室では、皇后の住んでいる宮殿とか、一般の家庭では、家の女性たちが住んでいる奥の間、そうしたところにある庭園は、女性たちが簡単に外に出られないように、また、そこの庭で遊べるように、つくったものと理解できます。

(4)一イ

【小野】 新羅時代の龍江洞と、それから九黄洞の庭園の池について、例えば貴族の邸の庭とか、離宮の庭とかいろいろ種類が考えられるかと思いますけれども、それぞれどういう性格の庭であったと考えられるでしょうか。



【洪】 これまでの発掘調査成果によると、例えば、龍江洞の園池については、別宮、離宮の庭園であったことがありますが分かっています。九黄洞園池は皇龍寺と芬芳寺という2つのお寺のすぐそばにあります。これを寺院の庭園と見る人もいますし、先ほどの龍江洞園池のように、離宮の庭園と見る人もいます。九黄洞園池が寺院の庭園だとするとならば、日本の寺院庭園と何か関係があるのではないか、その部分の研究が必要だと思います。

(4)一ウ

【尼崎】 技術的な点について、レジメの表現で「磨いた石」という表現、特に「自然石を前面のみ磨いて」という表現がありますが、それはどういう加工のことでしょうか。

【洪】 尼崎先生がご指摘されたのは、護岸の石垣のことですね。まず、2つの石をきれいに磨いたのには2種類あります。まず、曲線の護岸については、石の前面だけをきれいに磨いて、そして石を積む、接点だけをきれいに磨いて積んだわけです。一方、直線の護岸の部分は、1メートル以上の大きな石を使っていますが、そこでは、非常に長い石なので、全体をきれいに磨いて積んだわけです。

【尼崎】 自然石を磨いたという意味ではないのですか。

【洪】 完全に磨き上げたというわけではなくて、積み上げるための部分を整形したということです。

(4)一エ

【本中】 3点、お尋ねしたいことがあります。1つめは、先ほど小野先生がご質問されていたことについての確認ですが、九黄洞園池は8世紀の遺構であって、仏教関係の庭園である可能性があるかもしれないけれども、今のところ、離宮の可能性も大きいということでおよしいでしょうか。



【洪】『三国遺事』の記載を見ると、皇龍寺というお寺について、龍宮が南側にある、という記述が残っています。しかし、今の九黄洞園池の位置は、皇龍寺のちょうど北側に当たります。皇龍寺の記念館建設に伴う発掘調査で発見されました。こうしたことから見て、寺院と関係のある庭園ではないかができると思います。まだ文献などで正確に確認したわけではないので、確実に皇龍寺や芬皇寺などのものであるという関連性について明らかにされたわけではありません。

【本中】2つめは、九黄洞園池は8世紀の遺構だということですが、その後の11世紀から13世紀ぐらい、さらに具体的に言うと、私たちが課題としている12世紀の平泉の時代における仏教関係の庭園の遺構は、今のところ韓国では確認されていないと言っていいのでしょうか。

【洪】12世紀には韓国にも庭園がたくさん存在していて、これを検討することで何か、この浄土庭園との関係を検討できるのではないかと思っていました。しかし、結果的に、池を作った庭園遺構は確認されていないことが分か

りました。ただし、12世紀の寺刹、寺院には庭園があって、そこに池があったということは分かっています。しかし、現在もそこにある池などが、11世紀から13世紀辺りの時期に造成されたかというのは分かっていません。

【本中】最後に3つめですが、講演の中で「九品蓮池」については、別に報告したいというお話をしたが、今回のレジュメによると、現在は消滅しているとあります。これは地下に埋蔵されて残されているのでしょうか。それとも、今はもう破壊されて存在すらしないということなのでしょうか。

【洪】この「九品蓮池」については、発掘調査が1970年代初頭に行われました。その結果、長さが70mから80m、幅30mから32m程度の楕円形の曲線を持つ池の跡が検出されました。諸事情があって、発掘調査は完全に終了することはできずに、遺構はそのまま埋められています。

(4) 一オ

【仲】雁鴨池について、2つお尋ねしたいと思います。ひとつは、出水溝のところで、15cmの穴があって、そこ



に栓がされた状態で発掘されたと思います。私の記憶では、その穴はたしか1つではなくて、幾つかあったと思いますが、そのことについて補足して教えていただきたく存じます。

【洪】「長台石」(長方形の石の台)は、上の長台石と下の長台石とあったわけです。その間に穴が1つあったということです。発掘調査では、その15cmの穴に木製の栓を差し込んでいたという状態が検出されました。これは1つだけです。下に木製の台があって、溝が掘られていて、そこから水が溢れるようにつくられていたという形です。私見ですが、これは入水装置であると考えています。入水溝を経て水が入ってきますが、その水が溜まつてくると溢れる。水位が高まって溢れるようになつたら、溝を通して流れ出るわけです。この栓の差し込まれていた穴というのは、掃除なり、何らかの目的を持った水を抜く必要があったときに使われたのではないかと思われます。

【仲】この点については、もし、その穴が複数あると、水面の高さを調整する機能があったものかと考え、お伺いいたしました。

もう1つは、池底の状態についてです。日本で言えば、平城宮跡の東院庭園や平城京の左京三条二坊に発見された宮跡庭園では、池底まで石を敷いて、水深が浅いために、水があつても、池底の石が見えるような状態です。雁鴨池でも水を通して池底を見ていたのではないかという説を聞いたことがあります。洪先生はどうのよにお考えでしょうか。かなり、水深が深いので、見たか見えないか、私は少し疑問に思っていますが。

【洪】雁鴨池の深さというのは、1.6mほどあります。先行研究を含め、私の知る範囲では、水底を見て観賞したのではないかということはなかったと思います。日本のように敷石を敷いたというような形ではなく、形態としては泥土があったと考えられます。

【仲】泥土であれば、ハスを栽培していたという可能性は考えられるでしょうか。

【洪】先ほど申し上げましたように、ハスの花に関しては、四角い栓が発見されたと申し上げました。この中のみ、植えたと考えられます。ハスがそこから広がるのを防いだということです。

(5) 田中淡氏の講演に対する質疑応答

(5)-ア

【洪】太液池の中に蓬萊や瀛洲、方丈そして壺梁という4つの島が記載されているというお話をありました。神仙思想と関連しては、三神山とか三神島などと言いますけれども、この壺梁が入るというのは、中国では一般的なことでしょうか。

【田中(淡)】建章宮の四神山の話をしましたが、一番古く確認できるのは『史記』における、蓬萊や瀛洲の二神山です。だから、一番古い格好は二神山で、その次に確認できるのは漢の武帝のときで、その場合は、蓬萊、方丈、瀛洲、壺梁の四神山になることが分かっています。ただし、その後の時代を通じて見ると、壺梁が加わるのは、むしろ例としては少ない。蓬萊、方丈、瀛洲、すなわち、洪先生のお話にもありましたように、この3つが出てくるのが、中国におけるこの後の時代、すなわち、魏晋南北朝から隋、唐にかけては、この3つ、三神山というのがほとんどスタンダードです。

(5)-イ

【仲】洪先生のご質問と関連しているのですが、この蓬萊、方丈、瀛洲、そして壺梁の諸島があつて、海中の奇魚、亀、魚になぞらえているというお話がありましたけれども、その神仙島というのは仙人が住まいするところではなくて、魚や亀をたとえるために池の中につくったというふうに解釈したらよろしいでしょうか。

【田中(淡)】明確に断言できないのですが、引用した文章の書き方、文脈から考えると、「神山や、亀、魚の類を象る」と理解できます。ですから、多くは神山で、しかし、池の中にいる亀や魚を象った島もあると、そういう意味で読むことができます。ただし、壺梁が亀島なのかとか、





そういうところまでは断定できません。

(5)一ウ

【小野】 図3の「李寿墓壁画樓閣圖」において、この屋根の両脇に、何かモヤモヤとしたものが描かれていますが、これは何でしょうか。

【田中(淡)】 中国の画像表現の上でしばしば問題になりますが、墓の壁画、墓の画像石というのは、死者を祀る空間に建てられたものを象っているわけです。そこに、プロポーションからすると異常に大きな格好の鳥が飛んでいたりする場合があります。しかし、この図の場合は、おそらく屋根飾りの実体的なものの表現だろうと思います。このようなものは、少し誇張して描かれる傾向があります。なぜかというと、目立つところのデザインは誇張されて描かれる傾向があるので、これについては、例えば鳳凰のような鳥が、死後の世界において死者の住む住まいの屋根の上に飛んでいる様子を表しているのか、飛んでいたと想像して描いているのかは分かりません。しかし、実は、もとを話せば両方とも同じことであると言えます。それを象ったのが屋根飾りになるわけで、そうしたものが最終的に実際の建築の部材になるわけです。ですから、その辺のもの断定は非常に難しいのです。

しかし、例えば、後漢の時代の有名な河北阜城桑莊に5層の樓閣が確認されていて、それには欄干のところに鳥が飛んでいたり、屋根にも飛んでいたりします。その屋根の鳥は巨大なものです。ところが、欄干には、リアルブロボーションの小さい鳥、ハトみたいなのが飛んでいる。それは、おそらくほんとうに鳥が止まっている様子を表現したのではないかと考えられます。そして、屋根の上のすごく巨大な鳥というのは、おそらく死後の世界の死者が住む住まいの上で、ほんとうに象徴として飛んでいと考えられますが、そういう話は非常に難しい。一部

について限って言えば、平等院鳳凰堂とか、そういうた ような類の、非常に装飾豊かな屋根飾りというふうに言つていいのではないかと思います。

(5)一エ

【尼崎】 中国の早期庭園では、池と水面が重視されたとあります。これはいろんな事例の中で、海と島とのイメージという点では非常に分かりやすいのですが、例えば白居易の邸宅で、水が5分の1を占めていたとかv、それから「曲水」、すなわち流水とか、それらは、どのようなイメージであったのかについては明らかにされているのでしょうか。

【田中(淡)】 そこまではとても分からなくて、白居易のような記述があるのは非常に珍しい記録で、おそらく白居易が、庭のマニアだったからだと思います。白居易に限らず私邸庭園といいますか、住宅付設庭園の場合は、皇帝の巨大な苑とは違って、池にとても巨大な島をつくって人工的に橋をかけてとか、そんなとんでもない過飾のことはできないわけです。白居易は結構立派な橋をかけていますけども、とてもそれらには及びません。

【尼崎】 中国における文人庭園の話の中で、植物については、やはり竹というのが特記されていますね。この竹の位置づけというのはどう考えたらよいのでしょうか。

【田中(淡)】 白居易は特に竹を愛好していた形跡があります。植栽についての趣味というのは時代によってかなり変わりますが、例えば唐の時代だったらボタンであるとか、宋でもボタンだと思いますが、唐よりももっと前はウメだったと思われます。ボタンについては、「花王」といって称賛する。そういう時代が唐、宋のころはあったと見られます。当然、それぞれ種類は違います。一方で、白居易は、なぜか、竹がとても好きです。竹が好きというのが、必ずしも唐あるいは宋の文人にすべて共通かというとそうではない。人によって違うようです。

3. 討論－1（5月20日）

■庭園文化の基層を成す人と自然の関わり

【田中（哲）】 討論は、大きく『人と自然の関係－表現としての庭園』、『庭園における池－その意味の変遷』、『理想郷と庭園－東アジアにおける表現の本質と多様性』という3つの論点に分けて進めていきます。

まず、「人と自然の関係－表現としての庭園」ですが、最初に「庭園文化の基層を成す人と自然の関わり」という観点から検討したいと思います。

本中さんから、日本の『作庭記』という古い庭作りに関する技術書には、「自然の姿に即して庭をつくりなさい」ということが書かれているという話がありましたが、中国、韓国、日本で少しずつ庭園の自然観というのが違う思いますので、中国の呂先生と韓国の洪先生には、それぞれ庭園における自然観についてお願いしたいと思います。

まず、呂先生からは、文人庭園に見られる自然観や、詩情画意を強調して庭園がつくられたということについて補足していただければと思います。

【呂】 中国の早期における庭園は、皇帝の庭園など、非常に大規模なもので、その中に大きな池が設けられました。それは自然の水の在り方を庭園の中に表現するもので、仙人の住む島を象徴するものもつくれました。それは領土の象徴という意味も持っていました。

ところが、その後の南北朝時代になると、社会的・政治的に変動の時期になります。そのため、文人の朝廷の中における地位あるいは官僚の地位というものが非常に不安定なものになりました。そこで、自然の中に住んで自然を愛でる、そして自然の中に詩心を見いだす「隠居」の風潮が出て

きています。そして、ある種の植物の中に品格を見出す傾向も見られます。例えば、竹というのは氣骨を表すものとして、象徴意義があると考えられています。また、松とか梅とかは人の品格を表すものです。

それから、もう1つ、隠士文化というのは、南北朝以降、まことに高尚で優雅、高雅なことの代名詞となりました。中国における伝統的な隠士に関する文化的考え方によると、比較的レベルの低い「小隱」は山中で隠居生活を送る。

中レベルの隠士というのは、町の中で隠居生活を送る。

そして、最もレベルの高い「高隱」は、朝廷の中にいながらにして隠居生活を送る、そういう伝統的な考え方があります。このような隠士文化の影響を受けながら、その後の中国庭園は発展してきました。そして、中位ないしは高位の隠士たちのさまざまな私邸庭園がつくられていくわけです。また、庭園の意匠あるいは景観については、自然を濃縮した形で表現しようという傾向があります。田中淡先生の講演の中に、白居易が「石癖」（石マニア）であったというお話をありがとうございましたが、小さな石を通して大きな山、大きな川を象徴しているわけです。

その後の文人庭園にもそういう傾向が見られます。これは「詩情画意」を庭園の中に取り入れるというのですが、小さな庭園の中の景色を愛でながら、大きな山、大きな川を象徴して、庭園の中に大自然の美しさ、雄大さを感じ取る、そのような流れがあります。

そして、その文人庭園の流れは、当然のことながら、その後、皇帝の庭園にも影響を与えていきます。例えば、17世紀の圓明園などにも文人庭園の影響が見られます。中には、わざわざ画家を南方に派遣して、有名な文人庭園を描かせ、それを参考に皇帝が庭園をつくるといったこともされました。さらに面白いのは、1つの王朝を打ち立てる軍人出身の皇帝たちが文化化の傾向を示すようになったことです。すなわち、自分自身が文化を持っている文人であるということをむしろ誇りにするようになります。

以上のように、中国社会における審美觀であるとか趣味であるとか、あるいはその品位であるとか品格であるとか、そういうものはすべて文人を崇拝する傾向にあるわけです。





【田中(哲)】 中国庭園における自然の取り扱いとしては、文人庭園などで、「詩情画意」に基づきながら、自然の景色を縮めて庭園の中に収めるというように理解しました。

【呂】 そのとおりです。

【田中(哲)】 韓国では特に風水思想が強く影響していると思われます。洪先生には、どのような自然の表現の仕方が採用されたのかについて、補足していただければと思います。

【洪】 韓国において、なぜ庭園をつくられたのか、ということを考えると、中国や日本と同じく、人間が簡単に近づくことができない、つまり理想郷を表現したものであると言ることができます。人が生きている実際の現世というのが非常に苦しみに満ちたものであり、人はそこから脱却するために楽園を表現する、そうしたことが、庭園をつくる原因になったと見ることができます。韓国の場合、それを神仙の世界として表現しているわけです。

また、韓国では、西方極楽浄土という仏教を中心とするそうした極楽浄土を夢見る理想郷もあったと言えます。仏国寺の九品蓮池などにも見られるように、極楽浄土を寺院に導入しようとした痕跡は、高麗、朝鮮時代を経てあらゆるところに見られます。もちろん形式の差はあったと思います。例えば、仏国寺の九品蓮池について、詳細は後の追加的な調査の成果を待つかりませんが、その曲池が概ね橢円形であったことが分かっています。

高麗、朝鮮時代には、四角形の方池に変化していくわけですが、極楽浄土の象徴としてのハスが導入されたところを見ても、寺院の池が極楽浄土を表していたということが分かります。韓国の庭園がどのように曲線から四角形に変化したのかということはまだはっきり分かりませんが、例えば龍江洞や九黄洞の池などを見ると、その変化が窺い知れます。

朝鮮時代に入ると、政治的な争いによって、士大夫たちが隠遁生活を送るようになります。それによって、別荘(山莊)を建て、そこに庭園をつくりたりするようになりました。その庭園を見ると、神仙世界を夢見たと考えることもできるし、また、その一方で、仏教世界を夢見たというふうに見ることもできます。しかし、朝鮮時代には、仏教が弾圧されて儒教が非常に好まれるようになって力を増していくので、士大夫たちが夢見たのは、神仙が住むそうした理想郷であったのではないかと考えられます。

曲線の池が直線型に変化したのを見るとき、新羅時代の神仙思想といったものが徐々に陰陽五行説の思想に取って替わられていった影響を受けたのではないかと思われます。こうしたなかで、自然をどのように庭園に取り入れたのかというのは、とても重要です。

韓国においては、自然を敬愛するという思想がありました。本中先生の講演にもあったような、自然を敬う、また自然に合致させるといった、いわゆるトーテミズム、アニミズムの側面は、韓国にも見受けられます。そのような形で自然を敬愛する韓国人にとって、庭園をつくるという段階になった場合には、その自然の本質を損なわないように取り込むという傾向が見られます。言い換えると、自然の持つ性格をそのまま一対一で取り込んだわけです。理想郷を表現する場合にも、本質的なものを変えずに、容易に分かれる山の美しさ、木の美しさ、また水の美しさなどを表現しました。

中国の庭園では、スケールのとてもない大きさが見受けられます。日本の庭園では、小さい形の美しさというものを感じます。韓国の庭園の場合は、あるがままの姿、一对一のスケールのまま表現しようとしたわけです。

もう1つ申し上げたいのは、韓国のは、庭園に対して意味を付与することがあるということです。例えば、「雁鶴池」というのはまさに海を象徴するものであるという意味づけです。また、入江や半島などにも、すべて意味を持たせています。渓谷の岩に見立てて石を置いたり、築山などで規模の大きな山をあらわしたりしました。これは、中国の文人庭園などに見られる山水庭園とも相通するものを感じます。岩を据え、また築山をつくるといった象徴的な景観をつくるというのは、日本の庭園とも通じるものがあると考えます。さらには、その庭園に名をつけること(命名)でも象徴性を持たせます。

韓国の庭園の場合は、自然にあるがままの本質を取り入れ、そのまま表したと言えます。

【田中(哲)】 韓国の庭園では、自然敬慕、自然崇拜、アニミズム思想などが背景にあって、庭園をつくるときには、できるだけ自然そのものを映して庭園にするということでした。また、神仙の世界としての理想郷が庭園の要素として強いということだったと思います。

【洪】 そのとおりです。

【田中(哲)】 日本の場合は、『作庭記』に、地域の名勝を写すというような記録があります。田中淡先生のご講演の中で、中国の庭園でも、古くは、そういう名勝が取り入れられたとありましたが、それは後の時代にも続く話と考えられるでしょうか。

【田中(淡)】 先ほどの河南省洛寧にある二峨山という実在の名山を取り入れるというのがありました、それと非常に近いような記録は、唐・宋の時代にも見ることはできます。

【田中(哲)】 韓国では、名勝を庭園の中に取り入れるということはあったのでしょうか。

【洪】 先ほど申し上げたような一対一の取り込み、取り入

れが解決できない場合には、例えば、山水画を通じた想像の世界といったものを取り込む場合もありました。

【田中(哲)】 いまの議論から分かるのは、中国、韓国、日本における庭園と自然との関係には大きな違いというのはなくて、基本的に自然崇拜から始まって、自然を誘導した形、あるいは、できるだけ近い形を庭園に取り入れる点で共通していると言えると思います。

【田中(淡)】 山水画と関連して、「詩情画意」ということからみると、少し中国は日本の感覚とはどうも違うような気がしますので、その点を少し補足しておきたいと思います。

中国には「画論」、すなわち絵画理論があります。例えば、北宋の郭熙が『林泉高致』という有名な画論を著しています。その中に距離感をあらわす法として、高遠、深遠、平遠、この3種類の遠景の画法のことを書いています。距離感の基準が違うものが3種類、遠いところ、近いところ、普通のところということが、同じ画面に共存するという中国絵画独特の世界があります。これは西洋絵画にはあり得ないものです。

実は、それと全く同じ考え方が中国庭園のつくり方で行われていた例があります。北宋の沈括が著した『夢溪筆談』という有名な本の中に、山水画の手法というのは、要するに小さいものを大きく見せるということに特徴があって、それは、ちょうど人が築山を見るのと同じ理屈だと書かれています。もし本当の山と同じようにそのまま写して下から上を見るとすると、重なる峰の一一番前の山しか見えない。そうすると、実際庭園の中に縮小世界を表現しようとするときに、後ろの山が見えないから、山々が重なっているという空間表現ができない。すなわち、実際とは少し違うけれども、遠近の違いをミックスさせる山水画の方法によって築山はつくらないといけないということです。少なくとも



も宋代の人にとっては、築山の遠近感と山水画の遠近感は、まったく同じ種類のものであったのです。

【洪】 韓国の場合、17世紀末から18世紀初頭にかけて、中国の山水画の画風を非常に好む傾向がありました。そこで注目されるのは、中国の自然はとても勇壮でスケールが非常に大きく、それに比べて、韓国の自然は人間のスケールで小規模なものだということです。当時の知識階級の人たちは、山水画を邸に掛け、その違いを楽しんでいたわけです。

例えば、李氏朝鮮時代に、中国の武夷山に実際行ったことがある人はいないと思います。しかし、武夷山の絵や文献などを通じて、そのすばらしい景色を楽しんだということが分かります。それで、韓国でも、武夷の九谷を真似たような絵がたくさん出てきたわけです。

このように山水画については、中国の山水画が非常に流行したわけです。しかし18世紀に入ると「真景山水」という画風がつくり出され、中国の山水画の画風とは大きく違ってきました。その後の庭園には、「真景山水」の画法を取り入れられるようになり、韓国の本来の趣向をそこに導入することになったと考えることができます。

■庭園文化の伝播と発展

【田中(哲)】 次に「庭園文化の伝播と発展」ということを検討していきたいと思います。

1つは思想的な背景として、神仙思想に基づいて神山をつくるという話があります。本中さんからは、酒船石遺跡の事例で、水を流すときに水を溜める亀型石造物が紹介されました。あるいは、洪先生からは、雁鴨池の事例で、同じような導水部分で亀の形を象った石造の水槽があるということをご紹介いただきました。「作庭記」の中でも、こういう鶴とか亀とかという吉祥の動物を庭園の形態として使うという話が出てきます。鶴も亀も不老不死を象徴する動



物ですが、そういうものを直接象って庭園の中で使うことについて、洪先生はどのようにお考えでしょうか。

【洪】 珍しい花や珍しい動物といったものを庭園に導入するようになったのは、日中韓3国とも皆同じだと思います。雁鴨池でもそうした珍しい動物、花を導入したという記録があります。また、吉兆を示す尊い動物や花なども導入された形跡が見られます。

韓国では、早くから「四君子」と言って、梅、蘭、菊、竹の4つがとても尊い植物であると言われてきました。また、「十長生」と呼ばれる動物がいました。これら儒教的な思考から発した「四君子」や「十長生」を庭園づくりに取り込んだと考えられます。

【田中(哲)】 日本も中国も韓国も、古い皇室の庭園で、必ず珍しい鳥その他の動物、それから珍しい樹木などを庭園の中に取り入れているという記事が出てきますが、それらは、そういう吉祥のものを取り込んだという理解でよろしいでしょうか。

【小野】 その点には少し異論があります。記録に出てくるいわゆる「珍禽奇獸」を庭園の中に飼うということは中國で始まったことであって、それは、秦漢帝国が非常に版図を広げたということを実証するものとして、帝国の領域内に生息する珍しい鳥や珍しい獣を庭園に取り入れるということだと考えられます。日本や韓国は、それを真似ていると考える方が妥当だと思います。田中淡先生は、その辺のことについていかがお考えでしょうか。

【田中(淡)】 小野先生の意見に全く同意します。

『三国史記』にも同じような珍禽奇獸に関する記載があったと記憶しています。このようなことは、例えば『日本書紀』などにも見られますが、それは中国の古典資料の表現をそのまま使ったものです。つまり、レトリックとして文体を真似ている可能性が考えられます。洪先生が引用された部分についても中国の史料に同じ文章があります。これは「珍禽奇獸」の表現に限らず、同様のことがしばしば見られます。ですから、その場合に実態を写したのか、ただ文章を書いたのか、その点については判断しかねます。

【田中(哲)】 日本、韓国においては、実態とは別に、特に文献の中でそのまま文章だけを書いたということもあり得るということですね。

【小野】 さらに言えば、それを実体的なものとして庭園で実現しようとしたことが、少なくとも日本では見られるということです。ラクダやオウムなどを新羅から譲り受けそれを庭園で飼うということなど、それは、まさに史書に書かれた言葉を実体化していくということでもあったと思います。

【田中(哲)】 そういうことも踏まえて、庭園で珍禽奇獸を飼うというのは、3国に共通した着想としてあると思います。特に古い時代の皇室庭園などでは、狩り場のような機能や、果樹園や動物園などの要素もあるのではないかと考えられます。また、唐の大明宮における太液池のように、水練の池みたいなものもあったと考えられます。

例えば、そういう機能の中に庭園の觀賞も含んでいたのか、それとも鑑賞は別にしてそういう機能が中心であったのかなど、特に初期の庭園についてお伺いしたいと思います。

【呂】 中国の文献の中にも、庭園の中に珍禽奇獸が飼われたという記載があります。富豪袁廣漢は、その邸宅の庭園でサイを飼っていたとされています。ましてや皇室庭園であれば規模も相当大きいので、もっとたくさんの動物を飼っていたに違いありません。それは、各地から貢ぎ物として挙げられてきた動物を飼っていたと考えられます。漢の武帝の上林苑の中には、クマもいたということが見られます。その中には野獸がたくさんおりますので、皇室庭園の中では狩りも行われていたと考えられます。

また、名勝旧跡を模倣したものを庭園の中に取り込んだ事例もたくさんあります。例えば、北京の頤和園には、広州の西湖の様子を取り込んだ部分があります。それから、避暑山庄の中にも、鎮江の金山寺を真似た部分があります。

■東アジアにおける庭園の表現

【田中(哲)】 次に「東アジアにおける庭園の表現」ということで、各國の庭園における類似点と相違点について検討します。特に庭園意匠の相違点について、ご意見お願いします。

【小野】 少し前の議論と関連して、人と自然との関わり合いということで言うと、東アジアの庭園に共通するものとして、自然は支配するものではなく、自然は親しむものであるという考え方があると思います。大きく言えば、東アジア全体において、それが庭園のデザイン(意匠)のモチーフ(主題)になっていると考えられます。

そのように考えると、少し違和感を覚えるのは、日本に



おける飛鳥時代の幾何学的な形を持った池と、特に韓国で高麗以降に出てくる「方池円島」のような幾何学的なデザインをつくる庭園です。それらは、東アジアの庭園が基本としていると考えられる「自然は親しむべきものだ」という概念からは少し外れているように感じられます。もしかすると、考え方は同じかもしれないですが、少なくともデザインとしては異質な感じがします。

【田中(哲)】 曲池はどちらかというと自然風で、方池というのはかなり人工的という感じがする。それが、東アジアにおける庭園のデザインとして、どのように評価されるのかということです。洪先生、いかがでしょうか。

【洪】 韓国の庭園は、三国時代、統一新羅時代、そして高麗時代までは、大体自然風の時期と言ることができます。その後に、「方池円島」というものが登場して、幾何学的なデザインに変わっていったことが窺われます。

この「方池円島」というものは何を象徴するのかというと、「円」は空、すなわち「天」を象徴するわけです。そして「方」は土、土地、「地」を象徴しているわけです。

そこに亭や四阿を建てますが、それは「人」を象徴しているわけです。そうして、「天」と「地」と「人」を1つにすることを象徴したわけです。

韓国の庭園のデザインの中で独特なことがあります。中國や日本と同様に、韓国の場合も池に島をつくるというのが一般的な傾向であると言えます。しかし、韓国ではその島に行くための橋をかけることはありません。なぜならば、その島は理想郷であり、そこには人がアプローチできないと考えたからです。

【田中(哲)】 韓国でも古い時代には方池で島は無いわけですが、方形の池というのは寺院の池などに見られると思いますけど、その点についても補足願います。

【洪】 寺院の見られる方形の池というのは百濟の時代にもあります。韓国の浄土変相図には直線の池があるのを見たことがあります。古代の百済の定林寺の跡にも、2つの方形の池が並ぶ「双池」と呼ばれる遺構が確認されています。

【田中(哲)】 日本においては、7世紀の飛鳥時代に方形の池が見られます。『日本書紀』に、百済から来た路子工(みちこのたくみ)という人物が「須弥山」と「呉橋」を築いたという記事があることから、かなり百済との交流があって、当時の庭園の技術も百済からされた可能性があると考えられます。この点について、小野さんから補足をお願いします。

【小野】 飛鳥の方形の池というのは、ほほ間違なく百済からの影響でできたものだと思っています。先ほど、後世の話として、「天円地方説」が「方池円島」のもとだということがありました。これはもともと中国の考え方であると思われます。それを中国や日本では、あまり庭園の具体的なデザインとしては採用していないのに、韓国ではそれを取り入れて庭園をつくっているということは、とても韓国に独特の点ではないかと考えられます。

古代において日本にも影響を与えた方形の池が韓国でつくられたとすれば、それが韓国のオリジナルのものなのか、それとももう今は全然痕跡もないけれども、中国でそういうふうな方形の池のような庭園のデザインがあって、それが例えれば百済に伝わって、さらに日本へ伝わったと考えられるのか。その辺は、7世紀あたりにおける朝鮮半島の方形の池の起源というのが、朝鮮半島で発生したものなのか、それとも中国から影響を受けてつくられたものと考えられるのか、中国で実物が残っていないので、なかなか難しい問題だと思いますけれども、この点については呂先生からもお考えをお伺いしたいと思います。

【呂】 いま、私の印象に残っている範囲では、宋代の絵の中の方池を見たように思います。ただ、古代の文献から見ると、秦の始皇帝が長い池を築いたとありますので、それがおそらく長方形をしていた方池ではなかったかと考えられます。

【田中(哲)】 会場の方から、工藤先生、どうぞ。

【工藤】 四角い池の話が出ていましたが、飛鳥石神遺跡の方池と全く相同するものが、実は陸奥の国、多賀城の前身になる郡山官衙遺跡というところにも見つかっています。

それと、その飛鳥石上遺跡の場合、『日本書紀』によりま



すと、当時の日本国家の領域外の人たち(南方の島の人たち、北方の蝦夷(えみし)それ以外の海の彼方の人たち)が飛鳥にやってきたときに、そういう境域外の人たちをもてなす儀式がそこで行われたということが書いてありますし、そのことは、出土品によっても確定されております。

郡山官衙遺跡の場合にも、北方の蝦夷に対して同じような儀礼が行われたというふうに考えてよいと思います。ところで、7世紀後半というのは、日本の国家体制が大和朝廷の時代から一歩踏み出して、日本の天皇を中国の皇帝になぞらえるという考え方方が非常にはっきりとしてくる時代です。

そういう考え方の下に、夷狄(いてき)に対応する儀礼が、飛鳥でも、東北地方でも行われたと考えることができます。そうすると、方形の池のところでそのような儀礼を行いうことの源流は、実物は確かめられていないにしても、中国にある可能性が高いと思います。技術的には百済からかも知れませんが、考え方の源流は、皇帝に貢ぎ物を持ってやってくる遠方の人たちをもてなす儀式の場として、中国の皇帝がそういう四角い池をつくったという可能性を示唆するものではないかと私は思います。

【田中(哲)】 もてなす儀礼として、その方形の池で宴を行うということ、その原点は、韓国からさらに遡って、中国にあったのではないかということですが、いかがでしょう。

【田中(淡)】 まず、先ほど呂先生が言われたことについて、少し補足します。

私のレジュメの註1に『史記正義』の『秦記』というのを引きましたけれども、秦の始皇帝の咸陽の蘭池宮について、そこには、長さ200丈と書いてあります。『三秦記』には、先生が言わされたように、「長池」と書いてあります。それは細長い池という意味で、長さ200丈ですから、異常に細長いと考えられます。殷の時代の偃師商城の北側からやはり非常に

細長い切石で囲われた、そして、どう見ても娛樂施設としか思えない池が発掘されています。そこには、排水渠があって、入水と出水と両方ある溝が喰出されているのですが、それは、形としては、やはり、異常に細長いで、完全な長方形です。それが、もしかしたらその原点に当たるのかも知れません。

ただし、いわゆる韓国とか飛鳥のような真四角というのは前例がないので、想定しようがない。文献では、西周の、紀元前(BC)600年代の「詩經」の中に、何かそれらしいものがあつたらしいということは分かりますが、はつきり正方形と書いてあるわけではないので、文献的にはあまり明確ではありません。

【田中(哲)】 その池の意匠の違いということで、気になるのは護岸です。池の護岸をするときに、雁鴨池では切石を積み上げています。それから、造水も基本的に切石でつくられた流れになっています。日本では、基本的に護岸や造水は自然石でつくるのが原則となっているわけですが、その辺の違いというのはどのように考えられるものでしょうか。

【洪】 日本の場合、なだらかな曲線を持った造水といった水路が特徴的なところとして見られるわけですが、韓国の場合、ほとんどそういったところは見られません。

韓国の場合、水路構造に関しては、例えば幅で見ると、雁鴨池庭園の場合には60cmから1m、大変单调な、切石のような整形をした石を重ねています。

【田中(哲)】 護岸も、雁鴨池の場合は、加工した石を積み上げていますよね。

【洪】 そのとおりです。池の周り、石積みの部分ですけれども、曲線を持っていながらも、やはり切石を整えて積み重ねています。

【田中(哲)】 例えばそれは、新羅の石材加工の技術が相当進んでいて日本では真似ことができなかつたということ

となるか、それとも、自然を表現する仕方としてできるだけ自然の材料でつくりたいという日本の意向があるからか、などの点についてはどうでしょう。

【洪】 よく分からぬところでありますけれども、それは、日本には日本なりの考え方があって表現したのではないかと、私は思います。韓国には、その当時、直線的な水路がつくられたりします。曲線をもつたところにも石積みはするけれども、単調な形の積み方というのに馴れていたという点があつたのではないかと思います。

【仲】 雁鴨池について、洪先生のご講演のときに水位について質問させていただいたのはこのこととも関係します。池の水位が低いときは、かなり下の石積み、すなわち切石が何段も見えて、私から見ると不自然に思つたのですが、一昨年行ったときには水が満水で、切石の部分はほとんど水で隠れて、切石の上に組んである自然の岩のほうに目が行って、日本庭園の護岸の石組みとの親しさを感じました。先生がご覧になって、雁鴨池の水位というのは、どのあたりに設定されるのが好みましとお考えなのか、教えていただけますか。

【洪】 とてもよい質問をしていただいたと思います。韓国と日本の池の関係、池の様子を照らし合わせてみますと、護岸が曲線か直線になっているかということはありますが、水位という点から見ても、韓国と日本の違いが指摘できます。

伝統的な韓国の池を考えた場合には、地面と水面とに例えば1mくらい間隔が空いているのが分かります。日本の場合に、地面と水面との関係を見ると、多くの例で、あまり高さに違いが無いと思います。そのため、曲線を形成したときに、石積みをしなくとも不自然ではない。しかし、韓国の場合、李氏朝鮮時代までは同様でしたけれども、例えば雁鴨池では、1m60cmから70cmの差があるわけです。池底から石積みをするので、実際は、先ほどのご指摘のように、石を積んだと





ころが見えるような状況になるわけです。

【田中(哲)】 日本の庭園には、あまり深い池は無いので、石を積み上げるほどの深さは有りません。そのような水深の違いによる意匠の違いは確かにあるということですね。

【尾崎】 少し話をもとに戻したいと思います。

加工技術の話が出ました。飛鳥の島ノ庄遺跡では花崗岩の石積みをしています。酒船石にも複雑な加工を施していました。ですから、それが韓国から伝わったものかどうかは別にしても、飛鳥時代には岩石を加工する技術はあったと考えられます。

しかし、日本では方池の護岸は自然石を積んでいますので、それが技術の問題ではないということは明らかだと思います。意匠性が先なのか、技術者集団が違うのが先なのか、そういうこととも関係するような気がします。

【田中(哲)】 意匠についてもう1つ確認したいのは、田中淡先生からご説明された、池の中で石を彫って鯨をつくったりとか、亀とか魚の島をつくったりという、かなり造形的な意匠の部分をつくられることがあるのですけれど、それは中国において独特の話でしょうか。それとも、韓国にもありますか。

【田中(淡)】 先ほど引用した文献に「鶴の洲浜」、「マガモの渚」とあるのは、そこに鶴がいるとか真鶴を刻っているということではなくて、洲浜とか渚に当たるところ自体を鶴の形やマガモの形になぞらえたものであったと理解できます。

【田中(哲)】 先ほどの島の話も同様と考えられますか。

【田中(淡)】 島の話は、あまりにも神仙世界の考え方とかということのほうに重点があるので、実際にそれが亀島とか魚の格好をした島なのかとか、そこまでは限定できません。ただし、鯨を彫ったというだけは、明らかに鯨の格好の石を彫ったと理解できます。

【仲】 少し別の話になりますが、もう一つお伺いしたいと思います。日本庭園では、泉や湧き水を大事にして水源にしたり、祭祀の場所にしたりするということがあります、中国や韓国の古代庭園の中で、泉や湧き水などをどのように捉え、また、どのような意匠があったのかということについて、お分かりの点があつたら教えていただけませんか。

【洪】 雁鶴池には、特別に何か動物をまねでつくったような島はありませんでした。しかし、入水溝の亀の石像のように、部分的に景観として使われたということは見られます。次に、泉、湧き水についてですが、韓国では泉を非常に身近で、神聖なものと考えていました。ある一定の自然崇拜の現象と見られます。その泉に精霊が宿っていると思われていました。湧き水のうち、いいところの水は、薬水としても使われましたし、またお茶を沸かすのにも使われました。ですから、実用的な意味もあったわけです。

【呂】 中国のほうでも水というのは非常に身近なものでした。例えば、王維の詩に「朝川莊」とか出てきましたけれども、非常にそれは身近なものでした。ただ、古代中国においては、湧き水、泉というのは庭園の中に取り入れるのではなく、そのものを觀賞する、景勝地の中心に据えるという考えがありました。よい湧き水の出るところは、天下第一泉と呼んだりしていました。また、中国の庭園では、汲んだ水ではなくて「流れる水」を重視して、湧き水を庭園の中に取り入れるというのは無いように思います。

【田中(淡)】 少し補足すると、古代中国でも泉はお茶の水の等級の一一番として必ず置かれていました。庭園の要素というよりは、そういうものとして理解されていたわけです。

【田中(哲)】 ありがとうございます。後のテーマとも関連することもありますので、取りあえず「人と自然ー表現としての庭園」についてはここで終了したいと思います。

4. 討論一²(5月20日)

■東アジアの庭園における池の意味

【田中(哲)】 この前のセッションでは、「人と自然の関係表現としての庭園」ということでいくつかの検討をしました。自然に対してそれを表現する庭園でどのような自然の取り扱いがあるかということ。庭園文化が、様式として、機能として、どのような形で伝播したのかということでした。そういう検討を踏まえて、次は「庭園における池—その意味の変遷」ということを検討していきたいと思います。

まずは、「東アジアの庭園における池の意味」についてということで、既に前のセッションにも、曲池と方池の違いとか、水深の違いによる意匠のあり方とかということが検討されました。あとは、庭園における池の機能ということを検討する必要があります。ひとつは、龍舟競首の舟を浮かべて池で遊覧するということとか、池の中で水生植物を栽培するというようなこと、さらに、池の中に蓮を生けるということで「蓮華化生」あるいは「蓮華往生」というような、そういう基礎が当然あるわけです。

【高瀬】 雁鴨池の庭園の池の評価に関することですが、洪先生が神仙思想に基づく世界をつくり出しているというご見解で、私もそれはそうだと思いますが、雁鴨池の庭園についてはもう1つ、浄土の世界をつくり出している、そういう二面性があるのではないかと私は考えています。どうして雁鴨池を浄土庭園、いわゆる浄土世界を再現している庭ではないかと私が考えたのかについては、理由がいくつあります。

1つは、この池の平面型を見ていただきますと、西岸が直線的な護岸になっていて、建物が5棟、西岸に建てられていますが、その建物がことごとく池に向って張り出しているということです。これは、今まで見てきた画像の浄土変相図なんかに見られる形に極めて近いと私は思います。この5棟の建物のうち、少なくとも3棟は池のほうに正面性があるというか、一番北の建物と東北の隅に張り出した建物と、一番南寄りの建物は、内部も回廊で囲まれた区画になっていて正殿のような建物、後殿のような建物があります。少なくともこの池のところに張り出している建物については、内部向きというよりはむしろ池のほうに正面性

があると考えます。浄土変相図にも建物と建物を廊でつながっている形が出てきますが、平面を見ていただいても分かるように、廊でつながっている形です。建物の平面型が、浄土変相図の形に非常に近いというのが第1点です。

それから、2つめは、この立面ですけれども、これは、西岸が他の岸より高くなっています。西の岸だけ二重基壇になっていて。これは、特別高く基壇を立ち上げるために二重基壇にしているのだと思うのですが、それは、なぜここだけこういう形で立ち上げるのかということを考えると、やはり東側からの景観、あるいは舟、池の上の舟に乗った視線からの景観というのをかなり意識して特別に高くしている。それから、護岸も西の岸だけ特別な護岸になっていますね。ほかのところは長方形の削石を基本にして小さい石を積んでいますが、石の上部の基壇、葛石に当たるような石は、特別な長方形の切石を使っていて、ここには、建物が上に載るということもあると思いますが、特別な基壇を西にはつくっています。

3つめは、この点が一番重要なと思いますが、池の中から仏教関係の遺物が大量に出ています。これは、阿弥陀三尊仏ももちろん出ていますし、平等院の鳳凰堂の壁面を飾っているような掛け仏の類、それから飛天ですかとか、要は建物の壁面、内壁を飾っていたような金属製の荘嚴具が大量に出ていまして、これらが西岸の下から出ています。報告書に遺物の分布図が掲載されていますが、これを見ると西の建物にあったものが下に落ちたという状況を示していると理解できます。ということは、これは、雁鴨池は一応宮殿の遺跡というふうに考えられていますけれども、仮



殿の機能も併せ持っていたと考えられます。仏教はもう新羅以前から朝鮮半島は受け入れて、とても仏教が交流しているわけですけれども、浄土思想、浄土教ももちろん入っていて、そういうものが、この雁鴨池の宮殿でも、仏事が行われていた、あるいは仏殿的な機能をこの建物が持っていたということが遺物で分かるわけです。

4つめは、洪先生の御講演で私も初めて知ったわけですが、木の枠が出ていてそこに蓮が植えられていたというご見解を述べられましたが、蓮があったということ。それから雁鴨池の池底自体は地山を掘った、いわゆる池底に石を張っているようなそういう池底ではないわけです。ですから、蓮があったということも1つの傍証になるのではないかと思いました。

そういうことで、今までこの雁鴨池の評価については、先ほど言いましたように西から東を見た景観ということで、西から東の景観ばかり問題にされてきましたが、もう1つ東から西を見る景観というものをかなり意識してつくられていると思いました。雁鴨池のようなこういう形のものというのは、中国にも無いですし、日本にも無いし、韓国にもこれ以外に無いと思います。そういう意味では非常に特殊なもので、これが日本に伝わったのかどうかはよく分かりませんが、浄土の世界を再現しているという意味では、おそらくこれは1つのあり方を示しているのではないかと考えています。

最後の1つは、この平面型で、3つの島が、東岸と、すぐく潤へ偏ってつくられています。池の北西隅と東南隅と東南寄りというふうに、非常に片寄せでつくられている。これを、なぜこうしているのかなということですが、私の考えでは、これは西岸の前に広い水面をつくり出そうと。そういう意識で東の岸から西岸を見たときに、これだとそんなに島が邪魔になりません。手前の護岸は結構入り組んでいますけども、広い水面があって、その水面越しに立ち上がる基壇という景観をつくり出そうという平面計画ではないかと思います。

【洪】 雁鴨池庭園は浄土世界を表しているのではないかということについて、傍証になるのではないかとの観点で5つのことをおっしゃっていただきました。一面理解できる、納得できる点がありましたし、またそうでない部分がありました。私なりに考えてところを申し上げたいと思います。まず第1に、雁鴨池の西岸部分は直線構造をしており、5

つの建物があつて、その建物が池のほうに張り出しているというご指摘でした。

そこで、浄土変相図から見て取れるというお話をされました。その内容は、一理ある内容ではありますが、韓国の場合は、この浄土変相図が出てくるといいましょうか、その時期というのは11世紀から12世紀、すなはち高麗時代になります。

したがって、この時期に、浄土変相図を真似て、それを象った庭園をつくる、つくるというのが、果たして可能であったかどうかという疑問があります。

第2に、二重基壇をつくったという指摘でした。しかしながら、もともと西岸のほうは地形的な構造が25mほど高い形状になっていました。

そこに建物を建てたのです。

したがって、地形の特殊性、いわゆる違いというのを利用しながら建物を目立たせようとしてつくったということには、確かに合っていると思います。

特に、基壇がある西側の石積みを東側と比べると、東側は屈曲を経ていますけれども、西側に関しては成形をした切石、石を割ってそれを積んであるという点に関しては、視覚的には目を引こうという意図を感じさせます。

そこで、そうした新しい視角、視点でご覧になったわけですが、東から西を見た場合に、高くなっているところから、そこはその高いところは目立つところになるわけです。これが日本の浄土庭園との類似性があるのでないかといふお話をでした。

私が考えますに、この日本の浄土庭園との類似性の有無に関しては決断を出すのは難しいと考えます。しかしながら、視覚的な効果を出すためにこういうような構造になっているというところはうなづけます。

それから、第3に、島、池の底から仏教関係の遺物が大変多數出土したというのはおっしゃるとおりです。雁鴨池には内仏堂というのがありました。これは宮中の宮殿の中にある仏堂院、仏堂を言います。この寺の名前は「天柱寺」です。そのお寺に、阿弥陀仏を祀ったと記録があります。天柱寺というのがあったので、仏教の遺物が出てきたのはそのせいだと言うことができます。

したがって、これをもって雁鴨池を浄土世界である仏教の象徴性を担っていると決めつけてしまうのは妥当かどうか

か、もう少し議論が必要なのではないかと思っております。参考までに申し上げますと、池の中にある5つの建物、池に向かってある5つの建物の中には、内仏堂というお寺、お堂はありません。

4つめのこと、重ねて申し上げたいのは、木の枠が発見されたと申し上げましたけれども、そこで蓮の花を栽培していたというのは、間違いありません。

その蓮の花が阿弥陀浄土の象徴であるために、雁鴨池を浄土世界にあると見るのは、一理あると思います。

5つめにご指摘いただいた島の件について、島が東側に寄っているということで、西側の水面を広く見せたかったということをおっしゃいましたけれども、それは、合っていると思います。

この3つの島の配置については、次に申し上げる3つの理由があると思います。

1つめは、高瀬先生がご指摘されたように、視覚的な効果をねらったものであるということです。(平面図で1と示してある)1番目の島は、入水溝のすぐそばにあります。1番目の島が入水溝のすぐ近くにあると思いますけれども、それは、滻があって、その滻から水が流れたときにそれが両脇に流れるように、割れるように、そういう効果をねらって、入水溝のすぐ前に島があると思います。

そして、2番目の島ですが、それは出水溝の近くですけれども、それは高さが少し低目につくってあります。ですから、1番の島のそばから水が入ってきて、少し低目になっている出水溝のほうの島に向かって、水が雁鴨池を一回りしてそっちのほうに出ていくように高さが少し低目になっているということです。

以上、その5つですね。高瀬先生のご意見を伺って、その5つを通じて浄土世界と思うことについて私なりの意見を申し上げました。

浄土庭園としての蓋然性はあるものの、まだまだこれが浄土庭園であるというふうな確証を得るところまではいっていません。

しかし、私の個人的な考えですけれども、その当時、この中を見ても、天柱寺というのがありますし、そこに阿弥陀仏が奉られていますね。そして、また、蓮の花がそこで栽培されていた、そういう事実を見ましても、新羅時代の新羅の

国教が仏教であったということからも、十分これが浄土世界であった可能性はあるのではないか、浄土思想から来たものであるという可能性は十分あると思います。

田中淡先生からのご指摘があったと思いますけれども、「浄土庭園」という概念は日本の概念であるということであったと思います。

この「浄土庭園」とは一体何かということについて、私なりの考えを申し上げますと、仏教寺院として阿弥陀世界を象徴するものが「浄土庭園」ではないかと思います。

【高瀬】 天柱寺と雁鴨池との関係ですけど、文献では雁鴨池は天柱寺の北にありというふうに出てきます。ですから、おそらく、これは、韓国のはうの文献の解釈がどうなっているのかですけども、普通考えますと、天柱寺というお寺の区画があって、その北側に雁鴨池の宮殿の区画がある。ですから、雁鴨池の宮殿と天柱寺は、隣接はしていたのかもしれませんけども別の区画であると読むのが正しいのではないかという気がします。ですから、天柱寺の遺物が雁鴨池の池に落ちていたと考えるのは、少し無理があるのではないかと思います。

【洪】 その点について、高瀬先生がご指摘されたことが、全面的にそうであるとは申し上げられません。なぜかというと、「内仏堂」といって、これは宮殿の中にあったわけです。つまり、わざわざ宮殿の外に敷地を何かつくって、別区画でつくったものではないのです。内仏堂なので、別のところにということは考えにくいと思います。

【高瀬】 日本の平安時代の貴族も仏像を邸宅中に祀ったりとか、あるいは、平城宮でも大極殿で経を誦み上げるような仏事が行われたりします。古代においては宮殿の機能として、仏教と結びついていますので、宮殿が仏教的な性格を持っていて、仏事が行われていた、あるいは、そういうことがさらに変化していく、平安時代に貴族の邸宅などがその後お寺になるというのはよくあることすけれども、そういう意味で、邸宅だから仏像があったらおかしいとか、宮殿だから仏教関係の性格とは別だということはないと思います。

【洪】 ここで申し上げられるのは、内仏堂として雁鴨池の南側に天柱寺があったわけですね。つまり、その雁鴨池が荒廃する中で、仏像とか仏教用具、そうしたものが水の中に沈んでしまった、出処されてしまったということがあるのではないかと思います。

【小野】 今の高瀬さんの話も大変面白いと思ったのですけれども、確かに仏教が盛んで、この池に蓮が生えている様子を浄土と見る人も多分いたのではないか、ということになる気がいたします。結局、「浄土庭園」とは何かという定義に、また戻ると思います。

少し話を戻して、東アジアの庭園における池の意味ですが、まず中国で秦・漢の時代から神仙世界を表すものとして、池と島の庭園がつくられたということがありました。そこでは海の中にその神仙島が浮かんでいるということで、やはり池は海のイメージでつくられたのだろうと思います。それが中国から韓国や日本のほうに伝わったのだろうと思います。

一方、日本でいうところの「浄土庭園」の池というのは、海のイメージとは違って、浄土変相に描かれるような宝池というものをイメージとしてつくられたものであって、イメージするところが違うのではないかというのが、私が今感じているところです。

【田中(哲)】 古代の庭園は海を設けることがひとつ特徴として見られます。雁鴨池でも、臨海殿という形で、海上に臨んでということで建物に名前を付けたということです。それから、先ほどの中国の例でも、鯨の彫物などというのも海の風景のひとつの表し方だと思います。日本の場合、池が海の様子を表すために、例えば毛越寺などでは、荒磯をつくり、洲浜をつくり、ということになると思うのですけども、それは「浄土庭園」の池であるというのは海でないかということを示しているひとつの事例でもあると思います。

【小野】 毛越寺がモデルにした「浄土庭園」の池のというのは、もともとが住宅庭園の池をモデルにしてつくられたもので、それが浄土庭園にもそのまま転嫁された、という理解ができるのではないかと思います。



【田中(哲)】 ということは、毛越寺はもともと住宅だったという理解ですか。

【小野】 そうではなくて、毛越寺の場合は、法成寺、法勝寺という系譜の上にあるもので、その法成寺や法勝寺の庭園の池のデザインについては、もともと邸宅・宮殿系の庭園における池で、そのまま海のデザインを模していたわけです。それが「浄土庭園」に転嫁していった、その系譜の延長線上に毛越寺の庭園があると、私は理解しているわけです。

【田中(哲)】 分かりました。ここからは「浄土の画像における池」ということとも関連付けて議論を進めていきたいと思います。

■浄土の画像における池

【尼崎】 今の小野さんの話にも少し関連するのですが、これは、自然崇拜や理想郷など、いろいろな思想的なことを含めて、ある「観念のこと」があると思います。それと自然中心の「風土性」と生活空間という「属性」とも言えると思います。それらを切り離して考えてしまうと、それそれが何か1本の系譜であるように見えるけども、実はそうではないのではないかということだと思います。これはひとつの仮説です。

例えば、浄土変相図については、呂舟先生の講演で、最初に300もの浄土変相が描かれたということがありました。それは、仏教の信仰を広めるための1つの手段だというふうに考えるとします。そこには何らかの形でその現実のモデルがあったと考えざるを得ないということでした。その場合、時の権力者の宮殿なりにそのモデルを落とし込むと、最も受け入れやすい。そうすると、呂舟先生も書かれていますように、唐代の宮廷建築との関係が何か明確に判明していく。要するに、世俗である概念を受け入れやすくするために、どちらかというと「権力者」あるいは「みんなに受け入れられている空間」に重ね合わせるという手法を取ったのではないかと想像されるわけです。これはとても自然なことのように思います。ですから、浄土だから方形というよりは、世俗の空間の最も高貴なもの、あるいは権力のある空間がそういう空間だったから、それと結びついたのではないかというように、考えられるわけです。

【田中(哲)】 1つの要素だけではなくて、自然崇拜とか、基本的な理念と、信仰を広げるというそういう機能的話と、それから定着して認められている空間とタイアップしてい

るということです。そういう幾つかの趣旨を併せて考えないと見誤るということです。

【尼崎】 ですから、小野さんのご意見も、それは生活空間として当時最も権威があった庭園の形態に思想をかぶせれば、当然それを基にした造形として展開していくと思います。形態や配置だけではなくて、そういう中から生まれてきたことを考える必要があります。

例えば、山中淨土のことについても、淨土思想として山中淨土がどこでできたのかという話から始めるよりも、本中の講演で、最初に御神体としての三輪山が出されたように、自然信仰が山岳信仰や修驗道として展開していったとします。そして、それらがいわゆる淨土思想というものに乗っかってくると、池とお堂があつて、その向こうに山があるということと重なって二重構造になります。そのような日本固有の幅縫した思想を統合すると、淨土庭園のような空間ができるいくのではないかというふうにも考えられます。

【本中】 いまの尼崎先生のご意見については、私もそのとおりだと思います。基本的には、山中に淨土があるという日本人の意識は、記録的に古くから出ています。それは、山中にこもって修業するという修驗道の世界とも結びついています。人間の死後には山の高みに靈が昇っていくって、その果ては天へと昇っていくということです。西方にある淨土の世界とは違いますが、死んだら高いところへ行くのだという考え方があったわけです。ですから、山の向こうにパラダイスがある、山の上にパラダイスがあるという考え方、日本人の山を神聖視する意識の奥にあったと思います。それは、淨土世界とも結びきます。例えば「兜率天淨土」という弥勒の淨土の世界は山の上の天高くにあるわけです。淨土とは正式には言えないものだと思いますけ



れども、そういうパラダイスがあるという意識があるわけです。そういう仏や仏になろうとして励んでいたり強制的で、そういう世界を求める意識と、それから山の中に入つて呪術的な力をつけようとする修驗道の世界などもすべてやはり融合する形で、山というものが持つている神聖性というのでしょうか、神秘的な力みたいなものは日本人の中にあつたのだと思います。

もう一方では、庭園は「遊ぶ世界」ですね。この世において淨土の世界に遊ぶためにつくられたのがおそらく「淨土庭園」であろうと思います。「仮の世界」と「遊ぶ世界」というのは、基本的には分離しているもので、功徳を積んでさまざまな修業の果てに淨土世界での誕生がかなうという考え方も一方にあるわけです。ただし、貴族の間では、さまざまな作善を積むことによって淨土世界に転生できるという考え方方も出てくるわけです。そこで、仏像をつくったり、伽藍造営の一環として庭園をつくったりということが、淨土の世界に生まれ変わるための重要な功徳の積み方だというふうに捉えられてきたところがあると思います。庭園と淨土、あるいは仏道とがつながる機縁というのも、やはりそこに、この世において淨土の世界にまみえたい、遊びたい、そこで詩歌管弦をしながら、それでもやはり仏の世界にまみえたいという当時の貴族の要求があつただろうと思います。

無量光院で、背後に山があり、池があり、そして仏堂があり、というこの3つの要素が1つの軸の中に位置づけられて完成される背景には、尼崎先生のご意見のように、山に対する古くからの日本人の意識などが複合して反映していると思います。また、小野さんからのご意見のように、庭園が住宅の中で完成してくると、それが遊ぶ世界であり、そして仏の最も重要なパラダイスの世界に遊ぶということと結合して、末法の世の中に入った12世紀に、1つの伽藍のスタイルとして、あるいは庭園のスタイルとして完成してきたのが、「淨土伽藍」あるいは「淨土庭園」と呼ばれているものの流れなのではないかと思います。

【田中(哲)】 このことは、「淨土庭園」の定義というのをどうするのかということに繋がりますし、次の「淨土庭園における池と堂舎との関係」とも深く関わってくるので、そこも含めて「変相図」、それから「池と堂舎の関係」についての検討に進みたいと思います。すなわち、池と堂舎がどういう

位置関係にあるかということ、あるいは、建物の機能、それからその堂の前に必ず池があるのかという配置の問題などがあるかと思います。

■浄土庭園における池と堂舎との関係

【杉本】 本中先生のご意見との関係で、少し感想を申し上げます。

もともと浄土変の中には、宝鏡閣の背後には虚空があつて、特に自然の山とかが描かれているわけではありません。そのことは、平等院の仏堂壁の浄土変にも見られます。

それと、日本の「浄土庭園」と言つたらいいのか、「臨池式伽藍」と言つたらいいのか、分かりませんが、京都の中で成立してくるそいつたものは、最初から背後に山を背負うのかといったら、そういうこともありません。おそらく山が仏堂の後ろに出てくるというのは、それより少し後のことで、無量光院はその中の最初のかなとは思うのです。

もともと当時の日本人には、山の中にもう1つの世界があるという「山中他界觀」があって、おそらく浄土信仰の中に、観想念佛によって自分たちが極楽に往生しようという考え方から、たぶんどこかの段階から、弥陀がこちらに来ること、すなわち、来迎を願うほうに信仰が移っていくのだろうと思います。その来迎を願うことが強くなっていくときには「山中他界觀」の問題がある、いわばどこから弥陀が来るのか、その来る目安として山が、「臨池式伽藍」の背後に山が出てくると考えたのではないのかなと、私は考えています。

【田中(哲)】 「浄土庭園」の機能を考えるとき、極楽往生を目指すとか、追善供養の伽藍とかがありますが、今の話のように、来迎のための装置ということになると、仏堂と苑池だけではなくて、自然がどのように含まれるのかということに関わると思います。

【大矢】 中国の場合は「神仙島」、韓国のは「方池円島」、



そういうふうに聖なるものを隔離する空間としての池という意味合いが強いと思います。日本でも、浄土思想が伝わっておそらく間もなくして、彼岸と此岸、こちら側とあちら側という考え方になってきた。無量光院の仏堂の後ろに山があるというのは、全体を含めてあちら側だと思います。

しかし、私はもう1つの視点があるのではないかと思います。特に浄土ということに絡んで池を考える場合には、やはり阿弥陀経的なあるいは観無量寿経的な原点に帰る必要があるということです。そうすると、そこでは極楽世界、あるいは浄土世界そのものが池となります。この場合、浄土そのものが池で、池は隔てるものではありません。そこでは何をするかというと、もともとの意味は、沐浴をしているということです。その聖なる池に仏が生まれた、池そのものが聖なるものであるということが、もともとの仏教の中心だったはずだと思います。沐浴のための浄土の池は、阿弥陀経によりますと四角の池で、しかも四方から階段がある。この階段というのは、おそらくベナレスのガンジス川の川べりの階段のようなイメージで、それは自然の川ですから乾季と雨季では水位が違っているので、そこに沐浴しに降りていくためには当然階段が必要なわけです。

私は、この庭園における池の意味というのも、そういう移り変わりというのを考えるべきではないかと思うわけです。それで、もう一度平泉へ戻って考えますと、平泉の場合は、再び池が彼岸、此岸の区別ではなくて、またそのまま浄土の世界になったのではないかというように考えることができると思います。

【田中(哲)】 少し新しい議論だと思います。池というのは、結界とか此岸・彼岸の区分だけじゃなくて、池そのものが浄土の世界であって、沐浴という行為を通じて浄土の世界に入ることになるのではないかということでした。

【呂】 もし、浄土ということにおいて庭園と池の関係を考えるのであれば、やはり仏教法典のほうにも立ち返る必要があるかと思います。今回の研究において幾つかの文献に当たってみました。例えば、法華経の中には「浄土とは煩惱のない世界である」というような記載があります。また、阿弥陀経の中にも「七宝蓮池の中に浄土が溢れている」というような記載があります。その四方には階段があり、金、銀、瑠璃、ガラス、銅でできています。その上のほうには楼閣

があって、同じように金、銀、瑠璃、ガラス、あるいは瑪瑙などのような七珍八宝というような装飾がなされています。さらに、蓮池の色は、金あるいは黄色、赤、白、さまざまの色の光を放っています。そのような、たくさん美しい描写があります。淨土世界においては、美しい音楽が流れています。あるいは時間によって異なる鳥のさえずりが聞こえたりというような描写もあります。そして、こういう描写を見ると、仏教の発祥の地であるインドやその周辺国家、例えばネパールなどの仏教建築、あるいはその環境と非常に似通ったところがあるのではないかと思います。

すなわち、淨土を考えるときに、淨土変相図などから想像される世界だけに限られるものではないのではないかと思われるわけです。そして池の形については、方形であつたりあるいは幾何学的だったりというような話になります。たけれども、それはインドの影響を受けているのではないかと思います。また、仏教伝播の際、伝える道具のひとつに淨土変相図などが使われたわけですから、1つの画像の中に、淨土の世界の要素、すなわち、宝樓閣や七宝蓮池、八功德水を描くとなると、非常に制限があるかと思います。

日本には、鑑真和尚が淨土変相図をもたらしたということが正倉院関係の文献の中にあるようです。しかし、日本にもたらされた後、日本の状況に応じて変化を遂げるということは十分考えられます。例えば平泉の毛越寺の庭園で既に池は方形の形をとっています。

どうしてその方形の池が、曲池となったのか、日本はどうしてそういうような変化が起きたのかというのは、ご在席の皆様方のご意見をさらにお伺いしたいと思います。

【田中(哲)】 このことについてはいかがでしょうか。

【高瀬】 日本において「淨土庭園」に関連する一番古い事例と言えば、今のところ阿弥陀淨土院にまで遡れると思います。阿弥陀淨土院の造営は西暦760年代で、島を持つ曲池には、池の中に張り出す建物が建っていて、その建物につながる廊状の橋もあります。

【田中(哲)】 今のところ阿弥陀淨土院については一部しか発掘調査されていないので、詳細はさらに調査しないとまだ分からぬ部分がありますが、いずれにしろ、阿弥陀淨土院においても、曲池の可能性があるということで、日本の寺院庭園においては、かなり当初から曲池というのが採

用されていたということが窺われる重要な事例と言えます。

池と堂舎の関係については、田中淡先生に少し補足願いたいと思います。

【田中(淡)】 仏典の原典とその内容を画像化した「觀經變相図」という話の原点に戻って、それと実在した庭園の関係について補足したいと思います。

仏教世界における淨土というものは、先ほど呂先生も言われたように、明らかにインドの仏典起源と言えます。インドの仏典に出てくるものはすべて四角です。それが源流であるということは動かしがたい。問題は、敦煌の壁画に見られるような「觀經變相図」、日本にはそれが「當麻曼陀羅」に見られるようななかたちで伝わっているその図像では方池であるのが、日本の寺院庭園では何かの理由で曲池になっている、ということです。

淨土世界を反映した庭園の実例が非常に少ないと、最初に私は言いましたが、例として写真をお見せした昆明の圓通寺というのは、実物で唯一ほとんど觀經變相図にピッタリした方形の池を持つ事例です。さらに、実はまだ誰も今まで指摘していませんが、実物ということでなければ、唐の時代に、真四角の苑池で、中島があつて、文殊菩薩を安置する龍堂という建物が中央にあるという事例を窺うことができます。五台山を訪れた円仁の記録に、五台山に中台、西台、東台とあって、中台には4丈四方(40尺×40尺)の池があるということが見られます。その真ん中に、中島に龍堂と名づく小堂がある、と書いてあります。ですから、少なくとも中国の場合は、インド起源の仏典に極めて忠実なかたちで、実際に、四角い池をつくり、中島を設けていたということが記録にあるわけです。

それから後、日本に伝わったときに、「當麻曼陀羅」のような「觀經變相図」の1タイプが絵画作品として日本に招来されて、それに基づいて、いわゆる日本で言っている「淨土庭園」のような曲池のものに繋がるのだろうと思います。どうしてそうなったのかについては分かりません。ただし、中国には方形苑池のものが実在したということは押さえておく必要があります。いきなりインドの方池から突然に曲池とはならないでしょう。

【小野】 日本では仏堂とセットになるのが当初から曲池であったということについては、これは住宅庭園からそのまま

転用したからだと思います。そこでは、池と仏堂というものがセットになっているという点に集約して考えたから、曲池であるか方池であるかということにはこだわらなかつたといふうに解釈するしかないのかなというふうに思います。

【田中(哲)】 ただ、住宅庭園からすべて変遷しているわけではないですね。

【小野】 阿弥陀浄土院を一番最初の例とすれば、それは藤原不比等の邸から繋がっているということは明らかなので、それがプロトタイプになったということではないでしょうか。

【田中(哲)】 さらに調査したら分かると思いますけれども、藤原不比等の邸がそのまま阿弥陀浄土院に変遷しているかどうかということは、今後の重要な課題のひとつと言えます。

【工藤】 先ほど來の議論の中で、「神仙思想」、それから仏教にかかる「淨土」という2つのキーワードがありました。それらは、あたかも対立する別個のもののような形に理解されることがありましたけれども、そもそも中国に仏教が入ってきた当初は、神仙の1つとしての仏という時代があつたと思います。その後で徐々に、神仙と異なる性格を持つ仏という方向に進んできたということがあるのではないかと思います。

その次に、神仙の世界、海に神仙の島があるとか、そういうものが庭園の源流になっていくのだろうというお話がありました。司馬遷の『史記』に書いてある始皇帝のお墓の中の姿がもし事実であるとすれば、始皇帝のお墓は、地下宮殿の中に水銀でたくさんの川や海をつくり出したということになります。中国の場合、亡くなった権力者が葬られる地下宮殿がもう1つの死後の宮殿であったわけですから、中国の場合にはそういう神仙世界というものが、この世だけではなくてあの世にもつくられたという点で、少なくとも日本ではそういうことが無いと分かります。では、朝鮮半島ではどうなのか。壁画というところまで視野を広げると、高句麗にはおそらくそういうことはあると思います。新羅の古墳は地下宮殿ではないように思いますので、そこら辺で、あの世に神仙世界を持っていく地域とそうでない地域というものが生まれてくるというようなことが考えられます。

日本の池を持つ宮殿と、中国の本来のもののあり方というのが、どう違うかということを考えるのかということが

原点もあると思います。

【小野】 「神仙世界」というのは、やはり「不老長寿」を求める世界ですよね。ですから、「淨土」が「来世の淨土」だとすると、そこに根本的な違いというのはあるのではないかという気がします。その通り、田中洋先生は、いかがお考えでしょうか。

【田中(淡)】 ご指摘のとおりと思います。

神仙世界というのがありますね。これは昇天するということがもとになっています。それは、とこしえの命を得て昇る、つまり、不老長寿です。そのことを求めて秦の始皇帝も漢の武帝も必死の努力をして仙薬をつくり出し、いろいろな鶴物だとか水だとかをたくさん実際に飲んでまで、それを実現しようとした。先ほどご指摘のあった始皇帝陵のこともうそで、人魚の油でもって火が消えないようにして永久に地下空間が明るくなるようにしているとか、水銀で大海をつくり、水銀の川を流したとか、そういうのも明らかにそうで、死んだ後地下に埋められるのですけれど、それは仏教以前の話ですが、中国のネイティブな宗教観あるいは死生観と言えば「魂魄この世にとどまりて」とよく言う、そのことをを目指しているわけです。その「魂」と「魄」と二種類の「たましい」があって、メンタルなほうのスピリットといういは永遠不滅だから天に昇り、フィジカルなほうのボディは地下に埋まるわけです。だから、「魄」は死んでいるのですけど、「魂」は死がない。「魂」はスピリットでエネルギーですから。そういうのが中国のネイティブの、仏教伝来以前のはるか昔からの老子・莊子の世界であって、その伝統が道教に繋がります。神仙思想というのは、まさにそれなのです。

つまり、中国庭園の原型というのは、そちらのほうから発している。淨土というのは「欣求淨土」で、杉本さんの非常に分かりやすい説明にあった「來迎を請う」、すなわち、來迎を欣求するという方向に変質するということでした。それは日本の中の話ですが、非常に分かりやすい説明です。それは、本中さんのプレゼンの中にあった「二十五菩薩來迎図」からみても、左上から光線が射てきて二十五菩薩が降りてくる、つまり、その往生思想というか、それはとても日本の展開だと私は思いますけども、小野さんが言われたように、根本的に異質な生命観というか、死生観だと思います。

■日本に展開した淨土庭園の特異性・希少性

【田中(哲)】 次に「日本に展開した淨土庭園の特異性・希少

性」ということで、平等院から無量光院、それから法成寺・法勝寺から毛越寺へと続く系譜について、杉本さんから補足をお願いします。

【杉本】 平泉の浄土庭園と京都の浄土庭園という、それぞれを表す概念や単語が無くて少し言いにくいのですけれども、それらの基本的な差は次のように考えられます。京都における基本的な「臨池式」あるいは「苑池式」伽藍については、法成寺を最初にすればいいと私は思っていますけれども、その基本は、たくさんの仏たちが庭園の周りに、庭園の前の仏堂に祀られているということと言えます。それは、都の貴族たちが長い時代の中で彼らが築き上げてきた仏教に対する考え方であって、仮に、純粋な形で何かだけを、例えば、阿弥陀浄土だけを頼っているわけではなくて、さまざまな仏の功德を一身に集めたいと思っている、普通の当時の貴族たちの考え方方がそのまま反映されているのだと思います。

基本的にはそのような、多様な仏教の仏たち全体に対する信仰があるわけですけれども、それを形としてつくっていこうと思ったときに、平安時代中期から非常に日本の中で興隆する阿弥陀浄土をイメージさせるように工夫されている観経、親無量寿經というものが、非常に有効に作用したのだと思います。ですから、「浄土庭園」というのは、浄土教によって伽藍が構築されているとかということではなくて、どちらかというと、漠然とした浄土への信仰というものを形として見せたものが法成寺であったのだろうと思います。したがって、当然、大日如来とか密教の諸尊も全部そこに祀って全く平氣だったわけです。

こういうことを踏まえて、平泉を見てみると、無量光院は、当然、平等院を見本としていますから阿弥陀の浄土ですけども、特に毛越寺などは薬師如来を祀っていて、少し違います。一方で、京都の法勝寺もまた本堂が胎蔵界の諸尊で、中島に立つ八角九重塔と愛染堂には金剛界の諸尊を祀っていました。そのように、実は京都の中における苑池式浄土伽藍というのは、阿弥陀堂があると同時に、極めて強い「密教」性を持ちながら存在しています。そういうものが、実は平泉の中では、毛越寺においては、阿弥陀といふ「圓教」側に本尊がシフトして、庭園の形だけはそのままでいるということです。

さらに平泉と京都と比べて面白いのは、例えば法勝寺でも法成寺でも平等院でも、当時京都でこの程度の寺院であ



れば大体持っていた「五大堂」というお堂が、平泉には無いという点が見て取れることです。それが何でそうなっているのかというのは、よく分かりません。このことは、平泉に「密教」がないということではなくて、少なくとも、「密教を表現するお堂」が明確に見出せないということを1つの特徴として指摘できます。それは、平泉がどういう選択をしたかという話と関係することですが、平泉が京都の持っているものをそのまま持ってきているというようなことは、少なくともお堂に関しては無いと言わざるを得ないと思います。私は報告の中で、都でつくられたものが「純化して伝播している」とも言いましたが、京都の貴族たちが持っていた多様な仏に対する信仰というものを「もう少し整理して少し発展させている」という言い方もできると思います。

【小野】 杉本さんがつくられた「平安期浄土教寺院の変遷」という図は、大変よくできていて感心しているのですが、法成寺の前の段階で、無量寿院の段階、すなわち九体阿弥陀堂だけがある段階があったということを、この図に加えておく必要があると思います。九体阿弥陀堂と池というセットが、もう1つ別の道筋として、現存する淨瑠璃寺の庭園に繋がっているということを表現しておけば、かなり説得力があると思います。

それと、平等院ですが、これは、建築史の方面からの研究の成果ですけれど、藤原頼通の自邸である高陽院が、いわゆる「寝殿造住宅」とは言いながら、四方に池を持つというふうな非常に特異な形を持っていたことがあります。四方に池を持つという高陽院のイメージがやはり平等院に反映をしているのではないか。この図は寺院庭園に関することとしていますのでこれに加えるかは別にしても、そのベースにはそういうものもあったかも知れないということは、注目して

しかるべきだと思います。さらに言えば、平等院から法勝寺に矢印が行って、そこから毛越寺に行っている矢印が必要なのは疑問です。むしろ、毛越寺のほうは、法勝寺からの矢印だけで説明ができるのではないかと思います。

いずれにしても、この図では、広い意味での浄土伽藍が、平泉で完成形に到達したことが分かりやすく表現されていて、とても優れた図だと思います。

■平泉の浄土庭園群の代表性・典型性

【田中(哲)】 伽藍配置の変遷、顕教・密教の違い、お堂に祀られた仏さまの違いなど、いろいろな形で変遷があるということが確認されました。それらが変遷しながら、平泉に向かって繋がっていったというのは、紛れもない事実です。

そこで、これまでの議論を踏まえて、「平泉の浄土庭園群の代表性・典型性」ということについて、深めていきたいと思います。

【本中】 平泉の寺院伽藍につくられた庭園、あるいは、浄土様式の庭園と言ったらしいのか、その庭園の顕著な普遍的価値ということですが、いろいろな浄土を表す図像が日本に入ってきて、それが実際に実体化されるときに、それまでに日本で既に確立していたさまざまな庭園の意匠や技術そのものが優先されて、それが寺院庭園の中に生かされていったということが想定できると思います。それともう1つ、私自身は、やはり日本人が持っているさまざまな自然に対する信仰の精神、あるいは、自然神崇拝思想と言つていいと思いますが、それが融合した形で、平泉の伽藍の中に実現されているということが、浄土庭園の最も完成されたスタイルであると言えることだと思いますし、純化されているというふうな意味でも言えるのではないかという気もします。

杉本さんの図で見ると、法勝寺の伽藍配置にしても、毛越寺の伽藍配置にしても、それ以前の興福寺の伽藍などの奈良時代の回廊で囲まれている伽藍配置形式から出発してきていることは間違いないわけで、そこに阿弥陀淨土を象徴した阿弥陀堂と庭園とのアンサンブル形式が融合する形で法勝寺のような伽藍配置や、それに先行して法成寺のような伽藍配置が成立して来るのだと思います。

平泉では、薬師淨土を象徴する形での毛越寺ができたり、あるいは自然の山との一体感をより認知させる形での阿弥

陀淨土の世界としての無量光院が成立したりするわけですね。それらの伽藍配置の中にも、先行する奈良時代の伽藍配置の系統が継承され、なおかつ自然の崇拜思想、自然神に対する崇拜思想という信仰形態みたいなものが反映されて、両者が融合する形で無量光院において実現したと言えますし、あるいは、毛越寺の伽藍配置にもそのことが投影されているという点が、平泉が持っている大きな特質なのではないかと思います。

もう1つは、『作庭記』をどのように位置づけるのかということです。中国や朝鮮半島の思想的な影響も当然『作庭記』の中には認められるわけですが、少なくとも作庭の技術書としては、世界でも類を見ないほど古いもので、それとまったく、細部にわたってもコンセプトにおいても照合できる形で毛越寺の庭園が現存しているということ自体、他に類例を見ない顕著な価値を持っているのではないかと思います。

【田中(哲)】 田中淡先生が説明されたように、いろんな風水の思想とか、あるいは『宅經』など経典は当然中国のものを参考にしてつくったということがありました。そういう影響を受けてつくられたのが『作庭記』であると言えます。それから、陰陽五行説や四神思想、鬼門のことなど、いろんな面で中国の影響を受けたのは間違いないと思います。それに基づいて、現実の庭園の中で、特に毛越寺、あるいは、親自在王院でもその一部は言えるんですけども、そういうのが意匠として明確に分かるということは、極めて重要な事実であると思います。それもどのように庭園が伝わってきたかの1つの確証にもなるのだと思います。

【工藤】 それでは、「平泉」を歴史学上どう位置づけることができるかということと、これまでの先生方のご指摘を結びつけるような試みについて、少しお話したいと思います。

古くは、平泉のさまざまなお寺などについて、京都から遙か遠くに流れてきてたまたま残っていたものだというような考え方とか、あるいは、奥州藤原氏がひたすら京都に憧れて、京都のいろいろなものを、とにかくはめ込んだのだと、そういう理解が非常に強かったように思います。それを見直すような見解が、歴史学の分野ではあります。奥州藤原氏は、12世紀、約100年間東北地方をほぼ支配した。そういう意味では奥州王でした。これは、京都の中央政権から完全に自立していたというわけではありませんが、一

一定程度自立した動きをすることを、京都の中央政権側も容認していたというふうに考えられます。

そういう意味で、中国の歴史の上でいろいろな地域、そして時代に成立した地方政権、しかも都から非常に離れたところに成立した地方政権という意味で、平泉は辺境の地方政権の都であったということになります。中国の場合も同様と思いますが、辺境の地方政権の王は、中央政権の都の中から、その都にふさわしいものを選択的にピックアップして、それを移植するという大きな傾向があったように思います。それは、先生方が指摘されたように、京都で平安時代の11世紀を中心とした時期に見られるような寺院の姿がそのまま平泉に入っているわけではないという観点から理解できるのではないかと思います。

平泉の中心となる中尊寺については、既に先行学説にもそういう考え方がある、京都における延暦寺を意識したものだという説があります。その延暦寺を大きく性格づけている人物に、延暦寺のあり方、天台宗のあり方を大きく規定した慈覚大師がいます。慈覚大師は五台山に巡礼して、そこで見聞してきたものを延暦寺にもたらした。それは仏像であったり、お経であったり、いろいろするわけですが、五台山を1つのモデルにして延暦寺を立派なものにしようとした。その中には、延暦寺において果たすことができた部分も、果たせなかつた部分もあります。その延暦寺におけるそのような考え方が、平泉に非常に強い影響を及ぼしていることが、中尊寺というお寺のあり方そのものに見ることができます。それから、毛越寺にも見ることができます。すなわち、慈覚大師が五台山巡礼の行き場

り、そしてさらに中国山東省から新羅の人たちに多大な便宜を図っていただきながら日本に帰国したという状況の中で、山東省の港に祀ってありました赤山明神、これを日本を持って来て、京都側の延暦寺の登り口のところにそれをお祀りした、それと同じものが、神様の名前こそ少し変わりますが、平泉にもたらされて、実は、現在も毛越寺の常行堂に祀られています。それは、まさに、1つの証拠であろうかと思います。

そのように考えてみると、平泉のあり方というのは、中国、特に五台山、そして中国の山東省の一帯の端に当時9世紀にあった新羅の人たちの信仰のあり方というようなものと深い関わり合いがあって、それが京都を経て選択的に平泉にもたらされたというような、そんな視点も参考になるのではないかと思います。

【田中(哲)】 いまのご意見で、選択的移植というのは当然、辺境の地方政権にはあったと思います。庭園についても、浄土の世界の表現の仕方についても、そういうことがあったのではないかと思います。ぜひそれを含めて、明日、取りまとめていきたいと思います。

【平澤】 田中議長、それから先生方、どうもありがとうございました。

長時間にわたり、いろいろな議論をいただきました。明日の議論のために、これらのことと少し整理させていただいて、また明日は、一体どういうところが成果で、どういうところが課題なのかということを確認していくような議論ができるばと思いますので、どうぞよろしくお願ひいたします。



5. 討論－3(5月21日)

■結論文案に関する説明

【平澤】 昨日、一昨日の議論を踏まえ、事務局の方で、議長と相談させていただきながら、この国際研究会の成果に関する整理の文案をご用意させていただきました。この資料にお目通しいただきながら、本日、有意義な議論をいただければ幸いです。

【田中(哲)】 いま事務局からありましたように、昨日までの議論に基づいて、この国際研究会の成果に関する資料を用意しましたので、それに目を通していただきながら、最後の議論を進めたいと思います。まず、この資料について、読み上げさせていただきます。文化庁の本中さんの方からお願いします。

【本中】 ありがとうございます。では、国際研究会の成果について、奈良文化財研究所と文化庁を代表して、ご報告させていただきます。お手元には、仮に英語の文案もご用意していますけれども、これについては参考用としていただき、これから検討を踏まえて、最終的には電子メールなどで確認していただき、文案を確定したいと思いますので、よろしくお願いいたします。

タイトルは「東アジアにおける理想郷と庭園に関する国際研究会の成果について」ということで、本日付で独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所と文化庁の下に文案をつくってあります。

2009年5月19日から21日の間に、文化財研究所と文化庁の主催のもとに、文化財研究所において、「東アジアにおける理想郷と庭園に関する国際研究会」が開催されたわけです。この研究会では中国、韓国を代表する2名の研究者をはじめ、

日本国内から6名の研究者の方、専門家の方を中心として、標記の主題に基づく研究成果の交流と議論が行われました。

この研究会における目的と論点、結論を以下にまとめています。

まず、目的ですけれども、3つありました。

目的の1番目は、日本において8世紀から14世紀にかけて造営された仏の淨土世界を表現する庭園。ここではこれを「淨土庭園」というふうに呼んでおりまして、英訳で、Pure Land Gardenというふうに定義づけていますが、この本質を明らかにすること。このような定義でいいかどうかということについて、また英語でこのように呼んでいいかどうかということについて、最後のご意見を賜ればと思います。

目的の2番目は、以上のような庭園を「淨土庭園」と呼ぶことが正しいとするならば、その淨土庭園の系譜を明らかにするために以下の点について明らかにすることでした。1つめには、中国大陆、朝鮮半島、日本列島の各地域において形成された理想郷の思想。2つめは、それらが永遠の理念、意匠、技術に与えた影響。3つめには、各国のそれぞれの庭園における表現上の類似点や相違点、この3点でございました。

目的の3点目は、一群の淨土庭園が現在もなお継承されている「平泉」、これは日本が世界遺産暫定一覧表に記載し、なかなか今、再推薦の途上にある資産ですけれども、「平泉」が持っている顕著な国際的な価値を結果的に明確化することでした。

大きくは、以上の3つの目的のもとに、この国際研究会では、3つの主題について、それぞれに論点が設定されたわけです。

主題の1つめは、「人間と自然との関わり」についてでした。その関わりが庭園にどのように表現されてきたのかということです。人と自然との関係を芸術の作品にまで昇華させた東アジアの庭園の成立から発展に至る系譜、あるいはその特質について検討を行い、3つの論点に基づいて議論が行われました。

論点の1は、「庭園文化の基層を成している人と自然との関わり」です。これは各国の一般的な意味での人と自然との



関わりです。論点の2は、それらが庭園文化として伝わり発展していく過程についてです。論点の3は、それらがそれぞれにおいてどのように庭園に表現されたのかということでした。

主題の2つめは、「庭園における池」ということでした。特に浄土庭園においてはそうですが、池が持っている意味というのがとても大きいということから、庭園における池、その池を持ってきた意味についての変遷、形の変遷について議論が行われました。中国と朝鮮半島では、「浄土庭園」の事例が現時点においては確認されていないことが、この国際研究会の結果、ほん明らかになったのではないかと思っておりますが、「浄土庭園」が日本において成立した可能性が高いとすれば、その系譜や特質について東アジアの諸国が共通して持っている理想郷を庭園に表現しようとする方法、その中で庭園と池との関係がどのようなものであったのか、このことを検討することによって、以下の3つの点について議論が行われました。

まず、論点の1は、広い観点からの「庭園における池」の問題でした。そして浄土世界を描いた浄土変相図などの図像における宝池の性質をその課題としました。それから、実際の浄土庭園における池と仏堂との関係、この3点についての議論が行われました。

主題の3つめですが、そのような「理想郷と庭園との関係」ということでした。これは東アジアのどの地域においても理想郷としての庭園にさまざまな自然の姿が表現されてきたわけですが、そこを見る共通する性質と多様な方法、姿、性質、そういうものについての議論が行われました。

東アジアにおけるその理想郷と庭園との関係を包括的に検討して、特にここでは「平泉」に残されている一群の浄土庭園が持っている顕著な普遍的価値について明らかにするために、論点3つか設定されて議論が行われました。これは1番めと2番めの主題にも関係しますけれども、東アジアにおける理想郷の表現としての庭園の観点からの平泉へのアプローチ。そして、日本に展開した浄土庭園の独自性と希少性の観点からの平泉へのアプローチ。それから3点目には、結論的に東アジアの庭園文化史上における平泉の一群の浄土庭園の代表的、あるいは典型的な性質について議論が行われました。



以上の目的と論点に基づいて、結論です。読み上げさせていただきます。

中国、韓国、日本の3つの国には、東アジア地域に独特的の自然と人間との関係を表す庭園文化がはぐくまれ、それらを反映して形成された多くの歴史的庭園が現在する。各國、各地域の庭園には作庭の理念、意匠、技術の各側面において、共通する性質が認められる反面、おのおのの歴史的、文化的背景に基づく固有の性質も認められる。

その中でも最大の共通点は、庭園が仏教、神仙思想、陰陽五行説などのさまざまな思想、理念に基づき、自然を警護し、自然になじみ、自然の姿を写しとすることを目的に、現世における理想郷をあらわそうとして創造されたことである。庭園は、中国から朝鮮半島、及び日本へと作庭思想が伝わる過程で、おのおのの地域に固有の自然観とともに融合しつつ独自の発展過程を経て、各國に固有の庭園文化として定着した結果、形成された文化的な資産である。特に日本の場合には、中国及び朝鮮半島から日本へと伝わった作庭思想が、日本に固有の自然崇拜の信仰形態、自然観とも融合しつつ、中国、朝鮮半島とは異なる独自の庭園文化とそれをあらわす庭園が形成された。

その中でも特筆すべきは、仏の浄土世界を理想郷とみなし、それを具念する独特の「浄土庭園」の様式が含まれていることである。それらの顕著な価値を正当に評価するためには、以下の点について十分考慮することが必要である。

1点目、現時点では中国及び朝鮮半島において、浄土庭園の実例は確認されていないということ。

2点目、これに対して、中国大陆及び朝鮮半島から人と自然との関わりにより創造された庭園の理念、意匠、技術が、仏教及び神仙思想とともに日本にもたらされ、日本に固有

の自然崇拜の信仰形態、自然観とも融合発展する過程で、世界の他の地域に類例を見ない「浄土庭園」の様式が確立したこと。

3点目、平等院庭園を含む数々の浄土庭園の中でも平泉の一群の浄土庭園は、2点目において述べた日本庭園の発展過程における最も典型的、代表的な浄土庭園の事例であり、他に類例を見ない傑出した資産であるということから、以下の3点に基づき顕著な普遍的価値を持つ可能性が極めて高いこと。

1番、浄土世界を象徴的に表現した仏堂、庭園群と、それらの考古学的遺跡は6世紀から12世紀に中国大陸及び朝鮮半島から、日本列島の最東端へと進んだ、建築庭園の意匠、設計に関する人類の価値觀の重要な交流の到達点を示している。

2番、浄土世界を象徴的に再現しようとした優秀な芸術作品であり、それらの考古学的遺跡をも含め、建築、庭園の分野における人類の歴史の重要な段階を示す傑出した類型である。

3点目、平泉において一群の浄土庭園が完成する上で重要な意義を持ったのは、複合的性質を持つ日本独特の仏教思想である。それは世界的な思想体系である仏教思想が6世紀から12世紀に日本列島の最東端へと到達する過程で、法華經、密教、浄土教のみならず日本古来の神道を含む自然崇拜思想とも融合し、地上に現存するものも地下に遺存する考古学的遺跡をも含め、浄土世界を体現した庭園群の意匠・形態へと直接的に反映されたものとして、顕著な普遍的意義を持つ。

以上が結論の文案です。議論はかなり多岐にわたって、そして本来結論として盛り込まなければいけない事柄は詳細にわたるかと思いますが、おおむね要約すれば以上のようになるのではないかと考えます。足りない点、そ

れから表現のあり方で具合の悪い点がありましたらご指摘いただければと思います。

最後に、主な参加者として、2名の中国そして韓国からおいでになった呂先生と洪先生。そして6名の研究者、それから2名のプレゼンテーションしてくださった研究者、この合計10人の方のお名前を主な参加者として示しました。

■結論に関する議論

【田中(哲)】 いま、本中さんのほうから、この研究会の目的・論点・結論についてご説明がありました。特に「浄土庭園」の定義、英語表現を含めたその定義をはじめとして、どうぞご忌憚ない意見をいただければと思います。

【洪】 幾つか申し上げたいと思います。「浄土庭園」の定義については、この2日間の議論を通じて、ある程度の合意というものがなされていると思います。また、日本に遺る「浄土庭園」は非常に特殊であり、またその希少性も極めて高いと思います。

しかし、浄土庭園というのは、仏教文化を持つ国家では、どこでも表現される可能性があるのではないかと思っています。韓国でも浄土信仰というのは非常に流行したことがありますし、今でも多くの人々が浄土信仰を崇拝しています。ですから、韓国では韓国独自の浄土信仰を表現した庭園というものが当然あります。その1つの例が、私がご紹介した仏国寺の九品蓮池です。韓国の場合も浄土庭園がある可能性がありますし、日本にもあり得るということです。しかし、そのデザインや形式が同じではないということです。

結論を申し上げますと、日本で言う「浄土庭園」というのは日本にしかないと思いますし、特異性、そして希少性があるのだと思います。

そうした点から見ると、結論の部分で、「現時点では中国及び朝鮮半島において浄土庭園の実例は確認されていないこと」と記載されていますけれども、朝鮮半島でも朝鮮半島独自の浄土庭園というものがあり得ると思いますので、こういった部分をより明らかに規定したほうがいいのではないかと思います。

例えば、「現時点では、日本で形成された「浄土庭園」のような実例は、中国と朝鮮半島では確認されていない」としてはいかがでしょうか。そうすることで平泉の庭園遺構といったものをより明らかに表現しながらも、韓国と中国にもそ





の可能性があるということを示すことができる表現になると思います。

そういった日本の形式は日本の自然観、そして文化を反映しているものである。それはもちろん、韓国でも中国でも発見することができないわけですね。よって、その結論のところに記載された部分を、「日本で形成された淨土庭園」というふうにはっきりと表現することで、最終的なサマリーにおいてより明言できるのではないかと思います。

次に2つ目ですが、これは少し微妙なことですけれども、日本語のことを分からないので申し上げたいと思います。韓国では「朝鮮半島」とは言わずに「韓半島」という表現を使っています。もし問題がなければ「韓半島」という記録を残していただけないでしょうか。

最後にもう1つ、これは英語を少しよく分からなくて指摘する部分になるかも知れませんが、「淨土」について、「Pure Land」という表現を使うのは、一般的なのかどうかについて、少し判断が難しいところだと感じます。「淨土」という言葉についてもう少しほかの表現がないのか、更に少し考えてみる必要があるのではないかと思います。

【田中(哲)】 幾つかのご指摘がございました。まず結論冒頭のところです。韓国にも当然淨土信仰があって、それに基づく淨土寺院の庭園というのがあるということ。仏国寺の九品蓮池などが実例としてあるということで、そういう意味で、この部分の書き方については、「日本で形成された淨土庭園のような」ということに限定して、それが中国及び朝鮮半島では確認されないという整理がひとつありました。

これは後で呂先生のほうからご意見をお伺いしたいと思います。系譜」ということを考えているので、韓国では淨土式寺院の庭園としてまだ完全に解明されてないのですけれ

ども、九品蓮池のような遺構も確認されているという整理もあると思います。

【洪】 それでよいと思います。先ほど田中議長がご指摘されたように、中国や韓国でも表現方法は違って、淨土庭園をつくるというのはあると考えます。ですから、先ほどおっしゃったことも同時に表現する方法で、「日本で形成されたようなものの実例は、韓国また中国では発見されていない」という表現がよいと思います。また、韓国の九品蓮池が淨土の庭園としても表現された実例であるというふうに記載されても、それはいいと思います。

ただし、その中でも、日本で形成された「淨土庭園」というのは大変特異なものですので、それをより際立たせるために表現する方法もあるのではないかと思いました。

【田中(哲)】 最初の問題は、中国でも韓国でも淨土寺院を中心とする庭園は存在したと考えられるということですね。それが日本で形成されたような状態とは違うということで、そういう表現の仕方に変えたほうがようということです。その点はいかがでしょう。

【本中】 例えば、「韓国の九品蓮池のような事例は確認されていますはいるが、仏堂と園池の組み合わせにより多様な仏国土を表現した多くの淨土庭園の実例は、日本以外の東アジアにおいて確認されてはいない。」という言い方はいかがでしょう。

【洪】 とてもよい表現だと思います。韓国の九品蓮池は、その寺刹と池との関係に、鮮明な形で表されています。九品蓮池の場合、そこに橋があったのかどうかというのは、完全に明らかにされてはおりませんが、その九品蓮池を通り過ぎると、七宝橋と蓮華橋の階段を昇って、極楽殿というところに上がるようになっています。

それで本中先生がおっしゃったように、韓国の九品蓮池は淨土思想、淨土庭園の1つの表現方法ではある。しかし、一部、その寺刹と池との関連性はないというふうにおっしゃったように私には聞こえたのですが、もしそうであれば、それは違うよう思います。

【本中】 その点について、訂正したいと思います。「仏堂と園池を組み合わせることによって、淨土世界を表現した韓国の九品蓮池のような事例は確認されていますはいるが、多くの仏の多様な仏国土を表現した一群の淨土庭園の事例は、日本以外の東アジアにおいて確認されてはいない。」というよう

にしてはいかがでしょう。

【洪】 結構だと思います。

【小野】 本中先生が今、多様な仏国土ということで、いわゆる阿弥陀浄土だけではないということを組み込んだのだろうと思いますけれども、浄土本来の形から言うと、やはりその阿弥陀の極楽浄土というものがベースにあるのだと思います。そこではかの淨土も含み込むような形でその後展開したということは否定しませんけれども、あえてそこで「多様な」ということで、ほかの仏の淨土というものを強調するような言い方は、私には少し抵抗があるので、いかがでしょうか。

【本中】 具体的に文章にすれば、どうなるのでしょうか。

【小野】 「多様な」というところを取ってしまうということです。

【田中(哲)】 「仏国土」だけにするわけですか。

【小野】 あるいはその本来の阿弥陀浄土を踏まえて、「極樂浄土をはじめとする」ということを入れるのではないかがでしょう。

【田中(哲)】 しかし、これまでの議論からすると、あまり阿弥陀だけにこだわる話ではないという方向だったので、そこには多様性を表現に組み込んだ方がよいのではないかですか。

【小野】 整理の仕方の違いだと思います。「淨土庭園」という言葉が含む内容については、日本の国内でも曖昧なのではないかという批判があるわけですね。そこで、要は、仏堂と圓池だけあったら、それで「淨土庭園」と言ってよいのか、ということがあります。あくまでも「淨土」という言葉を使うのであれば、極楽の阿弥陀浄土ということを中心を考える必要があるのではないか。例えば建築史の専門家からも指摘があるそうですから、その辺りもやはり考慮しておいたほうがいいのではないか、というのが私の考えです。

【仲】 今、本中先生が修正されたところは、仏堂と圓池が一体化したというところで、これは、韓国の九品蓮池も仏殿と一体化しているという反論があったからだと思うのですけれども、「一体化」という意味は、仏殿のすぐ前面にということで、日本の場合は隣接しているということだと思います。考え方の整理の中に、韓国においても池はあるけれども、日本のようにすぐ前面にあるというスタイルではないということを含んではいかがでしょうか。仏殿のすぐ前に圓池を設けるスタイルは見られない、ということでも



よろしいのではないかと思いました。

もう1点、日本で言うところの「淨土庭園」の大きな特徴は、仏殿と圓池の一体化だけではなくて、それにプラスして、本中先生からご指摘あったように、背面の山あるいは手前の河川、つまりそういった自然地形としての山、川も構成用途としてみなすところに大きな特徴があります。そのスタイルが平泉で完成されているという意味で「平泉」を適格と考えられると思います。つまり、仏殿の前面に池を開き、さらに背後に山、前面の河川と一体となって淨土の表現をとっている、そういうところに日本の淨土庭園の特徴があると言ってもよいのではないかと思いましたが、いかがでしょうか。

【田中(哲)】 今少し議論が混ざってしまっていると思います。ここでは九品蓮池の例も挙げて、仏堂と圓池が組み合わされた仏国土を象徴しているという話ですから、別に堂前の圓池とか、境内にある圓池とかと区別せずに説明しているわけですね。ですから、「多くの仏国土」とか、「仏国土」という表現でも十分問題なのではないかと思います。

この部分は中国での話も関わってくるので、先にこの部分だけに限って呂先生からも少し、中国での状況というのをご説明いただけると幸いです。

【呂】 まず、この「淨土庭園」についての定義ということで、そこから申し上げたいと思います。この国際研究会の中で、皆さんとともに議論してきた中で、その「淨土庭園」というのは何かということでありますけど、これは自然と人、自然の中の水、そして池、島、伽藍、橋というものが入っているものであると思います。

そういう点から申しますと、そういうもので定義をされた淨土庭園ということについていえば、中国にしても韓国にしても無いわけです。



それから、若干の幾つかのその浄土庭園の間の特徴、共通している特徴ということも『吾妻鏡』に書かれているとおりです。そういうふうに書くと、もっと表現がはっきりするのではないかと思います。

それからまた、自然を表すという形ですけど、日本のほうはその自然の曲線を持っている、そして、方地ではないということですね。

平泉の浄土庭園については、私が現地に臨んだときには、形態について、確かな印象というのがあまり残らなかったことがあります。前のほうに池があって、そして後ろのほうに山があるという情景でしたけれども、もう少し詳しく説明して書かれたほうが、その代表性あるいは特異性を明らかにできるのではないかと思います。

【田中(哲)】 今、浄土庭園の定義と、それから日本のその浄土庭園の特異性についてご意見いただきました。定義のところで確認したいのですが、自然と人の関係があって、意匠として池、島、それから仏堂・仏殿、それから橋が使われるということがある、それが日本の「浄土庭園」の特色だということでおよしいでしょうか。

【呂】 私が強調したほうがよいと言ったのは、いわゆる「平泉」に見られる独特の価値、特異性、それをもう少し詳しく書かれたほうがいいのではないかということです。

【本中】 今即座にここで完成された修文を申し上げるわけにはいかないと思いますので、呂先生と洪先生とお二人からいただいたご意見を踏まえて、また仲先生や小野先生からいただいた指摘事項も踏まえて、日本の浄土庭園の定義ということをもう少し具体的に書き込む作業をしていきたいと思います。それで、そのような事例は、韓国では九品蓮池に確認されてはいるけれども、阿弥陀の西方極楽浄土の世界

を表現した庭園をはじめ、多様な仏国土を表現した一群の淨土をあらわす庭園が残されている事例は、東アジアのどこにも見られない、というような言い方をしたいと思います。

【洪】 先ほど申し上げましたけれども、九品蓮池にも蓮池があるわけですね。そしてその次に阿弥陀世界を象徴する七宝橋があつて、そして蓮華橋というものがあります。これも阿弥陀世界を象徴しているものですね。そしてその先に行くと安養門があり、それは極楽浄土に入っていく門になるわけですが、そこを通るとその次に極楽殿があります。こういった流れを見ると、一連の浄土世界を表現しているひとつの文脈の流れが見えると思います。それはやはり韓国的なものであり、「平泉」はやはり日本的なものだと思うわけです。ですから、日本の「浄土庭園」は、東アジアのどこでも見つかっていないと思います。

【田中(哲)】 分かりました。あと、用語の使い方で、朝鮮半島、中国大陆という表現が有りますが、これは、「大陸」とか「半島」とかいうのをつけずに、中国と韓国という言葉を基本として整理し直せばよいと思いますが、そのような整理でよろしいでしょうか。

【洪】 結構です。

【本中】 英語では、Korean Peninsulaという表現でよいですか。

【洪】 結構です。

【田中(哲)】 それから、もう1つの質問は、浄土の英語訳はPure Landでいいかどうかということですが、洪先生には何か良い表現がおありでしょうか。

【洪】 私は、歐米の方たちによくそれを理解していただけるよう表現があればよいなと思っているわけです。先ほど小野先生からの発言で、浄土世界が阿弥陀浄土をはじめとしているということがありましたけれども、ならばPure Landではなくて、Amida Landにしたらどうかなと思います。ここにいらっしゃる皆様が、Pure Landでいいとおっしゃるのであれば、何としても反対するというわけではないのですけれども、よりよく表現するような何か言葉を考えていかかがと思います。

【小野】 私も基本的にはPure Landでよいと思っています。「浄土」は、本中先生がかねてからご指摘されてきたように、10の仏国土があるというふうな話で、すべてが、Pure Landだと思います。だから、もしあえて阿弥陀浄土と言うので

あればPure Land of Amitabhaとか、そういうふうな言い方になるのだと思います。

日本の「浄土庭園」の場合、私の考えではベースが極楽淨土の阿弥陀淨土ですけれども、ただ多様な展開をするという中で、わざわざof Amitabhaという言葉をつけてしまうのは限定的過ぎるのではないかという気がしています。そういう意味で、例えば、Pure Landというか表現などが妥当ではないかと思います。

【呂】 仏教界のほうで、何か特別な英語の言い方というのはあるでしょうか。やはりこれは宗教と関係してまいりますから、確認することは重要だと思います。

【洪】 私も同意見です。その仏教関係の用語として、英語的な解釈、英語的な表現はどのような形なのかということについて、その分野の方に聞くのもよいのではないかと思う。

【田中(哲)】 ゼひ検討したいと思います。

【田中(淡)】 「目的」の部分について、今までご意見が出ていたように実際的な庭園様式を示す言葉がここに入らないと、これでは日本の「浄土庭園」は表現していないと思います。庭の形を示す言葉で示して、それを日本では「浄土庭園」ということを明確に書いてしまわないといけないと思います。

しかも英語表現のWorld of Pure Land Buddhismというのは、これはこのままだと「浄土教世界」となりますね。ですから、日本語が表現するところと違っております。「仏の淨土世界」という言い方は、日本語としても非常に落ちつかないと思います。また、英語表現のほうは、the "World of Pure Land Buddhism"ということで、ここでは「The」を入れているわけですね。トータルで「Pure Land Buddhism」だったら「浄土教世界」とすれば意味は通じますけども、それと日本語表現とは少し合っていないので、どちらの意味で使うのかを、もう少し考えたほうがよいと思います。

また、併せて、先ほど洪光杓先生が言われたように、「浄土庭園」という言葉自体に、「日本における」ということが明確に分かるような書き方にしていくほうがよいと思います。なるべく括弧やクォーテーションマークをつけるなどすることは最低限必要ですけれど、そのときに「Pure Land Garden」というのは英語としては意味を成さないのでないでしょうか。例えば、「Pure Land Style Garden」とかにするのが、私はよいと思います。「Pure Land」というタームを使



うのは構わないと思います。しかし、ひとつの庭園様式ということで“Pure Land Garden”という言葉にするとなると、これは英語のネイティブの人に聞いてみないと分かりませんが、多分意味を成さない英語だと思われます。そのほうが少なくとも誤解を招かないと思います。

【田中(哲)】 ひとつは最初に示された目的の中の定義に関することで、「仏の淨土世界を表現する庭園」というのでは、あまり具体的ではないので分かりにくいので、もう少し淨土庭園に特徴ある意匠などを表現したらどうかということでした。

それから、英語の表現で“Pure Land Style Garden”というほうがよいのではないかということでしたが、その点はいかがでしよう。

【本中】 ただいまの点については再度検討したいと思いますが、実は“Pure Land Garden”という言葉は、世界遺産の推薦登録の検討において、もう既にひとり歩きしているところがあるので、現在、その言葉について欧米人の間でどのようにコンセンサスを得ているのかを踏まえつつ、検討してみたいと思います。

【田中(淡)】 しつこくケチをつけるわけではないのですけど、「Pure Land Style Garden」だったら、その意味するところは通じると思います。ひとり歩きしているかもしれないということであれば、例えば“Pure Land Garden”をフランス語ではどのように表現されるかというときに、“Jardin Amitabha”ということなら分かると思います。それからドイツ語でも“Amitabha Garten”とかになったら通じるかも知れない。つまり、「阿弥陀の庭園」とかというように理解されると思う。しかし、“Pure Land Garden”では、何を意味しているのか分からぬと思います。とにかく、ここで議論

しても結論は出ないので、ネイティブの人にチェックしてもらうのが一番よいと思います。

【小野】かなり先の部分に飛んでしまうのですけれども、最後の項目のところで、「法華經、密教、淨土教のみならず」ということで、3つ並列してあります。法華經というお經、それから密教という現世利益を目的とする仏教のあり方、それと、淨土教といいわば淨土三部經を中心とする考え方。これらオーダーが違う3つのものが並列するのは少し変な感じがします。この辺は誤解が生じないような表現にしていく必要があろうかと感じています。

【田中(哲)】並列の用語が同次元でないのではないかということについて、後で確認したいと思います。

【本中】ひとつ全体のことについて確認させていただければと思います。我々としては、このエキスパートミーティングの成果について、奈良文化財研究所で調査研究書としてまとめ、それを全部、附属資料(Appendix)という形で「平泉」の推薦書に添付していきたいと考えています。

そのときに、今の淨土庭園の定義の問題、それからさまざまに指摘された部分を全部その文章の中に反映をさせることを前提にして、この文章もその附属資料(Appendix)に含めていきたいと考えていますが、そのことについてはいかがでしょうか。

【田中(哲)】それでよろしいでしょうか。では、了解していただけるということで、ありがとうございます。さらに、ほかに訂正すべき箇所等について、いかがでしょう。

【仲】少し英語の表現が問題なのでよく分からぬのですが、日本語のほうでは「平泉の一群の淨土庭園、最も典型的、代表的な」ということなのですから、英語表現のほうでは



“exceptional”ということになっていて、これには「例外的な」という意味はあったかと思うのですけれども、ここでは「特異的な」ということで使っているのでしょうか。

【本中】これは日本語と英語と確かに一致していないのですが、「典型的」と「代表的」というのは非常に似通っている言葉なので、exceptionalityではなく、representativityということで表現しています。そこにexceptionalityをつけ加えています。ですから、この部分の日本語と英語とは、逐語的には一致していないです。exceptionalは「比類のない」という意味で使っています。

【仲】ほかにある日本の淨土庭園から傑出したというか、ある独特の特徴を持っているということをここで表現しようということですね。

【本中】そうです。outstanding representative exampleということです。いずれにしても、これは日本人がつくった英語ですから、確認させていただきたいと思います。

【田中(淡)】少し拘りたいと思う点があります。洪光均先生からご指摘のあった「韓半島」ということと関連するようなことで、英語の表現で、例えば「中国大陆」は、このままだと“Chinese Main Land”となっていますね。これは、まず、“Main Land China”とすべきところですけど、問題は、そういう表現を採用するのではなくて、例えば、China, Korea and Japanとか、それだけではいけませんか。

【洪】問題無いと思います。

【田中(哲)】「朝鮮半島」と「韓半島」については、「半島」を付けるので、さまざまな配慮から、用語の選択が難しくなるので、それを外そうという方向で考えています。

【田中(淡)】“Main Land China”というと何か非常に政治的な意味になって、台湾は除外しているという意味が表現されてしまうと思うので、Chinaだけでよいと思います。

【田中(哲)】国の名前で統一したいと思います。

ほかには、よろしいでしょうか。

今幾つかご意見いただいたことを踏まえて修正を加えることにして、先生方には、また電子メールなど何かで確認をとると思いますので、よろしくお願いします。

それでは、この国際研究会の結論文案については、若干訂正確認の必要がありますが、この形での取りまとめを行っていくことについては合意されたものといたします。

■最終コメント

【田中(哲)】 上で、この会議は終わることになるわけですけれども、最後にラウンドテーブルの各先生方から、今回の国際研究会について、何か一言ずつコメントがいただければと思います。田中淡先生から順番にお願いします。

【田中(淡)】 とても密度の濃い話がたくさん聞けたので、非常に効率的で、成功だったと思います。

【呂】 奈良文化財研究所の皆様、また文化庁の皆様にお礼を申し上げたいと思います。今回の会議に出席をさせていただきまして、日本、中国、韓国の8世紀から14世紀に至る庭園に対して、非常に理解が深まったと思います。ありがとうございました。

【洪】 今回の会議を通じて、東アジアの庭園について深く検討することができました。こうした機会を持てたことは、非常に喜ばしいことだと思います。東アジアの庭園を形成したその基本にあるもの、すなわち、自然への憧れ、そして自然への愛というものが共通して見られたというのが、皆の意見だと思います。このたびの会議の準備のためにご苦労なさいました、奈良文化財研究所の皆様に感謝を申し上げます。ありがとうございました。

【仲】 私はコメントーターということで参加させていただきました。大変有意義な会議で、お招きいただきましたことにまず感謝を申し上げたいと思います。それから諸先生方の非常に精緻な論考、それから深いお考えに触れることができて非常に感銘を受けました。

淨土庭園というものを中心として、広く理想郷という大きなテーマを掲げられていたということが非常に興味深いことで、今回は、東アジア3国の中での理想郷においての議論でしたけれども、洪先生がレジュメで触れられている西洋のパラダイスであるとか、西洋文化あるいはさらに広く世界全体の中で人類が求めた理想郷ということについて、さらに検討が広く発展していかなければと思っております。どうもありがとうございました。

【小野】 洪先生あるいは仲先生のお話にもあったように、東アジアという枠組みで淨土庭園というのを1つのテーマにしてこういう会議を持てたことは、大変意義深いことであったかと思います。私どもの研究所は考古学が中心的な課題のひとつで、考古学のほうでは中国あるいは韓国と協

力していろいろなプロジェクトを進めております。呂先生、それから洪先生には今後ともいろいろとお世話になるかと思思いますけども、何とぞよろしくお願ひいたします。それからラウンドテーブルの先生方並びにご参会者の皆様にも、お礼を申し上げたいと思います。ありがとうございました。

【本中】 まず、呂先生と洪先生にお礼を申し上げたいと思います。ありがとうございました。

ご参会いただいた先生方、そして各地からご参加いただいた研究者、専門家の先生方、また奈文研の専門の方々、ほんとうに心からお礼を申し上げたいと思います。

もっと早くにこのような国際研究会を開いて、平泉の推薦書を作成していく作業に反映させるプロセスが必要であったなと痛感いたしました。役所の中にいる専門家、研究者として多くの専門家の知識を1つにまとめながら推薦書を作成していくという、そのプロセスの重要さを改めて感じた次第です。これからも様々な観点でご支援とご助言を賜りますように心からお願い申し上げます。ありがとうございました。

【田中(哲)】 呂先生、洪先生、どうもありがとうございました。私があまり頼りない座長なので、うまくまとめられたかどうかについて分かりませんが、多分、ほかの先生方や会場にお見えの各分野の専門の先生方のおかげで何とか結論が得られたと思います。

私の立場は、1つは平泉の推薦書作成委員になっていますので、本中さんと同じような立場でありますし、それから最初に小野部長が説明されたように、今回の国際研究会が一連となっているこの「古代庭園研究会」にもずっと参加してきました。これまで時代を順番に追って、もう8年間取り組んできたもので、日本の庭園史を追っていく段階で、現在、平安時代に取り組んでいます。だから、奈良文化財研究所として、淨土庭園とはどういうものかという検討においても、「古代庭園研究会」の重要な要素であったわけです。つまり、「平泉」にも「古代庭園研究会」にも大いに成果が得られたのではないかと思います。これもひとえに皆様のご努力とご協力の賜物だと思います。ほんとうに、どうもありがとうございました。

註) 5月21日(木)の討論-3において、円卓メンバーの尼崎博正氏は、公務の都合により欠席された。

6. 閉会(5月21日)

【平澤】 田中哲雄議長、それから先生方、皆様、どうもありがとうございました。

【小野】 改めまして、奈良文化財研究所を代表して、閉会のご挨拶を申し上げます。

田中哲雄先生からお話をありましたように、私どもの研究所といたしまして、「古代庭園研究会」の取組をはじめてから、古墳時代以前から飛鳥時代、奈良時代、そして平安時代と検討を進めてきました。今年で9年目になります。最近、奈良文化財研究所も独立行政法人ということになりましたが、5年ごとにまとまりある成果を見せていかなければならぬという中で、今年は4年目というかなり厳しい年に当たっているところですが、その中でもこの国際研究会を無事開催することができ、また、大変豊かな成果を得ることができました。その面でも大変感謝をしているところであります。

この会議は、文化庁とも共催させていただき、それから大変お忙しいなか、呂先生、洪先生、さらに国内の田中哲雄先生、田中淡先生、それから尼崎先生、仲先生にもおいでいただき、さらに岩手県の佐藤さんあるいは宇治市の杉本さんにもおいでいただき、非常に豊かな研究会になったと思います。当然のことですが、この有意義な成果については、私どもの研究所だけの成果とするのではなくて、こうした参加者全員の成果であるという形で広報をしていきたいと思っております。

ほんとうに3日間、かなりタイトなスケジュールでありましたけれども、皆様のご協力のおかげさまで、無事に終えることができました。改めてお礼を申し上げます。どうもありがとうございました。



【平澤】 皆さま、ありがとうございました。

私ども事務局では、この3日間この会議の裏方で準備を進めてまいりまして、内容が非常に豊かなだったので、時間が取まるというところが非常に心配でした。

ところが聞いてみれば、1日目から立て板に水を流すようにさっと非常にスムーズにまいりまして、議論も非常に集約的に、かつ、一番本質的な、深いところをご議論いただけたかと思います。

さて、この「東アジアにおける理想郷と庭園に関する国際研究会」の成果につきましては、最終的な報告書のとりまとめを予定しております。内容につきましては夏頃を目途に、また印刷物としては秋頃にはきちんとしたものとして印刷をしたいと考えております。

このたび、ご報告、ご講演でお世話になりました先生方におかれましては、引き続き電子メールなどでご連絡申し上げますので、またよろしくご協力お願いいたします。改めまして、皆さま、大変長時間にわたり、まことにありがとうございました。この国際研究会の有意義な成果、そして皆様のご協力に深く感謝申し上げます。

これをもちまして「東アジアにおける理想郷と庭園に関する国際研究会」を終了いたします。

一了一



4. 参考資料(1)

日本における浄土庭園の構成と変遷

はじめに 右図は、杉本宏氏による「平安期浄土教寺院の変遷」を基本に、関連文献を参照し、日本の浄土庭園10例をほぼ年代順に配置したものである。なお、法成寺(図中A)と法勝寺(図中B)は十分な発掘調査成果もないため、推定復元図を用いた。以下、各事例の概要を記す。

A：法成寺(京都) 寛仁3年(1019)、藤原道長によって造営が開始された。東面する阿弥陀堂が園池の西側に建立された当初は無量寿院と称していたが、各堂宇が完成した治安3年(1023)以来、法成寺と呼ばれた。南門から延びる南北中軸線上に金堂と園池を配し、池は堂宇・廊によってコの字形に取り囲まれていたと想定される。

B：平等院(宇治) 平等院は藤原道長が入手した別業を、その子頼通が永承7年(1052)に仏寺に改めたものである。主要堂宇として、阿弥陀堂(鳳凰堂)・法華堂・多宝塔・五大堂・不動塔・護摩堂などが記録に残り、各堂宇は東面を基本とした。庭園は宇治川の旧河床・段丘を利用して造成され、池の西端に配した中島に阿弥陀堂(鳳凰堂)を配置した。造営後ほどなくその対岸に小御所が建てられ、視点場となる建物と視対象となる建物が中軸線をそろえた点に特徴がある。

C：法勝寺(京都) 承暦元年(1077)に白河天皇によって造営された。推定される伽藍は、南大門からの南北中軸線上に金堂・九重塔・講堂・薬師堂を配置し、阿弥陀堂を寺域西南に置き園池に東面させるもの。金堂とその両側から延びる東西廊がコの字形に南庭を囲み、その南に池を配置していたものと見られる。

D：毛越寺(平泉) 奥州藤原氏の二代基衡によって造営された。建立は基衡の晩年とされ、永治元年(1141)～保元元年(1156)に比定する説が有力である。伽藍構成は法勝寺の影響を受け、金堂円隆寺両脇から延びる回廊がコの字型に南庭を取り囲み、その南に園池を配置する。伽藍背景に塔山を位置づける点も特徴となっている。

E：觀自在王院(平泉) 藤原基衡の妻によって仁平2年(1152)ころに建立された。大阿弥陀堂・小阿弥陀堂・普賢堂などの堂宇を配し、園池は滝石組・造水・中島などを備えていた。阿弥陀堂が園池の西ではなく、北岸に南

面し、背後に金鶴山が位置する点も特色といえる。

F：白水阿弥陀堂(いわき) 磐城地方の領主であった磐城則道の妻で奥州藤原氏三代秀衡の妹の徳尼によって12世紀中頃に開かれた。承暦元年(1160)に創建された阿弥陀堂が園池に南面し、堂背後には経塚山がそびえていることから、觀自在王院との類似性も指摘される。園池に大小2つの中島が配された点も特色といえる。

G：無量光院(平泉) 奥州藤原氏の三代秀衡によって12世紀後半に造営された。「吾妻鏡」によると、鳳凰堂の姿を模した阿弥陀堂をはじめ、ことごとく平等院にならったという。園池は阿弥陀堂および翼廊の前面に設けられ、中島を配していた。池も本堂翼廊の背後に続くことが判明し、平等院と酷似する庭園構成が確認された。また、中島上の建物群と阿弥陀堂とが東西の中軸線をそろえ、その西の延長線上に金鶴山が位置する。極楽浄土の光景を現出させることを目的に造営された浄土庭園のひとつの到達点を示すものとされている。

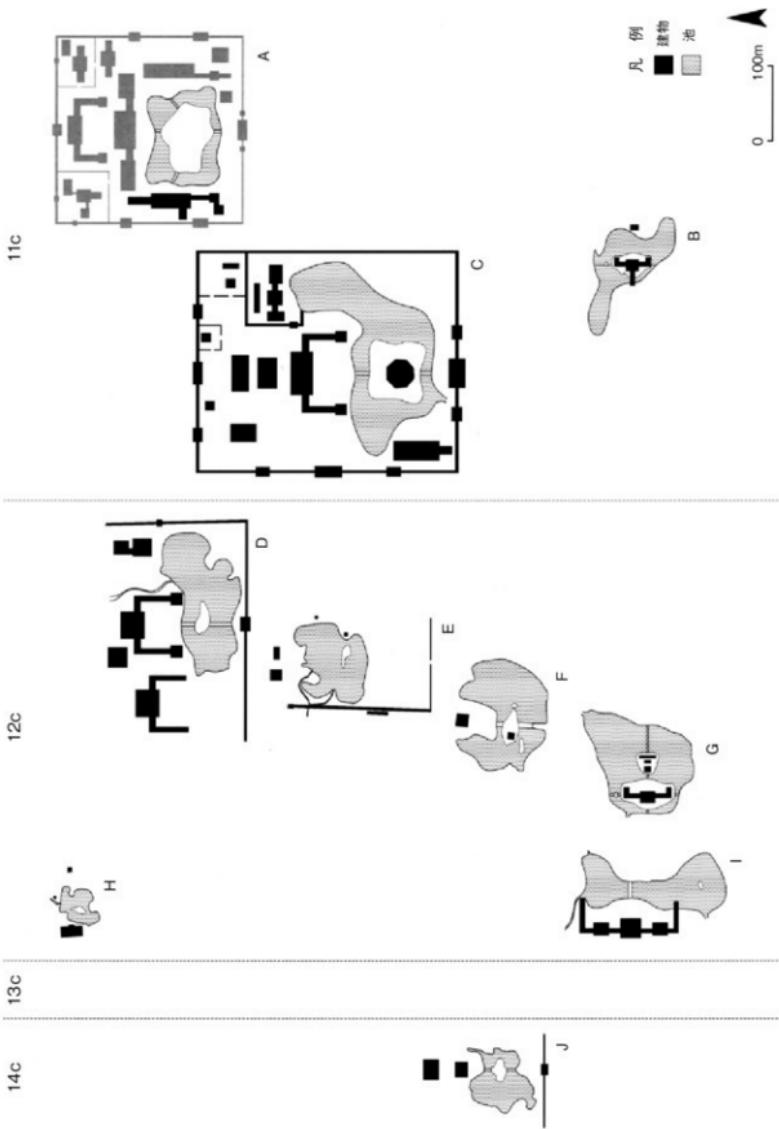
H：淨瑠璃寺(木津川) 寺の創建は永承2年(1047)であるが、嘉承2年(1107)に阿弥陀堂が建立され、久安6年(1150)に興福寺一乘院の恵忠によって寺域や園池が整備拡充された。その後阿弥陀堂が園池西岸に移建され、三重塔が京都一条大宮より園池東岸に移建され、現在の伽藍配置が整った。三方が山に囲まれた立地も特徴である。

I：永福寺(鎌倉) 建久3年(1192)に開かれた永福寺は、阿弥陀堂と薬師堂を左右に從えた中堂・翼廊・釣殿・園池などによって伽藍を構成した。中堂は中尊寺二階大堂を模す。主要堂宇が東面して園池に臨む構成は無量光院にも類似する。園池は池底に相模川の緑色の玉石を敷き、池中に立石群や中島を備えたものであった。

J：称名寺(鎌倉) 北条実時の造営した持仏堂を母胎として、三方が丘陵に囲まれた地を選び、文応元年(1260)頃に成立したと考えられている。実時の孫・金沢貞顕は文保元年(1317)から元享3年(1323)まで、園池を含み伽藍の再整備を図った。金堂は園池に南面するように配置し、園池中心に中島を設けている。伽藍全体と背後の山との視覚的対応が考慮された立地を有する点も注目される。

(栗野隆／奈良文化財研究所)

図-1 日本における浄土庭園の構成と変遷



4. 参考資料 (2)

日本語訳訳(原文はハングル)
韓國庭苑學會誌 12 (2). 75 - 82, 1994年12月

仏国寺の蓮池に関する一考察

洪 光杓
東国大学校造景学科

A Study on the lotus pond (reflecting pool) of Pulguksa temple
Hong, Kwang-Pyo
Dept. of Landscape Architecture, Dongguk Univ.

I. 序論

仏国寺は新羅景德王10年(751)に大相であった金大城(700-774)が創建した¹⁾新羅時代の代表的な寺刹である。仏国寺が創建された時代は新羅が三国統一を成し遂げ(668)てから約80年余りが経過した頃であり、新羅はまさにこの時期に至り最高の繁栄期を迎えていた。とくに文化史的側面から見たとき、新羅は統一以降初めて外国から受け容れた外来文化を我が國の風土に合うよう再解釈を試みるようになるが、このような事実は寺刹の造営を通じても明らかである。つまり三国統一以前に造営された新羅寺刹(興輪寺、皇龍寺、芬皇寺など)が中国の寺刹形式の模倣からなる塔中心型寺刹であったとするなら、統一以後に造営された寺刹(四天王寺、望德寺、感恩寺、甘山寺、仏国寺など)は塔・金堂並立型という新羅独自の新たな形式を呈するようになる。とくに仏国寺は、四天王寺(679)を基点として出現する新たな形式(塔・金堂並立型)の完成型と評しても過言ではない形式的特徴を示しており、注目される²⁾。

仏国寺については、様々な側面に表れている特徴的な現象から、その造営上の意味を探ることができる。それらは、寺刹が王京の外郭部の山麓に位置しておりそれ

以前の寺刹とは異なる点、聖と俗の空間区分を石壇といふ新たな形式によって表現している点、さらに青雲・白雲橋と蓮花・七宝橋を導入し石壇で形成された異質的性格の空間を互いにつなげている点などとして挙げられるが³⁾、このような現象は、それ以前の寺刹には見られない形式上の特徴と言えよう。とくに仏国寺には、蓮池という新たな概念が導入されており、関心の対象となっている。勿論「淨土三部經」中の1つである「觀無量壽經」には功德蓮池という宝の池に関する記述があり、インドや中国の寺刹では水景観要素が寺刹に導入されていたことがこれらの記録からわかる。我が国においても通度寺(646)に九龍池を造成したとされる創建説話が伝わっているが⁴⁾、仏国寺のように入口部分に本格的に池が造成された例は見られなかった。このような事実から、仏国寺は創建の過程で新たな概念の水景観構成原理を導入したことなどがわかる。したがって仏国寺についての研究⁵⁾は、造景学的側面からなされるべき課題であり、その結果は、寺刹造景研究は言うに及ばず伝統造景研究の礎として作用し得るものと思われる。

現在我々が目にする仏国寺は、1970年代に復元されたものである。しかし様々な側面から観察すると、復元工事によって仏国寺がその原型を一体どの程度回復したの

1) 「三国遺事」卷五、孝善九、大城孝二世父母条

一方「仏国寺古今創記」は、仏国寺の創建年代を法興王15年(528)と記しており、三国遺事の記録とは異なっている。創建年代については仏教学や史学分野でかねてから議論されており、これらの内容については次の両論文が参考となる。

黄寿永、1976、仏国寺の創建とその沿革、仏国寺復元工事報告書、文化財管理局

金相鉉、1986、石仏寺および仏国寺の研究、仏教研究2、韓國仏教研究院

2) こう述べる根拠は、仏国寺が塔・金堂並立型寺刹の中でも最も遅れて出現する例であり、空間構成的な側面からみる

場合、比較的安定した形式を示していることによる。

洪光杓、1991、新羅寺刹の空間形式変化についての研究、成均館大学校大学院博士學位論文、P113-136

3) 仏国寺に築造された石壇は、下位の娑婆世界と上位の仏国淨土とを区別する手段となり、その石壇に据えられた青雲・白雲橋と蓮花・七宝橋はそれら異質の兩世界を互につなげる機能を持つ。

4) 通度寺聖宝博物館、1987、韓國の明利通度寺、三省出版社、P18

5) 仏国寺は他の寺刹に比べ残された文献資料が多く、たとえその原形の復元に問題ありとする議論が提起されてはいるものの、伝統寺刹の中では比較的原形保存の状態が良好

か、という点で疑問を抱かざるを得ない⁶⁾。とくに蓮池は、発掘過程で瑣末な理由によって再び埋没してしまい、我々にその姿を見せる機会を失ってしまった。今からでも仏国寺については、その原形回復に向け、各分野で新たなアプローチが必要と思われる。

本考察は、仏国寺の原形回復に向けた取組みの一環として、とくに蓮池を復元するためのいくつかの手がかりを提供することを目的に、仏国寺の景観および蓮池に関する文献資料の考察と実地踏査に基づき行われたものである。

Ⅱ. 仏国寺の景観に関する文献資料

仏国寺に関する文献資料は他の寺刹に比べ比較的豊富である⁷⁾。これは仏国寺の持つ価値とその重要性を端的に立証する明らかな証拠と言える。

仏国寺に関して伝わる文献資料の中で重要なものとしては、「三国遺事」、「仏国寺事跡」、「仏国寺古今創記」、「円宗文類」、「東文選」、「東国李相国集」、「民庶文集」、「鎌洲集」、「活山集」、「梅月堂詩集」などが挙げられる。しかしこれらの文献資料から伝わる仏国寺に関する内容は、その大部分が仏国寺の創建縁起と変化の過程、そしてそれに伴う時代背景および作用因子と仏国寺の仏教史的位置および比重または関連人物などに関するものであり、仏国寺の景観を解釈できる内容は極めて少ない。このため仏国寺の景観的側面についての研究は当然制約を受けざるを得ないが、このような問題点は統一新羅時代の寺刹景観を研究する上で大変残念なことである。

仏国寺の景観について最も関心が寄せられているのは、仏国寺がその創建時に一体どのような物理的形式を備えていたかという点である。より具体的に言えば、仏国寺創建当時の寺域の規模がどの程度あり、どのような建築物がどの程度の規模で建てられたのか、寺刹の空間構造

であるため、伝統寺刹の景観的側面について研究する上で極めて重要な対象となっている。とくに、仏国寺が統一新羅時代の代表的寺刹である点は、仏国寺の研究価値をより一層高める要因となっている。

6) この問題については、東国大学校新羅文化研究所が1990年11月に主催した第9回新羅文化学術会議—仏国寺の総合的研究で部分的に取り上げられた。

7) 仏国寺に関する文献資料およびそれらの詳細な内容については、金相鉉、1994、仏国寺に関する文献資料の検討、芝部金甲周教授華甲記念史学論叢、P235-254を参照されたい。

および配置形式はどうであったか、さらには仏国寺の景観を構成する要素としてどんなものがいかなる方式で組み合わされていたのかという点などである。しかしこのような全ての事実を明らかにする創建時の記録は、不幸にも見つからない。ただ、活庵東隱が1740年(英祖16)に著述した「仏国寺古今創記」がこれらの疑問を解き明かす内容をいくつか含んでおり注目されている。「仏国寺古今創記」は仏国寺の創建以降、再創と再修の歴史を年代記式に記述した書物である。この書物の中でとくに我々の関心を引く内容は、8世紀中頃に金大成が仏国寺を再創⁸⁾した当時の建物の名称とその規模に関する詳細な記録であるが⁹⁾、この記録の中には九品蓮池が含まれており水景観要素についてもある程度その重要性を認識していることがわかる。しかしこの文献資料に記録のある建物が全て再創当時のものであるかは疑問の余地がある。なぜなら、この書物は前代に著された10余種類の典籍や資料を引用して書かれたものであり、伏藏記、上権文などを除いては信頼度を高める資料がなく、甚だしくは内容に錯誤と混乱が少なからずあり、古い記録を書き改めた箇所もいくつか発見されたことによる¹⁰⁾。

一方、朴棕(1735-1793)が1767年(英祖43)に慶州を旅しながら書き記した東京遊録の中にも、仏国寺に造営されていた建物の名称やその位置、そして特徴などについての記述があり、当時仏国寺が誇った寺刹景観を解釈する上でたいへん役立つものとなっている¹¹⁾。

以上の文献資料の他にも、郷伝に「仏国寺の雲梯と石塔は、その木や石に刻まれた技工が東部の幾多の寺の中で最も素晴らしい」との記述がある。この郷伝で記述された内容を見ると、仏国寺の造形美と景観の質的水準がどれほどのものであったか推察できる。また、梅月堂金時習(1434-1493)が詠んだ詩「仏国寺」や柳馨遠(1622-1673)の「仏国寺」と題する詩、そして草衣(1786-1866)が1817

8) この部分については、注1)を参照されたい。

9) この内容については、仏国寺復元工事報告書、P272-274 参照のこと。

10) 韓國仏教研究院、1988、韓國の寺刹1、仏国寺、一志社、P15-27

姜裕文、1937、仏国寺古今創記跋、仏国寺古今創記、慶北佛教協会

金相鉉他2名、1992、仏国寺、テウォン社、P15-17

金相鉉、1994、前掲論文、P243-245

11) 朴棕、「東京遊録」、「鎌洲集」、卷15

年に書いた「仏国寺懷古」には、とくに蓮池やそれに関連する水景観の詳細な内容が記されており、仏国寺の景観的な側面を解説する上で大きな手がかりとなっている。

Ⅲ. 蓮池の位置

梅月堂金時習(1434-1493)が詠んだ「仏国寺」という詩に、次のような一節がある。

断石為梯庄 小池

石を切り取り築いた階段小さな池をおさえるかの如く
高低樓閣映連瀧
高く低い樓閣がゆらめき喚る¹²⁾

この詩から、仏国寺には小さな池があり、それが切り取った石で築かれた階段の下部に位置していたことがわかる。この詩の内容からは、切り取った石で作った階段が青雲橋と白雲橋を指すのか、あるいは別の階段を意味するのかは定かでない。しかし仏国寺の創建縁起および創建時の建築などについてその内容を詳細に記録した「仏国寺古今創記」には、仏国寺の初創時にあった階段は青雲・白雲橋と蓮花・七宝橋以外ではなく、それ以降再創・再修の記録にも階段についての記述がない。したがって梅月堂の詩で詠まれた階段は明らかに青雲・白雲橋または蓮花・七宝橋のうちの1つであり、高く低い各樓閣がゆらめいて目に映るという一節からは、その位置が石壇の下方部分であったことは動かしがたい事實と思われる。勿論ここにある、高く低い樓閣がいかなるものかは言及がなく定かでないが、空間構造的に見て石壇上にある梵影樓と回廊を指すものと考えて間違いないと思われる。

一方、草衣(1786-1866)が1817年に著した「仏国寺懷古」¹³⁾にも、蓮池に関する次のような内容が見られる。

昇天橋外九蓮池 昇天橋外の九蓮池に
七宝樓台水底移 七宝樓台がゆらめき
無影塔看還有影 無影塔の影を眺めると
阿斯米鑑到今疑 阿斯女が来て眺めるかの如く

この詩から読み取れる別の事実は、蓮池が昇天橋を渡っ

た所に位置しているという点だが、この昇天橋がどこに架かっていたのか未だ明らかではない。しかし言い伝えによれば、昇天橋は現在の四天王門を過ぎ石壇の前の前面空間にさしかかる場所に流れる小川に架けられた橋だと推測できる。そうであれば、蓮池は進入過程から見やすい地点に位置していたことになる。また、無影塔(积迦塔)が投影されるという事実も目を引く内容であるが、この一節から見る場合、蓮池は积迦塔の影が投影される範囲内のある地点に位置していたことがわかる。

一方、积迦塔の影が映るということは、過去仏国寺に設けられた回廊が今の回廊とは異なった構造を持っていたと推測できる。なぜなら、現在の回廊のように高く閉鎖的な構造を持つ蓮池があったなら、その水面に影が映ることは有り得なかつたからだ。

また、七宝樓台が映るということは、前述の梅月堂の詩に見られる内容と同一のものと考えられる。ここでも七宝樓台が何を指すのか定かでないが、これを石壇につながる樓閣と見なす場合、梵影樓を意味していると解釈しても間違いではないと思われる。

蓮池に関して知り得る別の記録として、李徳弘(1541-1596)が宣祖13年(1580)に慶州を旅しながら書き記した「東京遊録」¹⁴⁾という紀行文が挙げられる。彼は仏国寺に立ち寄り蓮池を眺めては次のように感想を綴った。

日の落ちる頃仏国寺に着くと、霧が深くたちこめ無人のようであった。ようやく1つの石橋を渡ると、大きな岩の上に蓮池があり、その池の北側に木の桶の飛泉が数里を伝って石槽に注がれている。木の桶を過ぎて雪橋に立つと、石を磨いた橋はあたかも虹のようであった。

この文からは、李徳弘が渡った石橋が、前述の草衣が記した昇天橋であるかどうか定かではない。しかし状況を考え合わせると、この文にある石橋こそ昇天橋であると捉えても突飛な解釈ではなかろう。そうであれば、蓮池は昇天橋を渡った場所に位置していたことが再確認できたと言える。しかしここで、大きな岩の上に蓮池があつたとする点をどう受けとめるべきか、疑問が残る。なぜなら今我々の考える規模の蓮池であれば、それが岩の上

12) 「梅月堂詩集」、巻12、仏国寺

13) 「韓國佛教全書」10、P835

14) 「民衆文集」巻7、東京遊録

に造られたとは考えづらいからだ。しかし、1970年に行われた発掘調査の結果、蓮池の周りを囲むように石が築かれていたことが判明し、この形を見て李徳弘が大きな岩の上に蓮池があると考えたのかも知れない。この場合石槽は蓮池の北側に位置することとなり、飛泉を経てその石槽へと水が落ちたはずである。さらに見方を変えると、もしや石槽と蓮池は同一のものではないかとも考えられる。なぜなら朝鮮時代の文献の中に、石槽を石蓮池と表現する例が見られるためである。勿論このような考えはあくまで推定であり、今のところ明確な解釈を示すことは難しい。いずれにせよ、この文を通じて我々は仏国寺に木造飛泉があり、石槽が導入されていたことを知り得たが、このような施設が創建時からあったかどうか明らかではない。しかし1969年から行われた発掘調査の過程で、石壇前面空間の東側にあった長方形の石槽についての調査が行われた。その結果それが新羅時代の石槽であることが確認され、その時代の石槽の中では最も傑作であることが判明した¹³⁾。このため李徳弘が「東京遊録」で言及した石槽が、これを指しているのではとの推察も可能となっている。

結局のところ李徳弘の東京遊録では蓮池の概念が不明確であり、その位置について議論することは難しい。しかし仏国寺に高いレベルでの水景観構成技法が用いられていたことが、ある程度明らかとなつた。

これら文献の解釈を通じて、我々は仏国寺の蓮池がどの辺りに位置していたのかを類推・解釈することができた。

ところが、仏国寺復元工事のための発掘調査の過程で、蓮池についての発掘調査が1970年10月から約40日間行われ、蓮池の位置を確実に把握することができた。

発掘調査の結果、最初の予測とは異なり¹⁴⁾、青雲橋の南側から東西長軸395m、南北長軸約25.5m、深さ2~3mの楕円形の人工蓮池が発見された。この蓮池の石積み方法は統一新羅時代に典型的なもので、ここから統一新羅時代の瓦当など数多くの遺物が出土した。これによりこの蓮池が創建当初から存在したことが判明した。

結果的に仏国寺の蓮池は、前述の文献に見た通り青雲橋南側の梵影樓の辺りに位置していたことが明確となっ

た。しかし残念なことは、蓮池に関する遺構の全貌を明らかにできぬまま、押し寄せる観光客、予算不足、発掘面積の拡張、樹木の障害、農繁期による人手の減少、12月初旬の気温の急降下などを理由に、姿を現しつつあった蓮池を再び埋没させたことだ。このような事実は、造営過程から仏国寺全体の景観をもって表現すべく意図された内在的な意味に対する無理解からくるもので、今後長い間難題を免れないのである。

IV. 蓮池の機能と意味

仏国寺の蓮池についてのいくつかの記録を基に考察すると、仏国寺内にあった蓮池は主に影池としての機能を果たしていたと思われる。このような事実は柳馨遠(1622~1673)の「仏国寺」と題する詩に見られる「寺影池中見」という一節を通じて、より明確に確認することができる。

仏国寺の蓮池が実際に影池としての機能を持っていた事実は、1970年に行われた蓮池についての発掘調査中にそこに溜まった水の上に投影された积迦塔の影が偶然写真で撮影され、我々が目にすることなり一層確信を持つに至った(写真参照)。これを通して、前述の梅月堂や草衣の詠んだ詩句の内容が実際にそうであったことを推察できるようになった。しかし当時は大雄殿一郭の回廊が復元される前であったため、积迦塔の影が蓮池に溜まった水に投影された点に注目する必要があろう。つまり、現在のような回廊構造であるなら、蓮池が影池としての機能を果たせなくなることは明らかな事実となる。結局のところ以上の内容を踏まえて見ても、現在の復元された回廊をその原形と見なすことは難しく、1日も早くこの点の修正がなされるべきであろう。

元来、仏影崇拝はインドから中国を経て我が国に伝來したものと考えられるが、これは一般人に神異的な内容

¹³⁾ 発掘調査団は、過去より伝わる九品蓮池と蓮花・七宝橋との関連説に従い蓮池を発掘するため一次的に蓮花・七宝橋の下に探索トレンチを入れたと発掘調査報告書に記録している。しかし予想とは異なり蓮花・七宝橋の下からは蓮池址と推定し得る根柢を見いだせなかつた。このため九品蓮池が蓮花・七宝橋と関わりを持つとした、これまでの考えを改めることができ避けられなくなつた。

¹⁴⁾ 崔夢龍、1976、九品蓮池発掘、仏国寺復元工事報告書、文化財管理局、P60-69

¹⁵⁾ 沈愚京、康烈、1989、韓国古代寺刹における影池の象徴的意味と修景的価値、韓國庭苑学会誌7(1)、P88-93

13) 秦弘燮、1976、仏国寺境内遺物概要、仏国寺復元工事報告書、文化財管理局、P46



を伝え宗教的感動を与えようとする初期仏教の1つの方便として始まったと思われる。仏影を湛える皿としての影池の導入時期は三国時代以降とされており¹⁷⁾、この影池は仏・塔・山頂などを寺刹の境域内に取り込み水面に映す機能を果たすもので、いわゆる引影法を駆使する修景的特徴を持つ。

我が国の寺刹に存在するこのような影池としては、海印寺、清平寺、浮石寺、仏影寺などに見られる影池が代表的なものとして知られているが¹⁸⁾、仏影崇拝が宗教的な象徴性を表現する1つの方便である点から見て、多くの寺刹に影池が存在したことは容易に予測できる。我が国では、影池が多くの類型を示していることが確認でき、興味深い。全羅南道昇州の松広寺のように自然の渓流を堰き止め造成した渓潭が影池の機能を果たす例があり、石槽によって影池の効果を得る例もあり、人工蓮池を造成し本格的に影池として機能させる例も見られる。

それでは仏国寺の蓮池は、どのようなものを投影したのだろう。前述の梅月堂や草衣の詩句や構造的な側面から分析すると、仏国寺の蓮池には楼閣、积迦塔の紫霞門、青雲橋、白雲橋などの影が映ることになり、これを基に考えると仏国寺の蓮池は仏影崇拝の象徴性を複合的に表現する特異な類型であると推察できる。

一方、仏国寺古今創記には「九品蓮池」という名称が明確に記されているのみならず、「嘉慶三年(正祖3年)戊午年に蓮池の蓮の葉を返す」との記録もあり¹⁹⁾、仏国寺の蓮池が仏教の象徴花である蓮花を飾る皿としての機能を果たしたことがわかる。ここでの九品蓮池は、淨土信仰での九品蓮台に由来する名称と見られ、淨土に往生する者

が座った9種類の蓮花台が即ち九品蓮台である。このうち中上品は蓮花台であり、中中品は七宝蓮花である。したがって極楽殿一郭へ登る蓮花橋の名称は蓮花台に、また七宝橋の名称は七宝蓮台に由来するものと考えられる。このように見たとき、仏国寺の蓮池は極樂淨土へと進む過程で現れる象徴的表現の結果である。このような理由から、これまで仏国寺蓮池は蓮花・七宝橋と関連付けて説明してきたものと思われる。

別の側面から見ると、仏国寺の蓮池は聖と俗を区分する境界としての役割を担っていたことがわかる。韓国の伝統寺刹の景観的特徴に挙げられるものの1つが、聖と俗の領域を小川などの自然流水で区分することと言える。勿論このような現象を、山地に造成された寺刹の特徴と見ることもできようが、仏国寺の場合、山地寺刹としての形式は異なるが内容の側面では同一と思われる。

V. 結論

仏国寺は、石窟庵と並び新羅文化の花と表現されるほど重要な意味を持つ寺刹である。また仏国寺と石窟庵は、同じ年代に同一人物によって、しかも同一の信仰の意味を持って創建された。

しかしこれまで一般人の关心や専攻者による研究は石窟庵に傾く傾向が見受けられ、仏国寺に関する数少ない研究も、実のところ仏教学界や美術史学界が主に主導してきた。しかし近年、仏国寺の原形復元についての問題点が指摘されており、仏国寺研究の不足を反省する声もあがっている。現時点において造景学界は、仏国寺の原形回復へ向けた取り組みを学界として進めるべきであり、その結果が他分野の研究結果と合わさって仏国寺の原景観を回復させる一助となるよう努めなければならない。とくに仏国寺の蓮池は記録上明確に示されているもので、水景構成という側面から極めて重要であることは言うまでもなく、仏国寺の全体配置の持つ意味の完成という面から見て必ず復元されるべき対象と思われる。

本研究は、蓮池が復元されなければならない必要性の存在を知らしめ、復元過程で論議の対象とされるべき蓮池の位置、機能そして意味を明らかとすべく、主に文献考察と発掘調査報告書の分析ならびに現場踏査によって

¹⁸⁾ 上掲書、P88

¹⁹⁾ 崔夢龍、1976、前掲報告書、P61

進められた。研究結果の要約は、以下の通りとなる。

第一に仏国寺蓮池の位置は、聖と俗の区分手段である石壇の下部分の青雲橋、白雲橋の南側部分に該当することがわかった。

第二に仏国寺蓮池は人工池であり、楕円形をなし、池の周囲は巨大な岩石を圍むように積みあげていたが、これは統一新羅時代の典型的な石積み方法であることが確認できた。

第三として、仏国寺蓮池は、俗人に仏教の持つ神聖的な内容を伝え宗教的な感動を与えるための方便としての影池としての機能と、仏教の理想郷を表現し修景効果を高めるための蓮池としての機能、さらには聖と俗を区画する境界としての意味を持つものとの解釈を得た。

Summary

The purpose of this study is to certify the location, function, form and inherent meaning of the *yeon-gi* (lotus pond) that was existed in *Pulguksa* temple bygone days. This study was performed mainly by both the review of written materials and field surveys.

The results of this study are as follows;

Firstly, the *yeon-gi* was located at the lower part of the *seok-dam* (which distinguishes sacred place from common place) and southern part of *Cheongungyo* and *Bekungyo*.

Secondary, the *yeon-gi* was an artificial pond with oval shape, constructed by the large stone and the *yeon-gi* proved to be a traditional form and construction method of *Silla* Dynasty.

Lastly, the *yeon-gi* was built to influence Buddhist and its divinity, to express utopia described in Buddhism, to enhance waterscape of the temple, and also can be interpreted as border which distinguishes sacred places from common place.

参考及び引用文献

1. 姜裕文、1937、仏国寺古今創記跋、仏国寺古今創記、慶北仏教協会
2. 金相鉉、1986、石仏寺および仏国寺の研究、仏教研究
2. 韓国仏教研究院
3. 金相鉉他2名、1992、仏国寺、テウォン社
4. 金相鉉、1994、仏国寺に関する文献資料の検討、芝郭
金甲周教授華甲記念史學論叢
5. 沈恩京、康勲、1989、韓国古代寺刹における影池の象
徴的意味と修景の価値・韓国庭苑学会誌第7卷1号
6. 秦弘燮、1976、仏国寺境内遺物概要、仏国寺復元工事
報告書、文化財管理局
7. 崔夢龍、1976、九品蓮池発掘、仏国寺復元工事報告書、
文化財管理局
8. 通度寺聖宝博物館、1987、韓國の明利通度寺、三省出
版社
9. 韓国仏教研究院、1988、韓國の寺刹1 仏国寺、一志社
10. 洪光杓、1991、新羅寺刹の空間形式変化についての研
究、成均館大学校大学院博士學位論文
11. 黃寿永、1976、仏国寺の創建とその沿革、仏国寺復元
工事報告書、文化財管理局
12. 鐘洲集
13. 東京遊錄
14. 東國李相国集
15. 東文選
16. 梅月堂詩集
17. 民齋文集
18. 仏国寺古今創記
19. 仏国寺事跡
20. 三国遺事
21. 円宗文類
22. 浄土三部經
23. 活山集

東アジアにおける理想郷と庭園

—「東アジアにおける理想郷と庭園に関する国際研究会」報告書—

発 行 日 2009年11月30日

編集発行者 独立行政法人国立文化財機構

奈良文化財研究所

文化遺産部遺跡整備研究室

〒630-8577 奈良県奈良市二条町二丁目9番1号

印 刷 者 岡村印刷工業株式会社

〒558-0004 大阪市住吉区長居東3丁目4番17号

ISBN978-4-902010-76-3